

青森県埋蔵文化財調査報告書 第371集

岩渡小谷(4)遺跡

東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告

2004年3月

青森県教育委員会



第1号木組遺構 西から



第1号木組遺構 南から



舟形木製品出土状況 東から



114-16 土器出土状況 西から



59-1 容器出土状況(アップ) 北から



岩偶出土状況 北から



石斧柄未製品出土状況 北から



漆器出土状況 西から



埋部構成材(板材)



埋部構成材(杭)



柄付木製品



鳥形木製品



掘り棒類



舟形木製品



石斧柄未製品類



漆器

序

青森市の西部、岩渡地区にある岩渡小谷^{いわたりこたに}(4)遺跡は、東北縦貫自動車道八戸線(青森-青森)の建設事業に先立って、平成12・13年度の二カ年にわたり、当センターが調査を行いました。調査の結果、埋没した沢から、県内はじめての縄文時代前期の木組遺構が発見され、木製品が多数出土しました。

今回の報告書は、この沢地区から発見された遺構や遺物の報告と二カ年の調査をまとめたものです。

本書に収められた成果を今後の埋蔵文化財の調査・研究、及び文化財の保護の面で役立てていただければ幸いです。

発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多大な御協力を賜った地元の方々をはじめ、御指導頂いた方々、関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成16年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤良治

例 言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成12・13年度に実施した東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）の建設事業に伴う岩渡小谷(4)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 岩渡小谷(4)遺跡の発掘調査は平成12年度から平成13年度までの二カ年にわたって実施している。本書は岩渡小谷(4)遺跡のなかで、平成12・13年度調査時の沢部分の遺構及び出土遺物に関する報告書である。報告対象については以下のとおりである。
青森県埋蔵文化財調査報告書第352集所収 - 岩渡小谷(3)・(4)遺跡の沢内以外の遺構・遺物
本報告書掲載 - 岩渡小谷(4)遺跡の沢出土の遺構・遺物
- 3 本遺跡の所在地は、青森市大字岩渡字小谷地区所在の陸上自衛隊小谷演習場内地で、青森県教育委員会の遺跡台帳に岩渡小谷(4)遺跡（県遺跡番号01302）として登録されている。
- 4 本報告書の執筆・編集は、坂本真弓、畠山 昇、工藤 司が担当した。遺物のうち、土器は坂本、木質遺物は坂本・工藤、石器・土製品・石製品は畠山が担当した。遺構と遺物等の実測図作成は調査補助員及び整理作業員が行った。土器実測の一部は（株）シン技術コンサル、剥片石器実測の一部は（株）アルカに、遺物写真撮影はシルバーフォト・フォトショップらいつ・フォトショップイナミに委託した。執筆者については、文末（ ）内に付した。
- 5 本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図）国土地理院発行の2万5千分の一地形図（青森西部）を複製したものである。
- 6 本報告書の遺構・遺物等に関する表示は次のとおりである。
 - ・遺構番号は調査時の番号をそのまま使用し、最終的に遺構と判断されたものは欠番、遺構と判断されたものは新規の番号を付けた。遺構のうち略号は以下のとおりである。
 - ・挿図に付した方位は真北を示す。
 - ・土層等の色調観察には『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編 1999）を用いた。
 - ・縮尺率は、位置図・配置図等及び遺構・遺物の大きさにより適宜決定し、決定した縮尺率についてはスケール脇に示し、遺物図版では（ ）内に示した。遺物は、土器実測図・拓影図・礫石器（1/3）、剥片石器・土製品・石製品（1/2）、大型の礫石器（1/4）、木質遺物は大きさに応じて1/1・1/2・1/3・1/4・1/5・1/6・1/8・1/10・1/12とし、遺物番号の下にその縮尺を示している。
 - ・挿図で使用したスクリーンパターン等の種類は以下のとおりである。その他に関しては図中に示した。

石器

剥片石器光沢痕



礫石器スリ痕



礫石器敲打痕



木質遺物

樹皮



炭化範囲



黒色塗り範囲



赤色塗り範囲



板目



柾目



追柾目



芯去削出



芯去り角



芯持半割



丸木



・遺物出土地点の判明しているものについては、平面分布図及び垂直分布図を作成した。垂直分布図は土層断面図を基準に作成している。また、これらの図には、出土遺物のすべてではなく、水平分布・垂直分布が判明している遺物のみを示している。

- ・遺物、 - 岩偶、記号と記号を線(-)で結んであるものは、接合関係を示す。
- ・遺物は出土地等の一覧表を設けた。
- ・遺物番号は挿図番号と図版内番号の組合せで付した。(挿図-番号)
- ・遺物写真の縮尺率は不同であり、この記載番号は挿図番号と一致する。
- ・縄文原形は、山内清男『日本先史時代の縄紋』(先史考古学会1979)を参考に分類した。観察表では以下のように省略した。

単軸結条体第 類 単 結束第1種 結1 横位回転文 横回、斜位回転文 斜回、側面圧痕 側圧

- 7 本調査に関わる諸記録・遺物等の資料は青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 8 発掘調査における測量は、旧日本測地系(Tokyo Datum)を使用しており、本報告はこれに基づいて行っている。ただし、抄録に記した遺跡の緯度・経度については旧日本測地系と世界測地系に基づいた日本測地系2000(JGD2000)を併記している。
- 9 写真図版の一部は不要なものをカットするため、フォトショップ(アドビ社)で加工している。
- 10 報告書内では A・B・C層をA・B・C層と省略して使用している場合もある。
- 11 本発掘調査及び本報告書の作成に当たり、次の諸機関及び諸氏から御指導・助言を頂いた。

感謝申し上げる次第である。(順不同 敬称略)

市立函館博物館、福井県立若狭歴史民俗資料館、(財)北海道埋蔵文化財センター、石橋孝夫、伊藤隆三、石川正行、稲野裕介、宇部則保、扇崎 由、久々忠義、小島朋夏、児玉大成、小林圭一、佐々木由香、佐藤浩司、佐藤智雄、鈴木 徹、高橋泰子、田中寿明、田口 尚、田中孝尚、田中祐二、千葉敬朗、長谷部一弘、藤沼邦彦、村上義直、村上由美子、村木 淳、森 香織、渡辺 誠

目 次

巻頭カラ	
序	
例言	
目次	
挿図目次	
写真目次	

第 1 章 調査の概要	1
第 1 節 調査要項	1
第 2 節 調査方法・整理方法	3
第 3 節 遺物の分類	6
第 2 章 沢地区の遺構と遺物	9
第 1 節 地形	9
第 2 節 層序	11
第 3 節 検出遺構と出土遺物	18
1 第 1 号木組遺構	18
2 木道	31
3 樹皮範囲・杭跡 1	31
4 板敷遺構	36
5 杭跡 2	39
6 湧水状遺構	40
7 クリ果皮片集中範囲	40
8 遺構内出土遺物	44
第 4 節 遺構外出土遺物	71
1 木質遺物	71
(1) 木製品	
(2) 木材	
(3) その他	
2 土器	129
3 石器	177
4 土製品・石製品	201

第3章 自然科学分析	203
第1節 花粉分析	204
第2節 植物珪酸体分析	213
第3節 珪藻分析	218
第4節 昆虫同定	225
第5節 放射性炭素年代測定	236
第6節 漆器の樹種と漆塗膜断面の観察	245
第7節 黒曜石製石器、石片の原産地分析	251
第8節 使用痕分析	260
第9節 出土土器の成分分析	278
第10節 遺構内土壌分析	286
第11節 大型植物化石群	293
第12節-1 出土木製品の樹種	320
第12節-2 出土樹種と木取りからみる森林資源利用	329
第4章 まとめ	332
第1節 検出遺構について	332
1 沢検出遺構のまとめ	332
2 台地検出遺構のまとめ	337
第2節 出土遺物のまとめ	348
1 土器	348
2 石器	356
3 木質遺物	360
第3節 遺跡のまとめ	376
1 分析結果のまとめと今後の課題	376
2 集落のまとめ	377
遺物観察表	381
写真図版	405
報告書抄録	

図 版 目 次

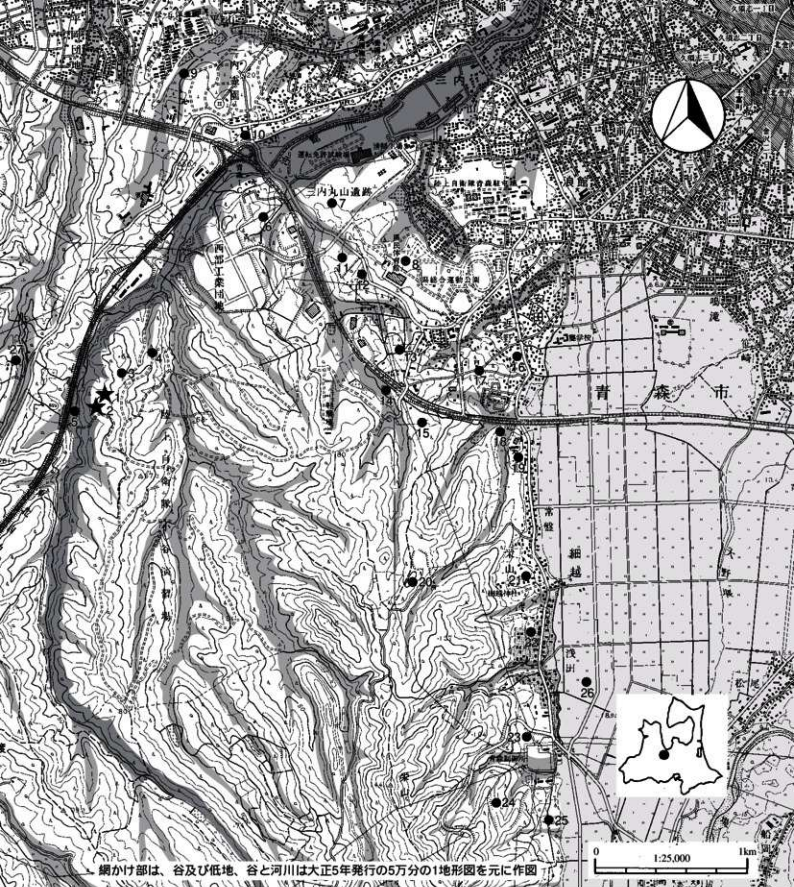
図1 遺跡位置と周辺の遺跡	
図2 遺跡周辺の地形	2
図3 調査対象区域	4
図4 遺構配置(1/1000)	4
図5 遺構配置(1/200)	10
図6 層序1	13
図7 層序2	14
図8 層序3	15
図9 層序4	16
図10 遺構配置(1/100)	17
図11 第1号木組遺構	19
図12 杭の位置とレベル、各部の名称	20
図13 堆積土・杭の打ちこみ	23
図14 底板検出状況	25
図15 埋・排水・土留部構築状況	26
図16 構成材検出状況(全体)	28
図17 構成材検出状況(埋・排水・土留部)	29
図18 遺構上面遺物出土状況	30
図19 木道	32
図20 樹皮範囲・杭跡1	34
図21 樹皮範囲上面遺物出土状況	35
図22 板敷遺構・杭跡2・ 導水状遺構遺物出土状況	37
図23 板材検出状況(B層)	38
図24 導水状遺構検出状況(C層)	41
図25 板材下部・杭跡堆積土	42
図26 クリ果皮片集中範囲1～4	43
図27 第1号木組遺構出土土器	44
図28 第1号木組遺構構成材・出土遺物1	45
図29 第1号木組遺構構成材・出土遺物2	46
図30 第1号木組遺構構成材・出土遺物3	47
図31 第1号木組遺構構成材・出土遺物4	48
図32 第1号木組遺構構成材・出土遺物5	49
図33 第1号木組遺構構成材・出土遺物6	50
図34 第1号木組遺構構成材・出土遺物7	51
図35 第1号木組遺構構成材・出土遺物8	52
図36 第1号木組遺構構成材・出土遺物9	53
図37 第1号木組遺構構成材・出土遺物10	54
図38 第1号木組遺構構成材・出土遺物11	55
図39 第1号木組遺構構成材・出土遺物12	56
図40 第1号木組遺構構成材・出土遺物13	57
図41 第1号木組遺構構成材・出土遺物14	58
図42 第1号木組遺構構成材・出土遺物15	59
図43 第1号木組遺構構成材・出土遺物16	60
図44 第1号木組遺構構成材・出土遺物17	61
図45 第1号木組遺構構成材・出土遺物18	62
図46 第1号木組遺構構成材・出土遺物19	63
図47 木道構成材	64
図48 樹皮範囲・杭跡1構成材	65
図49 板敷遺構・杭跡2・ 導水状遺構構成材・出土遺物1	66
図50 板敷遺構・杭跡2・ 導水状遺構構成材・出土遺物2	67
図51 板敷遺構・杭跡2・ 導水状遺構構成材・出土遺物3	68
図52 板敷遺構・杭跡2・ 導水状遺構構成材・出土遺物4	69
図53 板敷遺構・杭跡2・ 導水状遺構構成材・出土遺物5	70
図54 沢出土鋳り棒	72
図55 沢出土鋳り棒・槌・敲き具	75
図56 沢出土容器1	76
図57 沢出土容器2	77
図58 沢出土容器3	78
図59 沢出土容器4	79
図60 沢出土用途不明木製品1	81

図61 沢出土用途不明木製品 2	82	図94 沢出土半割材 1	119
図62 沢出土用途不明木製品 3	83	図95 沢出土半割材 2	120
図63 沢出土用途不明木製品 4	84	図96 沢出土両端切断材	121
図64 沢出土用途不明木製品 5	86	図97 沢出土用途不明加工材 1 (舟形)	122
図65 沢出土角材	90	図98 沢出土用途不明加工材 2 (桶状・容器片?)	123
図66 沢出土棒状加工材	91	図99 沢出土用途不明加工材 3・丸木材 1	124
図67 沢出土杭状先端加工材 1	92	図100 沢出土丸木材 2	125
図68 沢出土杭状先端加工材 2	93	図101 沢出土遺物 樹皮 1 ほか	126
図69 沢出土杭状先端加工材 3	94	図102 沢出土遺物 樹皮 2	127
図70 沢出土杭状先端加工材 4	95	図103 沢出土遺物 樹皮 3	128
図71 沢出土杭状先端加工材 5	96	図104 土器出土状況 1	130
図72 沢出土杭状先端加工材 6	97	図105 土器出土状況 2	131
図73 沢出土杭状先端加工材 7	98	図106 沢出土土器 群土器	132
図74 沢出土杭状先端加工材 8	99	図107 沢出土土器 C 層 1 (第 群土器)	137
図75 沢出土杭状先端加工材 9	100	図108 沢出土土器 C 層 2 (第 群土器)	138
図76 沢出土杭状先端加工材 10	101	図109 沢出土土器 C 層 3 (第 群土器)	139
図77 沢出土杭状先端加工材 11	102	図110 沢出土土器 C 層 4 (第 群土器)	140
図78 沢出土缸目板 1	103	図111 沢出土土器 C 層 5 (第 群土器)	141
図79 沢出土缸目板 2・缸目材・板目板 1	104	図112 沢出土土器 C 層 6 (第 群土器)	142
図80 沢出土板目板 2	105	図113 沢出土土器 C 層 7 (第 群土器)	143
図81 沢出土板目板 3	106	図114 沢出土土器 C 層 8 (第 群土器)	144
図82 沢出土板目板 4	107	図115 沢出土土器 B 層 1 (第 群土器)	145
図83 沢出土板目板 5・板目材 1	108	図116 沢出土土器 B 層 2 (第 群土器)	146
図84 沢出土板目材 2	109	図117 沢出土土器 B 層 3 (第 群土器)	147
図85 沢出土板目材 3	110	図118 沢出土土器 B 層 4 (第 群土器)	148
図86 沢出土板目材 4	111	図119 沢出土土器 B 層 5 (第 群土器)	149
図87 沢出土板目材 5	112	図120 沢出土土器 B 層 6 (第 群土器)	150
図88 沢出土割材 1	113	図121 沢出土土器 B 層 7 (第 群土器)	151
図89 沢出土割材 2	114	図122 沢出土土器 B 層 8 (第 群土器)	152
図90 沢出土割材 3	115	図123 沢出土土器 B 層 9 (第 群土器)	153
図91 沢出土割材 4	116	図124 沢出土土器 B 層 10 (第 群土器)	154
図92 沢出土割材 5	117	図125 沢出土土器 B 層 11 (第 群土器)	155
図93 沢出土割材 6	118		

図126	沢出土石器B層12(第群石器).....	156	図159	沢出土石器13.....	195
図127	沢出土石器B層13(第群石器).....	157	図160	沢出土石器14.....	196
図128	沢出土石器B層14(第群石器).....	158	図161	沢出土石器15.....	197
図129	沢出土石器B層15(第群石器).....	159	図162	沢出土石器16.....	199
図130	沢出土石器B層16(第群石器).....	160	図163	沢出土石器17.....	200
図131	沢出土石器B層17(第群石器).....	161	図164	沢出土石器製品.....	201
図132	沢出土石器A層1(第群石器).....	162	図165	沢出土石器製品.....	202
図133	沢出土石器A層2(第群石器).....	163	図166	他遺跡の関連遺構.....	335
図134	沢出土石器A層3(第群石器).....	164	図167	前期の竪穴住居跡 集成.....	340
図135	沢出土石器A層4(第群石器).....	165	図168	石器埋設遺構.....	344
図136	沢出土石器A層5(第群石器).....	166	図169	出土石器の破片数と重量分布.....	347
図137	沢出土石器A層6(第群石器).....	167	図170	沢 C・B層出土石器.....	350
図138	沢出土石器A層7(第群石器).....	168	図171	遺構・捨て場等出土石器1.....	351
図139	沢出土石器A層8(第群石器).....	169	図172	沢 A層出土石器.....	352
図140	沢出土石器A層9(第群石器).....	170	図173	遺構・捨て場等出土石器2.....	353
図141	沢出土石器A層10(第群石器).....	171	図174	稲山遺跡出土共伴石器.....	353
図142	沢出土石器A層11(第群石器).....	172	図175	石器の模式図.....	355
図143	沢出土石器(・層第群石器).....	173	図176	石器組成と石材傾向.....	359
図144	沢出土石器第群石器.....	175	図177	樹種組成・器種組成1 (全体・遺構構成材).....	361
図145	沢出土石器第群石器.....	176	図178	樹種組成・器種組成2(層位別).....	361
図146	石器の出土状況.....	178	図179	主要器種の樹種組成.....	363
図147	沢出土石器1.....	179	図180	主要器種の器種組成・木取り.....	365
図148	沢出土石器2.....	180	図181	みかん副材・半副材・丸木材の 直径分布(4cm毎(大)10cm毎(小)).....	366
図149	沢出土石器3.....	182	図182	杭.....	368
図150	沢出土石器4.....	183	図183	杭状先端加工材.....	369
図151	沢出土石器5.....	184	図184	掘り棒集成.....	372
図152	沢出土石器6.....	185	図185	樅状木製品集成.....	374
図153	沢出土石器7.....	187	図186	用途不明木製品(箸状・薄板状)と 削出加工材の加工方法.....	375
図154	沢出土石器8.....	188			
図155	沢出土石器9.....	189			
図156	沢出土石器10.....	191			
図157	沢出土石器11.....	192			
図158	沢出土石器12.....	193			

写真目次

写真1	遺跡遠景1	405	写真31	第1号木組遺構出土遺物10	435
写真2	遺跡遠景2	406	写真32	第1号木組遺構・木道出土遺物	436
写真3	層序1	407	写真33	樹皮範囲・杭跡1、 導水状遺構出土遺物	437
写真4	層序2	408	写真34	導水状遺構・板敷遺構出土遺物2	438
写真5	第1号木組遺構1(全体1)	409	写真35	導水状遺構・板敷遺構出土遺物3	439
写真6	第1号木組遺構1(全体2)	410	写真36	遺構外出土木質遺物1	440
写真7	第1号木組遺構(導水・貯水部1)	411	写真37	遺構外出土木質遺物2	441
写真8	第1号木組遺構(貯水部2)	412	写真38	遺構外出土木質遺物3	442
写真9	第1号木組遺構(貯水部3)	413	写真39	遺構外出土木質遺物4	443
写真10	第1号木組遺構(埋部1)	414	写真40	遺構外出土木質遺物5	444
写真11	第1号木組遺構(埋部2)	415	写真41	遺構外出土木質遺物6	445
写真12	第1号木組遺構(埋部3)	416	写真42	遺構外出土木質遺物7	446
写真13	第1号木組遺構(土留部・杭)	417	写真43	遺構外出土木質遺物8	447
写真14	木道	418	写真44	遺構外出土木質遺物9	448
写真15	樹皮範囲・杭跡1	419	写真45	遺構外出土木質遺物10	449
写真16	板敷遺構1	420	写真46	遺構外出土木質遺物11	450
写真17	導水状遺構1	421	写真47	遺構外出土木質遺物12	451
写真18	板敷遺構・導水状遺構2	422	写真48	第 群土器集合	452
写真19	杭跡・クリ果皮片集中範囲	423	写真49	C出土第 群土器1	453
写真20	遺物出土状況1	424	写真50	C出土第 群土器2	454
写真21	遺物出土状況2	425	写真51	B出土第 群土器1	455
写真22	第1号木組遺構出土遺物1	426	写真52	B出土第 群土器2	456
写真23	第1号木組遺構出土遺物2	427	写真53	A出土第 群土器1	457
写真24	第1号木組遺構出土遺物3	428	写真54	A出土第 群土器2	458
写真25	第1号木組遺構出土遺物4	429	写真55	沢出土石器1	459
写真26	第1号木組遺構出土遺物5	430	写真56	沢出土石器2	460
写真27	第1号木組遺構出土遺物6	431	写真57	沢出土石器3	461
写真28	第1号木組遺構出土遺物7	432	写真58	沢出土石器4	462
写真29	第1号木組遺構出土遺物8	433	写真59	沢出土石器5	463
写真30	第1号木組遺構出土遺物9	434			



周辺の遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	岩渡小谷(3)	8	近野	15	安田(2)	22	栄山(2)
2	岩渡小谷(4)	9	三内豊圃	16	安田(1)	23	朝日山(2)
3	岩渡小谷(1)	10	三内沢部(1)	17	安田近野(1)	24	朝日山(3)
4	岩渡小谷(2)	11	三内丸山(5)	18	栄山(3)	25	朝日山
5	熊沢	12	三内丸山(3)	19	細越館	26	細越
6	三内	13	三内丸山(4)	20	栄山(4)	27	新城平岡(1)
7	三内丸山	14	三内丸山(6)	21	栄山(1)		

図1 遺跡位置と周辺の遺跡

第1章 調査の概要

第1節 調査要項

1 調査

1 調査目的

東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市岩渡小谷(4)遺跡の発掘調査を実施し、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成12年6月20日から同年10月31日まで（平成12年度）

平成13年4月18日から同年7月27日まで（平成13年度）

3 遺跡名及び所在地 岩渡小谷(4)遺跡（県遺跡番号01302）

青森市大字岩渡字小谷 陸上自衛隊小谷演習場内

4 調査面積 4,700㎡（平成12年度）、2,000㎡（平成13年度）

5 調査委託者 日本道路公団東北支社

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）（平成12・13年度）

調査員 遠藤 正夫 青森県教育委員会埋蔵文化財対策室長（考古学）（平成12年度）

工藤 一弥 青森県総合学校教育センター指導主事（地質学）（平成12年度）

山口 義伸 青森県環境生活部県史編纂室総括主幹（地質学）（平成13年度）

（現 青森県立浪岡高校教諭）

山田 昌久 東京都立大学人文学部助教授（考古学）（平成13年度）

調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島 邦夫（現 青森県立郷土館長）

次長（兼調査第一課長） 成田 誠治（平成14年3月 退職）

総務課長 西口 良一（現 青森県労政・能力開発課総括主幹）

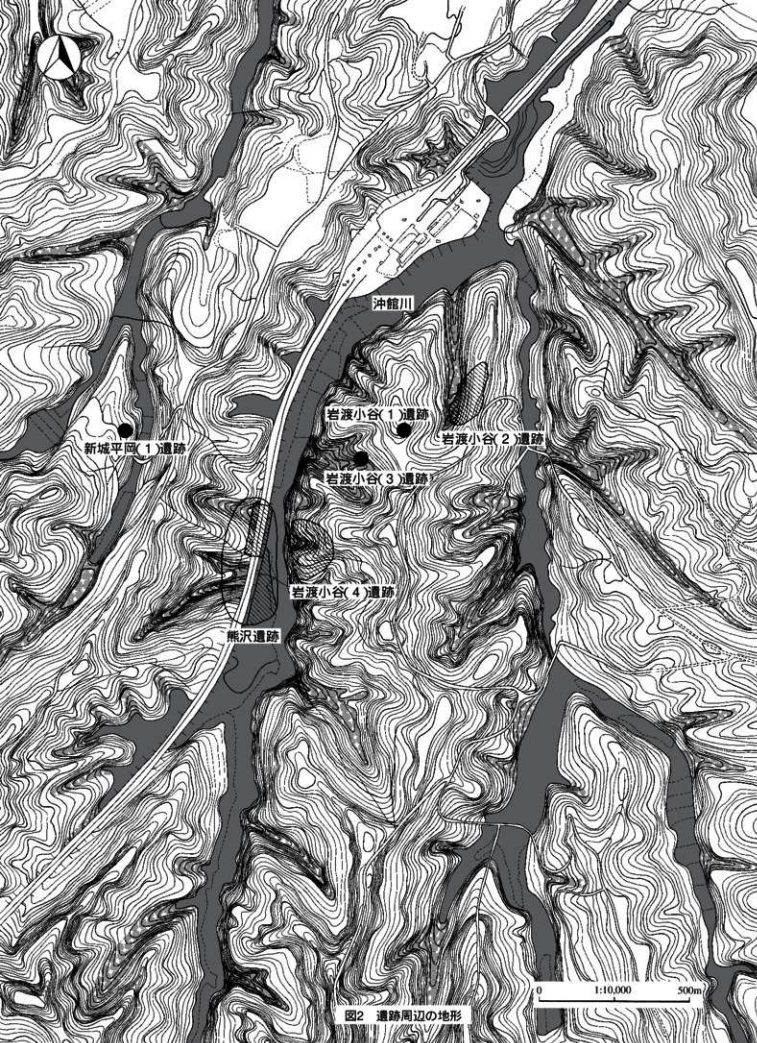
調査第一課

文化財保護主幹 畠山 昇

文化財保護主事 坂本 真弓

調査補助員 鶴ヶ崎礼恵、伊藤 純子、伏見 友里、森内 麻美（平成12年度）

浅利 康子、大石 悠治、片岡 典子、後藤 千春（平成13年度）



2 整理・報告書

平成13年度

平成12年度発掘調査 岩渡小谷(3)・(4)遺跡の整理作業

平成14年度

平成12年度発掘調査 岩渡小谷(3)遺跡の整理、岩渡小谷(4)遺跡の遺構および遺構外分(沢部分除く)の整理・報告書刊行

平成13年度発掘調査 岩渡小谷(4)遺跡のうち、遺構および遺構外分(沢部分を除く)の整理作業・報告書刊行

「岩渡小谷(3)・(4)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第352集刊行

平成13年度の発掘調査のうち、沢部分の整理作業。

平成15年度

岩渡小谷(4)遺跡 沢部分の整理作業

「岩渡小谷(4)遺跡」報告書刊行(本書)

第2節 調査方法・整理方法

1 調査方法

グリッドの設定は、工事用路線杭の座標から、新たに杭K1～K6までを設けた。K1・K2はX=88560.000上、K3・K5はX=88400.000上、K4・K6はX=88420.000上に位置している。これらの杭を基準にして、本遺跡ではK4及びK6を基準に4mごとにグリッドを設定した。X軸は南から北方向へ2種類のアルファベットA～Yの組合せを、Y軸は東から西方向へ算用数字で表示している。ただし、X軸に使用したアルファベットは100mごとに繰り返ることとしたので、AA～AYの次がBAとなる。グリッドの呼称は軸線の南東隅の交点を用いており、このため、岩渡小谷(4)遺跡がX軸AA～BP、Y軸が35～75までの範囲に含まれる。

B・Mの移設は、工事用路線杭の杭高からK1～K6に移設し調査区内に適宜設置した。

遺構の調査は、簡易測り方実測を用いた。縮尺は1/20を基本とするが、その他必要に応じて選択した。ただし、平成13年度はトータルステーション((株)アイシン精機の「遺構実測支援システム」)を一部使用した。

遺物の取り上げはグリッドごと、層位ごと一括して行い、遺物が集中して出土する範囲については4mごとのグリッドをさらに2mごとに分割して遺物の取り上げを行った。その際の呼称は、南東・北東・北西・南西の順に1から4まで番号を付し、グリッド名-小グリッド番号とした。このほか必要に応じて1/10、1/20の縮尺で記録してから取り上げたものもある。

写真撮影は主として35mmの一眼レフカメラを用いて撮影し、その他必要に応じて中型カメラを使用した。遺跡上空からモラジコンヘリを使い、中判カメラで撮影している。フィルムはモノクロネガ・

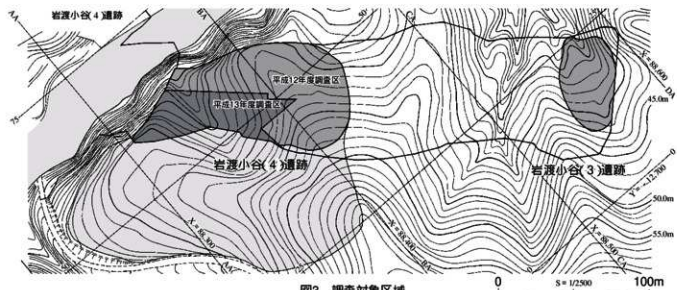


図3 調査対象区域

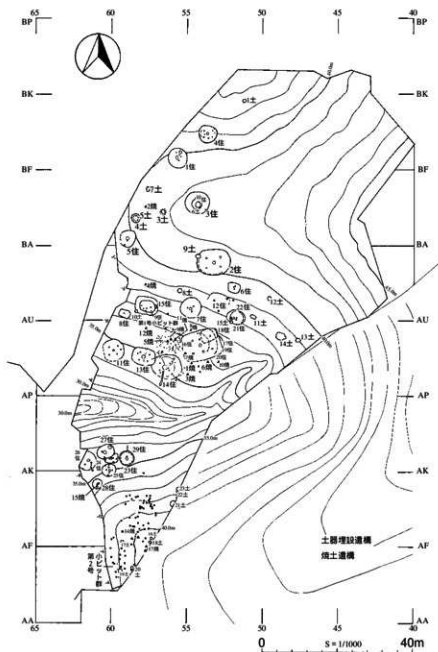


図4 遺構配置(1/1000)

カラーリバーサルを使用し、露出を変えて同一カットを3コマずつ撮影した。カラ・ネガは適宜使用した。

2 木質遺物の整理方法

本遺跡の沢部分からは調査時に約1900番までの番号を付して取り上げ作業を行った。現場での水洗いは、時間の制約と水道設備がなかったため必要最小限にとどめ、調査終了後に当センターで行った。遺物は草根によるひび割れや砂・クリ果皮片等が遺物に密着した状態のものがあつたため、手作業での洗浄は遺物を傷めるとの判断から一部はシャワーで洗浄したが、その他は簡易な流水洗浄に留めた。このため、大多数の遺物の汚れが落ちきれず、保管容器中に汚れが沈殿するため、定期的な水替えの必要が生じた。度重なる水替えはこれらの汚れの洗浄効果はもたらした。

これらの遺物は、現場での取り上げ番号（C番号）のほか、収納した箱番号（H番号）、樹種同定の通し番号（AOM番号）を併用して台帳を作成し、所在を明らかにした。最初に洗浄した時点で、漆器や全体の形状が分かる木製品や木組遺構に使用されたもの（Aランク）、端部に加工痕のある加工木や割材片、板材・角材などの加工痕の明瞭なもの（Bランク）、加工のない自然木（Cランク）に分類し併せて寸法・含水重量を計測した。

これを元に保存処理・実測点数等を出したところ、保存処理期間や遺物量などの様々な理由から次年度刊行は困難であると判断されたため、谷部の検出遺構および遺物は平成15年度刊行予定の報告書に掲載されることとなった。

保存処理については、当センターの木材保存処理設備の制約から遺物の規模が1m未満のものに限定されたため、これ以上の大型木材の保存処理の計画も立てる必要があつた。前述したAランク（木製品・大型木材を含む遺構に関わる木質遺物）を外部の保存処理業者に委託し、Bランク（遺構に伴わない木材）を当センターが行い、Cランクの自然木は適宜処理を行うものとした。保存処理は外部委託では高級アルコール法・PEG・真空凍結乾燥法、当センターでは糖アルコール法・PEG・真空凍結乾燥法で行った。

木質遺物の管理は、遺物観察表内にも記載している。保存処理後の木材は湿度の比較的低い収蔵庫に保管する予定だったが、実測等の必要があるものは整理室付近に保管していたものもあり、湿度等の管理が十分行えなかったものもあつた。

（坂本）

第3節 遺物の分類

土器

土器は以下のように分類した。

第 群 縄文時代早期の土器

第 群 縄文時代前期の土器

- 第1類 前期初頭に相当するもの
- 第2類 円筒下層a式
- 第3a類 円筒下層b₁式
- 第3b類 円筒下層b₂式
- 第4類 円筒下層c式
- 第5a類 円筒下層d₁式
- 第5b類 円筒下層d₂式
- 第6類 口縁～胴部の土器
- 第7類 胴～底部の土器
- 第8類 大木6～7a式併行期の土器
- 第9類 その他

- 第2類 円筒上層b式
- 第3類 円筒上層c式
- 第4類 円筒上層d式
- 第5類 円筒上層e式
- 第6類 椀林式
- 第7類 最花式
- 第8類 大木10式併行期
- 第9類 その他

第 群 縄文時代後期の土器

- 第1類 十腰内 式
- 第2類 十腰内 式
- 第3類 その他

第 群 縄文時代中期の土器

- 第1類 円筒上層a式

第 群 縄文時代晩期の土器

第 群 平安時代の土器

石器

剥片石器類と礫石器類とに分け、以下のように分類した。

<剥片石器類>

A類 石鏃

- a. 凹基無茎鏃
- b. 平基無茎鏃
- c. 平基有茎鏃 (T基)
- d. 凸基有茎鏃 (Y基)
- e. 尖基
- f. 円基

B類 石槍

C類 石錐

D類 石匙

- a. 縦形
- b. 横形
- c. 両面加工で槍先状の先端を持つもの

E類 石筥

F類 楔形石器

G類 不定形石器

- a. スクレイパー類
- b. Rフレイク
- c. Uフレイク

H類 異形石器

I類 剥片、石核、母岩

- a. 剥片
- b. 石核
- c. 母岩

< 礫石器類 >

J類 石斧

- a. 磨製石斧
- b. 打製石斧

K類 敲磨器類

- a. 磨石の類
 - 1. 凹孔を持つもの
 - 2. 凹孔を持たないもの
- b. 敲石の類
 - 1. 凹孔を持つもの
 - 2. 凹孔を持たないもの
- c. 凹石の類
 - 1. 円・楕円礫素材
 - 2. 石皿破片素材

L類 半円状扁平打製石器

なお、剥片石器類の分類と観察表の大部分は実測を依頼した(株)アルカの池谷勝典氏と馬場伸一郎氏による。観察表の記載項目や内容で特に注意すべき点は第352集と同様である。

M類 扶入扁平磨製石器

- N類 北海道式石冠
- O類 石皿・台石類
- P類 石棒類
 - a. 石棒
 - b. 石刀または石剣

Q類 石錘

R類 砥石

S類 擦切具

T類 その他

- a. 何らかの使用痕跡を残すもの
- b. 角柱状の搬入礫
- c. 自然礫

石製品 U類 岩偶

V類 軽石製品

土製品

木質遺物

本遺跡では多数の木材が出土しているが、大多数は用途の不明な割材であり、機能が類推出来るものは全体の数量からみれば非常に少ない。縄文時代前期という限られた年代での出土であり、「忍路土場遺跡」・「瀬名遺跡」の報告書を参考にこの時代の特徴が表れる分類方法を試みた。大きく分けて、機能で分類できるもの、形状・製作技法で分類できるものに分けた。

工具 掘り棒

石斧柄

敲き具

漁労具 櫂

容器 鉢

皿

槽

用途不明木製品 槌状・鳥形・舟形・柄・薄板状・管状・しゃもじ形・挟り付・板状

角材

杭

杭状先端加工材 角材・柱目材・板目材・割材・丸木材

用途不明加工材 棒状・容器状・桶状

虹目板・虹目材

板目板・板目材

割材 分割材（放射分割材・みかん割材）・分割材

半割材

両端

切断材

加工材

丸木材

擦痕のあるクルミ

ヒョウタン果皮片

ツル植物の巻き付けと結び

編物片

樹皮巻き（佐々木由香氏の分類に基づいたもの）

樹皮の厚さ

1. 厚手 2. 薄手 3. それ以外

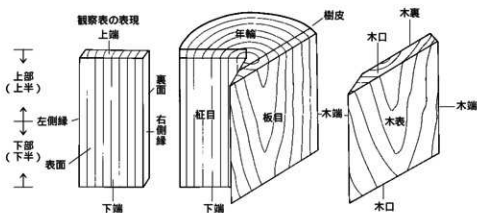
巻き方

- 樹皮を一方向から巻いたもの
 - 小型巻 - 樹皮幅の狭いもの
 - 普通巻 - 樹皮幅の標準的なもの
 - 幅広巻 - 樹皮幅の狭いもの

樹皮を二方向から巻いたもの - 両端巻き
- 樹皮を適当な長さで折り畳んだもの - 畳み
- 樹皮を緩く巻いたもので平面形状が楕円形のもの - 楕円形
- その他

巻きの厚さ

1. 薄いもの - 細巻き 2. 厚いもの - 太巻き



長野県埋蔵文化財センター1997「石川奈重通跡」を元に作成。

第2章 沢地区の遺構と遺物

第1節 地形

本遺跡が立地する沢は、丘陵の西側斜面を東から西へと開折し、段丘下の沖館川へと注ぐ多数の沢筋の一つである(図2)。開折作用によって沢を挟んだ北側・南側には斜面が形成されており、沢底へと急傾している。沢の起点となる湧水地点は調査区よりも東側に位置しており、沢全体からみればちょうど西側半分を調査した形となる。調査区東側境界付近のA O52→A P51→A Q49は小さな沢が形成されており、木組遺構が作られた大きな沢へと合流する。以下、大きな沢を本流とし、小さな沢を支流として記載する。

本流の湧水地点と思われる位置は標高42~43m、A M・N・42・43付近で(図4)ここから調査区西側境界までの距離は約82mである。湧水地点から調査区東側境界までの地表面の比高差は約8~9m、調査区西側境界までの地表面の比高差は約12mである。本流の流れは微妙に蛇行しながら流れており、調査区東側境界からN-99-W方向に約12m、A N55付近で緩やかに蛇行し、N-80-W方向に向きを変え、下流ではほぼ真西に流れている。

北側斜面は標高33~35mから、南側斜面は標高33~34mから沢地形となる。沢幅は上流側が狭く幅7mで、沢筋が蛇行する付近から幅約10mに広がり、下流では幅15m弱に達する。河床面の幅も上流側では1.5m強であるが、蛇行する近辺では幅2mと徐々に広がり、A N58付近で最大4m弱に達し、A N61付近で再び狭くなり幅2m弱となり、沖館川に注ぐ急崖へ至る。沢底は上流側河床面標高32.5m、下流側河床面標高28.5mであり、およそ4mの比高差でその傾斜角は約10°である。南側斜面から沢底に至る傾斜は上流側で29°、下流側で55°である。北側斜面から沢底に至る傾斜は上流側で52°、下流側で30°であり、かなり急傾斜である。

支流は標高36~37m、調査区東側境界に近いA R49の湧水地点から本流との合流地点A N53までの小沢で、湧水地点から右岸側に弧を描き、北から南に向かってN-122-Wの方向に流れている。沢開口部は急傾する傾斜変換点を沢地形の始まりとし(図4)、上流側が幅4m、下流側が6mで、下流にいくに従って徐々に沢幅が広がる。河床面は本流の沢地形と支流の沢地形が接するところまでほとんど変わらず、幅1m前後、距離は約20mである。河床面の比高差は1.5mでその傾斜は約5°である。西側斜面から沢底に至る傾斜は25~28°で、東側斜面から沢底に至る傾斜は30~35°であるから、本流よりはやや傾斜が緩い地形である。

沢地形内の層序と台地包含層との関係は次節に後述しているが、ベルトの南側斜面の第層が谷地形内にも存在していると考えられる。台地上の第層は深さ約30cmで、これらはほとんど分層できず、台地の南側斜面にみられた捨て場と谷内の包含層との関係は厳密には把握できなかった。しかし沢内での堆積状況から、第層は大きく分けてA-Cの3つに分層され、沢内でも堆積状況に時間差があると考えられる。C層中に構築されたと考えられる木組遺構とB層中から出土した遺物包含層には多少の時間差が見られる。

支流と本流の関係(図6) 支流は3本のベルトを設定し、土層の観察を行った。上部は台地の遺物包含層と同様の土で覆われ、下部も増水等の水の急激な変化が見られない。下部に黒色泥炭質粘土が堆積する。流路の基盤層は第層に相当し、本流より浸食が少ない。本流・支流の地形が形成されたのは第層堆積土以降であることは確認できるが、これ以前については定かではない。

(坂本)

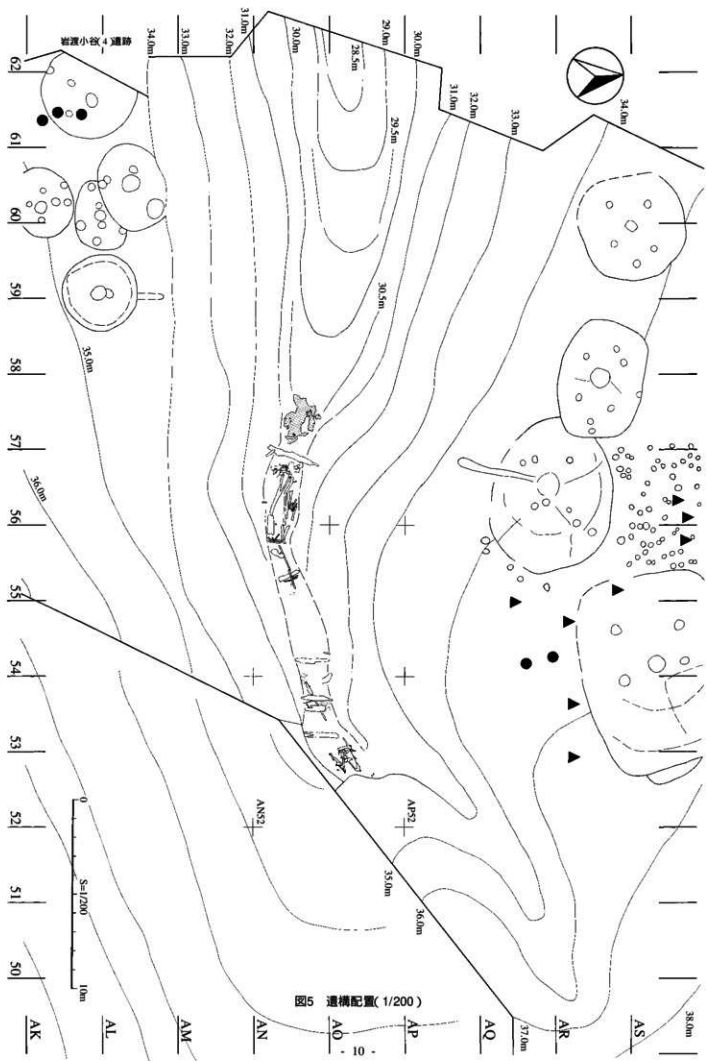


図5 遺構配置(1/200)

第2節 層序

土層観察用ベルトの設定(図6～9) 平成12年度の調査では、調査対象となった沢の西半分に4本の土層観察用ベルトを設けた。このうち1本は調査区境界部分である。残りの3本は調査区の中央に設けた観察用ベルトの東側と西側をそれぞれあてている。東側から第1ベルト、以下第2・第3・第4とした。第2と第3は調査区境界、第4は同一のベルトの両面(西側面・東側面)を当てており、大きくA～C層に分けている。

平成13年度の調査では、調査対象となった沢の東半分に6本の土層観察用ベルトを設けた。このうち1本は調査区境界の東側壁面である。残りの5本のうち本流側に2本、支流側に3本設けた。支流側のうち1本は作業通路用に設定したものである。本流西側から第1ベルト、第2ベルト、支流南側から第3ベルト・第4ベルト・第5ベルトである。

堆積土 台地の基本層序(『岩渡小谷(3)・(4)遺跡』所収)との対応から、第1層直下の第2層に相当する層が沢内に堆積している。第2層は地点によって堆積状況が異なるが、大きく分けてA～Cの3層に分層される。

A層は黒褐色土～暗褐色土主体、B層は黒褐色土～暗褐色土主体の層で、B層に遺物を多く含む層が見られる。C層は黒褐色～黒色砂質粘土で、砂と泥が互層になり堆積する箇所が見られる。

A層は主に斜面から供給される土砂による自然堆積と考えられる。土器や木質遺物等も混入しているが、B層ほど多く見られない。ベルトA5層のにぶい黄褐色土、ベルトA3層・A5層、第1～第2ベルト2層も同様である。第1ベルト～第2ベルトの堆積状況や南北両斜面の堆積状況から考えると北側斜面からの供給される土は黄褐色土の割合が強いと見られる。逆に第3～第4ベルトに共通する黒褐色土でローム塊を含む土砂の供給は南側斜面からのものが多いと見られる。

B層では沢上流の東側と下流の西側では若干様相が異なる。上流の第1～第2ベルト～調査区東側境界では黒褐色土主体の砂混じりの腐食質土が主体で、砂層が層状に堆積するものも見られる。木質遺物が増えはじめ、下層ほど出土量が増加する。下流側では、廃棄された土砂や斜面から供給された土砂とともに遺物も捨てられたと推測される。この範囲は第3～第4ベルト付近を中心としたA M～AO・58・59、AN・AO60に集中している。

A層とB層を分層する鍵層は、厚さ約10cm弱の細粒砂を主体とする土砂の層で、沢の増水等によって当時の地表面が砂層で覆われたためにできたものと思われる。調査区境界では19・20層、第1ベルトでは8～10層、第2ベルトでは8層、第3ベルトではA6層とB1層の層界面で観察される。平面的には、調査区東側境界から第1～第2ベルトまでの長さ17mほどの範囲で確認されている。また、この層は木組遺構埋没後に堆積した標高32.5～31.5m前後に堆積する土砂であり、第1～第2ベルト間AN54～57にかけては幅1.5m程度の規模で北側を流路とし、第3ベルト付近では沢全体に広がっている。第1～第2ベルトではこれらの土砂は確認されていない。

C層は全体に泥炭質黒褐色土と砂質土が主体で、砂層と泥炭質土層が互層となる箇所が多く見られ、繰り返し水の流路となっていたと考えられる。調査区西側境界付近の第1ベルトは小谷が沖館川へと注ぐ急崖に接した場所で、V字形谷を呈しているが、ここではC層の砂層堆積が最も厚く観察されている。木質遺物の遺存状態はC層が最もよく、木組遺構も検出された。平面的にはAN59が

ら東側でよく見られるが、とくにA N55～A N53で顕著である。第Vベルトでは灰白色粘土ブロックを混入するのが確認されている。調査区東側境界の土層では長さ約1.2m、厚さ5～10cmでほぼ水平に暗灰黄色砂質粘土が堆積している。これらは大型板材の周囲で確認されている(図13)。この粘土と同レベルの標高32.7～32.8mにかけてクリ果皮の堆積も見られた。

河床面(D1層)は灰褐色砂礫層で粗粒砂が主体である。一部浸食された黒色泥炭質土と互層になる。D2層をV字状に浸食した後には堆積した砂層で、V字谷の河床面が平坦になる木組遺構構築以前に堆積している。

黒色泥炭質土層(D2層)は河床面の両岸に堆積する極めて粘性の強い土質で、沼沢地化した止水堆積と考えられる。無遺物層であり、基盤となる緑灰色砂質土上部に堆積し、その厚さは調査区東側境界で約40cm、調査区中央付近の第Iベルト付近で1.3m、調査区西側境界の第Iベルト付近で20cm程度である。流路となったところは流水作用により浸食されており、灰褐色砂層(D1層)が厚く堆積している。谷の両岸に残存したものは流路から外れたために浸食を免れたと考えられる。

基盤層(緑灰色砂質粘土層)は主に上流で検出されている。第Iベルト付近では大型木材から約60cm下で(図8)第Iベルト付近では最深約1.3m下で検出された(図9)。第Iベルトの下方標高31.9m付近では北側の壁奥約10cmにわたり浸食されている。木組遺構の杭は暗褐色腐植土・砂・緑灰色細粒砂・青灰色粗砂に打ち込まれている。(坂本)

岩瀬小谷(4)沢の層序対応関係

報告書での 名称	00年	00Ⅰベルト	00Ⅱベルト	00Ⅲベルト	00Ⅳベルト	01年	01Ⅴベルト	01Ⅵベルト	01支流 1Ⅶ	01支流 2Ⅷ	01支流 3Ⅷ
Ⅱ		ⅠA-1			ⅣA-1 ⅣA-2					1	1
ⅢA(1)	Ⅲ1	ⅠA-2		ⅢA-1	ⅣA-3	A層	1～9	2～10	(2～6)	(2～8)	(1～7)
ⅢA	Ⅲ1	ⅠA-3		ⅢA-2	ⅣA-4	A層					
ⅢA(2)	Ⅲ2	ⅠA-4		ⅢA-3	ⅣA-5	A層					
ⅢA	Ⅲ2	ⅠA-5		ⅢA-4	ⅣA-6	A層					
ⅢA	Ⅲ2	ⅠA-6	ⅡA-1	ⅢA-5		A層					
ⅢB(3)	Ⅲ3	ⅠB-1	ⅡB-1	ⅢB-1	ⅣB-1	B層	10～17	11～14			
ⅢB(4)	Ⅲ4	ⅠB-2	ⅡB-2	ⅢB-2	ⅣB-2	B層					
ⅢB	Ⅲ4	ⅠB-3	ⅡB-3	ⅢB-3	ⅣB-3	B層					
ⅢB	Ⅲ4	ⅠB-4	ⅡB-4	ⅢB-4		B層					
ⅢB(5)	Ⅲ5	ⅠB-5	ⅡB-5	ⅢB-5		B層					
ⅢB	Ⅲ5		ⅡB-6	ⅢB-6		B層					
ⅢB	Ⅲ5		ⅡB-7			B層					
ⅢB(6)	Ⅲ6		ⅡB-8	ⅢB-7		B層					
ⅢB	Ⅲ6		ⅡB-9	ⅢB-8		B層					
ⅢB	Ⅲ6		ⅡB-10			B層					
ⅢC	Ⅲ7	ⅠC-1	ⅡC-1	ⅢC-1	ⅣC-1	C層	18～23	15～20			
ⅢC		ⅠC-2	ⅡC-2		ⅣC-2	C層					
ⅢC		ⅠC-3	ⅡC-3			C層					
ⅢC			ⅡC-4			C層					
D		ⅠD-1	ⅡD-1	ⅢD-1	ⅣD-1	D層	24・25	21	7	9	8
D				ⅢD-2	ⅣD-2	D層					
D					ⅣD-3	D層					

01年での調査では大きくA・B・C層に分層していることと、の場所によって堆積土が異なり細別は不可。との層番号は対応していない。

支流の層位は、1,2層から対応関係を当てはめたが、堆積土は本流と異なるため、対応させていない。

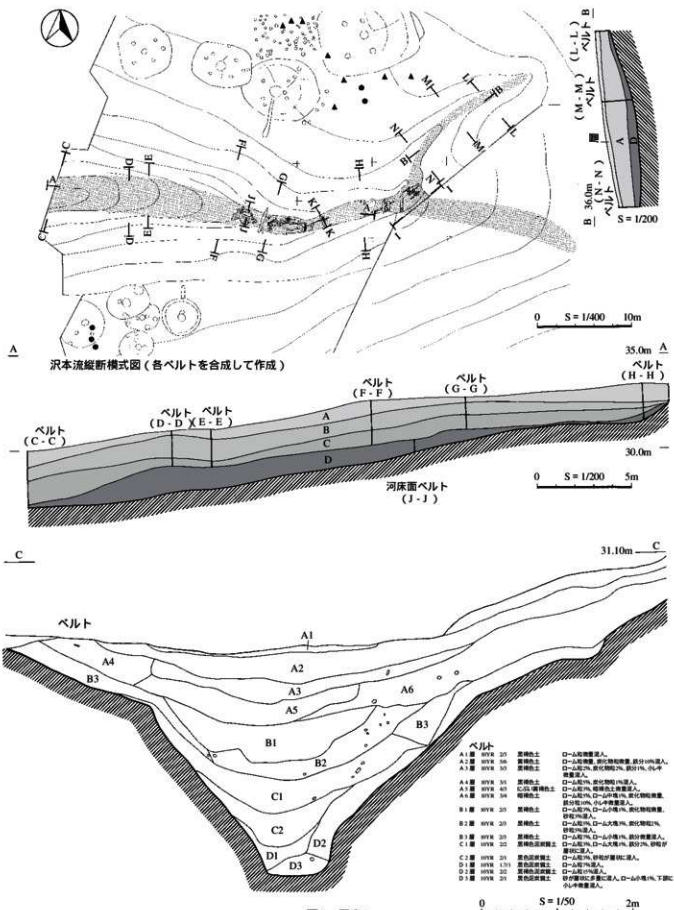


図6 層序1

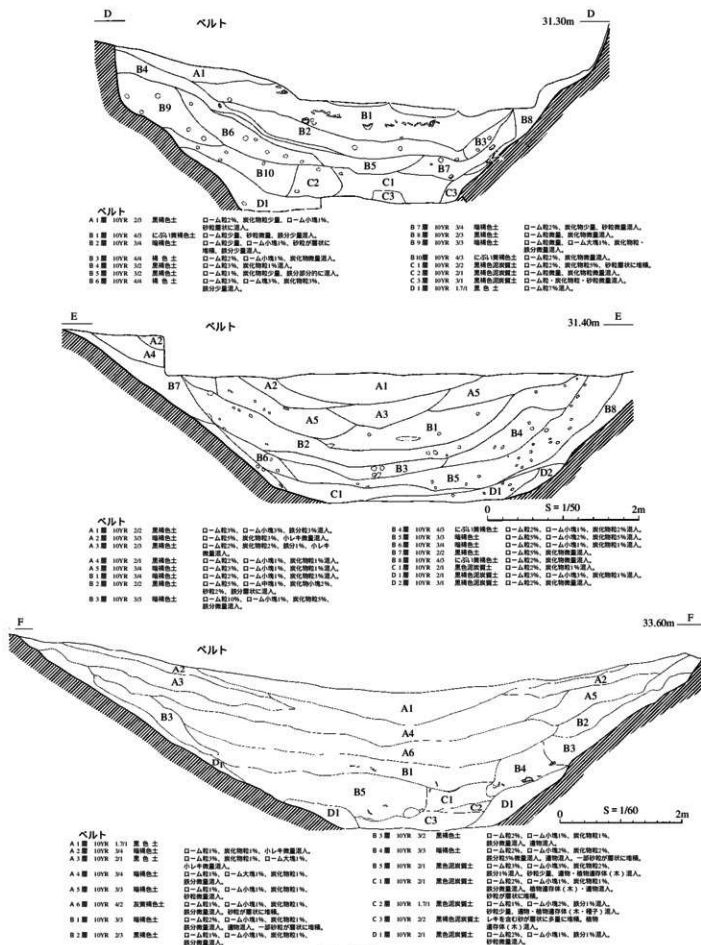


図7 層序2

岩瀬小沢4 跡跡

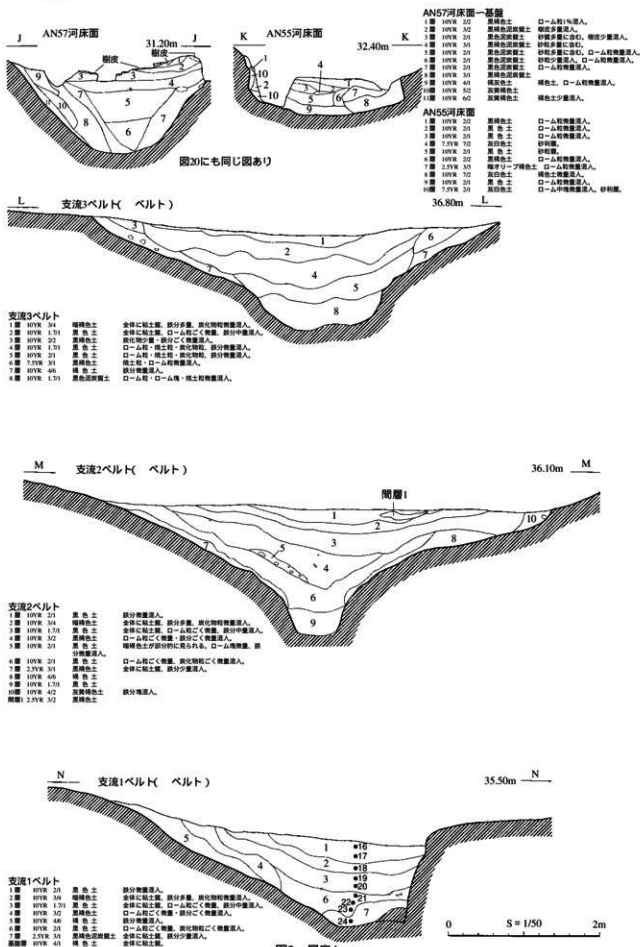


図9 層序4

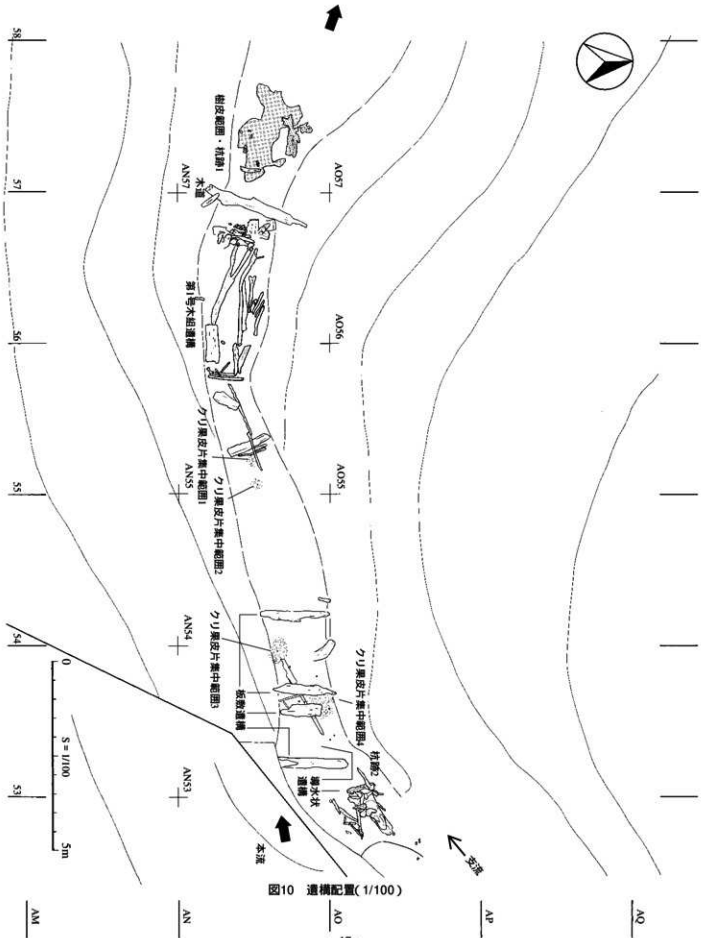


図10 遺構配置(1/100)

第3節 検出遺構と出土遺物

1 第1号木組遺構（図11～18・27～46）

[確認・調査・整理方法] 調査区沢中央部の標高31mで、沢が緩やかに蛇行するAN55・56に位置する。B層を掘り下げたところ、AN56で杭の打ち込みを確認した。B層からC層にかけては多くの木質遺物が出土したため、場所によっては調査時にほとんど腐化せずに取り上げた部分もあるが、空白部に遺物の出土がなかったわけではない。これらの遺物を取り上げ後に、C層で木材を組み合わせて構築した木組遺構を検出した。

調査段階ではC層とD層の違いを認識できなかったため、両岸に存在するD層も掘り下げている。

C層とD層の違いを把握できたのは、調査の終了近くであるため、写真では木組部分の両岸に土が堆積していないような印象を受けるが実際は両岸にD層が堆積していたと思われる。このため、平面図には破線でD層との境界を記載した。これは、土層図や写真等から起こしたものであり、十分吟味して作成しているが、若干不正確な部分もあると思われる。

当初、この木組遺構はAN56付近の貯水を行う「貯水部」、「埋部」、排水と土留めを行う「排水・土留部」のみでとらえていたが、整理の段階で、「貯水部」、「埋部」、「排水・土留部」とした部分の東側にも遺構として機能が想定できるような杭跡・木質遺物の出土状況が見られるため、新たに「導水部」とし、木組遺構の範囲を広げて捉えることとした。遺構の中で各形態・機能で分けた個別ブロックの規模を図12に掲げている。

[全体] 調査区域以外の沢も加味すれば、下流に位置し、緩やかに蛇行する地形に沿って構築されている。本流と支流が合流する箇所よりも9m下流である。沢の地形に即して構築されていることを加味すれば、平面形は東西に長い長方形である。全体の遺構規模は長軸6.92m（東西）、短軸2.42m（南北）である。大きくは、東側に位置する導水部と西側の貯水部・埋部・土留部・排水部の2つの地区に分けられる。

導水部 貯水部の東側、上流に位置し、N-107-Wに長軸を持つ。板材を横に固定するものと長軸に材を配するもの2つから構成される。長さ64cm、幅17cmの板材37-1を横にし、板目面を立て、木口に近い板目面の片面2点ずつに杭を打ち込んでいる。杭はほとんどが板材検出面で確認されている。4点の杭の位置関係から、北東30-4・北西31-2・南西31-1・南東40-3の杭として記載する（図12）。このほか、西側に打ち込まれた29-2や板材東側に打ち込まれたC1859（実測図なし）・43-7の杭もある。固定するための杭は、臨接して打ち込まれた北東・北西・南西杭と、板材と杭の間に丸木材をはさんで打ち込まれている南東杭があり、下流側から斜めに板材の下部方向に打ちこまれている。北東の30-4は上端を板材のある西側に向けて斜めに打ち込まれ、上端はほぼ板材に接する。南東の40-3は板材検出面よりも下で確認された。板材の西側から斜めに打ち込まれた29-2は板材の下位に打ち込まれている。

貯水部 貯水部は導水部の西側で下流に位置し、西側が埋部に隣接する。1m前後の木材を長軸に平行に配し、北辺と南辺を構成する。北辺は枠の外側にN-68-W方向に約13点の木を配置してお

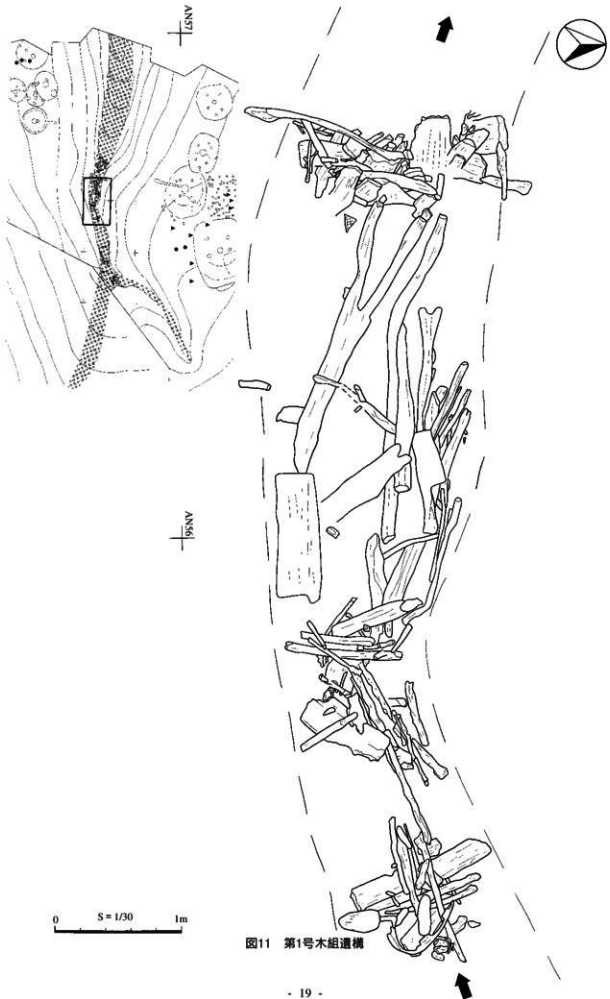


図11 第1号木組遺構

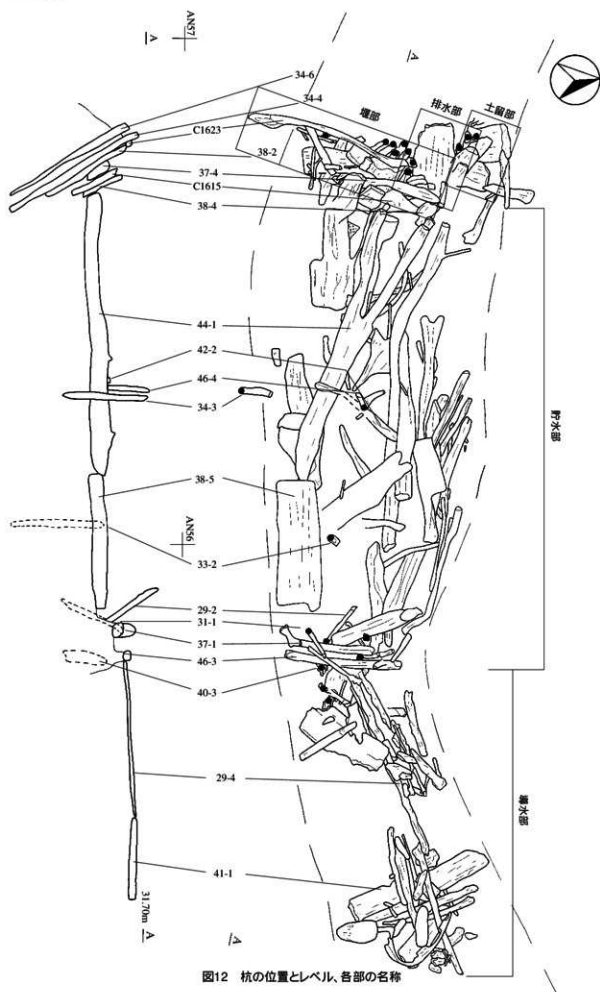


図12 杭の位置とレベル、各部の名称

り、枠内に近い方に規模の大きい木を配し、枠外に従って細い木になる傾向が見られた。貯水部と埋部の境界に隣接する構成材44-2の上部は枠外側に並べられている細い木と同じような方向になるよう置かれている。南辺はY材44-1と長方形板材38-5の2点で構成されている。板材はY材の東側で北辺枠内側と同じく真西に近い方向に置かれている。板材は枠内に傾け、Y材の長軸は北辺枠外側とほぼ同じ方向を向いて置かれている。

全体の規模は長さ3.56m、幅1.6mで、全体に南東・北西方向の斜めに位置する。この内北辺は長さ3.4m、幅70cmである。南辺は長さ3.1m、幅62cmである。木枠の北辺および南辺、西側に区切られた範囲を枠内とすると、全体の面積は約1.24㎡で、枠を構成する木材の高さは20cm前後である。枠内の最大幅は約50cmで、最小幅は北辺44-2と南辺44-1の間で約6cmである。

これらの材には、固定のために何らかの力が加わったような痕跡は見られなかった。北辺の木材はほとんど隙間なく整然と置かれており、とくに充填する作業が加えられた痕跡は見られなかった。

埋部（図15）東側が貯水部に隣接し、北側が排水部と接する。木組遺構では平面形の長軸方向に直交するブロックで、主に材の打ち込みによって構成される。これらの材の打ち込みを境として上流側と下流側を区切る役割を果たしている。これらはかなり残りのよい状態で、材の上部にも風化等の痕跡があまり見られなかった。

[構成材の配置] 貯水部に直交して南北方向に特徴的な材の設置や打ち込みが「4列」見られる。

1列目は貯水部側に接した部分で、4点の長方形板材の短い一端を打ち込んでいる。列の長さは約80cmで、板材は面を東西に向けて木口上面から打ち込んでいる。打ち込みの深さは20cm前後で、板の上端のレベルをそろえて水平にしているようである。38-3・4・C1615・C1614（実測図なし）板材は2列目の材に上部約15cm前後の箇所が接しており、下流側に傾けて打ちこまれている。

2列目は1列目の下流側に隣接し、板目厚板を横にして面を東西に向けている（37-4）。ちょうど材の北側木口面は貯水部の南辺44-1から連なる水の通り道にあたる。この材の上面はほぼ水平で、打ち込まれた形跡は見られないが、南側木口面にこの材を固定するためのものと思われる板材片がある。3列目の板目面と接している。

3列目は2列目の下流側に隣接し、4点の板材と杭を打ちこんでいる。南北方向の列の長さは約80cmで、板材同士を隙間なく打ち込む。後述する4列目の杭の上端とほぼ同じレベルで、打ち込みの深さも同程度である。上端は下流側に傾けて打ち込まれており、板材の板目面・柁目面全体が4列目の杭に接している。

4列目は3列目の下流側に接しており、8点の杭と3点の板材の打ち込みが見られる。杭列は南北方向に約70cmで、そのうち北側約30cmの間には5本の杭が隣接している。28-1・33-3・33-2は南側のやや離れた場所に位置する。杭の大きさは長さ約1m、太さは3cm前後である。5本の杭はほぼ隙間なく打ち込まれ、上端をやや下流側に傾けており、上端のレベルはほぼ水平に揃っている。いずれの杭の上端にも打ち込みによるつぶれや折れの痕跡が見られ、強い力が加わったことが窺える。打ち込みの深さは約50cmで、上部にできた隙間にさらに3点の木材を打ち込むことによって補強している。杭と3点の木の違いは、長さが短く杭の打ち込みの深さに達しないこと、上端レベルがそろって

いないこと、形状が異なること等である。これらの杭はかなり密集しているにも関わらず、杭同士で打ち込みあっているものはない。このため、下流側から上流側へ規則的に打ち込まれた可能性が高い。

排水部 東側に貯水部、南側が堰部、北側が土留部と接しており、2点の板材35-2と39-3の板目面を上面にし、下方が近接する。45以下の低い角度で打ち込んでいるために寝かせたような状態で検出されている。35-2の板目面はほぼ水平であるが、39-3の板目面は南に傾かせており、水を沢筋に流しやすくするようにする工夫と思われる。排水部の規模は長さ50cm、幅46cmである。貯水部からの水の流れを受ける部分は貯水部の北辺と南辺間のできる6cm幅とほぼ同じである。堰部と土留部の間をとおり、下流側に放水する役割と思われる。35-2の上端が下流側で立ち上がっているのは、貯水部である程度水を溜まったら、自然に放水されるような配慮がなされたからと思われる。

土留部 東側が貯水部、南側が排水部と接している。東西方向に板材の打ち込みが1列みられ、2点の長方形板材の短い一端を打ち込んでいる。これらの板材は長辺の一面が隣接している。板材の打ち込みの深さは30cm前後で、板の上端のレベルをそろえて水平にしているようである。上端を北側斜面に傾けて打ちこまれている。このほか、39-2の南側には2点の杭が排水部の39-3に隣接するように密に打ちこまれている。これらの杭は土留部の「オサエ」とともに、排水部の板材のオサエであったと思われる。

[杭の位置とレベル] 堰部8点、土留部3点、貯水部内2点、貯水外1点、導水部7点の計21点が確認されている。これらは貯水部枠内外で検出された3点を除いて各ブロックで前述しているため、ここではこの2点について記述する。

貯水部外で検出された杭34-3は南側斜面と河床面の地形変換点に杭の上端を北側に傾けて打ち込まれている。この杭はD層で確認し、打ち込み深度はほぼ全長の72cmに達する。この杭の位置と貯水部内中央に位置する46-4を直線で結ぶと、ちょうど貯水部枠に直交するような位置関係となる。46-4は遺構上面ですでに検出されており、遺構底面から下に約10cm打ち込まれている。また、杭の上端は両杭ともほぼ同レベル(図12)で、杭の規模も同じことから、同じ目的を持って打ち込まれた可能性が考えられる。

貯水部内東側に位置する33-2は全長74cmで、上端が西側に約5°傾く。貯水部内2・3層で確認した。遺構底面から下に約60cm打ち込まれている。

[堆積土] 前述したように杭の検出により遺構の存在を確認しており、杭の検出はVベルト21・23層である。これらの層は木片や白色粘土粒・塊が所々に認められ、これを掘り上げると黒褐色土と砂混じりの層(1層)が主体となって検出された。21・23層はベルト付近ではその分布が認められるが、他の沢部分にはほとんど見られない。これらの層の成因については、沢の蛇行する地形から比較的崩落の起こりやすい場所であった可能性が高い。

貯水部中央付近の南北方向に設けた土層ベルトは堆積土5層、D層(6～10層)から形成される。遺構上面から出土した材は21・23層の下位で検出された1層からの出土である。1層は貯水部内外からも検出され、2・3層との境界は土層観察用ベルトでは認められるが、平面的な広がりとしては不明瞭であった。3層では灰～緑灰色礫が混入し始める。4層は砂層と黒褐色土が互層となっており、

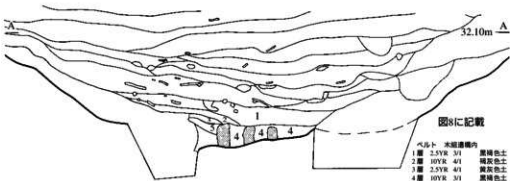


図8に記載

- ベルト 木組遺構内
- 1層 2.5YR 4/1 黒褐色土
 - 2層 10YR 4/1 黒色土
 - 3層 2.5YR 4/1 黒褐色土
 - 4層 10YR 3/1 黒褐色土
 - 5層 2.5YR 4/2 暗灰黄色土

- ム中粒微塵、砂粒極少量混入。
- ム中粒微塵、砂粒少量混入。
- ム粘粒混、砂粒混入。
- ム粘粒混、砂粒少量混入。
- ム粘粒混、砂粒混入。

木組遺構内

- 1層 10YR 2/1 黒色土
- 2層 10YR 1.7/1 黒色土
- 3層 10YR 2/1 黒色土
- 4層 10YR 2/1 黒色土
- 5層 10YR 4/1 暗褐色土
- 6層 10YR 1.7/1 黒色泥炭質土
- 7層 10YR 2/1 黒色泥炭質土
- 8層 10YR 1.7/1 黒色泥炭質土
- 9層 10YR 2/1 黒色泥炭質土
- 10層 10YR 2/1 黒色泥炭質土

- 小粒中粒混入。
- 砂粒少量混入。
- 黒色土
- 白色粘土粒・砂粒混入、小粒少量混入。
- 砂粒少量、ウレミ微塵混入。
- 白色粘土混、砂粒少量混入。
- 黒色泥炭質土、砂粒少量混入。
- 白色粘土少量、砂粒一部混入。
- 黒色泥炭質土、砂粒少量、小粒少量混入。
- 砂粒少量混入。
- 砂粒、小粒少量に混入。
- 小粒・砂粒少量混入。

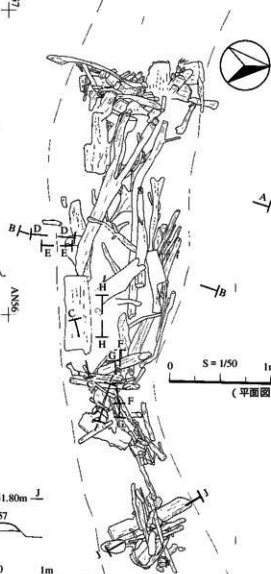
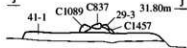
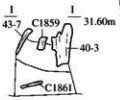
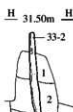
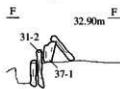
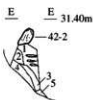
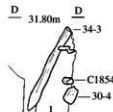
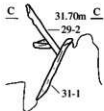
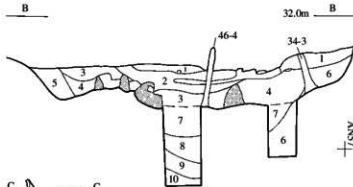
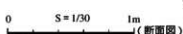


図13 堆積土・杭の打ちこみ



掘り棒や石斧柄未製品はこの砂層上面で検出されている。5層は白色粘土主体である。6層は泥炭質層、トレンチ部分の7～10層からは砂粒・礫主体となり、ともに遺物等は出土しなかった。このトレンチと、杭のトレンチから、遺構の底面は3・4層の黒色土と7・10層以下の砂層主体の層理面にあると判断した。

また、貯水部西側の ベルト下位に遺構堆積土が観察できるが、水の通り道と考えられる4層は他の貯水部内堆積土との違いが確認できなかった。

[底板] 貯水部を構成していた北辺および南辺の構成材を取り上げたところ、貯水部の底面からやや厚みのある板材が敷かれたような状態で検出された。当初、木組遺構構築以前の流路に残存した可能性も考慮したが、堰部の西側ではこのような状況が見られないことから、本遺構に伴うものと判断した。底面を検出する際残存している部分まで掘り下げたため、やや高低差のある検出となった。残存状態が極めて悪いため、全体を検出できなかったが、おそらく平坦的な広がりを持った状態であったと推測される。検出できた範囲は長軸2.3m、短軸1mで東西に長い不整形であり、堰部に接して貯水部内の西側半分、Y材の又部分、貯水部外南側に広がっていたと推定される。堰部の1列目に接する端部はまっすぐ揃っており、堰部と隙間なく接するように加工されたと考えられる。底面に使用した材は長さ70cm～1m、幅30cm前後の板材のようなものをほぼ遺構の長軸方向に置いたと考えられる。

[掘り方] 掘り方については、前述の [確認・調査・整理方法] のとおり、D層を掘り下げてしまったため、詳細については不明である。

[構築方法] 貯水部の構築順序は、主に下流側から上流側に向かって構築され、大きく土留部 排水部 堰部 貯水部底板 貯水部の順となる。この一連の作業の流れでいくと、東側の排水部の構築が最終的な作業行程であった可能性が高い。また、貯水部内外の杭の打ち込みについては、どの構築段階であったのかは判断ができなかった。

土留部 39-2・39-1 34-2・35-3

排水部 39-3 35-2 *排水部は堰部2列目構築までの間に作られている。

堰部(4列目)

堰杭 C1669・34-1 33-3 30-1 34-4
*堰杭は打ち込み順が分かるものを先に表示している

オサエ (40-2・40-1・46-6) C1851 34-6 34-5

堰杭 36-1 30-2・31-3 *36-1は堰部3列目であるが、ここに含めた。

堰部(3列目) 35-4・36-5 38-2 35-3

堰部(2列目) 37-4

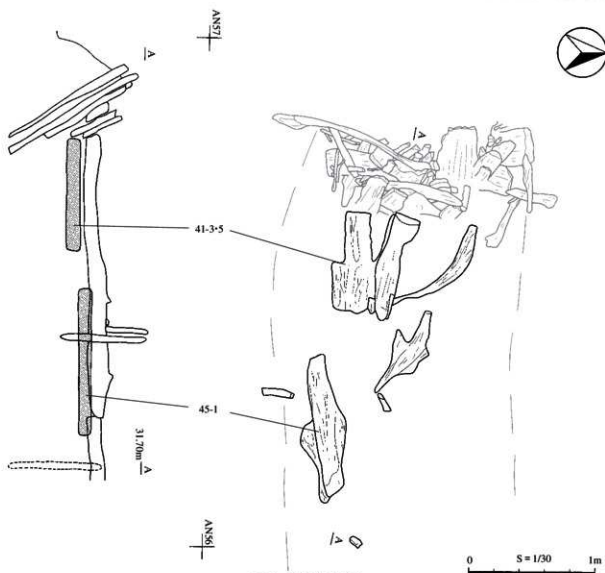


図14 底板検出状況

オサエ C1792・36-4

壇部(1列目)38-4・C1614・38-3 C1615

底板

木枠部 44-1・44-2

[構成材] 杭 - 木取りが木製品転用のもの(29-2、30-1・2・4、31-2・3) 角材のもの(33-2、34-1・4、36-3) 柱目板のもの(43-7) 板目材のもの(33-3、34-5、35-1～5) 割材のもの(34-2・3・6、36-1、43-1、40-1) 丸木材(42-2、43-6、46-4・6) 半割材(46-1)である。杭は、必ずしも先端が尖った形態でなくても構わなかったと思われる。櫂や掘り棒を転用した杭に代表される

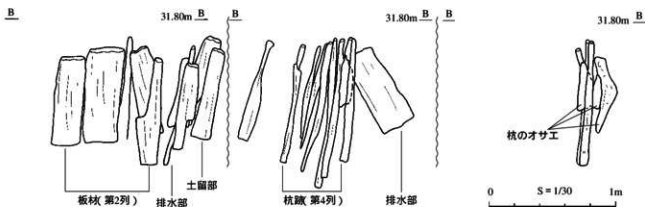
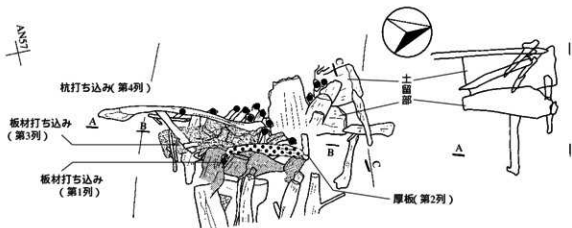
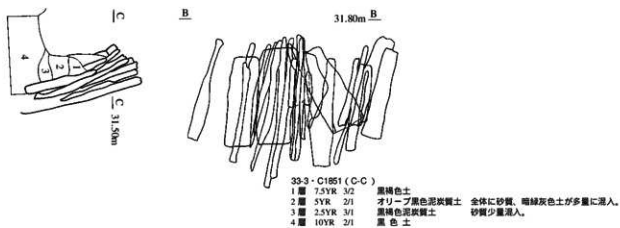


図15 堰・排水・土留部構築状況

0 S = 1/30 1m

ように、先端がヘラ状であっても他の杭と同じように打ち込んで使用している。上端が敲打によりツブれているものが多く、強い力が加わったものと推測される。これを裏付けるように杭の先端もツブている例が多い。

このほか打ち込まれている板材としては、柱目厚板のもの(36-5) 柱目薄板(36-4) 柱目板(37-3) 板目板(38-1・3・4、39-2・3、40-2・3) 板目厚板(38-2、39-1)が挙げられる。

・設置して使用したと思われるもの - 掘り棒(29-3・4) 柱目板(43-9) 板目厚板(37-4、38-5、41-1・5、45-1) 板目板(37-1、39-4、41-2～4) 板目材(42-4、33-1、46-5) 半割材(42-3、44-2) 割材(42-5) 加工材(37-2) 丸木材(44-1、45-1・3、46-7) 杭状先端加工材(丸木)(46-2・3)

・遺構と関連すると思われるもの - 掘り棒(28-2～4、30-3) 石斧柄未製品(32-1～3) 杭状先端加工材(半割材)(36-2) 杭状先端加工材(36-2、43-3) 櫛状加工材(43-2・10) 板目材(43-8) 割材(43-4・5、42-1)である。

[遺構上面の木質遺物] 構成材の上面では他の場所と比較して、自然木や小破片の出土が少なく、比較的大きな材の検出が見られた。これらは本遺構の長軸・短軸方向と一致せず、構成材から約20cm高いレベルで検出されているために、これらが遺構で使用されていたと考えられる積極的理由は見られない。しかし、沢地形であることを考慮すれば、土砂の堆積等が瞬時に見られることもあるので、むしろ遺構に使用された可能性を含めて考えたい。小片についての詳細は不明であるが、とくに大型材であるC451(実測図なし)について可能性を考えてみる。C451は長さ約1.7mの分割材で、貯水枠と長軸方向が異なった状態で出土している。この出土状態から流水による圧力で遺構の長軸方向と異なった出土状態を示した可能性もある。また、ここでは杭の存在も注目され、33-2の杭はC451のオサエとして使用された可能性も考えられる。このほかに導水部の板材を補強すると見られる材(46-2・41-2)もある。また、貯水部北辺と同じ主軸方向で出土した掘り棒29-1は遺構確認面より10cmほど上部での検出であるが、主軸方向を同じくする掘り棒2点が貯水部北辺の北側から出土していることや完形に近い掘り棒がこの周辺でのみ出土していることを考慮すれば、何らかの関係があったと思われる(図16)。

[遺物出土状況] ここでは主に遺構内の遺物について記す。木材片・木製品・土器・石器のほか、堆積土中から種子類も出土している(第3章第11節)。木製品では貯水部内から出土した遺物としては、石斧柄素材が底面から1点、長軸を南北方向にして出土している。このほか、貯水部北辺の北端から石斧柄未製品1点、掘り棒2点が出土している。貯水部内からの土器の出土は見られないが、外側底板上部から円筒下層b式土器の深鉢口縁部が出土している(図27)。

[時期・小結] 木組遺構の時期については、C層出土土器が円筒下層b式土器であることや、木組遺構貯水部外南の底板上面に控して円筒下層b式土器が出土したこと、放射性炭素年代測定の結果(第3章第5節)から、概ね縄文時代前期中葉から後葉にかけての円筒下層b式期に構築・使用されたと考えられる。木組東側の導水部から導かれた水が貯水部内に溜められ、必要に応じて排水部から排水される使用方法と考えられる。その他、堰部によって厳密に貯水・排水を制御し、土留部で土砂の流入を防いだのは、下流側での水の利用も大いに関係してくる可能性が高い。

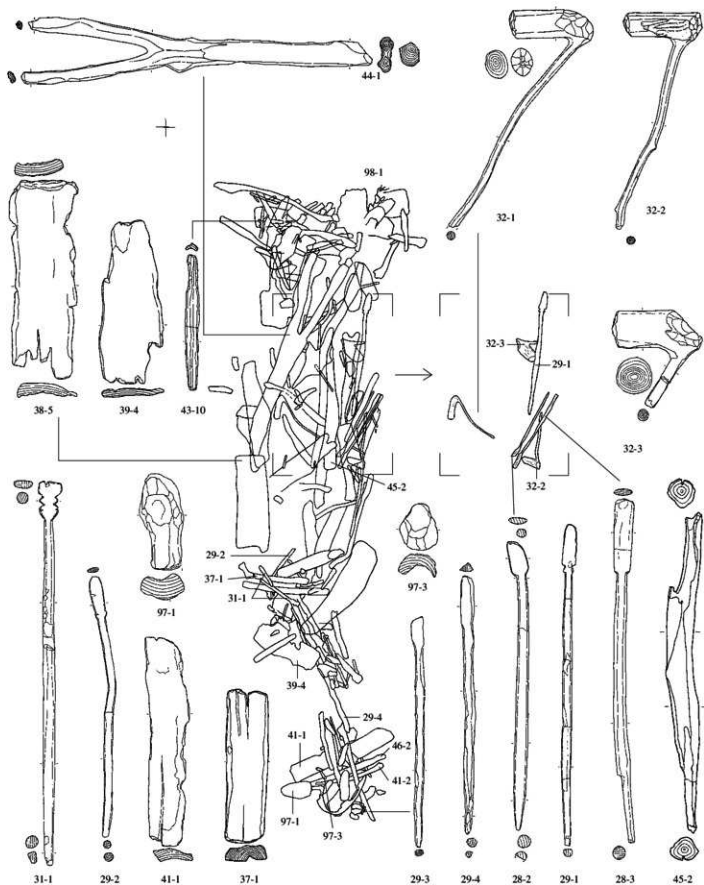


图16 構成材検出状況(全体)

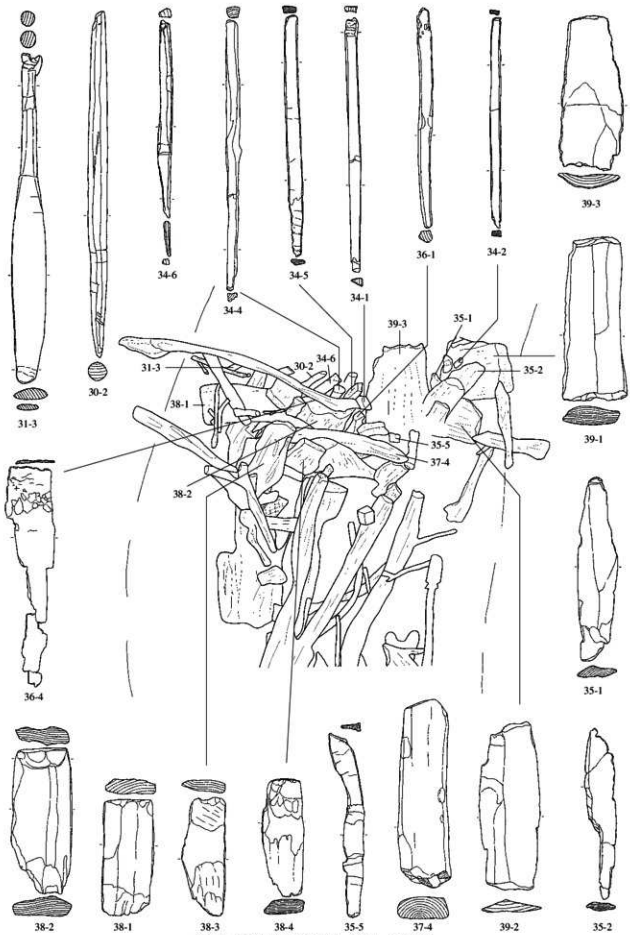


図17 構成材検出状況(煙・排水・土留部)

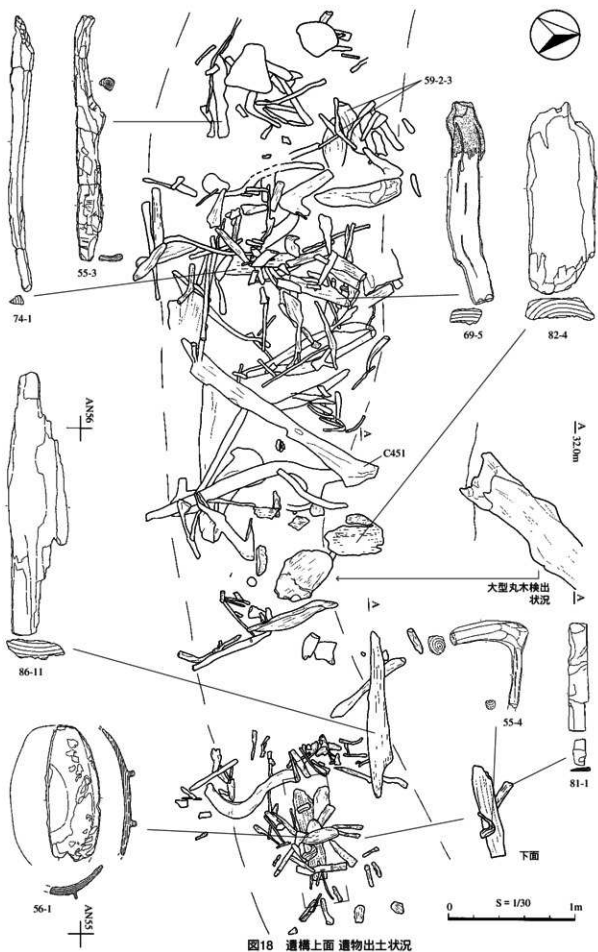


图18 遺構上面 遺物出土状況

2 木道 (図19・47)

[確認] 沢の土層観察用ベルトの西側に近く、調査時の比較的早い段階で検出した遺構の一つである。当初第1号木組遺構の堰杭列に近接して共に検出されたため、何らかの関連性があるものと考えたが、第1号木組遺構の機能と運動した機能を想定できなかったため、別遺構として扱った。

[位置・規模] 沢の川底付近で両斜面に接し、第1号木組遺構の西側に隣接したA N56・57に位置する。沢の流路方向にほぼ直交する南北方向で検出されている。木道は面を作り出した芯持材と杭によって構成されている。

芯持材は調査時に図化した長さ2.84m、幅最大40cmで、北側の標高31.64m、南側の標高31.5mで、南側は材が折れたことにより立ち上がったようである。北側斜面に近い部分では細くなりながら、緩やかに立ち上がっている。中央付近を中心とした南北約1.6mは標高31.4m前後でほぼ水平な状態である。杭は芯持材の南東側端に上部を北西に向けた状態で、杭の上部は芯持材の水平面から約5cm上で検出されている。この杭は長さ約80cm、幅約15cm、厚さ約9cmで、黒色粘土質土層および基盤層に打ち込まれている。とくに基盤層には約15cm打ち込まれており、杭が動いた痕跡は見られなかった。

[堆積土] 上部の堆積土については調査時に図化しなかったが、ベルトの堆積状況から23層直下で検出されたものと見られる。木道下部は、第1号木組遺構から排水された水が流れると推測され、堆積状況からも木道直下で砂層の堆積が互層となって認められる。木道直下にはクリ果皮の集中層が長さ60cm、厚さ4cm程度確認できたが、芯持材取り上げ時に確認したところ、やや散在しており範囲として認められなかった。

[構築・構成材] 左右斜面の下の両岸に残存する黒色泥炭質土層を土台として芯持材を設置したと考えられる。その際、上面がほぼ水平面になるよう、何らかの掘削や土盛りが行われた可能性があるが、そのような痕跡は確認できなかった。この後、南東側に杭が打ち込まれたものと思われる。木道に使用された丸木材47-1は上面に当たる部分を削り、平坦面を作りだしている。下面は北側の一部に同じく平坦面を作り出しているのみである。杭は半割材で(47-2)、上端は若干潰れ、下端はやや細く作られている。杭の上面は、第1号木組遺構貯水部木枠と同レベルの面に構築されている。

[使用痕跡] 使用されたと思われる痕跡は確認できなかった。

[時期・小結] 本遺構は斜面地から沢内への通路として利用されるとともに、沢を挟んで南北に広がる斜面への通り道として利用された可能性も考えられる。東側の第1号木組遺構からの排水を避けることができることや検出層位もほぼ同じであることやこの木組遺構と隣接していることを考え合わせると同一時期に機能していた可能性が極めて高い。

3 樹皮範囲・杭跡1 (図20・21・48)

[確認] 前年度の調査範囲の東側境界に接し、沢の包含層の中では多量の木質遺物が調査の早い段階で確認できた区域である。上流側と比べて、木質遺物の出土層位は河床面に近い部分のみみられる(図21)。これらの木材を取りあげたところ、C層面で、土壌化したような褐色の広がり確認されたため、これを樹皮範囲として調査を行った。また、多量の木質遺物に混じって、杭のように立った状態のものも何点か確認できたためこれを残した状態で調査を行った。当初は木質遺物が廃棄された場と考えたが、この下面から樹皮範囲が確認されたことで、第1号木組遺構の貯水部から流れてきた

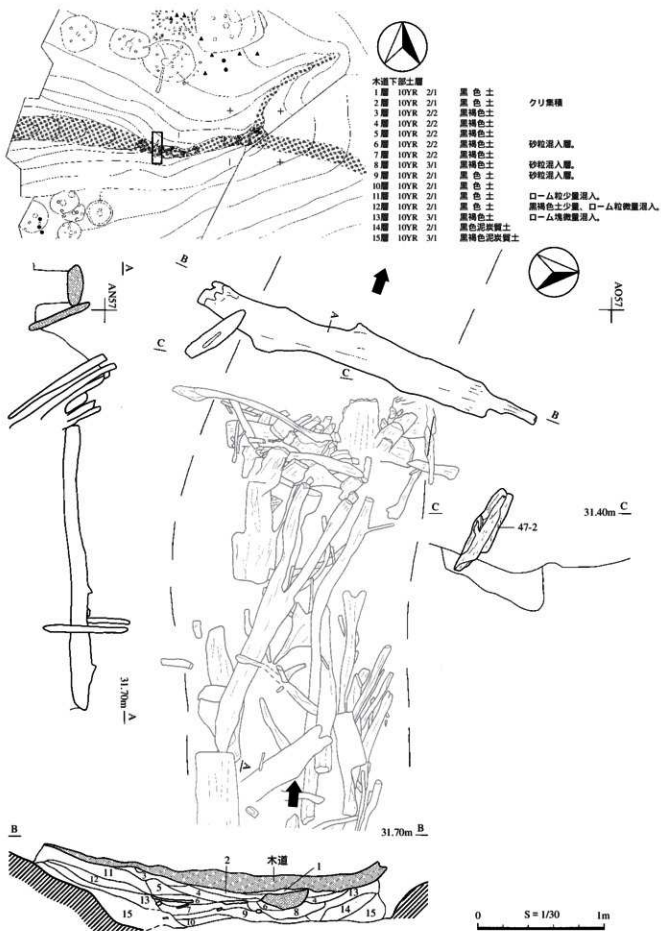


図19 木道

水の再利用が想定された。しかし、木道により木組遺構と樹皮範囲が区切られている点や一連のものであるという傍証が得られない点を考慮し、ここでは別遺構として扱う。

[位置・規模] 木道の下流側AN57に位置し、長軸2.6m、短軸1.9mの不整形で、標高31m前後のレベルに見られる。地形の傾斜によって東から西側へと緩やかに傾斜している。樹皮は幾重にも重なりあった状態で検出されたが、この範囲内の一部に樹皮を確認できない部分もあった。上部は所々、樹皮の原形をとどめているが、下部に堆積しているものは土壌化した状態で、厚さは数cm～20cm前後である。また、この樹皮を貫いた状態で杭が5点検出された。いずれも樹皮範囲の南東側、南側斜面に沿って打ち込まれており、斜面と河床面の変化地点と杭の距離はおおよそ20～50cmである。48-1は約40cm、48-2は約20cm、48-3は約50cm、48-4・48-5は約30cmである。打ち込みによる杭と地面の接点間の距離を測ると48-5と48-2の間隔は約40cm、48-4と48-2の間隔は約60cm、48-1と48-3の間隔は約20cmである、これらの杭の打ち込み方向にはバラツキがあり、南方向から北に向かって斜めに打ち込まれているもの(48-5)、西方向から東に向かって斜めに打ち込まれているもの(48-4)、若干傾いているが、ほぼ垂直なもの(48-1～3)がみられる。

[堆積土] 前述したように、廃絶されたと思われる木材が樹皮範囲や杭跡上面から検出されており、上部の堆積土は不明である。樹皮範囲は基盤層に堆積する砂層(D2層)上面で検出され、樹皮範囲から砂層に達する杭跡(48-4)もみられる。

[構成材] 杭は5点検出し、3点が樫状木製品を転用した杭(48-1～3)、1点が板目材(48-5)、1点が丸木材(48-4)を使用している。樫状木製品は柄から幅広になる部分を使用するもの(48-1)、幅広の部分を使用するもの(48-2・3)である。48-5の上部は水位による影響と思われる無数のヒビが入る。48-4の樹種はイヌエンジュである。

[遺物出土状況] 樹皮範囲上面には多量の木材が出土している。上流側に比べると水量の供給が少なかったためか、全体に遺存状態が悪く、土壌化の進んだ木質遺物が多数見られた。ここでは、特に大型割材と杭の可能性のあるものの2つについての出土状況を述べる。大型割材(94-4)は杭跡48-1～5と平行に出土し、後述する杭の可能性のあるものと近接している。しかし、杭跡に固定されるような出土状況ではなく、やや上面で検出している。

杭の可能性のある77-2、90-1、C1590(実測図なし)は、打ち込みの状況が確認できなかったが、図面での杭の記載がみられるものである。

これらの出土状況は、杭跡や樹皮範囲に関わった可能性も否定できないが、水流等により大きく位置が変化した可能性もあるため、ここでは出土状況を述べるに留める。

[時期・小結] 本遺構は第1号木組遺構の西側下流に位置し、木道との西側に隣接する遺構である。樹皮範囲とこの南側に集中する杭跡やこれらの上面に見られる木材出土状況から何らかの木組の施設が構築され、検出面は第1号木組遺構の底板とほぼ同様であることから同時期に機能していた可能性も高い。このほか、第1号木組遺構の貯水部付近から底板が検出された例から、第1号木組遺構の使用・構築以前に貯水部の機能を持つような木組構造を持っていた可能性はある。ただ、何よりも上面の遺物出土状況からはその木組構造に関わるとと思われる遺物が出土していないことや第1号木組遺構と杭跡位置が異なることもあり、ここでは前述したような第1号木組遺構から排出された水を再利用

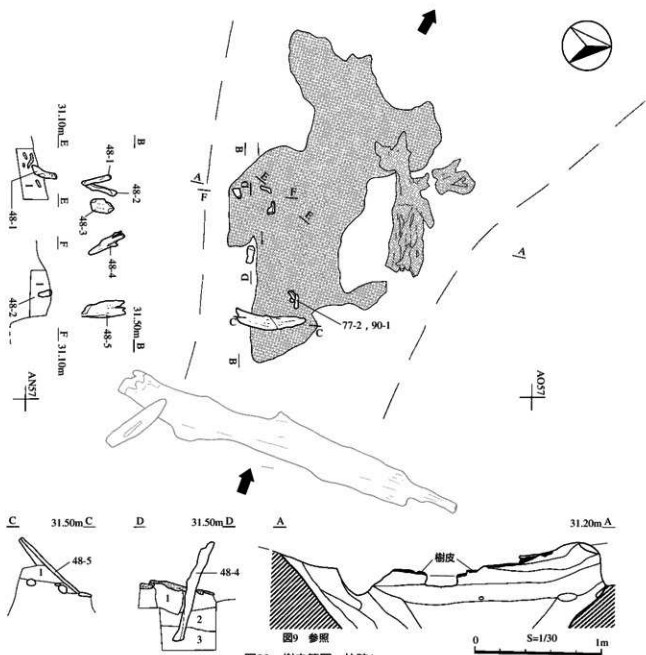
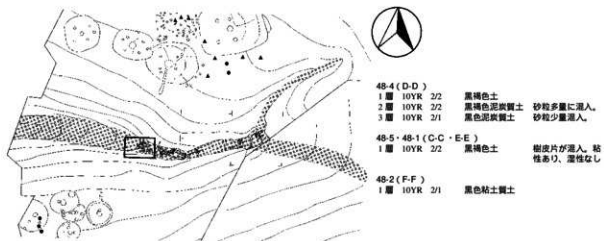


図20 樹皮範囲・坑跡1

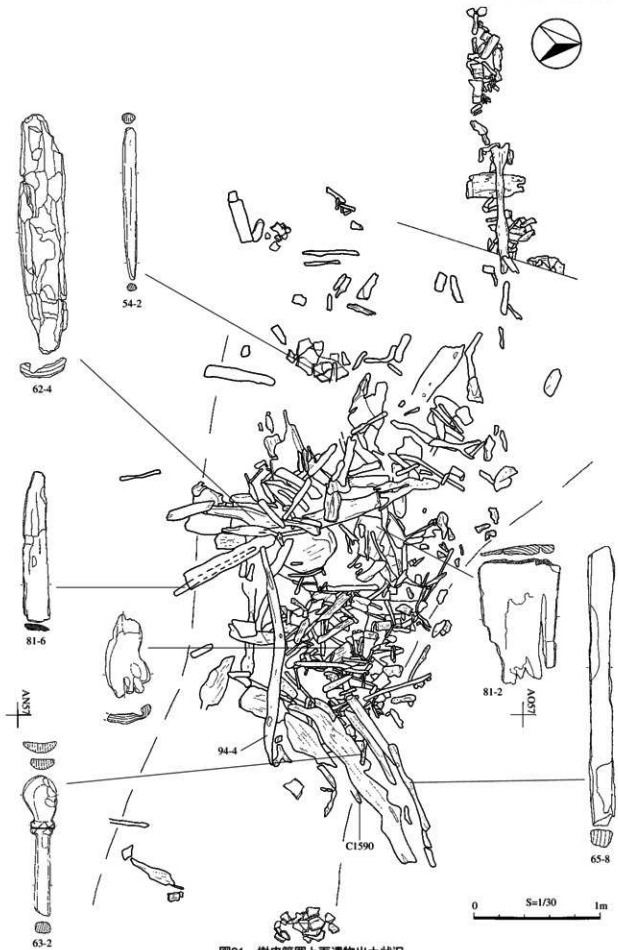


図21 樹皮範囲上面遺物出土状況

する段階の施設であったと思われる。

板敷遺構・杭跡2・導水状遺構（第2号木組遺構）（図22～25・49～53）

[調査・整理方法] 下流側で第1号木組遺構が確認され、本流と支流の合流付近にも遺構が存在する可能性があったため、第1号木組遺構と平行して調査を進めた。沢に直交した大型の木材が検出され、この北側からも杭跡が検出されたため、第1号木組遺構と関連する可能性のある「第2号木組遺構」として調査を行った。

発掘調査後に整理作業を行った結果、1 検出層位が第1号木組遺構と異なり、第2号木組遺構（大型板材検出面）は黒褐色土主体のB層中であること、2 杭跡はC層検出のものが多いこと、3 大型木材検出面の上部から下部にかけて多量の木質遺物が廃棄されている可能性が高いこと、などが分かった。

大型木材の主軸方向が4点とも同じであるのは不自然なことから、人為的に「置かれた」可能性が高く、杭跡と大型木材は検出層位が異なることから、「第2号木組遺構」の呼び方を変更して「板敷遺構」・「杭跡2」とそれぞれ別に扱った。

このほか、出土位置から水の流れを一定にするとと思われる木材とこれに平行してほぼ等間隔に打ち込まれた杭跡が見られ、本流と支流が合流する場所に位置している。調査時には遺構として認識しなかったが、本流と支流の水流を導く「導水」の機能が想定されることから「導水状遺構」と新たに遺構名を付して報告することとする。

4 板敷遺構

[確認・位置] 調査区沢東側の標高32～33mで、沢が緩やかに蛇行するAN53・54、AO52に位置する。ベルト近辺を掘り下げたところ、B層中で大型板材や割材が沢に直交して検出された。

[規模] 大型材は東側から5点みられ、長軸方向はN-176～180-Sの範囲でほぼ南北方向である。長軸1.1m～1.8m、幅26～30cmであり、それぞれの材と材の距離は52-2と52-4で1.4m、52-4と52-3で50cm、52-3と52-1で1.8mである。板材の標高は32.2～33.0mで、上流から下流に向かい緩やかに傾斜している。板材はベルト13層で52-1が確認されている。南側の斜面上に控しているものも見られ、52-1・52-2などが当てはまる。

[堆積土] 52-2・52-4 検出面上層では黄灰白色の粘土が不整形な範囲で広がっており、不整な楕円形の広がりが最大長2m、これに直交する幅1mで、厚さ約10cmに及ぶ。全体の範囲は調査区境界外に広がっており、不明である（図8の調査区境界ベルト24層）。基底部に見られる白色粘土とは異なり、黄灰白色でシルト質粘土層である。これ以外の範囲では黒色粘土質層が広がっている。

[遺構構成材] 52-3・4は板目厚板、52-1は割材、52-2・C1320（実測なし）は丸木材である。端部が細くなるものがほとんどで、両端が細くなるもの（52-2・3）、一端が細くなるもの（52-1）に分かれる。52-1は破損しており詳細は不明である。52-2～4は上面をほぼ平坦に加工している。樹種はクリがほとんどで、52-1のみがコナラ節である。

[遺物出土状況] 材の上位および下位からも木質遺物が多量に出土している。他の出土遺物と異なり、容器片（漆器含む）が多く出土している。板材検出面ではクリ果皮がまとめて出土しており、果皮の廃棄場としても利用されていた可能性も高い。

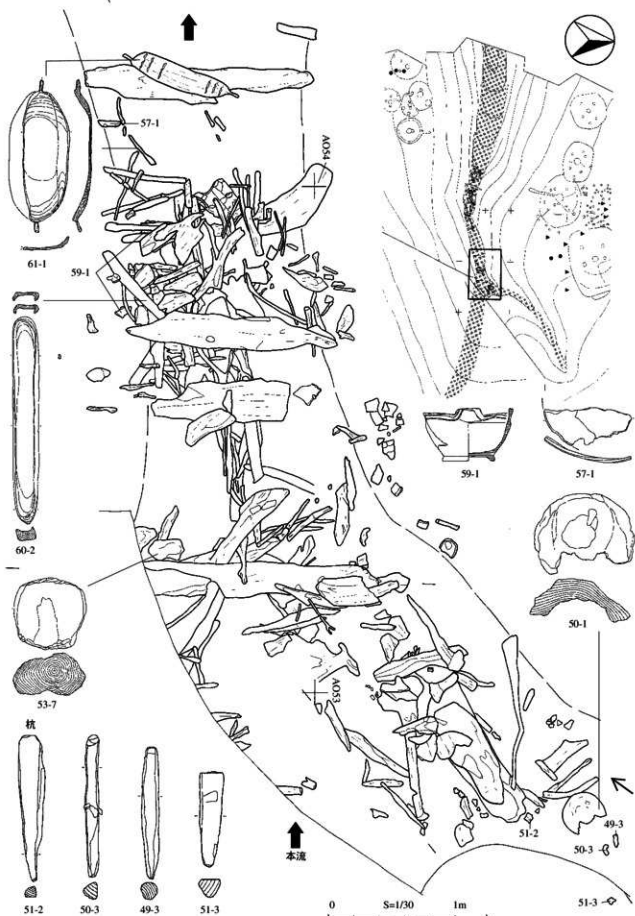
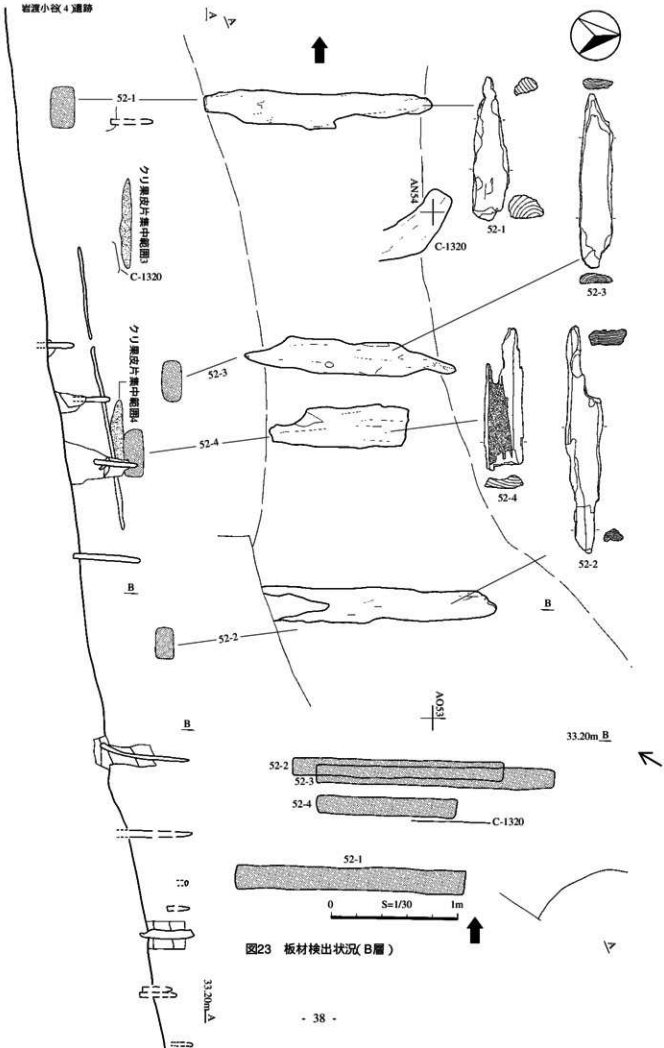


図22 板敷遺構・杭跡2・導水状遺構遺物出土状況



[小結・時期]大型板材の「置かれた」面を遺構構築面とすると、この周辺では廃棄段階の途中で置かれた可能性が高く、木道もしくは作業の足場であった可能性が高い。52-3 は他の大型板材よりも上面から検出されており、他の板材と同時に存在した可能性は低いように思われる。52-3 を除いた他の板材4点はほぼ等間隔に位置し、下流にいくに従って低い位置から検出されており、同時期に置かれた段状の足場であった可能性がある。遺構の構築時期は B層出土遺物からは縄文時代前期後半の可能性が高い。

5 杭跡2

杭跡は全部で16点検出され、大きく分けて3ブロックに分けられる。導水状遺構に伴う可能性がある5点を除くと全部で11点の杭である。AN55から1点(C191実測図なし) AN54から6点53-4・53-3・(C904実測図なし)・51-1・49-5・53-2、AO53から9点検出されており、大型丸木材の北側にみられる4点51-2・50-3・49-3・51-3である。この内、A層検出のC191と沢の斜面上で検出した53-2・51-3を除くとほとんどがC層で検出され、D層に打ち込まれているものが多い。

AN54ブロック(C191) 写真から確認すると、A層面で検出された丸木杭でほぼ垂直に打ち込まれており、先端は削られて細くなっている。

AN53ブロック(49-5、51-1、53-2～4、C904) 沢に直交するように打ち込まれた杭53-2、49-5、53-3と、沢の北側斜面に沿うように打ち込まれた杭53-4、53-3、51-1、C904が見られる。杭と杭の距離は53-2と49-5は1.22m、49-5と53-3は83cm、53-4と53-3は94cm、51-1と53-3は82cm、C904と53-3は74cm、C904と51-1は19cmである。ほとんどが割材で上部に敲打痕の残るものも見られ、打ち込まれた角度はほぼ垂直である。

AO52ブロック(51-2・50-3・49-3・51-3) 沢の東側斜面近く、大型木材の北側で検出されている。51-2は大型丸木材に隣接し、49-3、51-3、50-3の3点は近接して検出されている。杭と杭の間隔は、51-2～50-3が65cm、50-3～51-3が40cm、49-3～50-3が12cmである。沢の斜面上で検出された51-3はレベルの高い位置で検出されている。51-2は50-3～49-3に比べると上部のレベルが高い。割材が多いが、転用杭(49-3)も1点見られる。杭はほぼ真つ直ぐに打ち込まれており、50-3、49-3は若干上部を北にして打ち込まれている。全体に細く短い割材が多く、上部が破損しているものも多い。

[構成材]掘り棒(49-3) 割材(49-5、50-3、51-1～3、53-2) 丸木材(53-4)などの杭がみられ、割材の比率が大きい。杭の大きさは径・幅が1.5～5cm、長さ20cm～50cmである。打ち込みによるツブレが全ての杭にみられる。

[小結・時期]杭の機能等については、不明なものが多いが、他の木材出土状況と合わせて想定できる可能性を列挙したい。AN53ブロックでは沢の北側斜面に沿って杭が並ぶことから土留め等に使用された可能性もある。水の流れと直交して打ち込まれた杭列(53-2、49-5、53-3)は第1号木組遺構の貯水部で検出されたような木材を固定する機能が想定される。位置的には板敷遺構の52-3・4を固定するものと考えられそうであるが、52-3と杭跡は検出面が異なることや、52-4の板材は規模が小さいことから、板敷遺構の板材を使用した可能性は低いと思われる。

時期については、放射性炭素年代測定や検出層位から、C191以外は縄文時代前期中葉～後葉、C191は若干新しいと思われるが縄文時代前期に相当すると思われる。

6 導水状遺構

本遺構は調査区沢東側の標高32～33mで、沢の本流と支流が合流する地点A N53、A O53・52に位置する。B層中で板敷遺構を取り上げたところ、C層中から杭跡が検出され、これ以外に本流と支流の合流する東側斜面付近で大型の丸木材が検出されている(図24)。この大型丸木材は本流と支流の水の流れを調整する役割を果たすと思われる。

大型丸木材(C1577実測図なし)の規模は長さ1.4m、幅40cm、厚さ約30cmで、北東側に末口、南西側に元口を向けている。末口のほうは上部が破損し、元口は不明である。長軸方向はN-126-Wで、末口側が高く、元口側が低いレベルである。沢の東側斜面と約20cm程度しか離れておらず、斜面の立ち上がりと大型芯持材の末口側のレベルはほぼ同様である。

この大型丸木材と平行して、A O53から5点の杭からなる杭列が検出されている。主軸方向はN-132-Wであり、検出状況から何らかの関連があったと思われる。杭5点は51-4、53-5、51-5、49-4、53-1で、大型丸木材とこの杭列との間隔は約60～70cmである。杭間の距離は、51-4～51-5は72cm、51-5～53-5は30cm、51-5～49-4は45cm、49-4～53-1は18cmである。杭はほぼ真つ直ぐに打ち込まれ、51-5が上部をやや南側に傾けているのみである。杭の上端の標高はほぼ同じで33m前後である。

杭の種類には角材(51-5)、板材(53-5)、割材(49-4)、丸木材(51-4・53-4)があり、打ち込みによるツブレが見られるものは5点中4点である(49-4、51-4・5、53-4)。杭の径及び幅は3～5cmで、長さは最大で51-4の73cmである。

このほか、遺物出土状況から、考えられる導水状遺構の機能を述べる。導水状遺構の大型丸木材・杭列と主軸方向をほぼ同じくして検出された板材49-1・2、50-2が見られる。これらはC層で検出され、主軸方向はN-132-Wと大型丸木材・杭列とほぼ同じ主軸方向である。水で押し流された可能性もあるが、49-2の形状が舟形であり、出土状況が興味深い。

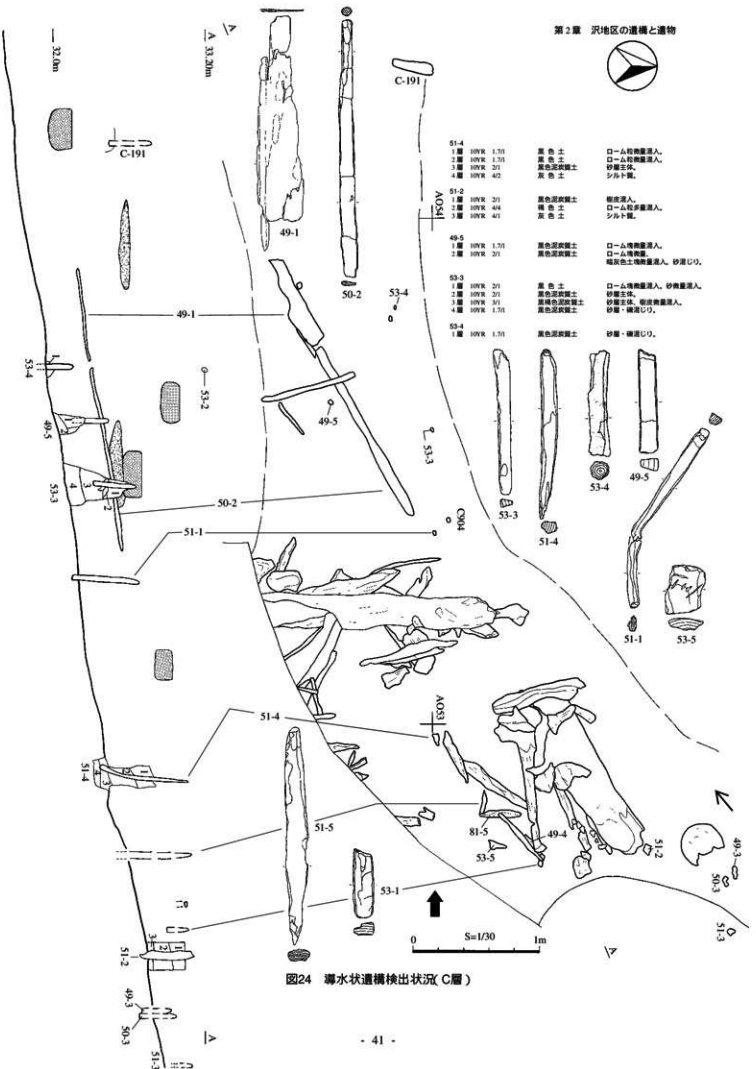
まとめとして導水状遺構の想定される機能としては、大型丸木材により本流と支流の流れを調整することや、杭列により水の流れを和らげるなどの働きが考えられる。検出層位から縄文時代前期中葉～後葉と想定される。

7 クリ果皮片集中範囲(図26)

クリ果皮片集中範囲が4カ所認められた。クリ果皮の小破片は堆積土中からAO53、A N53～55の全範囲で認められ、木質遺物に1cm未満の小破片が密着している状態であるが、集中範囲ではこの小破片のほかとくに1/4～1/2残存しているものも確認できた。また、未調査部分に接しているために範囲として認められなかったが、調査区東側の土層断面にもクリ果皮の集中する堆積層(図8調査区境界ベルト32層)が確認された。

クリ果皮片集中範囲1

第1号木組遺構導水部の東側付近のA N55に位置する。B層堆積土中で、約30cm上流側にはクリ果皮片集中範囲2が検出されている。確認した標高は32.35～32.5mで、長軸42cm、短軸21cmの楕円形範囲に約10cmの厚さで集中している。長軸は東西方向にのびる。クリ果皮は全体形の1/4～1/2程度、約1～1.5cm残存しているものもある。クリ果皮の範囲が検出された周辺は丸木・割材片などが多く



51-4

1層	HVR	1.731
2層	HVR	1.731
3層	HVR	2.01
4層	HVR	4.02

51-2

1層	HVR	2.01
2層	HVR	4.04
3層	HVR	4.01

49-5

1層	HVR	1.731
2層	HVR	2.01

53-3

1層	HVR	2.01
2層	HVR	2.01
3層	HVR	3.01
4層	HVR	1.331

53-4

1層	HVR	1.331
----	-----	-------

黒色土
黒色土
黒色土
黒色土

黒色泥状黄土
黒色土
黒色土

黒色泥状黄土
黒色泥状黄土

黒色土
黒色泥状黄土
黒褐色土状黄土
黒色泥状黄土

黒色泥状黄土

ローム陶器遺構人
ローム陶器遺構人
砂器主体
シルト層

磁器遺構人
ローム陶器遺構人
シルト層

ローム陶器遺構人
ローム陶器
緑灰色土塊陶器遺構人。砂器シロ

ローム陶器遺構人。砂器遺構人
砂器主体
砂器主体。磁器遺構人
砂器・陶器シロ

砂器・陶器シロ

図24 毒水状遺構検出状況(C層)

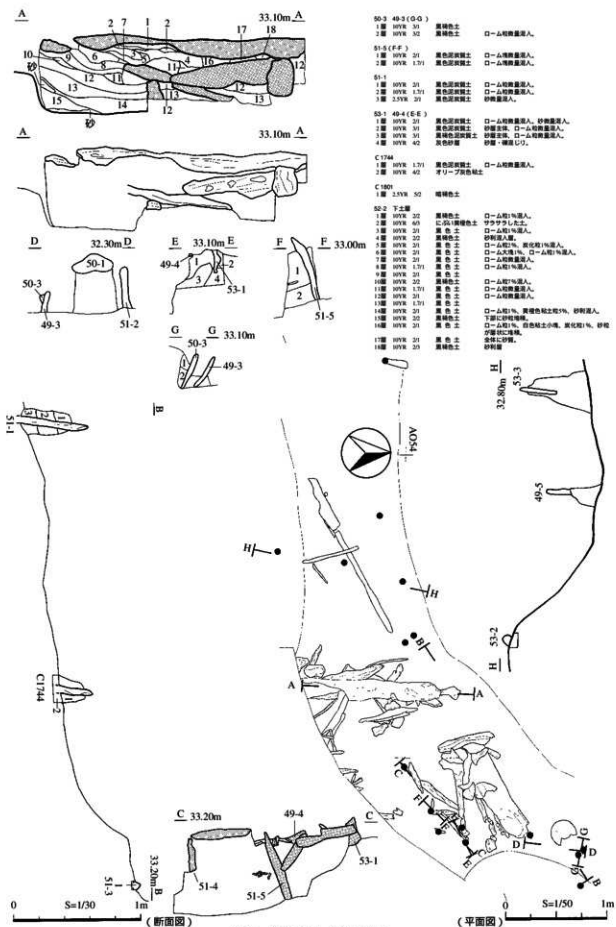


図25 板材下部・杭跡堆積土

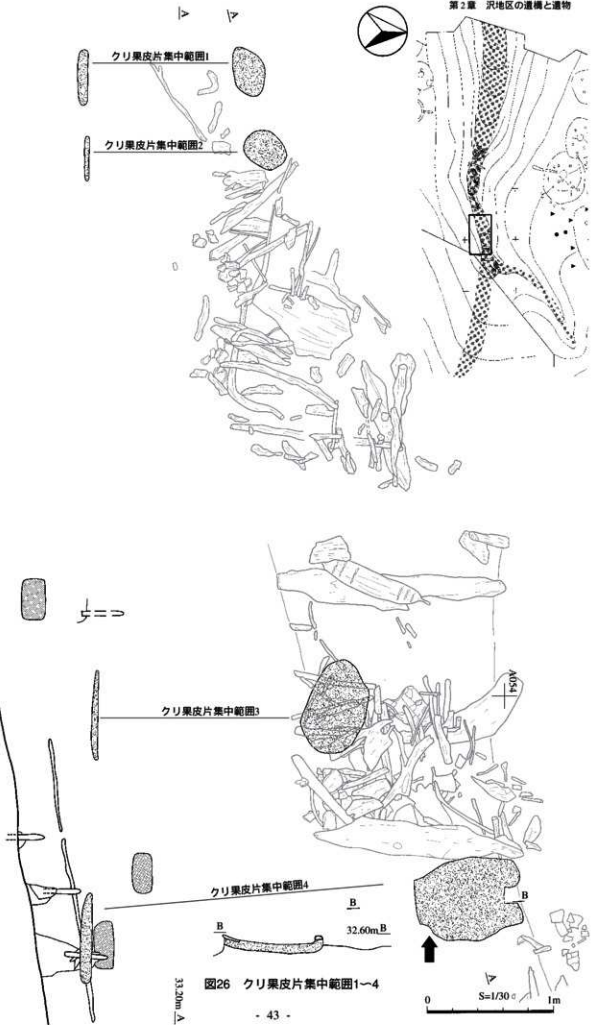


図26 クリ果皮片集中範囲1~4

出土し、黒褐色土に砂粒・草木が多く混入している。定量分析は行っていないが、クリ以外の種子としてクルミが数点確認されている。

クリ果皮片集中範囲 2

第1号木組遺構導水部の東側付近のAN55に位置する。B層堆積土中で、約30cm下流側にはクリ果皮片集中範囲1が検出されている。確認した標高は32.45～32.5mで、25～35cm程の円形範囲に約5cmの厚さで集中している。集中範囲1と同様、クリ果皮は全体形の1/4～1/2程、約1～1.5cmで残存しているものもある。この範囲が検出された周辺は丸木・割材片などが多く出土した部分の東端にあたり、黒褐色土に砂粒・草木が多く混入している。

クリ果皮片集中範囲 3

板敷遺構の大型板材52-1と52-3の中間、AN53・54に位置する。B層中で検出し、北東1.2mの上流側にはクリ果皮片集中範囲4が検出されている。確認された標高は32.6m前後で、長軸74cm、短軸48cmの楕円形範囲に集中している。厚さは固化していないが、約5cm未満であったと思われる。長軸は東西方向で沢の流路と同様である。クリ果皮は1cm未満の小破片が密集した状態である。この範囲が検出された周辺は板敷遺構のほか容器などが多く出土した部分で、黒色粘質土に砂粒や白色粘土粒が混入している。

クリ果皮片集中範囲 4

板敷遺構大型板材52-4の直下、沢の北側斜面に接したAN54に位置する。B層中で、南西1.2mの下流側にはクリ果皮片集中範囲3が検出されている。確認した標高は32.54～32.56mで、長軸82cm、短軸64cmの長方形範囲に集中している。長軸は南北方向で沢の流路に直交して広がっている。厚さは約8～10cmであったと思われる。確認面からの厚さは全体的に均一でほぼ水平に堆積している。クリ果皮は1cm未満の小破片が密集した状態である。この範囲が検出された周辺は板敷遺構のほか容器などが多く出土した部分で、黒色粘質土に砂粒や白色粘土粒が混入している。集中範囲の北側は沢の斜面に接しているため、一部粘土層直上に果皮が堆積している状態である。

8 遺構内出土遺物

1～7の遺構内出土遺物を以下に掲載する。包含層出土遺物と遺構内出土遺物の境界が曖昧であるため、遺構の構成材や遺構内と認定された遺物のみを掲載している。遺物については第4節遺構外出土遺物でまとめて記載している。 (坂本)

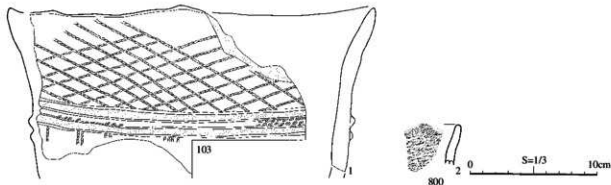
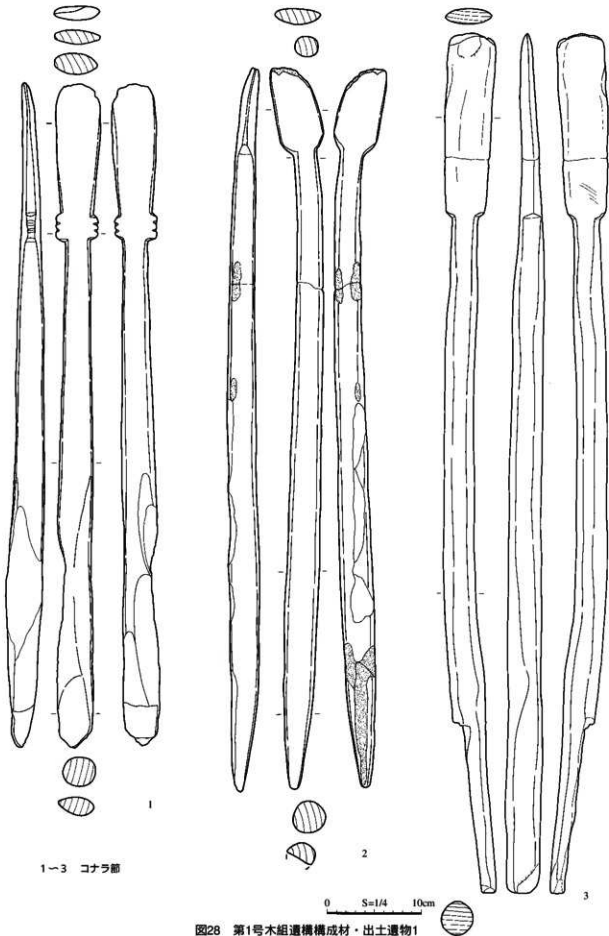
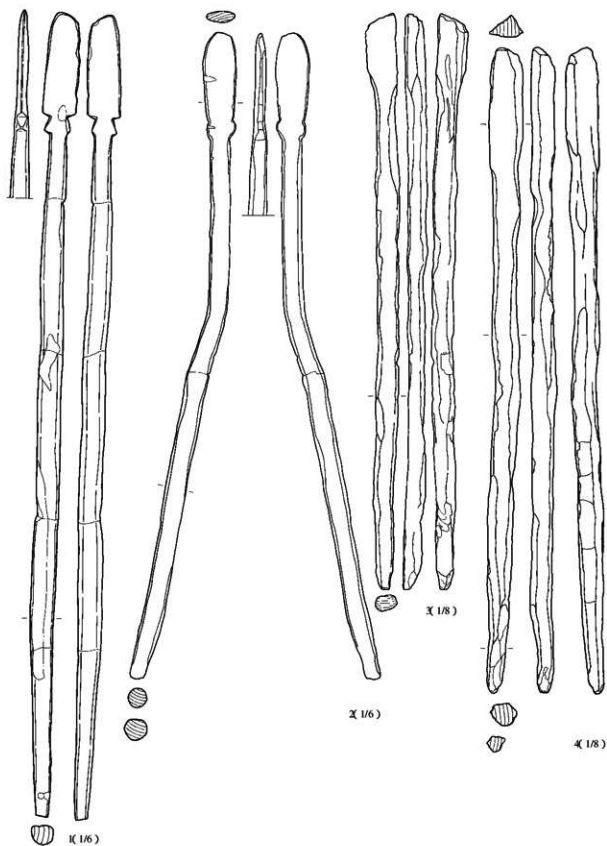


図27 第1号木組遺構出土土器



1~3 コナラ節

図28 第1号木組遺構構成材・出土遺物1



1.3.4 - コナラ節
2 - ケンボナシ属

図29 第1号木組遺構構成材・出土遺物2

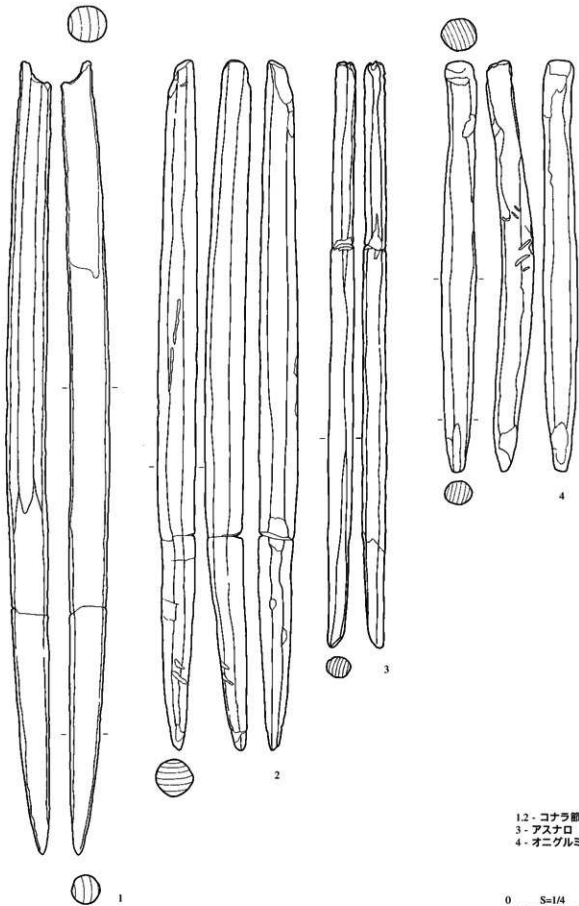


图30 第1号木組遺構構成材・出土遺物3

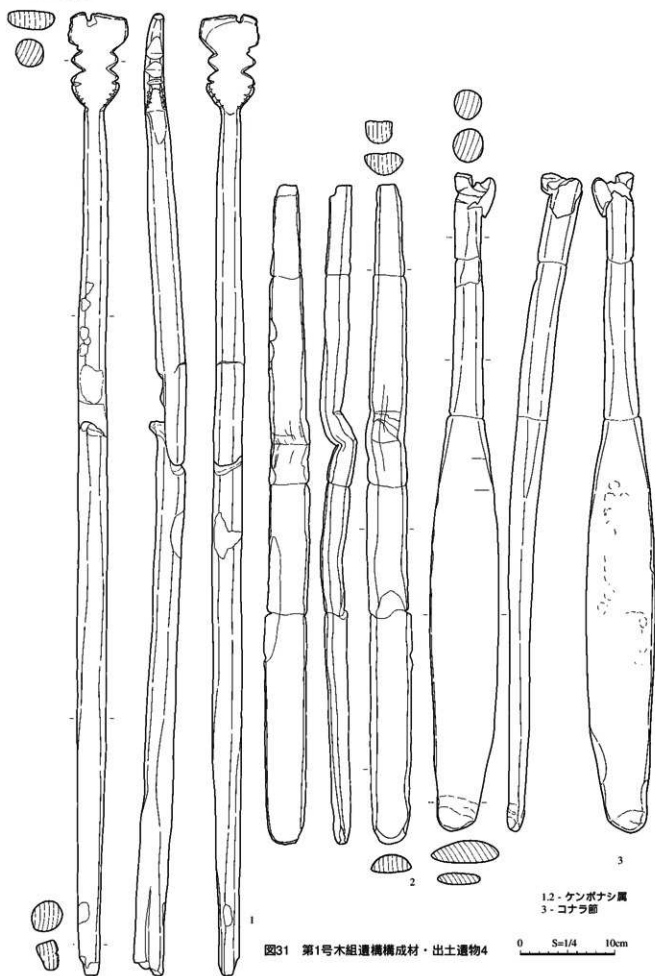


图31 第1号木組遺構構成材・出土遺物4

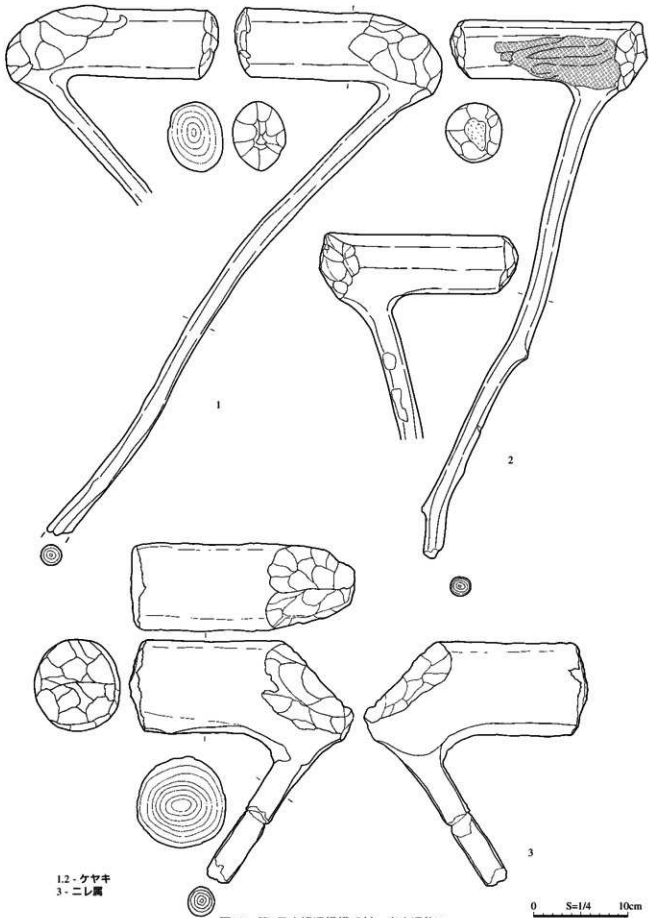
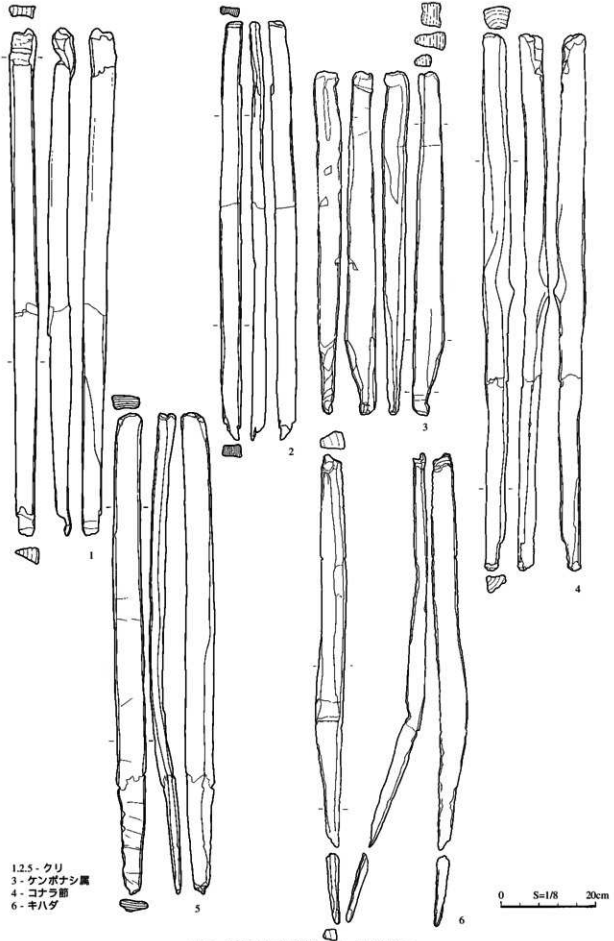


图32 第1号木組遺構構成材・出土遺物5



図33 第1号木組遺構構成材・出土遺物6



- 1.2.5 - クリ
- 3 - ケンボナシ属
- 4 - コナラ部
- 6 - キハダ

図34 第1号木組遺構構成材・出土遺物7

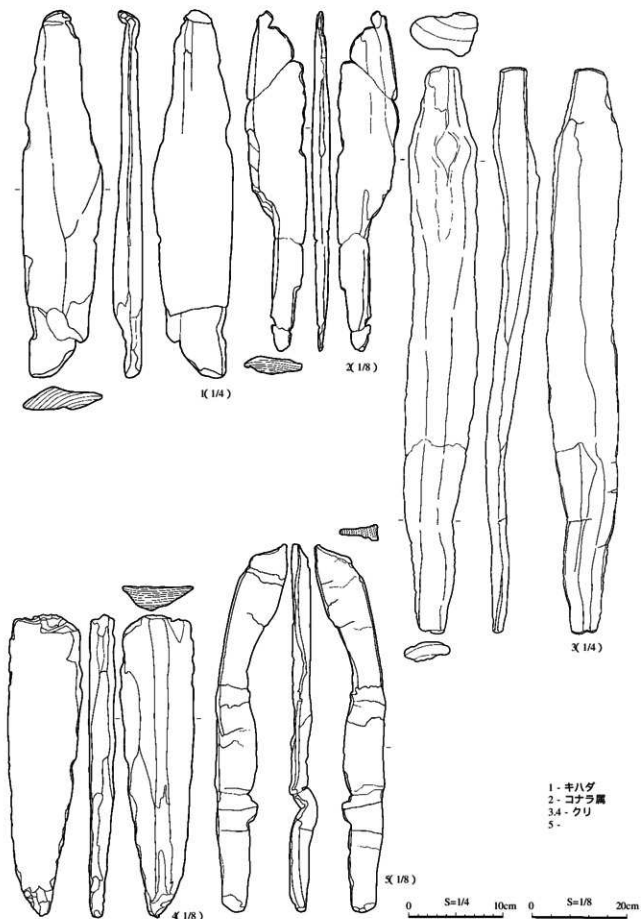


图35 第1号木組遺構構成材・出土遺物8

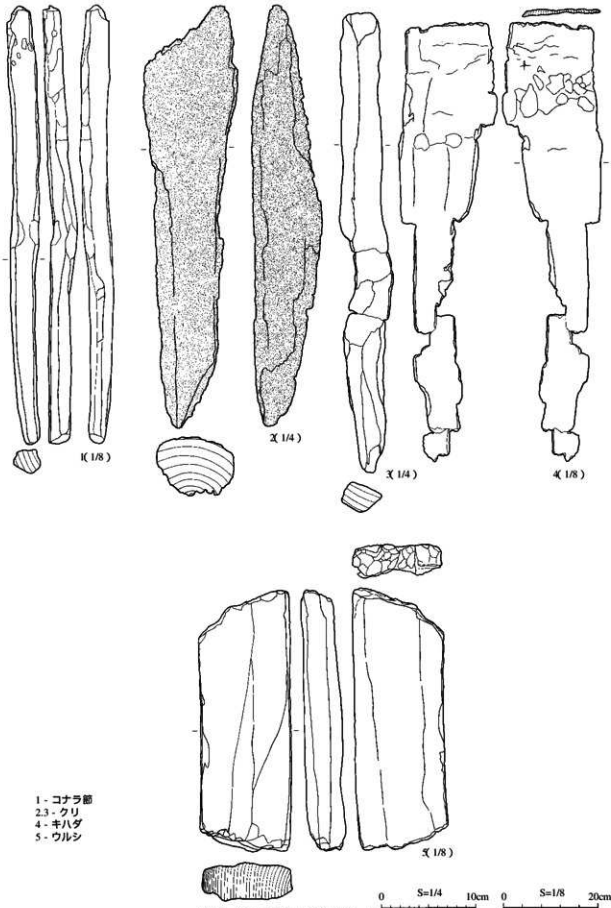


图36 第1号木組遺構構成材・出土遺物9

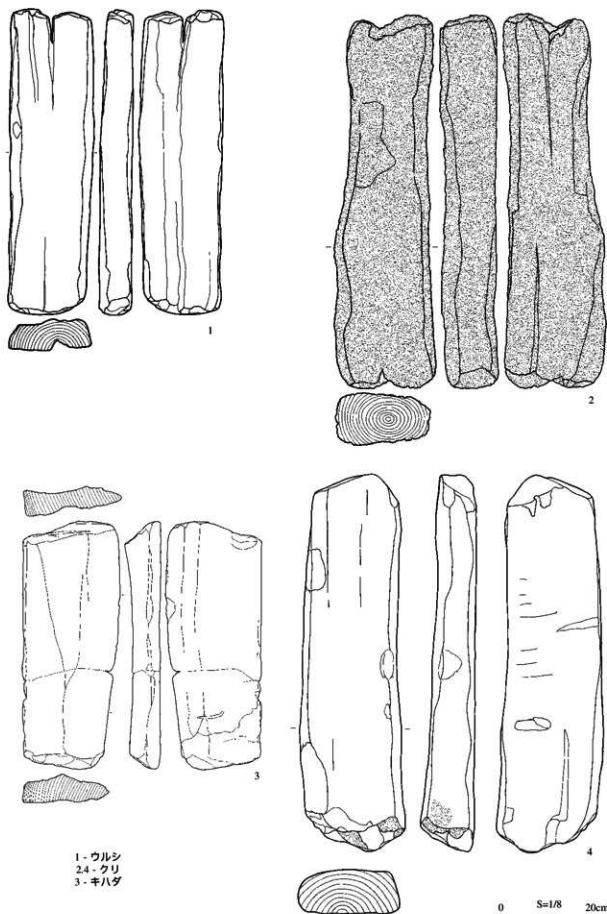


図37 第1号木組遺構構成材・出土遺物10

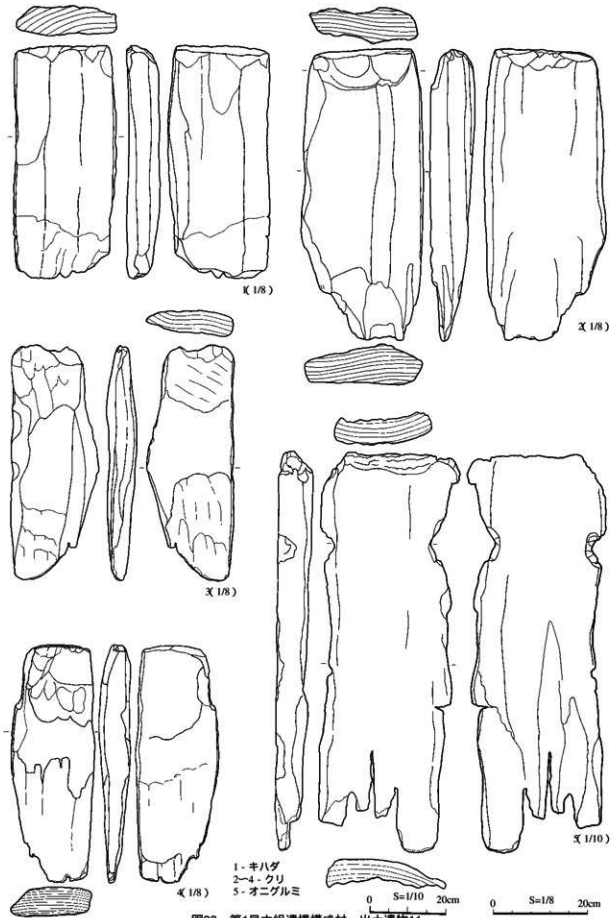


図38 第1号木組遺構構成材・出土遺物11

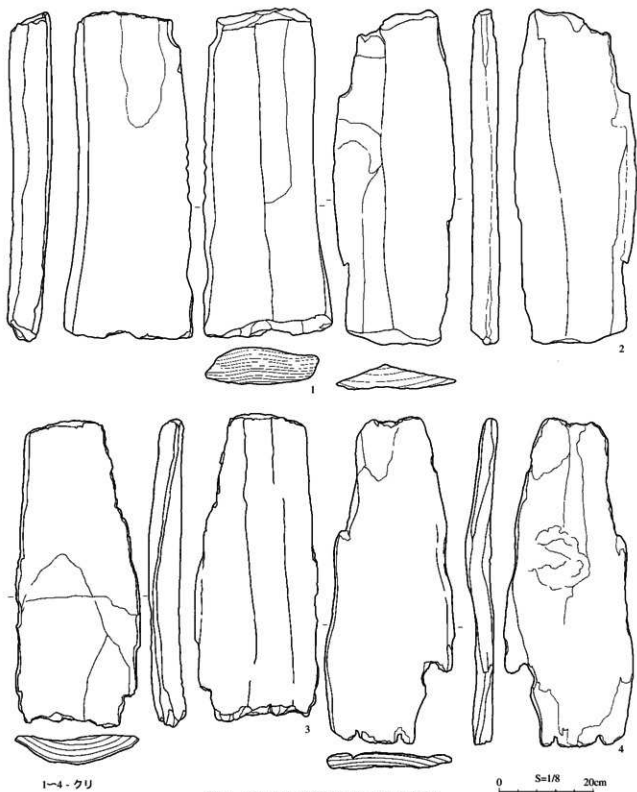
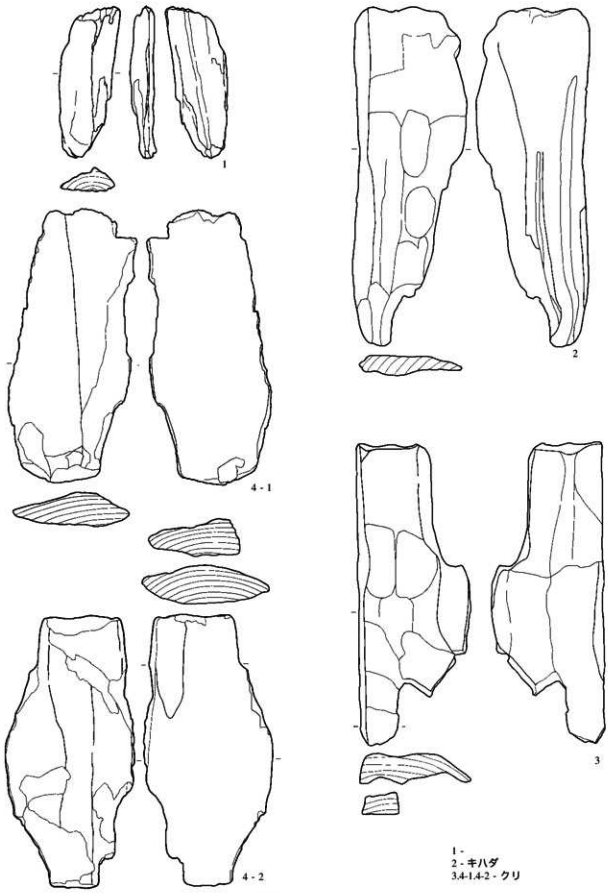


図39 第1号木組遺構構成材・出土遺物12



1 - キハダ
 2 - キハダ
 3.4-1.4-2 - クリ

0 S=1/4 10cm

図40 第1号木組遺構構成材・出土遺物13

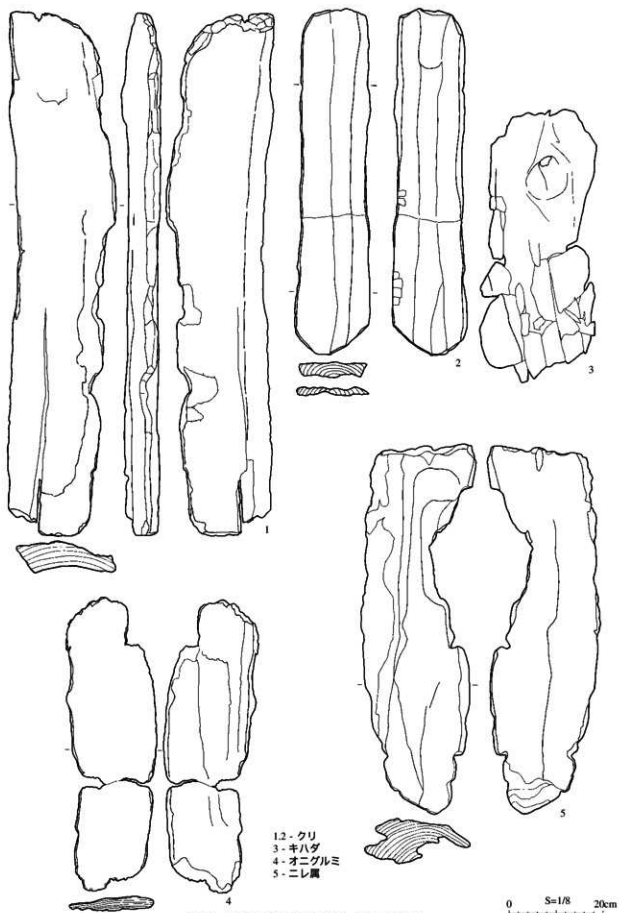


図41 第1号木組遺構構成材・出土遺物14

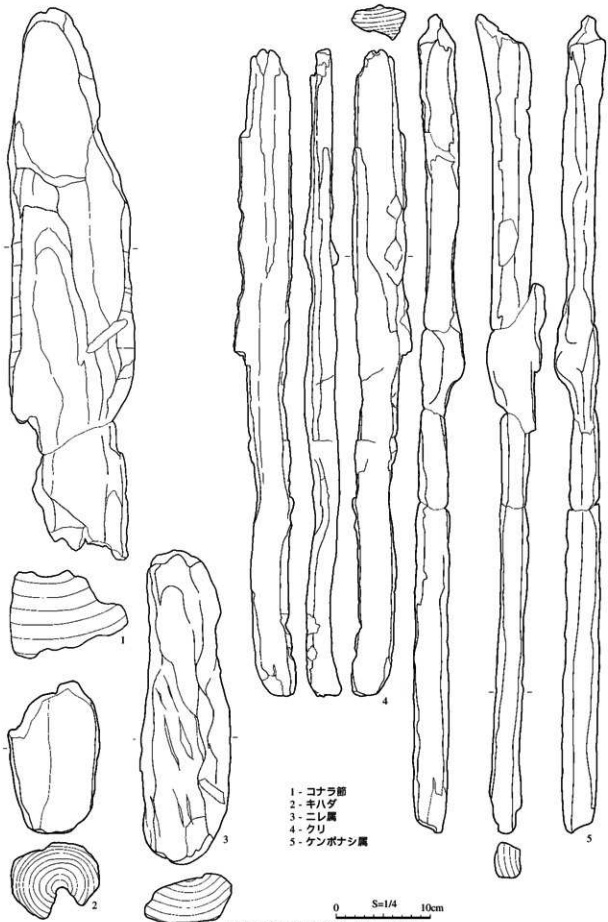


図42 第1号木組遺構構成材・出土遺物15

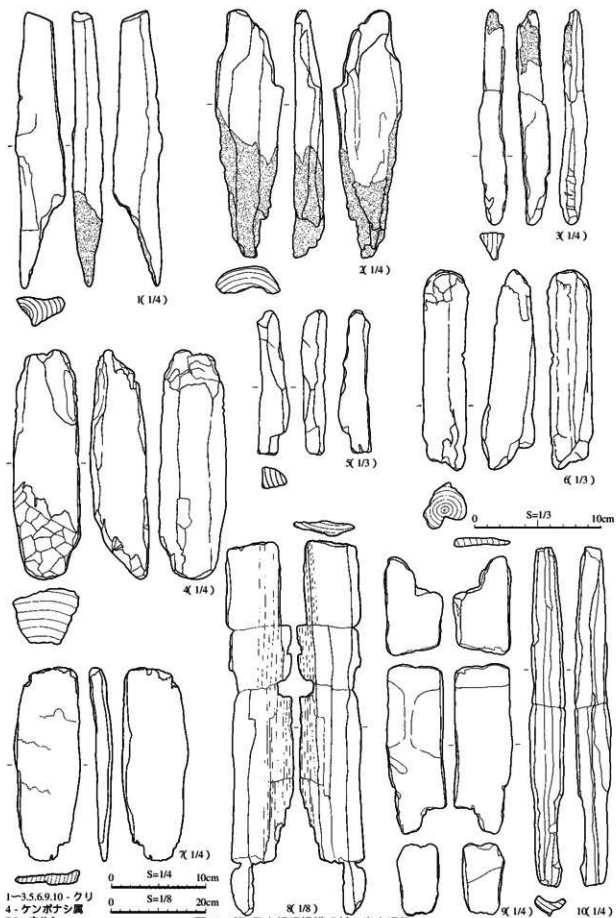
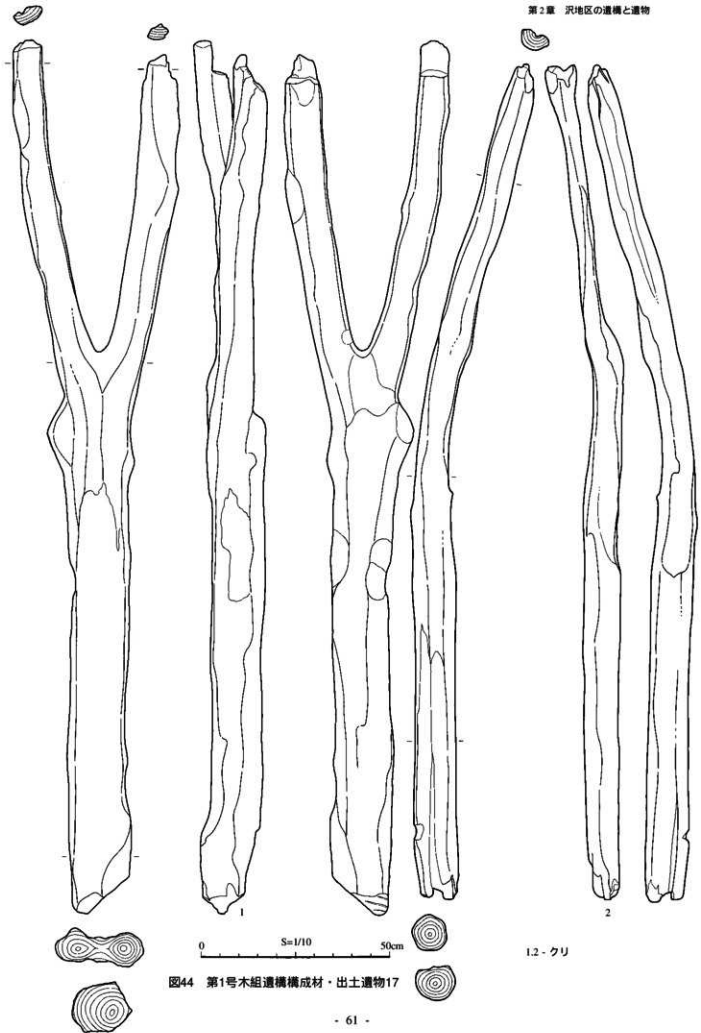


図43 第1号木組遺構構成材・出土遺物16



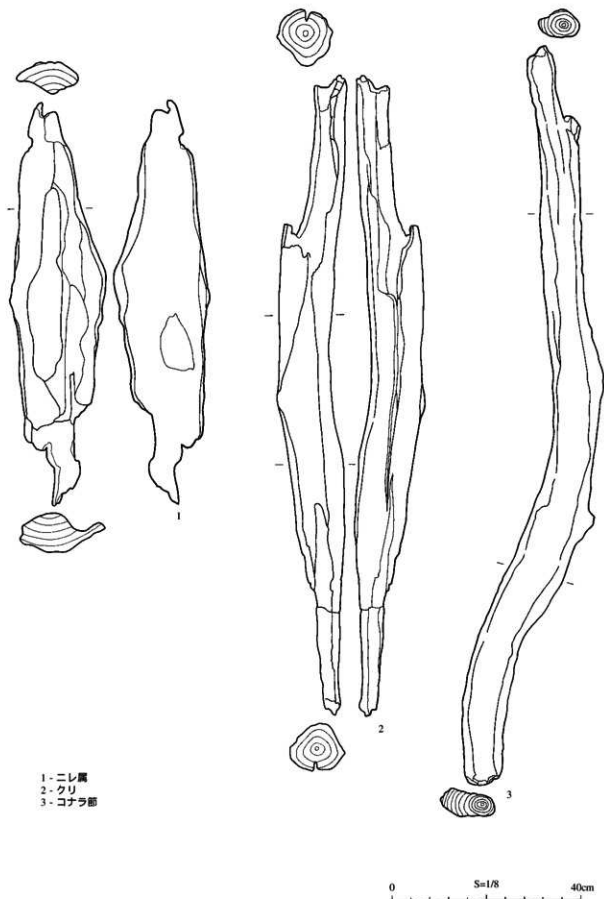


図45 第1号木組遺構構成材・出土遺物18

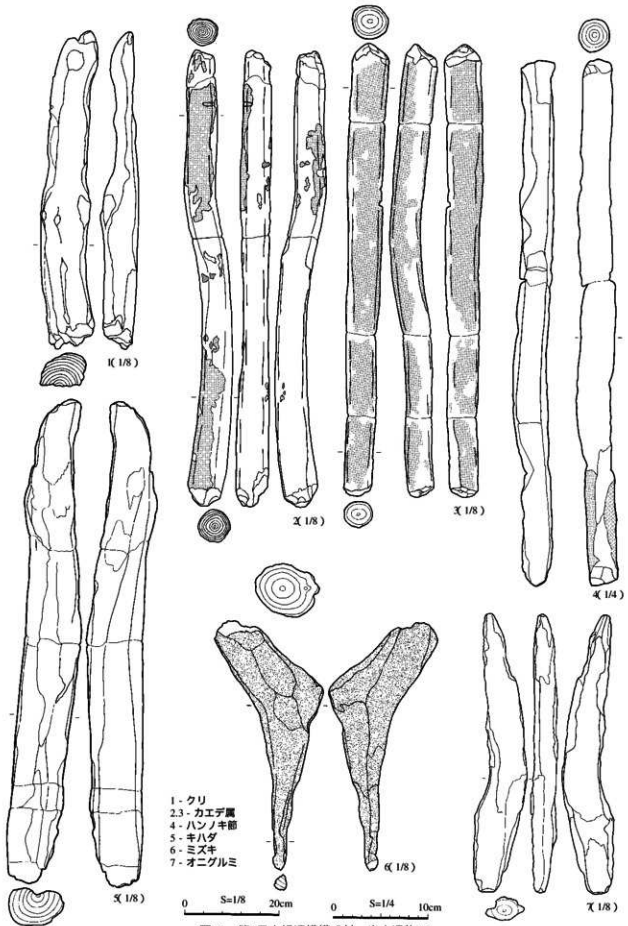


図46 第1号木組遺構構成材・出土遺物19

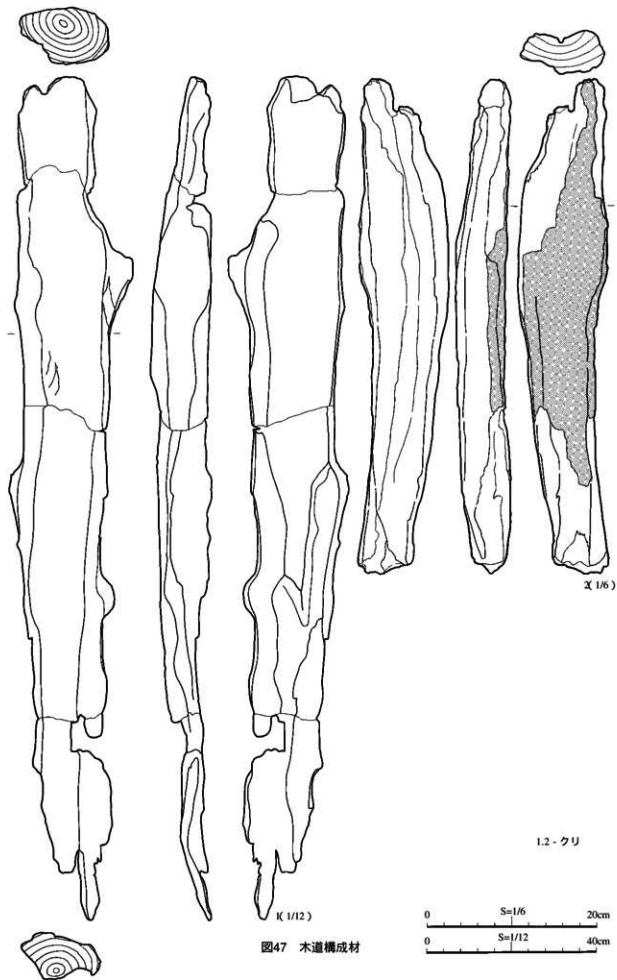


図47 木道構成材

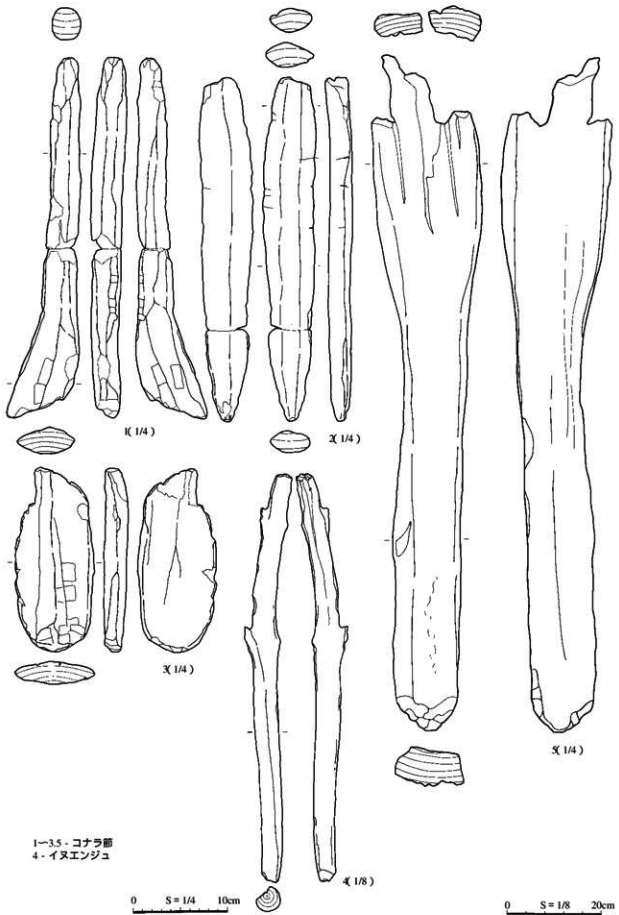


図48 樹皮範囲・杭跡1構成材

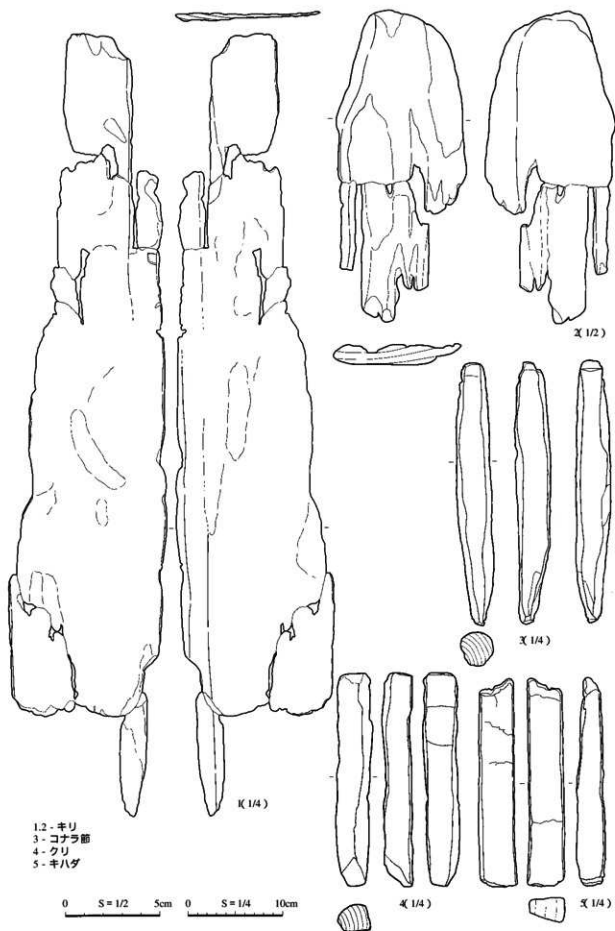


図49 板敷遺構・杭跡2・導水状遺構構成材・出土遺物1

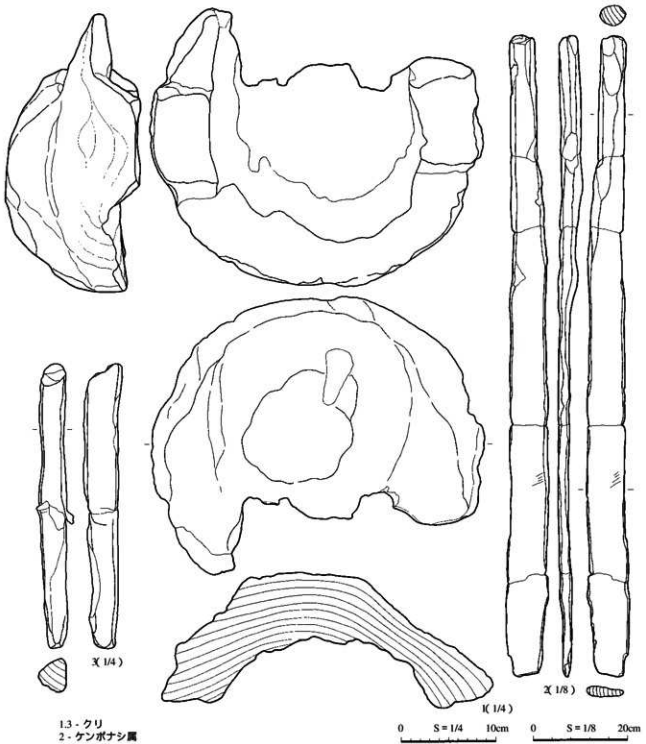


図50 板敷遺構・杭跡2・導水状遺構構成材・出土遺物2

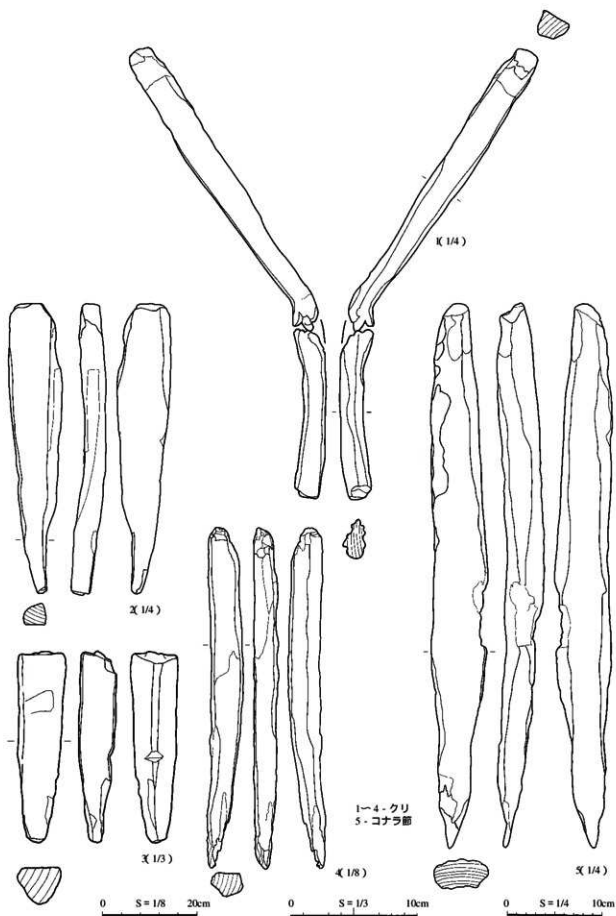


図51 板敷遺構・杭跡2・導水状遺構構成材・出土遺物3

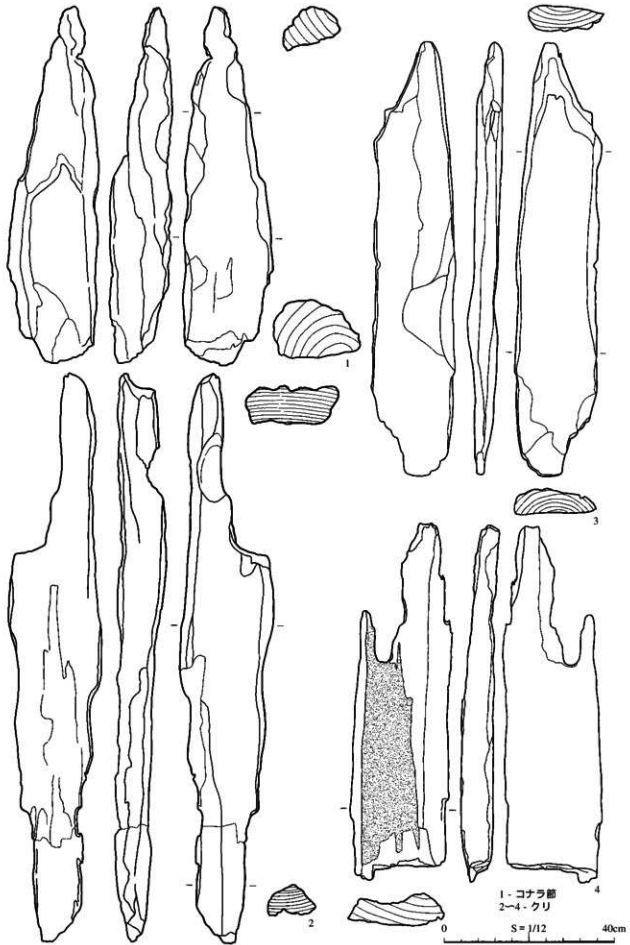


図52 板敷遺構・杭跡2・導水状遺構構成材・出土遺物4

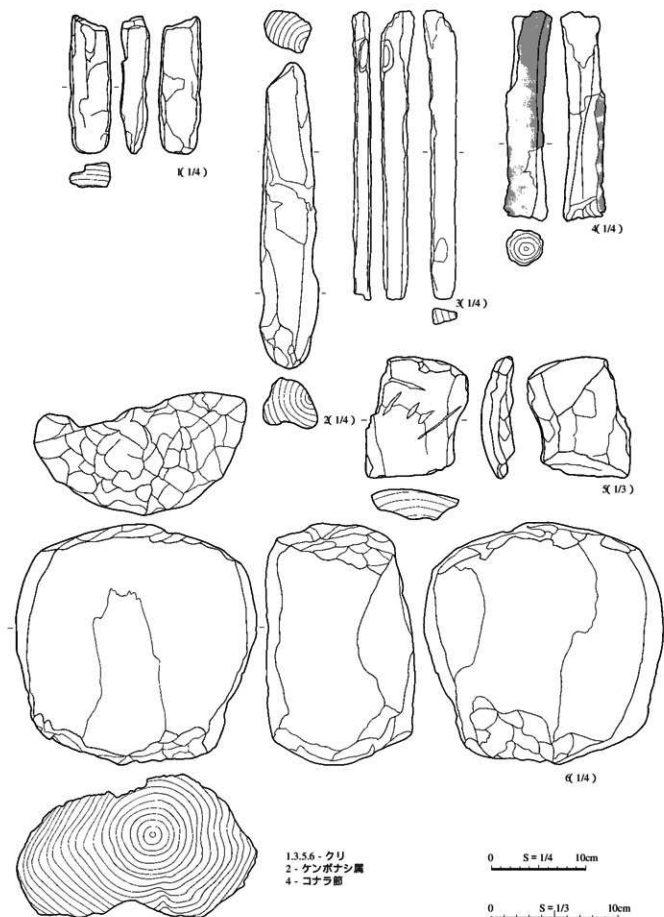


図53 板敷遺構・杭跡2・導水状遺構構成材・出土遺物5

第4節 遺構外出土遺物

1 木質遺物

木質遺物は木を割って製品を作るという性質上、製作技術による分類と機能・用途による分類と大きく2つの視点に立って考える必要がある。弥生時代以降の木製品については出土資料の蓄積によってさまざまな分類が用いられている。しかし、これに関しても、盛んな研究が行われているのは農具や容器等一部のものにすぎない。とくに本遺跡は縄文時代前期の出土資料が主体であり、まだまだ資料の蓄積が十分でないのが実状である。

このため、木製品の用途名称については民俗学の名称を用い、これ以外のものについては製作技術面からの分類を使用している事例が多い。本書でも、同様に遺物の用途が特定できるものと形状や製作技術の面から分類したものに分けて使用した。また、形状から機能が想定できるものに関しては形木製品、状木製品という分類を使用した。また、木製品が遺構構築材に転用されているものは、転用される以前の分類を用いている。遺構構築材としては第2章第3節を参照していただきたい。

木取りに関しては樹種の切片を作成した際に順次当てはめていったが、木材の位置によってはたとえ、半割材が芯持材であったり、芯取り部と芯の残存する部位があったりと明確に区分されていない。木材の分類についても板目・柱目・分割材の区分が曖昧になっているところもある。

出土状況

出土した木質遺物は調査した沢本流のAN57-AO53にあたる。出土範囲は上流から中流域にかけての長さ約24m、幅約2～3mで、出土層位はほぼ全層に及ぶ。A層下部から増加し、B層が最も多い出土量である。C層では木組遺構が検出されている。ほとんどが縄文時代前期の出土で、AMS放射性炭素年代測定からも4600～4900年(yBP)の数値が測定された(第3章第5節)、多少の時期差はあると思われるが縄文時代前期に相当すると考えられる。

出土遺物は自然木も多数含まれるが、現場での取り上げ出土登録番号は1863番まで付した。これにはグリッド一括で取り上げた木質遺物は含んでいない。また、1つの番号に複数の木質遺物が当てはまる場合があるため、現場から取り上げた点数はこれ以上になる。洗浄作業を行い、収納した箱に番号をつけて登録した点数は1233点である。これにも複数の個体が含まれる場合もある。このうち、樹種同定を行ったものが624点で、実測はこの中の478点である。報告書に掲載した遺物は458点である。掲載した遺物のなかで遺構構成材は114点で、主に板状や角状に加工した割材が多く出土している。機能・用途が特定できた遺物としては、榿・掘り棒・容器などが見られ、このほか、石斧柄未製品、敲き具、柄、形状から分類した舟形木製品、へら状木製品などがみられる。

(1) 木製品

A 工具

掘り棒(28-1～3、29-1～4、30-1～4、31-1・2、49-3、54-1～7、55-1) 割材を削り出して断面形を丸くし、一端を尖らせるものを掘り棒とした。器面が平滑で丁寧に加工されているのが特徴である。この掘り棒は長さ1m～最大1.26m、断面径約3cmで、ほとんどコナラ節であり、これに形状が類似し、端部が破損しているものや破損後に別の形状に加工したのもこれに含めている。また、

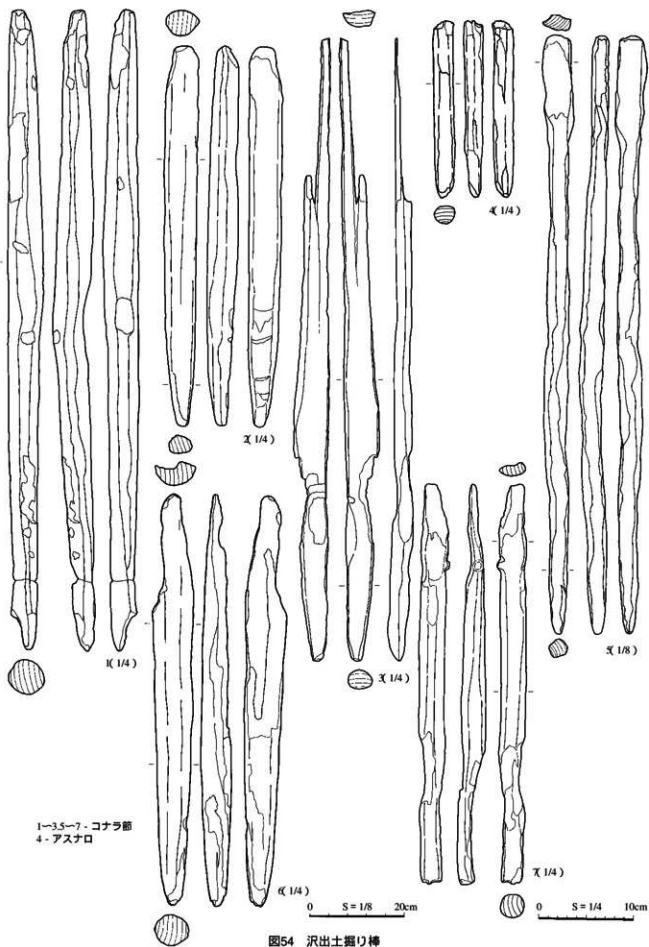


図54 沢出土掘り棒

これらの掘り棒の中には、一端にヘラ状の加工をもつものが多く、尖る形状+ヘラ状加工という組み合わせの図式が成り立つものが多いと考えられる。このため、ヘラ部分のみの出土遺物も一端に尖りヘラ状の加工のもつものもこの類で扱うこととする。

総点数は22点で、完形品2点、破損品17点、未製品3点である。出土位置は第1号木組遺構で13点とまとまって出土し、このほか、包含層からの出土は破片のものが多く、B層から多く出土している。

掘り棒はおよそ、端部から10～15cmの間で加工されることが多く、長さの規模に違いがあってもこれが認められる。また柄の断面形は先端まで円形であることが多く、29-1のように平坦な面を出している例は少ない。また、破損部には裂けて欠損したと思われる部分は多く、使用による破損と考えられる。

これらの掘り棒類はヘラ付き掘り棒、一端が破損した掘り棒、破損後の転用品、未製品などに分類される。

・ヘラ付き掘り棒 - 第1号木組遺構からの出土で、貯水部枠で4点、東側で1点出土している。29-2は杭として使用した際の打ち込みにより、折れ曲がっている。ヘラ部分は長さ7～15cm、幅3～5cmで、柄とヘラ部分の境界に肩をもつ。このほか撫で肩状になるもの28-2、肩部をもつもの28-3がみられる。このなかには装飾的加工をもつものも見られる。ヘラ先は、ヘラ部分と幅の変わらないもの28-3、やや先が尖り気味のもの55-1、ヘラ部分より幅が狭く、丸味を帯びた台形状になるもの28-1、29-1・2がある。ヘラの厚みは掘り棒の中央主軸線に当たる部分が厚く、両側縁・端部にいくにしたがって薄く、厚さ1～2mmになるものが多い。両側縁にも厚みをもつものは28-2が挙げられ、両側縁から端部にかけて丸味を帯びた形状になる。

・破損しているもの - 遺構構築材としては、第1号木組遺構の堰部杭30-2・30-1と導水部杭30-4、杭跡2の杭49-3が挙げられる。このほか、包含層出土遺物は54-1～4、54-6・7、55-1、54-3・4が見られる。55-1以外は先端が破損し、先端が尖る形状である。55-1は先端の尖り部分が欠け、ヘラ部分のみ残存している。形状や樹種がコナラ節であることから、同様の種類と思われる。ヘラ部分は完形品よりも一回り小さい。ヘラ先の端部が欠けており、形状ははっきりとしないが、おそらく、先端部はやや先が細くなる台形状と考えられる。54-4はアスナロで、径が2cmと他の掘り棒よりも一回り規模が小さいのが特徴である。

・掘り棒転用のもの - 7点出土した。杭に転用されている。1点は先端の尖り部分が破損したため、新たに加工されたもので、28-1がこれに当たる。一端はヘラ状であるが、一端は15cm程度裂けており、端部に厚さ5mm程のヘラ部分を出している。他の1点は杭に転用されたと考えられ、上部には敲打によるツブレが確認できた。樹種はアスナロで、54-4と同様に径が小さいのが特徴である。

・未製品のもの - 第1号木組遺構東側導水部付近での出土29-3・4と54-5である。いずれも樹種はコナラ節であり、割材を粗く加工し、全体形を整えているものと考えられる。

石斧柄未製品(32-1～3)自然木の幹と枝が適当な角度と規模をなす股木部分を伐採し、石斧柄の素材として使用する意図がみられるものを石斧柄未製品とした。幹部分は石斧を着装する台部分に加工され、枝部分は持ち手に利用されると想定されることから、便宜上、幹を台部、枝を柄と呼称する。総点数は3点である。すべて第1号木組遺構からの出土で、貯水部外側で2点、貯水部内で1点である。

これらの遺物は、台部と柄がなす角度は48～75°であり、32-1が最も鋭角で、32-2・3は75、58

と直角に近い。32-1・2 はともに規模や形状が類似しており、柄の長さ52.6～58.6cm、台部の長さ20.6～22.2cm、台部の径6.2～7.4cmである。32-3 と32-1・2 が最も異なるのは台部の径で、32-3 が9.7cmと32-1・32-2の1.6倍ある。また、樹種も異なり、32-1・2 がケヤキで、32-3 がニレ属である。

両端部は伐採後に台部斫断までの相形成形が行われたと考えられ、先端部は平坦に近い形状で削りが入り、後台部は両面から削り調整が入る32-1・2 や後端部に調整が入る32-3 が見られる。32-2 の先端部の中央、樹芯部分は径1cm程つぶれたような状態が観察された。

敲き具(55-4) 敲打によるツブレが明瞭で、敲きの主体となる道具とした。自然木の幹と枝の股木を利用しており、前述した石斧柄と形状や素材が似通っているため、石斧柄の可能性も高いが、使用痕跡の状況から石斧柄とは区別することとした。便宜上、幹部分を頭部、枝の部分を柄と呼称する。頭部は両側面・上面が先端部から削られ、平坦面が作出される。頭部先端では木の繊維が外側にめくられる程つぶれの痕跡が顕著である。柄は縦に大きく割れ、下端は欠けている。出土位置はAN55の第1号木組遺構東端の上面で、板材81-1の上部である。

イ 漁労具

櫂・櫂状木製品(31-3、48-1～3、55-2・3) 全部で6点出土した。内4点は転用杭で、いずれも破損したもののばかりである。形状を意図して側縁から端部を加工していること、両側縁にやや厚みを持ち、中央が膨らむ断面形状であり、31-3 と共通することから、櫂に類似した櫂状木製品とした。31-3 は両端とも打ち込みにより破損している。柄の部分は円形で、水かき部分は断面形状が菱形のやや丸味を帯びた形状である。48-1 は転用杭で、同様に柄の部分が断面円形であるが、水かき部分は31-3 と異なり左側に大きく広がるようである。櫂の先端にあたると思われ、31-3 と比べると幅が広くやや薄い形状である。55-3 は柄が細く、水かき部分が広がる形状の木を選択し、加工している。水かき部分は板状に削り、先端はやや細くなる。柄は芯を残して割り取る。

ウ 容器

9個体分11点が出土した。完形品はなく、復元可能な1点以外、すべて破片での出土である。器種別に鉢・皿・槽の3つに大きく分類される。出土位置は板敷遺構付近で出土しているもの59-1・57-3、第1号木組遺構導水路上面で出土しているもの56-1・59-2・3、貯水部上面で検出されているもの、調査区東側境界付近で出土したもの(3破片)など広範囲にわたるが、どちらかといえば、上流側に集中する傾向が見られる。出土層位は B層が多い。

鉢(59-1・58-1～3・57-3) 木取りはすべて横木取りで、内外面に漆が塗布されている。肉眼では赤漆と黒漆が塗布されているように観察されるものもある。59-1・58-1～3 は鉢、57-3 は浅鉢である。鉢の2点は底部から若干開くように立ち上がる器形で、58-1～3のほうは立ち上がりやや垂直に近い。2点とも口縁上端はほぼ平坦で、角の部分がやや丸味を帯びる。59-1 は底外面に高台が付く、口縁の一部には突起が作出されている。突起部分は台形で、口縁上端に横位の沈線が一条施される。また、口縁に沿って外面に幅約1cmほど浮き彫り状に残存し、装飾的な文様が施される。58-1～3 は破片だが、漆膜の残存状態は最もよい。口縁部の推定残存径は大きく、大型の鉢であったと推定される。

皿(56-1・56-2・57-1・57-2) 木取りはほとんど横木取りで、57-2のみ縦木取りである。漆のほとんどが剝離しており、下地に使用した黒色付着物が肉眼で認められる。57-1も肉眼では黒色である。56-2は遺存状態が悪く、詳細は不明である。56-1は高台付きで、56-2も接合しないが同一個体の小破片に台がついている。56-1・56-2の平面形は砲弾状や楕円形状になるとみられる。56-1・57-1の

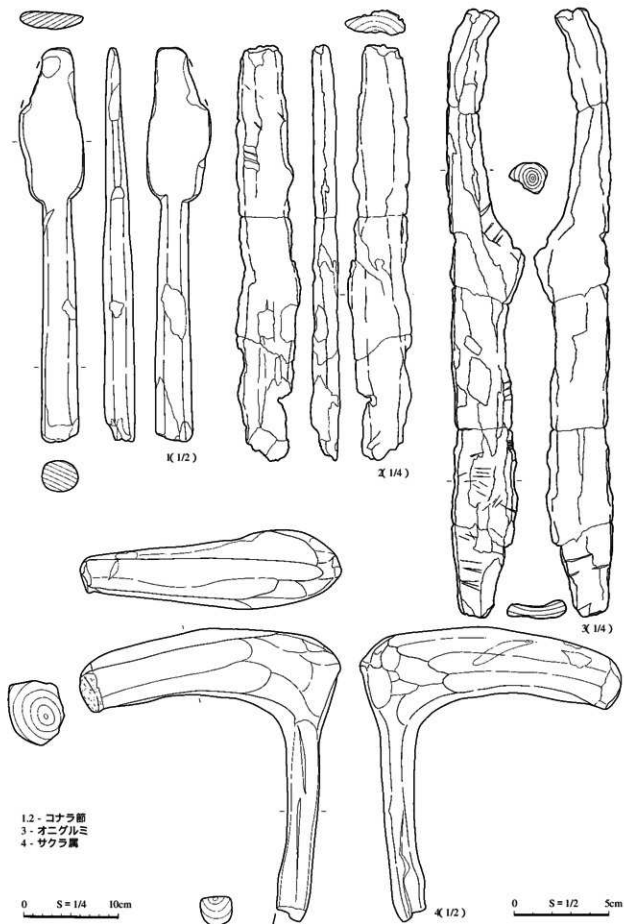


図55 沢出土掘り棒・榿・敲き具

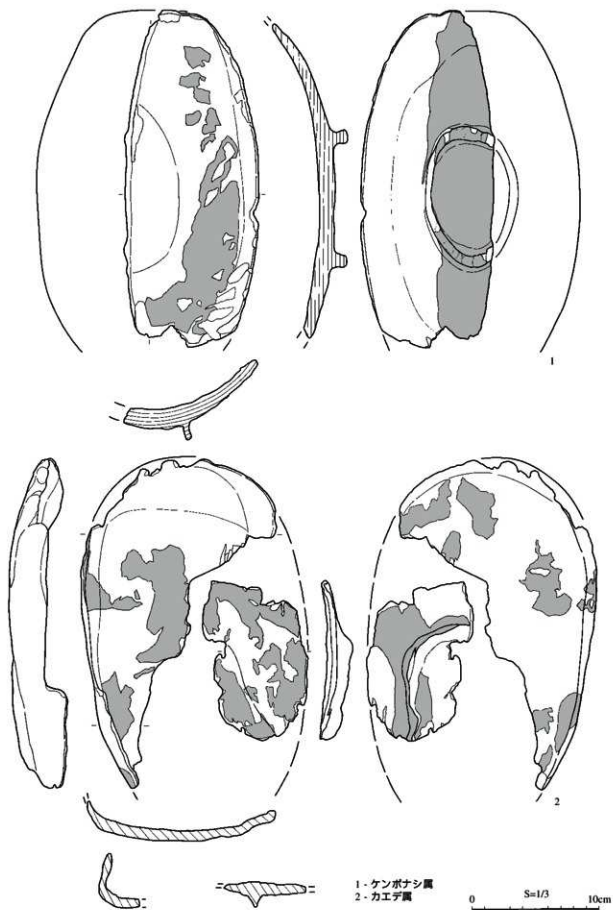


図56 沢出土容器1

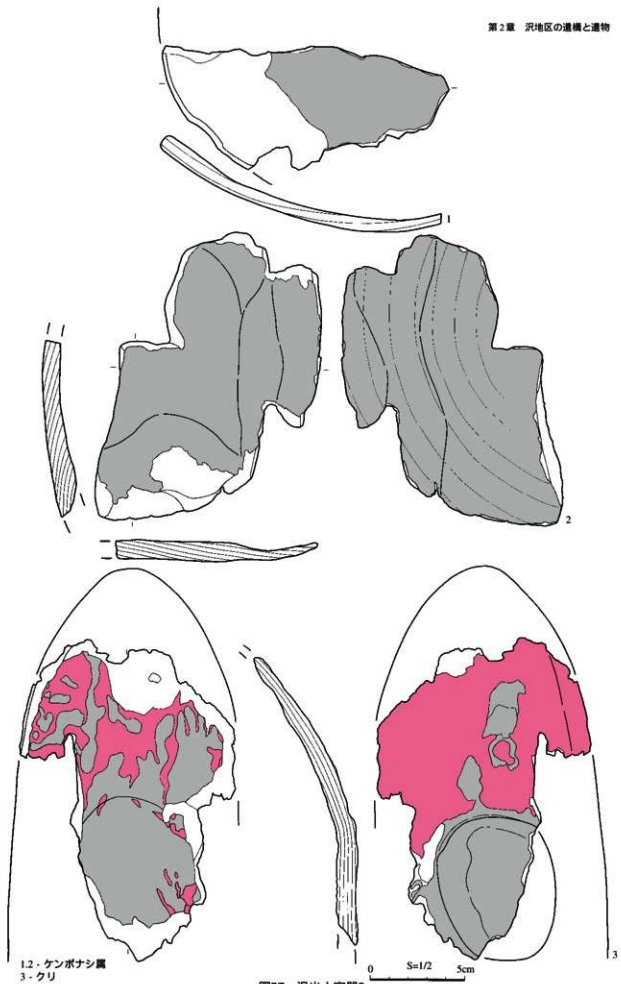


図57 沢出土容器2

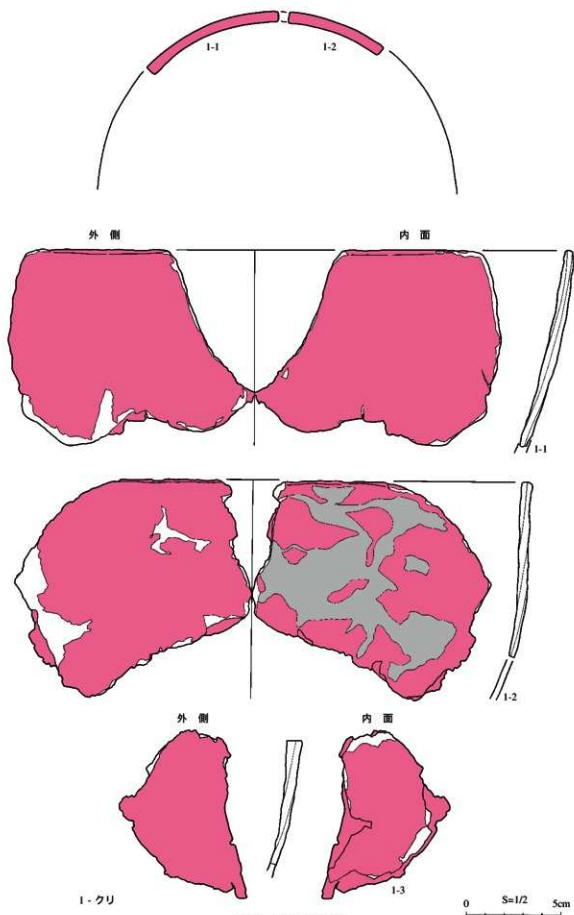


図58 沢出土容器3

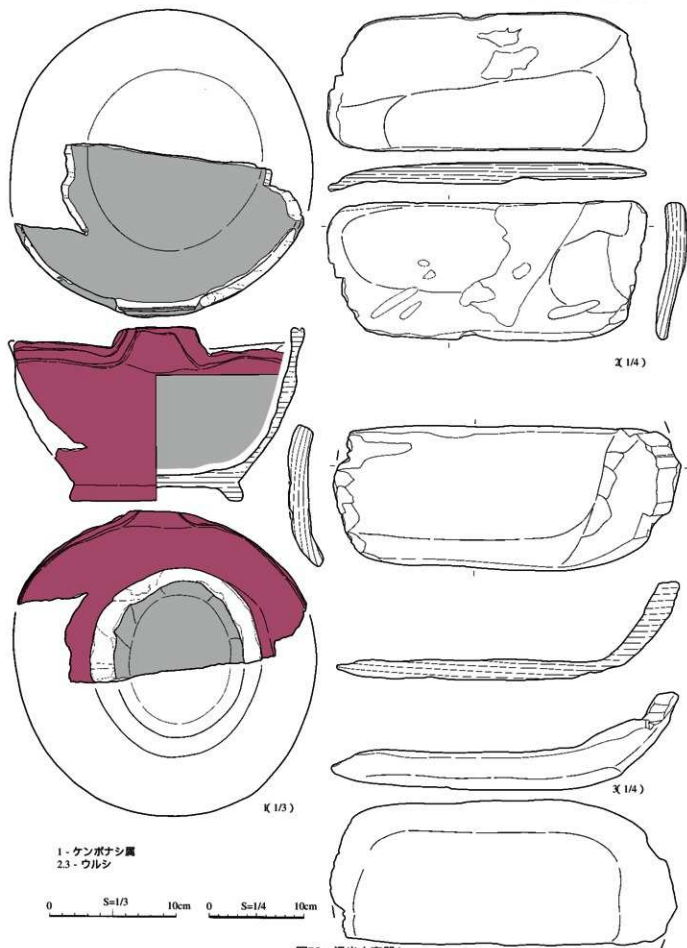


図59 沢出土容器4

器形は、底面から緩やかにカーブしている。57-1は丸底状だが、破片資料のため詳細は不明である。56-2は端部では緩やかに、両側縁はほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は先が細くなる形状である。槽（59-3・59-2）59-2・3は平面形が長方形で、底面は平坦状に丁寧な加工がされ、端部には胴部存在が想定される。59-3の上端部は胴部が残存し、右側縁もわずかに立ち上がる。上端部と右側縁胴部には器高や厚みに違いがあり、平面形状から槽として分類した。

工 用途不明木製品

楕状木製品（60-1）半割あるいは分割材の木裏部分を削りぬいて断面形をU字状に加工したものを指す。内外面を削って調整している。両木口付近の外面には浮き上がらせた一条の模様が入る。上部の模様にはこれに3個の孔が穿たれ、内1個には木釘？が孔に刺さったまま折れたような痕跡がみられる。

鳥形木製品（61-2）丸木のこぶ付近を使用し、全体に削りを入れている。幹部分を頸部、こぶ付近を胴一尾部分に見立てていると思われる。頸部は斜め上方向を向き、尾部もやや上方向を向く。下面はやや安定した状態で座りがよい。上面は楕円形状に削り貫かれ、容器未製品の可能性もある。

舟形木製品（49-1・2、60-2、61-1、62-1～4）上端にも口縁がめぐり、平面形が長方形から長楕円形の形状をし、舟底が作出され、両側縁に口縁がみられる舟形のもの指す。便宜上、上端部を舟首・下端部を舟尾、両側縁口縁を舟ペリと呼称する。舟首・舟尾が欠損した遺物については、後述する楕状木製品と類似する部分もあるが、舟底から舟ペリまで作出された痕跡が見られるものは舟形木製品に含めている。

総点数は8点で、完形品は60-2、器形の復元できるものは61-1、舟首先端が欠損しているものは62-4で、その他の破片資料は舟首付近のものが多い。出土位置は板敷遺構上面から2点、第1号木組遺構内から1点出土している。B層で出土しているものが多い。舟槽が削り貫かれる60-2・61-1・62-4と、ほとんど削り貫かれず、平坦状である49-1・2、62-1～3に分けられる。木取りはすべて横木取りである。

・舟槽が削り貫かれるもの - 残存している舟底はすべて平坦であり、61-1・60-2は舟首・舟尾に向かって緩やかに立ち上がる。62-4は欠けているために不明である。61-1の舟首または舟尾と類似した破片として62-2が挙げられる。61-1、60-2は舟首を尖らせる形状であり、62-4は残存部から舟首の幅が小さく推定される。60-2は舟首外面に径1cmほどの突起の痕跡が見られる。また、61-1の舟首・舟尾には方形の突起がつく。

・舟槽が削り貫かれないもの - 49-2・62-2は舟首部分と考えられ、62-1は先端が欠けている。49-2は舟首が台形状で、62-3は舟ペリの残存形状からやや尖らせた形状になると考えられる。

柄付木製品（31-1上部・63-1～3）石斧柄以外の柄で頭部を持つもので、いずれも頭部が柄部分よりも大きく、裝飾される例が多い。樹種は、31-1上部・63-2はケンボナシ属、小型石斧柄はサクラ属、63-3はニシキギ属である。31-1上部は第1号木組遺構貯水枠南側の板材を抑える転用杭の上部にあたる。打ち込みにより破損しているが、柄の長さだけで約1mある。削り出しにより加工されており、頭部は柄とほぼ同じ厚さで断面が扁平である。平面形は逆台形状であり両側縁に切り込みや削りで裝飾が施される。表面はほぼ平坦だが、裏面はごくわずかに中央がくぼんでいる。63-2は削り出しにより加工されており、頭部と柄の部分に長方形のかえしが付き、更にその上部が楕円形状に膨らむ。長方形のかえし表面中央に横位の沈線が一条切り込まれ、その上から2つの印沈線が横に並

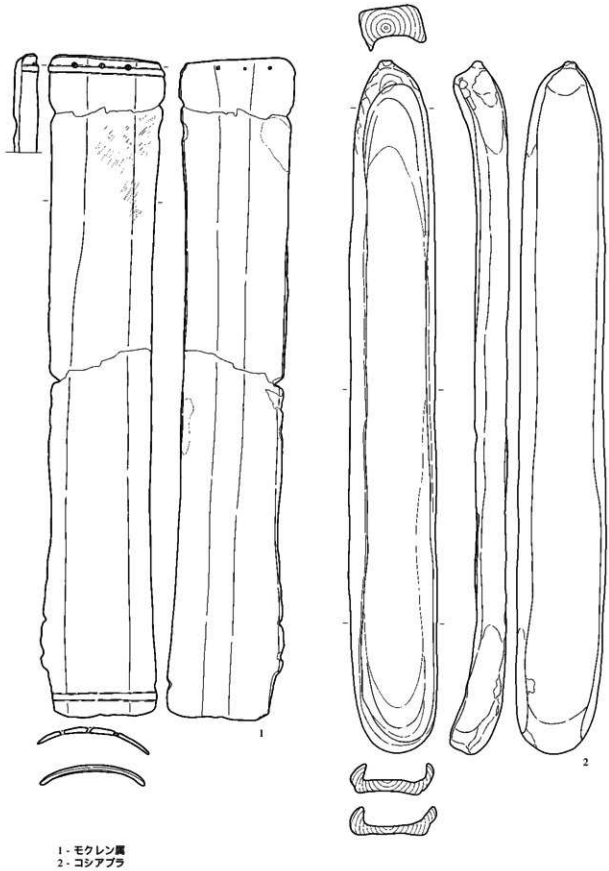


図60 沢出土用途不明木製品1

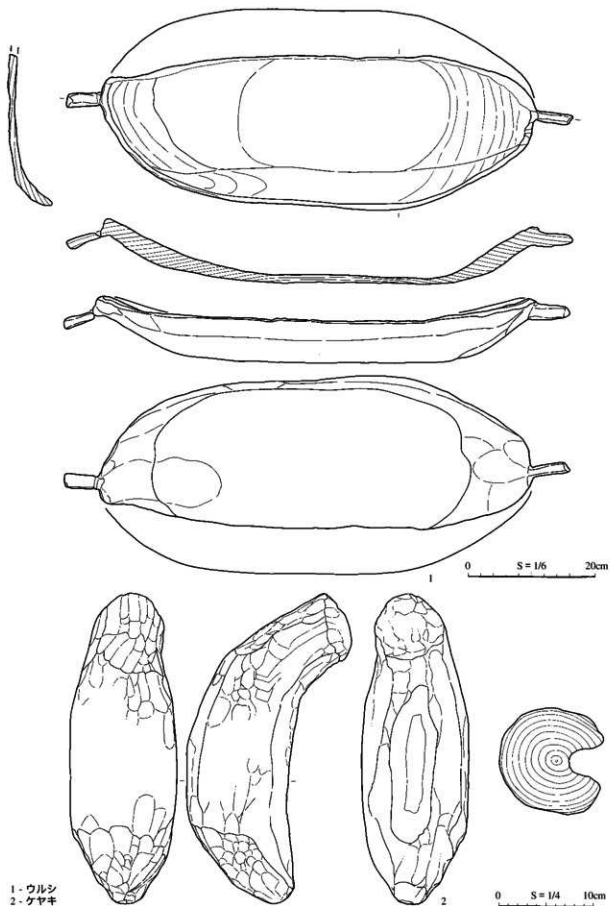


図61 沢出土用途不明木製品2

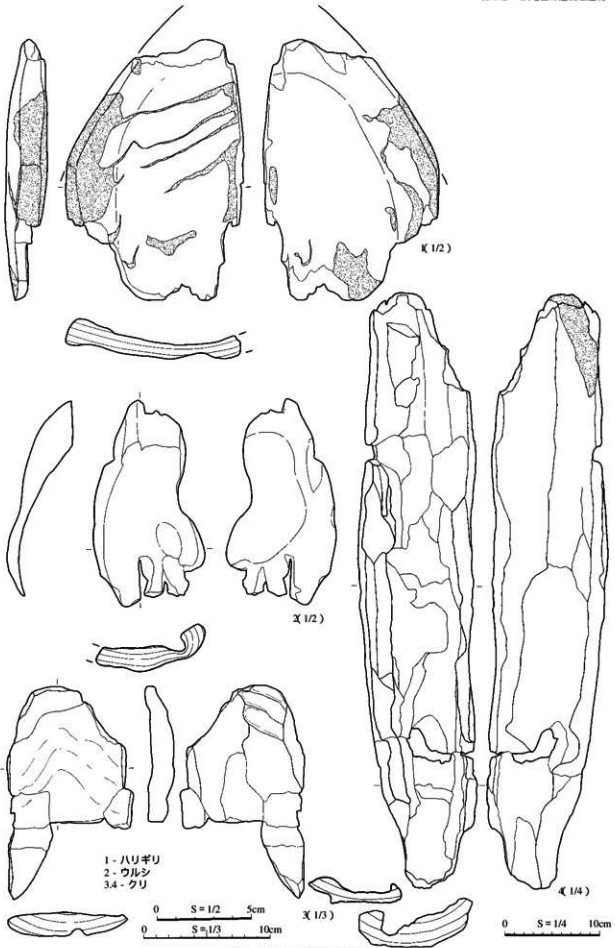


図62 沢出土用途不明木製品3

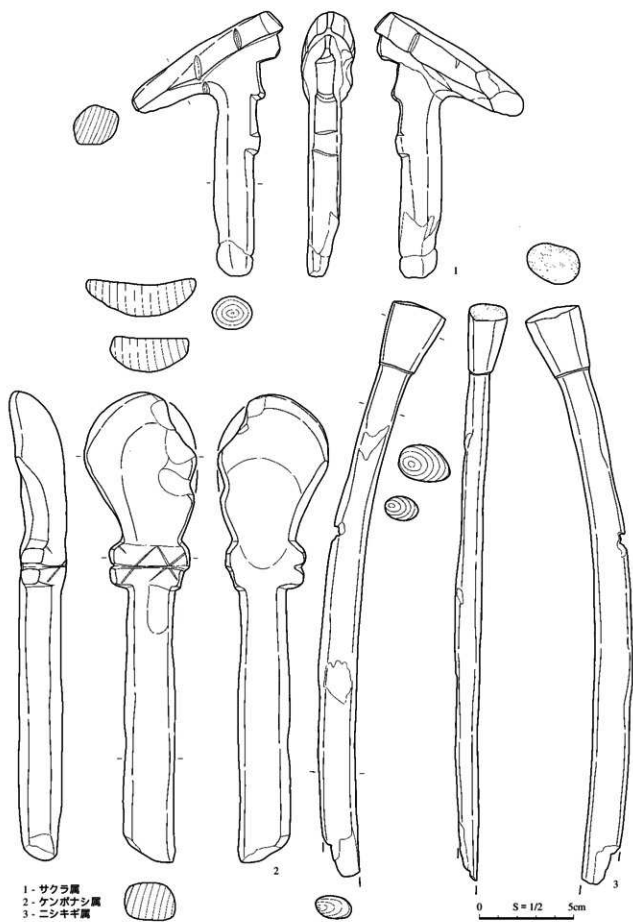


図63 沢出土用途不明木製品4

んで施される。楕円形状の上部は全体に丸味を帯び、両側縁がやや外側に開き上部が円形になる。表面中央が膨らみ、裏面が窪む形状である。右側縁は何力所か欠けている部分がある。小型石斧柄状は当初その形状から石斧柄と考えたが、股木を削り出して柄の部分に至るまで全面加工が施されており、装飾性が高いものと判断した。ただ、頭部両側縁に紐掛け状の小突起がみられ、小型石斧柄としての機能も十分考えられる。64-3は削り出しにより加工されており、柄の部分は扁平で、頭部が逆円錐形状であり、頭部と柄の間には一条の沈線が走る。頭部上端は平坦で擦痕が確認された。

薄板状木製品(64-1・2)2点ともアスナ口の薄板で、平面形上部が方形、下部が長方形である。64-1は炭化のものに比べて若干厚みがある。上部には割り剥がしたような痕跡がみられ、やや不整形なものの方形に近い形状である。下端がやや細くなっているが、破損しているかどうかは不明である。64-2は上部が隅丸方形であるが炭化による形状の変化も加味されると、本来は64-1同様、方形に近い形状と思われる。下部は断面長方形形状であり、下端は欠けている。

管状木製品(64-3・4)2点とも樹種はアスナ口で、64-3は割材を削り出して断面円形に加工している。両端が欠けているために詳細は不明だが、断面形や形状に変化が見られないため、管のように先端が尖る形状にはならない可能性がある。64-4のものは、割りの工程が行われ、整形前の未製品と考えられる。断面形が方形であり、裏面に割裂痕がみられる。

しゃもじ形木製品(64-5・8)柄を持ち、下部が柄よりも幅広く削り出されているものをこの類に含めた。64-5は厚みがほぼ一定の断面長方形形状で、柄から下部にかけて両側縁が緩やかに広がる形状である。下端は斜めに削りが入る。64-8は柄の部分が厚みを持ち、下部両側縁に肩をつけている。左側縁の肩はほぼ直角であるが、右側縁は緩やかである。下部は柄よりも薄く削られ、下端には削りが入る。

挟り付木製品(64-6・7)側縁に挟りの加工がみられるものである。2点出土している。いずれも証目薄板で、64-6は平面長方形に加工した板材に上部の両側縁から挟りが入る。挟りの形状は台形を横にしたような形状であり、平坦に削られている。使用痕などは観察できなかった。下端にかけて薄くなる形状である。64-7は裏面右側縁にJ字形状に挟りが入り、丸味を帯びて削られている。主軸線を挟んだ反対側の側縁には挟りが入らず、楕円形状に曲線を描くと思われる。

板状木製品(64-9)全体に薄く平滑に加工され、両側縁に丸味を出している。ヘラ片の可能性もあり、掘り棒に伴う可能性もある。

(2) 木材

角材(65-1～8)断面形状が角材に近いものを8点図示した。下端を尖らせておらず、杭状先端加工材とは別に扱った。65-3は上端に削りが入る。65-4・5は上部をやや斜めに削り出す。65-7は表面に光沢痕が観察される。65-8はほぼ完形で、側縁に削り出した浅いくぼみがある。

杭(31-1下部は掘り棒で記載、31-3は樞で記載、29-2、30-1・2・4、31-2、31-1下部、33-2・3、図34・35、36-1・3、42-2、43-1、43-6・7、46-4、図48、49-3～5、51-1～5、53-1～5)第1号木組遺構や杭跡等、一端が地表に打ち込まれた状態で確認されたものを杭としている。観察表には()内に木取りを入れてある。杭状先端加工材と異なり、両端の敲打痕が比較的明瞭である。また、必ずしも先端を尖らせたものを杭に使用していない。

杭状先端加工材(36-2、43-3、46-2・3、図67～77)包含層から出土したもので一端が杭状に細く

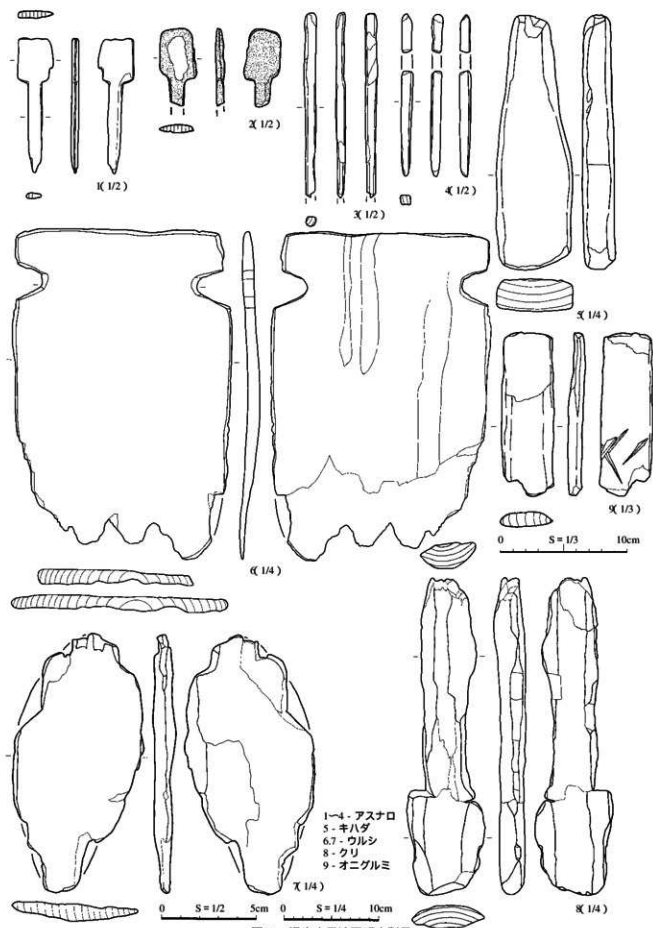


図64 沢出土用途不明木製品5

加工されているものを杭状先端加工材とした。これらは、杭として使用された可能性は高いが、出土状況から遺構に使用された杭とは区別して扱うものとする。杭と同様、観察表には()内に木取りを入れてある。先端加工材に特徴的なのは先端が炭化しているものが多いことである。炭化することによって木が腐りにくくなると一般的にいわれるが、遺構構築材の杭で炭化しているものはなく、これらの先端加工材が、何の目的で使用されたのかは不明である(第4章第2節3参照)

先端加工については、木取りや材の厚みによって加工方法が変わる特徴がある。全面を削り出すものが少なく、両側縁のみ、両面のみのものみみられる。

柱目板・柱目材(36-4・5、37-3、43-9、50-2、78-1～10、79-1～7)22点を図示し、この内5点が遺構構築材である。柱目の木取りは板目に比べて少ない。

大きく分けて薄板(36-4、43-9、78-1～6・10)と板(37-3、78-7～9、79-1～5)厚板(36-5)などに分けられる。薄板は、両面を削り出して薄くした36-4以外は放射分割材をさらに薄く割り取ったものがほとんどで、両側縁の加工は少ない。板や厚板としたものは、割材を割り取り、四面を加工して柱目にしたと思われるもの、放射分割材の四面を加工したもの(36-5、37-3、79-5～7)放射分割材の木表・木裏部分を割り取ったもの(79-2・3)があり割り取り後に二次加工されるが、割り取り時に生じた稜線は残存することが多い。遺構構築材に使用された36-5、37-3は両端をやや斜めに削り、上端に打ち込みによる敲打痕が見られる。50-2は上部を削り出して断面円形にし、上半から下端にかけての部分で柱目板に加工しており、木製品の未製品である可能性がある。

板目板・板目材(33-1、37-1・4、図38・39、40-2・3、図41、42-4、43-8、45-1、46-5、52-3・4、79-8～15、図80～87)板目の木取りは、分割材に次いで多い。大きく分けて薄板・板・厚板に分けられる。薄板は79-10～15で、厚板は37-4、38-2・5、39-1、41-1・5、45-1・2で、これ以外は板・材に分類される。

板材の製作は厚板・薄板に限らず、放射分割材を年輪に沿って割り剥がし、木裏側を削り、断面台形状の板材にするのが一般的である(39-2～4、40-2・3、41-4・5、42-4、45-1、46-5、79-9～15、82-2・3・5・7、83-5・6)この工程を経て両側縁を真っ直ぐに加工し、板にしたものが33-1、37-1・4、38-1～5、39-1、41-1～3である。このほかに一面を削って断面平行四辺形状に仕上げるものも見られ、木裏側を削るもの(43-8、81-2・82-4・83-3・9、87-6、83-3・84-12)である。45-2は上部が割り取られているため、板目になるが、中央付近では丸木材になる。

割材・半割材(42-1・3・5、43-4・5、44-2、46-1、47-2、50-3、52-1、図88～95)遺構構築材は10点である。放射分割材片・割材片・削り出し割材等を含み、破損や遺存状態の悪さから柱目・板目材に含めなかったものもこの類に入る。

・削り出し割材片(88-11～13)材を径2～3cm程度に丸く削り出した後、割り取って放射分割材にするもので、長さも30～50cmの長い削り出し材から作出している。樹種はすべてアスナロである。88-11は丸く削り出した材を4分割している。88-12は同じく半割したもので、割り取り時の稜線が中央に残存する。88-13は放射分割材の内側を更に削り取って断面台形状の材に加工している。

・長い割材(42-5、89-5～7、91-4～7、92-1～3)長さが30cm以上の比較的長い割材である。杭状先端加工材のように下部を細く削るものもある(89-6・91-5・91-6)。敲打の痕跡を持つものも見られ、上端に敲打痕の残るもの(91-6)中央に敲打による変形が見られるものもある(92-3)割り取りにより、上部と下部で断面形状の異なるものも見られる(89-5・7、92-2)。割り取り時の状

態のもの(91-4) 放射分割材の木表側を加工したもの(91-7・92-1) もがある。42-5 は中央に分枝部をもち、断面形状が角状になる。

・角材状(43-4、88-2→5・89-1→4・8→13、91-1→3) 断面形状が方形に近く、破損しているものなどをこの類に含めた。二次加工の見られない、割り取り時の状態のもの(88-4・5、89-1→3、10・11・13、91-1・2) 二次加工の見られるもの(43-4、88-2・3、89-4・8・9・12、91-3) がある。二次加工の見られるものは、全体に加工されるもの(88-3、89-4・8、91-3) 両側縁が真っ直ぐに加工されるもの(88-2、89-9) 一部に工具痕を残存するもの(43-4、89-12) がある。

・断面三角形状(43-5、88-7・9・10、90-1・3、91-8→14) 断面形状が三角に近く、破損しているものなどをこの類に含めた。二次加工の見られないもの(43-5、88-9、91-8・9・11・12・14)、二次加工の見られるもの(88-7・8・10、90-1・3、91-10・13) がある。段状に加工するもの(90-1) 木表側の両側縁を削り、断面菱形にするもの(90-3) 上端を削り落としているもの(91-10) 表面・右側縁を加工するもの(91-14) などがある。

・厚材(42-1、52-1、90-4・5) 厚い分割材をこの類に含めた。42-1・52-1・90-4 は、放射分割材の木裏部分を割り取った状態である。90-5 は放射分割材の木裏部分を削り、断面平行四辺形状に仕上げる。

・割材片(88-1・6、90-2) 断面形状が不整形なもの、破損しているものをこの類に含めた。いずれも割材片と思われ、割り取り後の加工は見られない。

・半割材(42-3、44-2、94-1→4、95-1・2) 芯持半割(偏半割)で、半割後に加工されたものが多い。木表側を加工し、断面角状に仕上げるもの(42-3、94-1→4) 板状に仕上げるもの(47-2、95-1・2) 等である。丸木材の一部を半割し、分枝部の残る94-2 や部位によって加工の異なる44-2、94-4 など、丸木材の痕跡をそのまま留めているものもある。44-2 は上部のみを半割にしている。

両端切断材(53-6、96-1→7) 両端にあたる木口部分を削り出しているもので、大きさは木口の大きさは径2.5cm→16cm、長さ13cm→31cmである。切断する木取りは、丸木材(53-6、96-3→5) 芯持半割材(96-1) 放射分割材(96-2) 板目材(96-6) 削出丸材(96-7) などである。切断形状は材の厚みに関係すると思われ、樹芯部を残して斜めに削り出すもの(96-1・3・4) 斜めに削り出すもの(96-2・5→7) に分けられる。53-6 はとくに厚手であるが、両端が平坦になるよう、削られ、両面・両側縁とも面取りされている。

用途不明加工材(43-2・10、66-1→9、50-1、97-1→3、98-1→3)

棒状(66-1→9) 棒状に加工された材で、先端が尖っておらず、杭状先端加工材のように杭としての機能が想定されないものを含む。大きく分けて、薄手のものと厚手のものに分けられる。

・薄手のもの(66-1→7・9) いずれも全体に削りが入り、平滑である。断面が台形状のもの(66-1・2) 断面が角状のもの(66-3・9) 断面円形のもの(66-4→6) などがみられる。

・厚手のもの(66-8) 丸木を削り出し、面取りをしており、下端には斜めに削りが入る。上部は炭化しており、木取りや厚さから柱材の可能性がある。

容器状(50-1、97-1→3) 木の自然に曲がった箇所を利用して容器状に加工した木材をこの類に含めた。いずれも木裏部分を削りぬいている。50-1 は上部が欠けていると思われる。口縁部はほぼ平坦で、左右が一段高くなる形状である。97-1 は把手状の柄がつく形状で表面外側に一段削りが入る。削りぬきの上部には平らな口縁をもつ。97-2 は木のカーブを利用した材で、全体に削りが入り、平

面形が楕円形状に削り抜かれている。97-3 は木の瘤部分内面を削りぬいており、底部形状が丸底状になる。

楕状(43-2・10、98-1～3)分割材の木裏部分を削り、楕状になるものをこの類に含めた。両端は破損しているものが多い。43-2 は下部が炭化している。43-10は幅4 cmほどであるが、木裏部分を削り出して加工している。98-1・3 は内面の削りが浅い。93-2 は内面が炭化している。

加工材・丸木材(37-2、44-1、45-1・3、46-7、47-1、52-2、99-1～5、100-1～4)15点を掲載し、このうち遺構構成材は6点である。丸木材全体の形を整えて加工しているもの(44-1)丸木材の四面を削り取り、断面長方形に加工するもの(37-2、47-1、52-2、99-1・2)丸木材の一部を削り取るもの(45-3、46-7、99-4・5)ほとんど加工されず断面形状が円形になるもの(99-3、100-1～4)に分けられる。44-1 は枝払いや木の瘤の高まりを除去し、全体の形状を整えている。上端には抉りが入り、下端は先を尖らせている。37-2 はほぼ全面炭化している。両端は削りが入り、丸味を帯びる。47-1・52-2 は両面を面取りしている。

(3) その他

擦痕のあるクルミ(101-1)1点出土した。クルミ頭部を打撃し、縫合線に沿って半割している。おそらく、内部の実を取り出した後に、外皮を磨ったものと思われる。

ヒョウタン果皮片(101-2)成育したヒョウタンの果皮片で、形状から底部に近い部分と思われる。ツル植物の巻き付けと結び(101-3)丸木の枝にツルを巻き付けたもので、丸木はウルシ、ツルはマタタビ属である。ツルがやや離れた状態で巻かれているが、本来は1本のツルが巻かれていた可能性が高い。ツルを結ぶ部分は別のもう1本のツルを用いている。丸木にツルを二回り巻き付けて結んだものに別のツルをつないでいる。ツルは幅5 mm程である。丸木は断面形状が扁平である。

編物片(101-4)2本1単位のツルと1本のツルを擦ったものに直交して、2本のツルをくぐらせている。民具では籠の胴部に使用される細編みに類似する。

樹皮巻き(101-5～7、図102・103)広葉樹の樹皮を剥いで適当な幅に切りそろえて巻いたものである。肉眼ではサクラやシナノキなどの特徴を有するが、木質部分と分離されているうえ、樹皮組織を観察していないため、特定はできなかった。樹皮の厚さ、巻き方、巻きの厚さから分類した。

・樹皮の厚さ 薄手・厚手・普通のものに分けると、厚手のもの(102-1)薄手のもの(103-1～6)以外はほぼ普通のものに分けられる。厚手のものは内皮が残存している。

・巻き方 樹皮の幅をそろえて一方向から巻くもの、両端から巻くものが見られる。柔らかく薄手の樹皮は折り畳んでいるものがほとんどである。図示していないが、両端から巻くものは、これ以外にも斜めに巻かれたものも見られる。樹皮の繊維方向をみると横剥ぎ法(名久井1999)によって剥ぎ取りが行われているようである。樹皮の剥ぎ取り方法の違いによって樹皮の巻き方に違いがあるかどうかは不明である。むしろ、巻き方の違いは樹皮の性質によるものと思われる。

・巻きの厚さ 両端巻きのもものが厚くなる傾向がある。一方向から巻くものでは、太巻きのもの(102-7)が見られる。

(坂本)

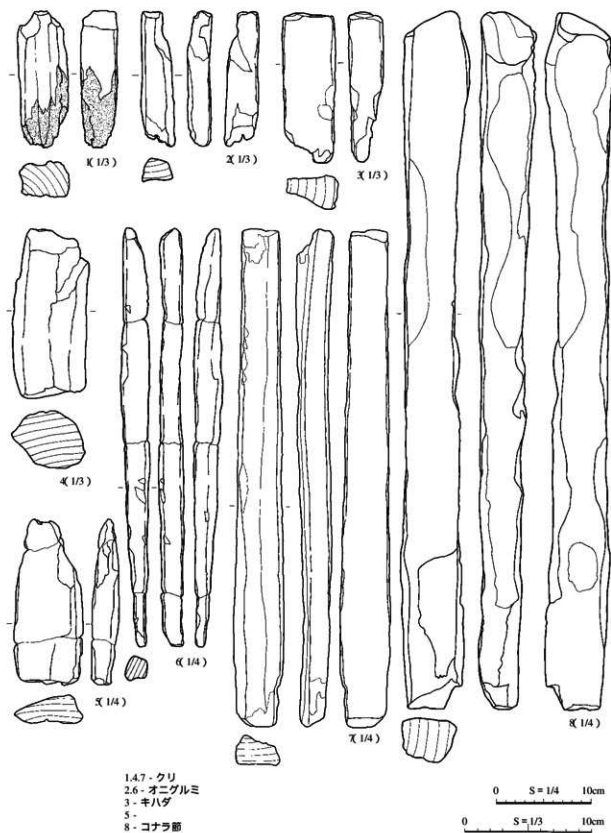


図65 沢出土角材

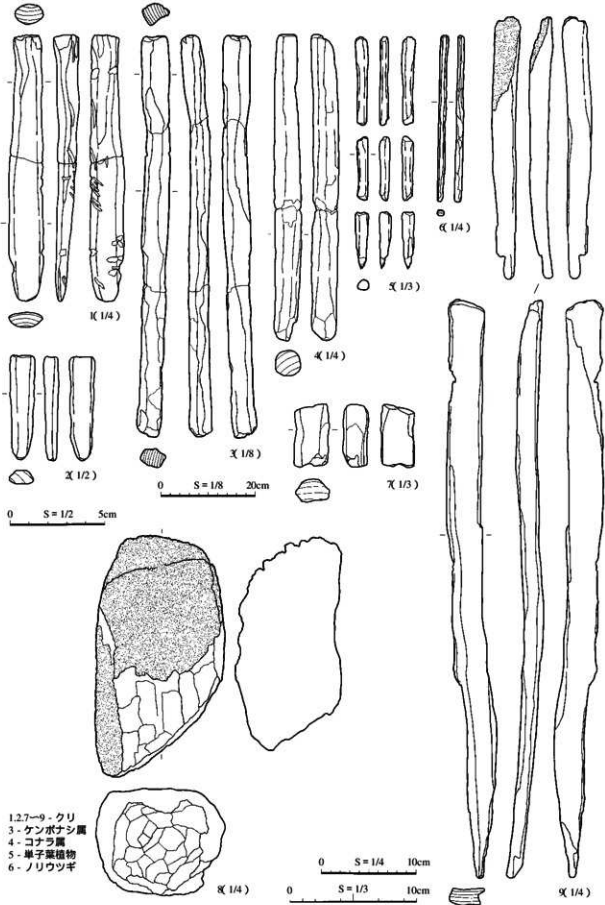


図66 沢出土棒状加工材

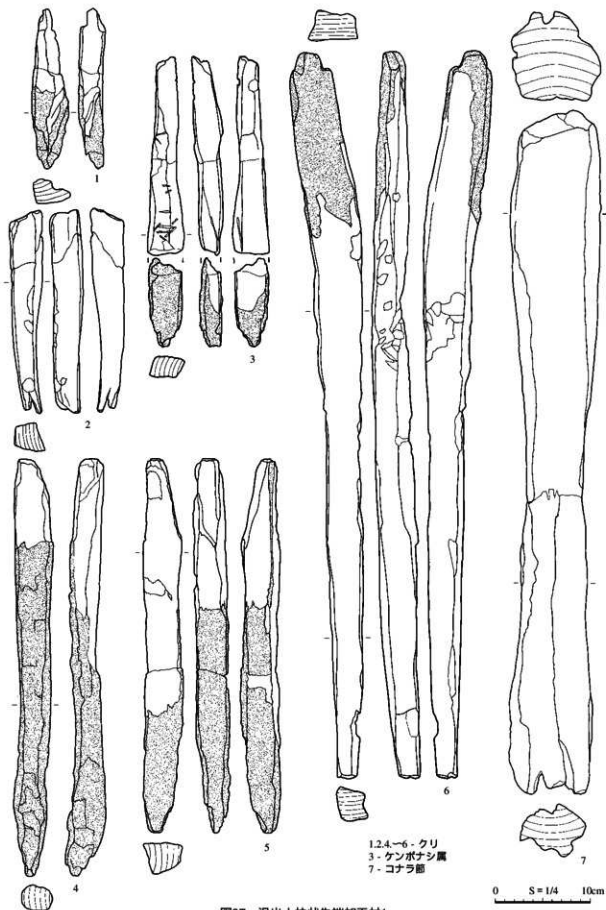


図67 沢出土杭状先端加工材1

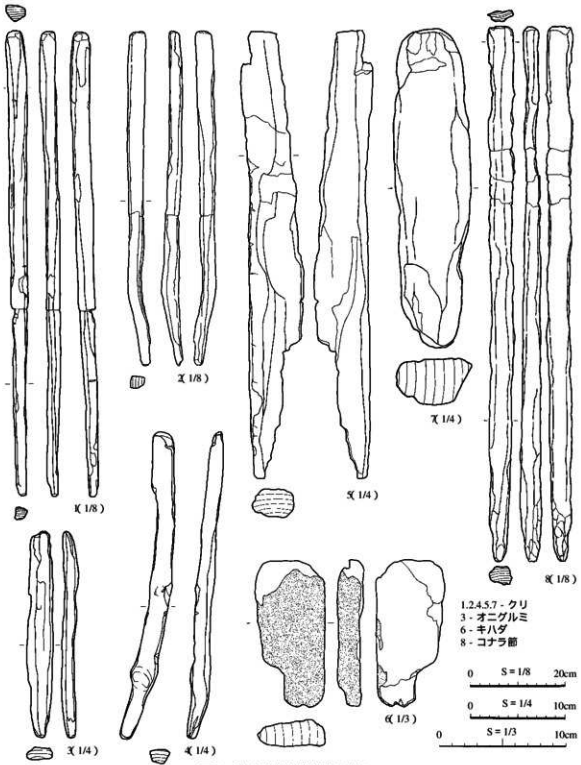


図68 沢出土杭状先端加工材2

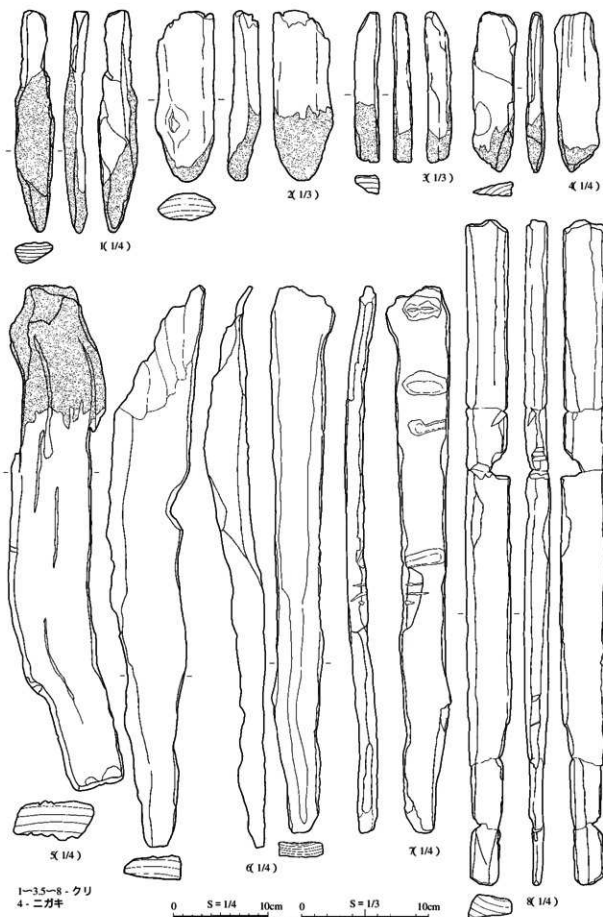
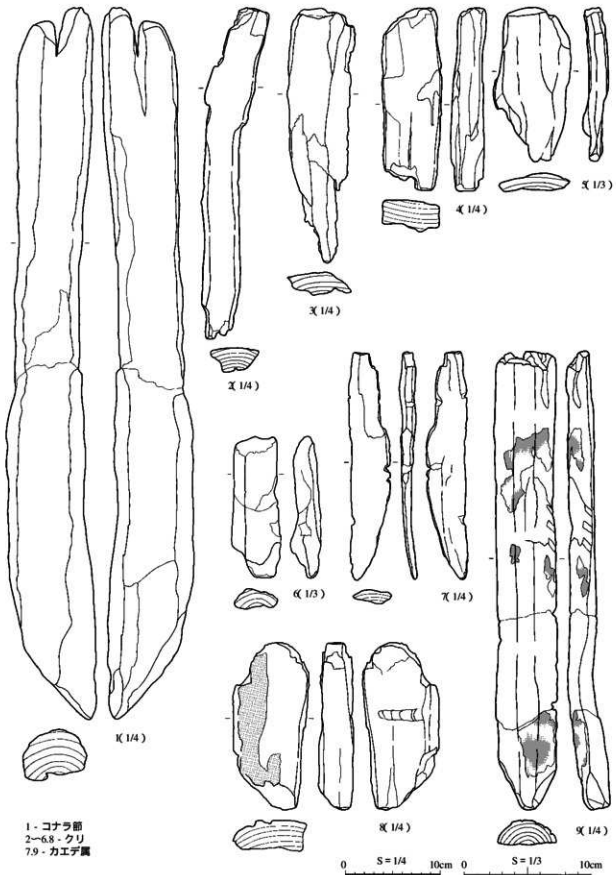


図69 沢出土杭状先端加工材3



1 - コナラ部
2-6.8 - クリ
7.9 - カエデ属

図70 沢出土杭状先端加工材

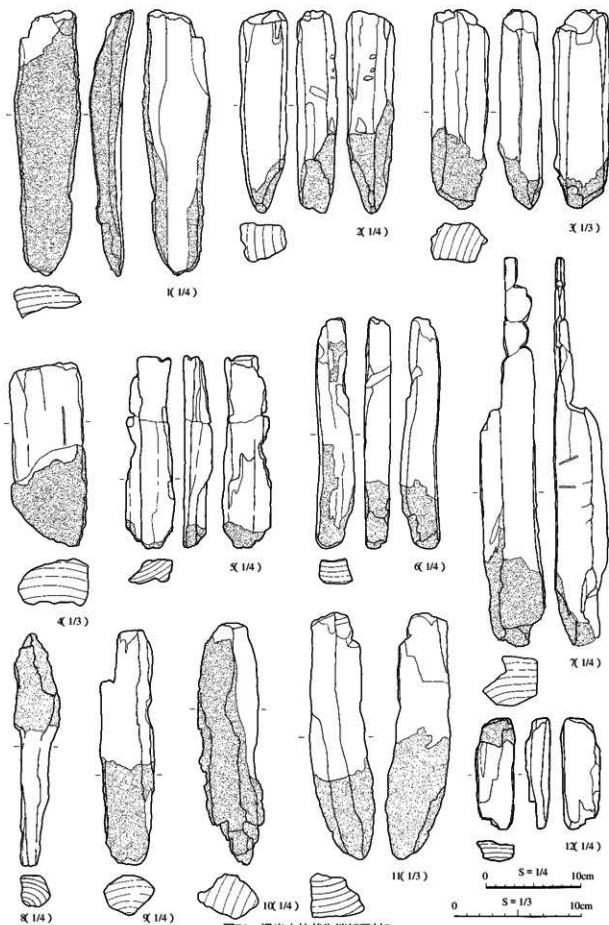
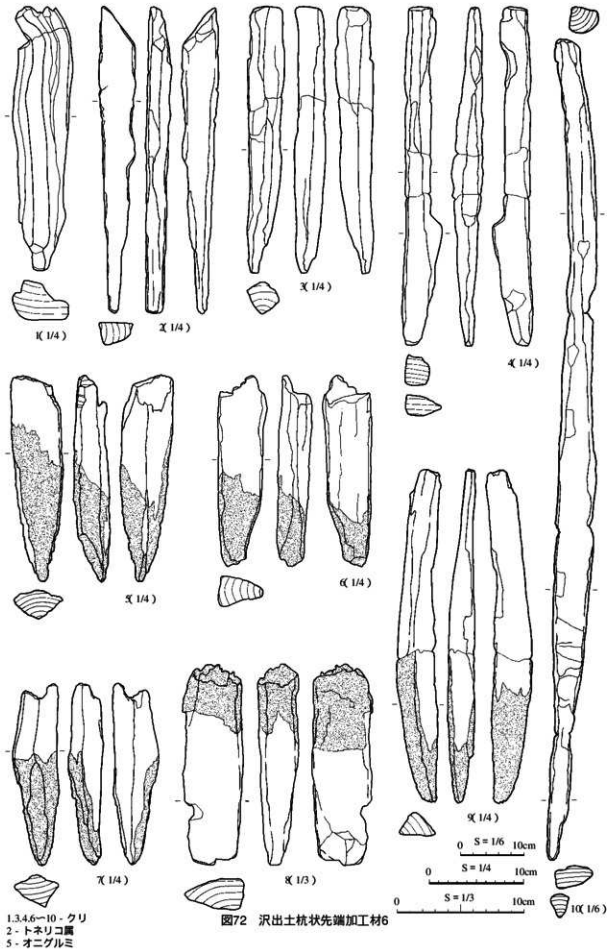
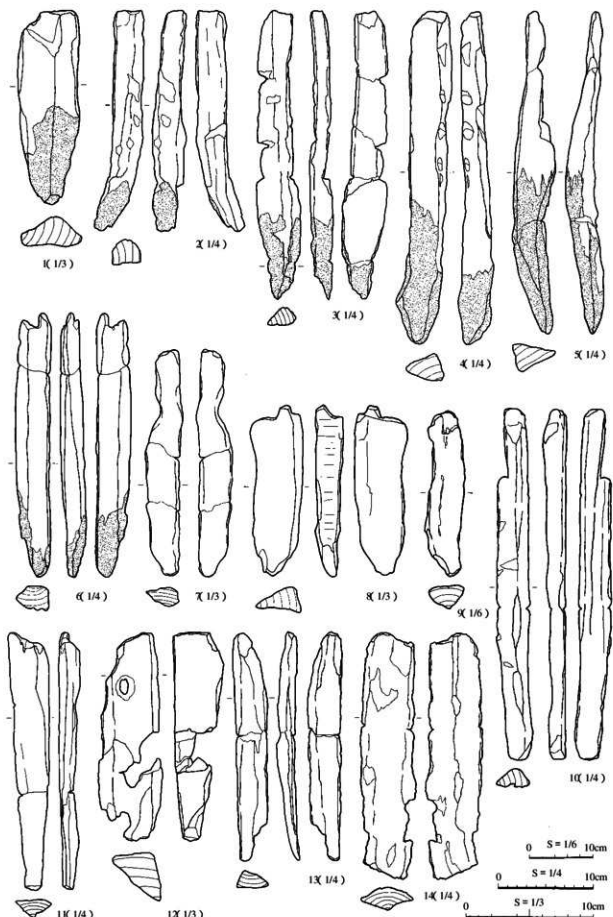


図71 沢出土杭状先端加工材5

1~4.6~12・クリ
S・ケンボナシ属





1-7,9-13 - クリ
 8 - ニガキ
 14 - ミズキ

図73 沢出土杭状先端加工材7

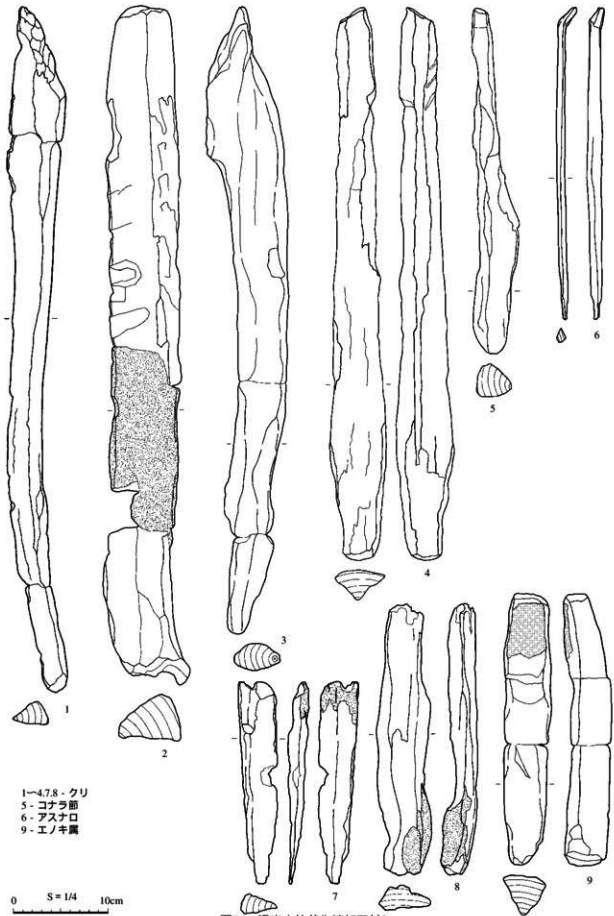


图74 沢出土杭状先端加工材8

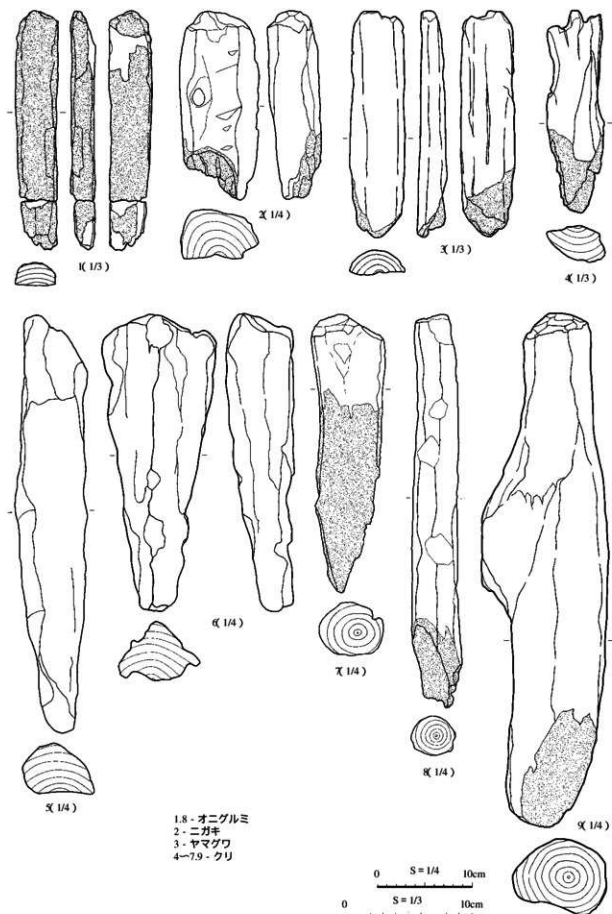


図75 沢出土杭状先端加工材9

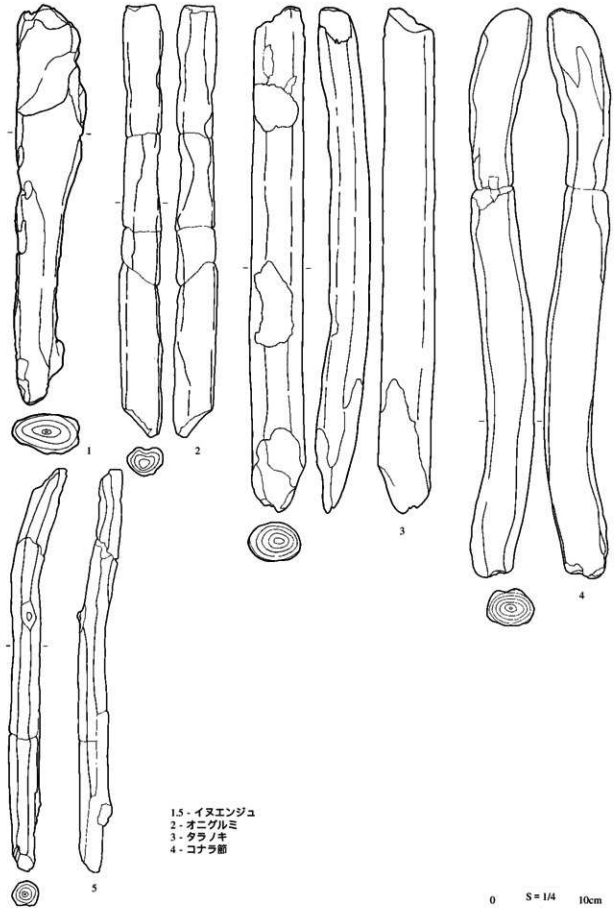


図76 沢出土杭状先端加工材10

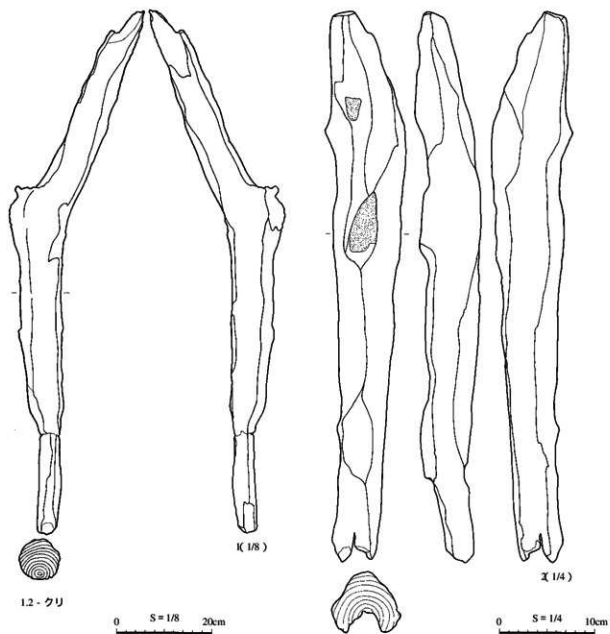
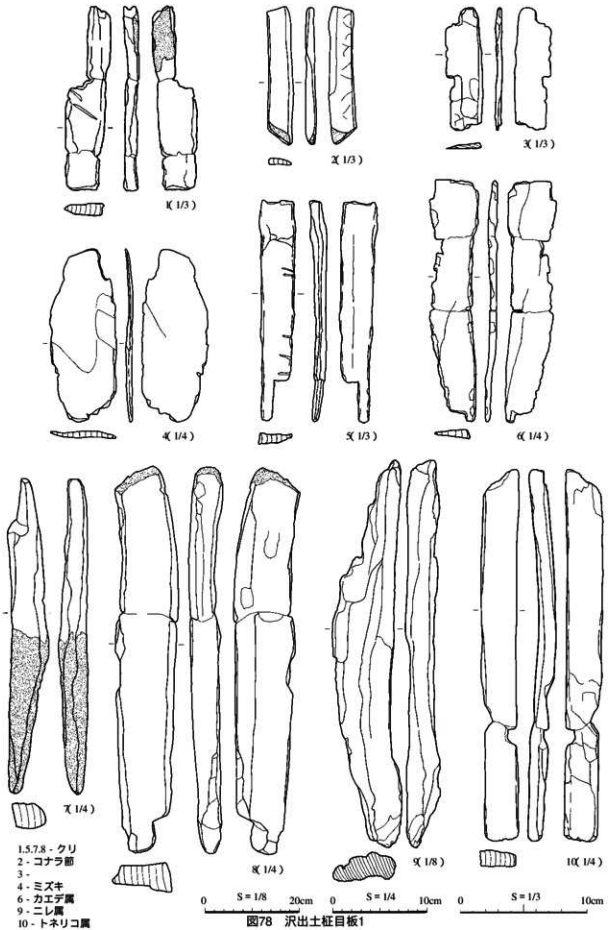


图77 沢出土杭状先端加工材11



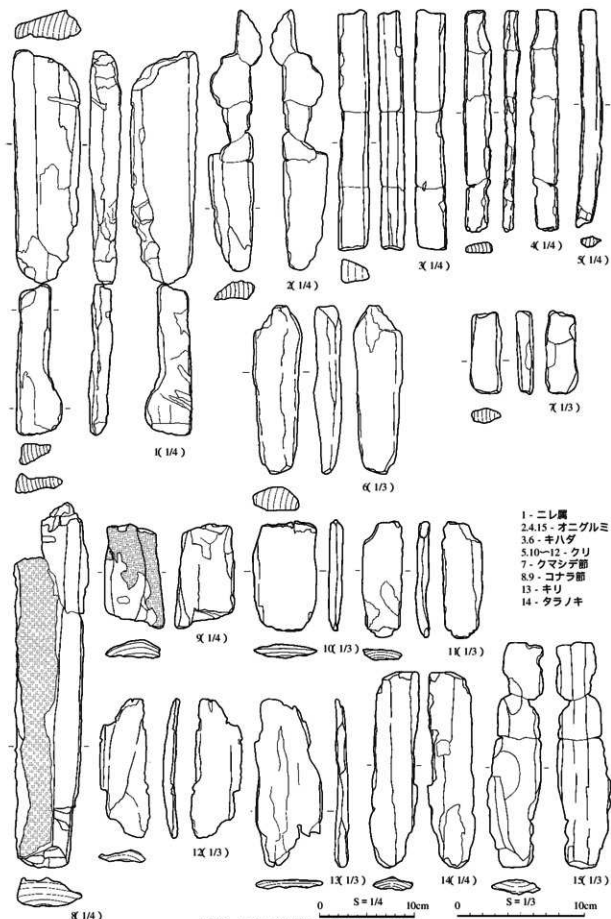


図79 沢出土柱目板2・柱目材・板目板1

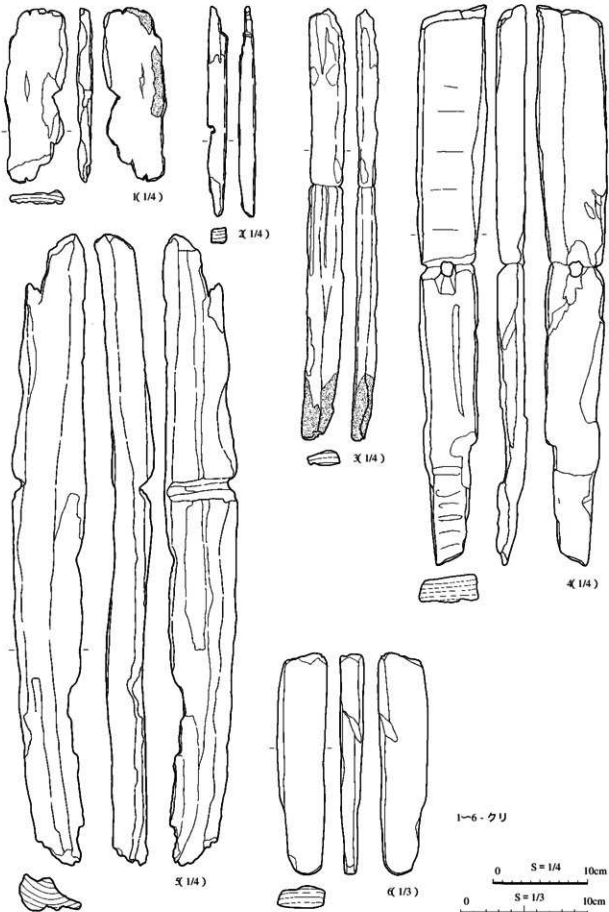


図80 沢出土板目板2

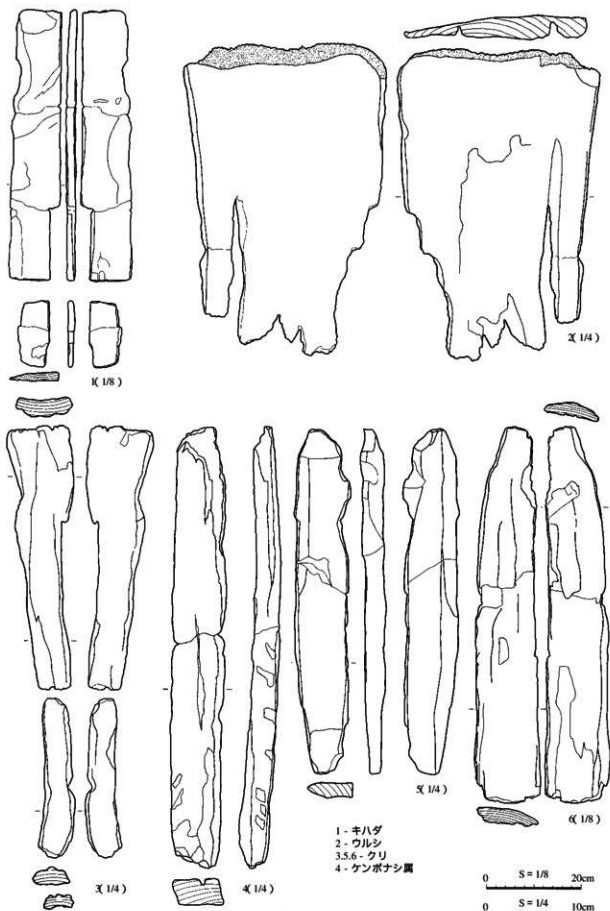
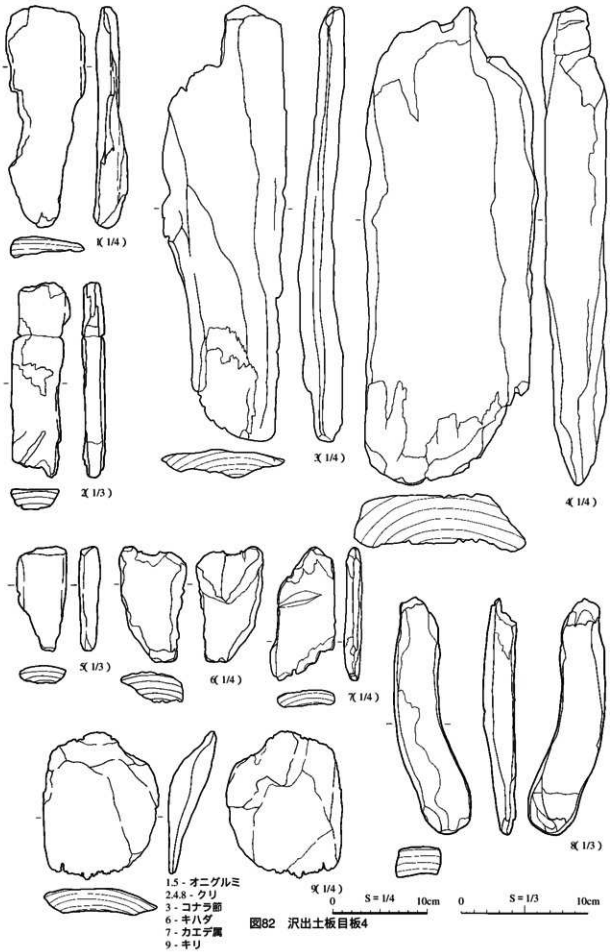
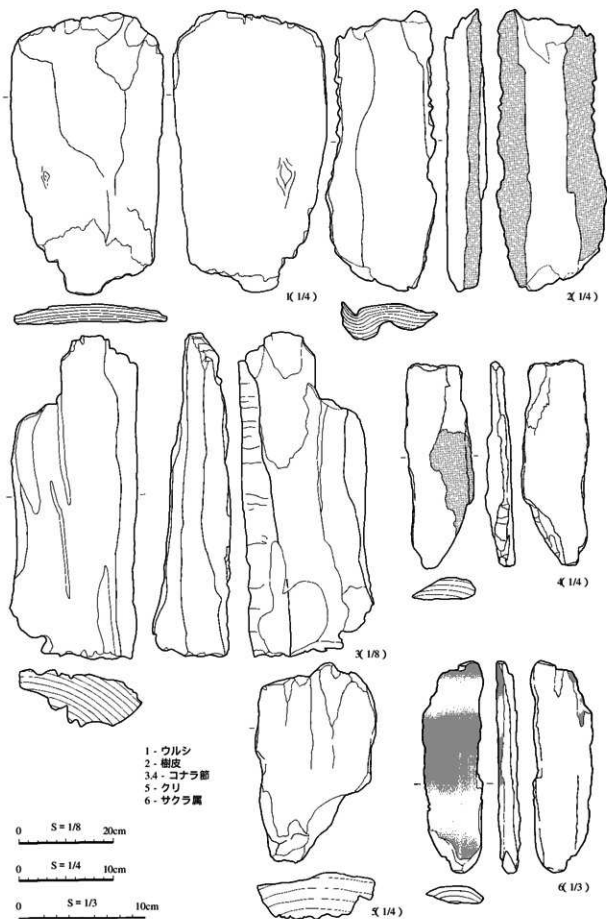


図81 沢出土板目板3





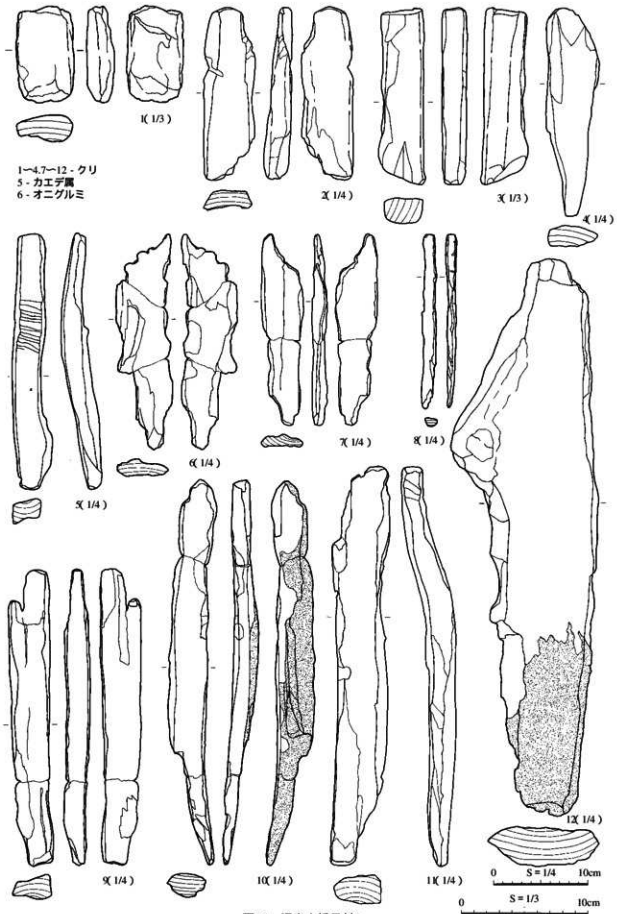


図84 沢出土板目材2

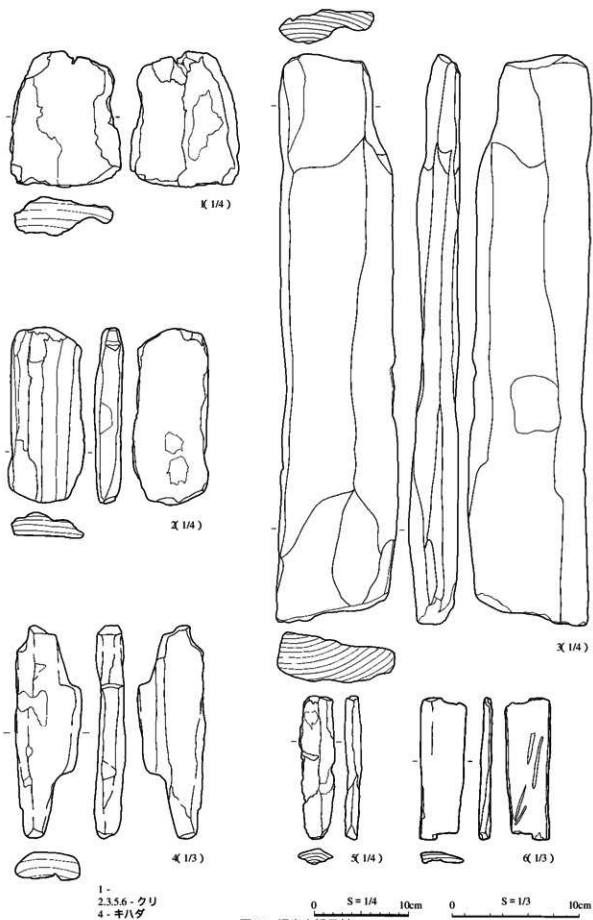


図85 沢出土板目材3

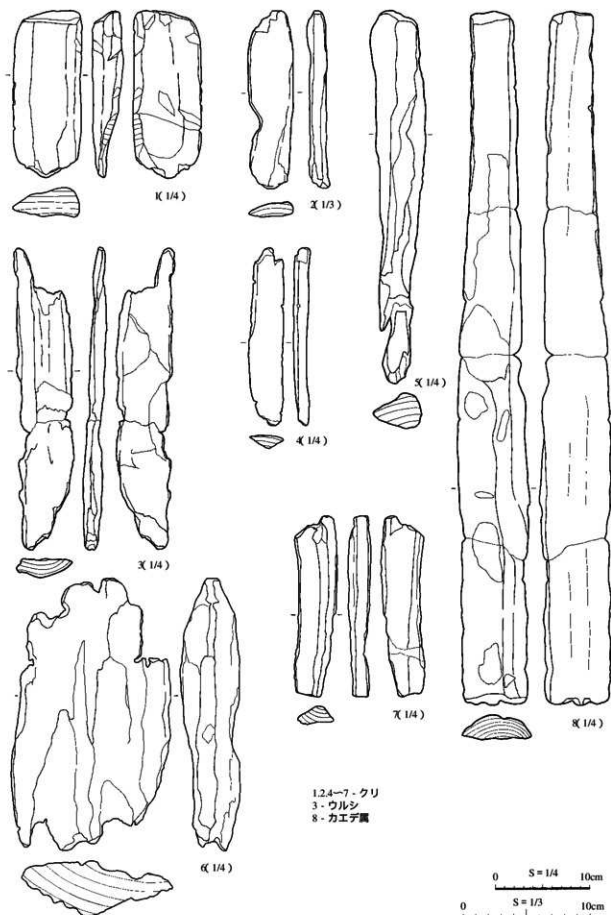


図87 沢出土板目材5

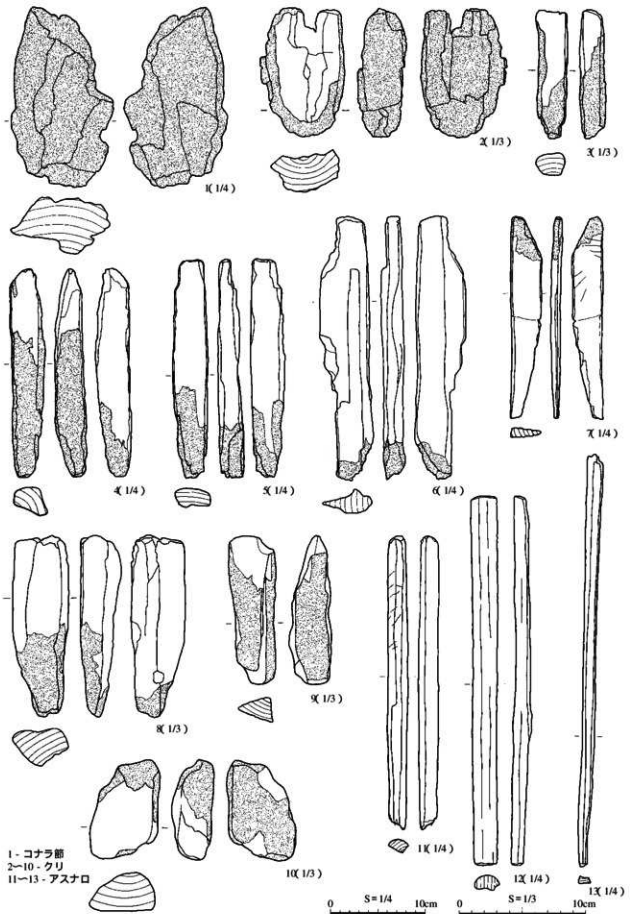
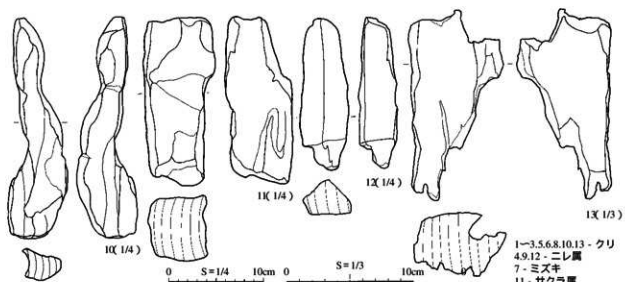
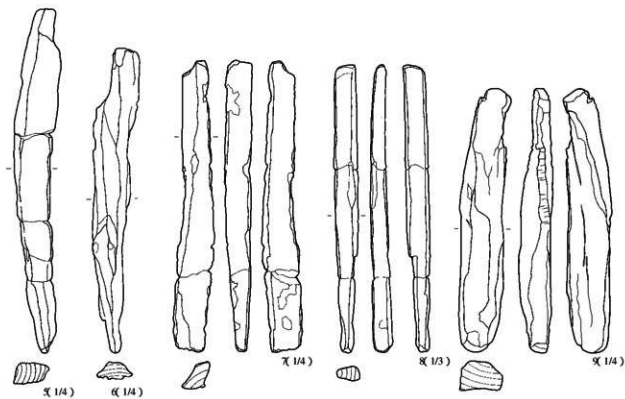
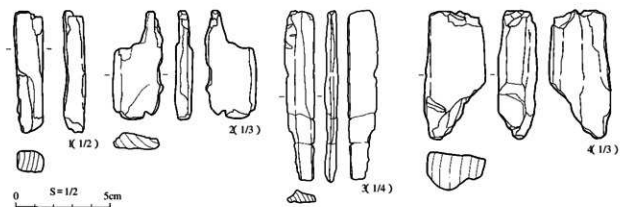


図88 沢出土副材1



1-3.5.6.8.10.13 - クリ
 4.9.12 - ニレ属
 7 - ミズキ
 11 - サクラ属

図89 沢出土副材2

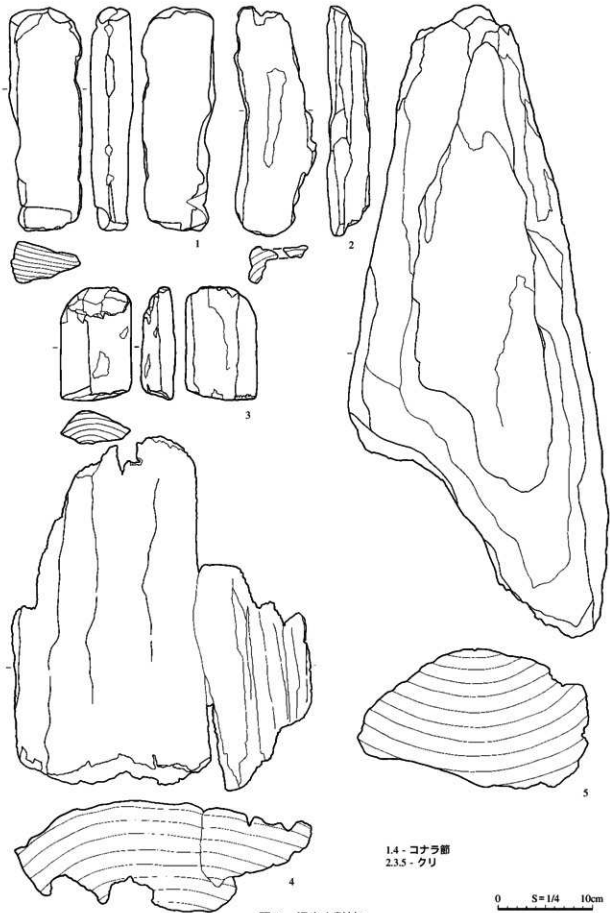
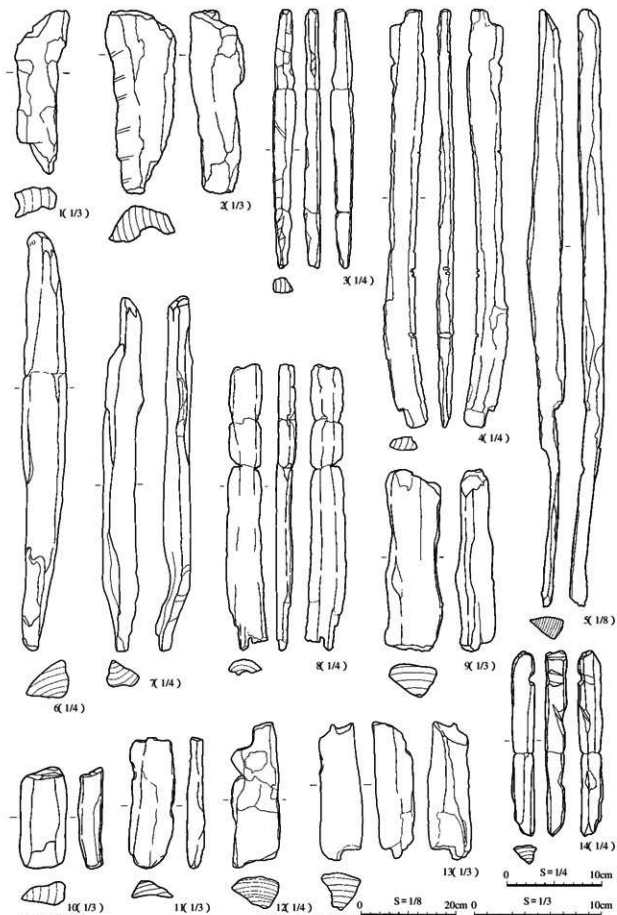


図90 沢出土割材3



- 1.3.12 - キハダ
 5.7.9-11.14 - クリ
 2 - コナラ節
 4 - オニグルミ
 8 - タラノキ
 13 - ケンボナシ属
 6 - ミズキ

図91 沢出土副材4

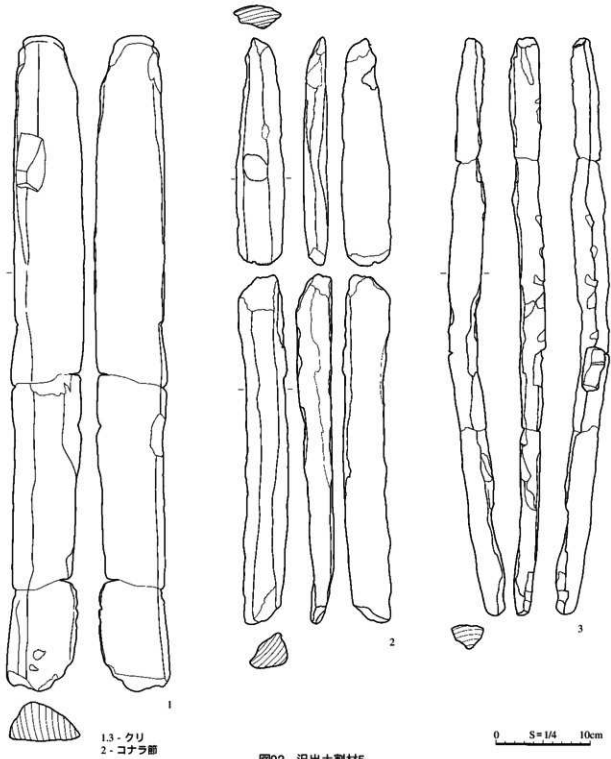
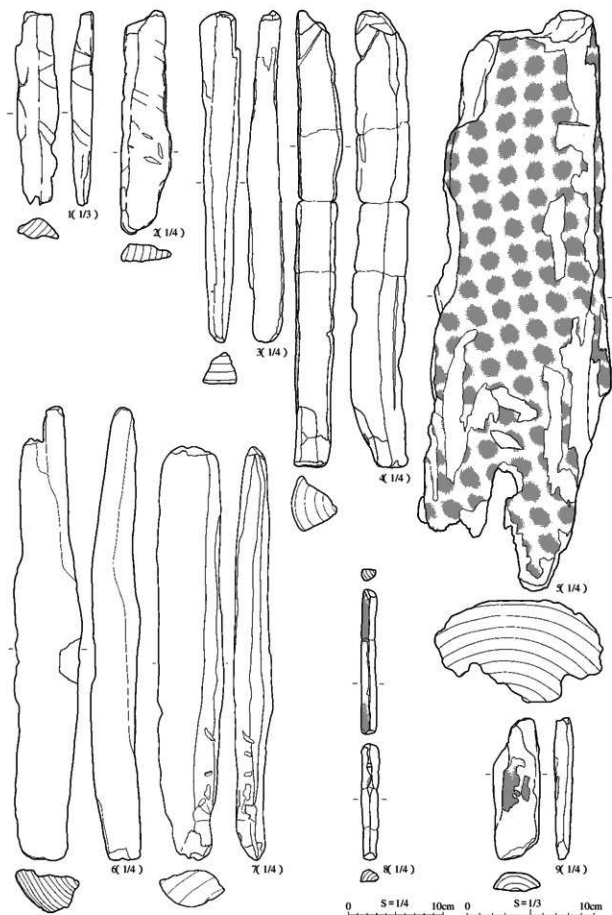


図92 沢出土副材5



1-3.5.7 - クリ
4.6 - キハダ
8 - ガマズミ属
9 - タラノキ

図93 沢出土副材6

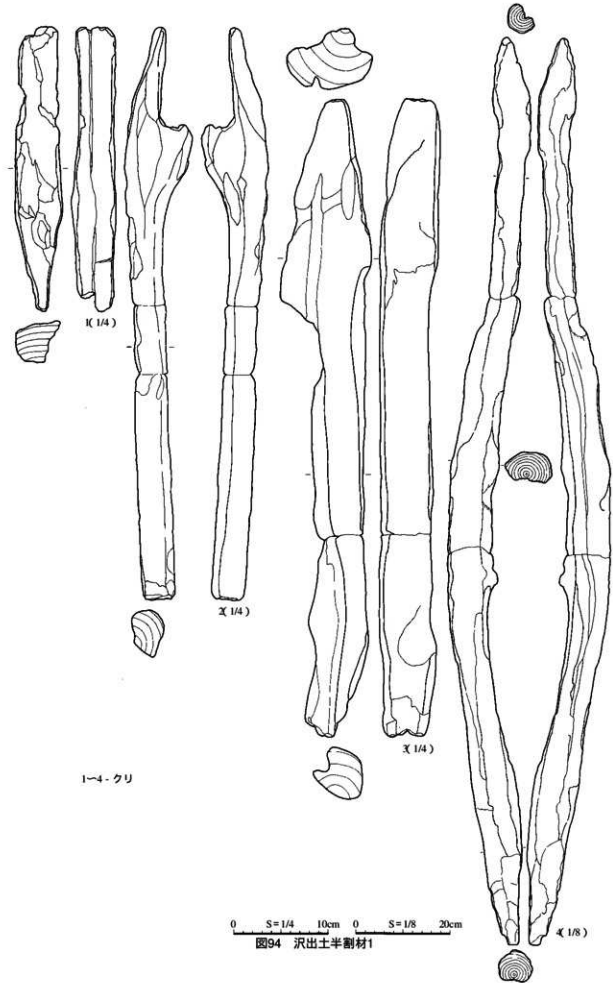
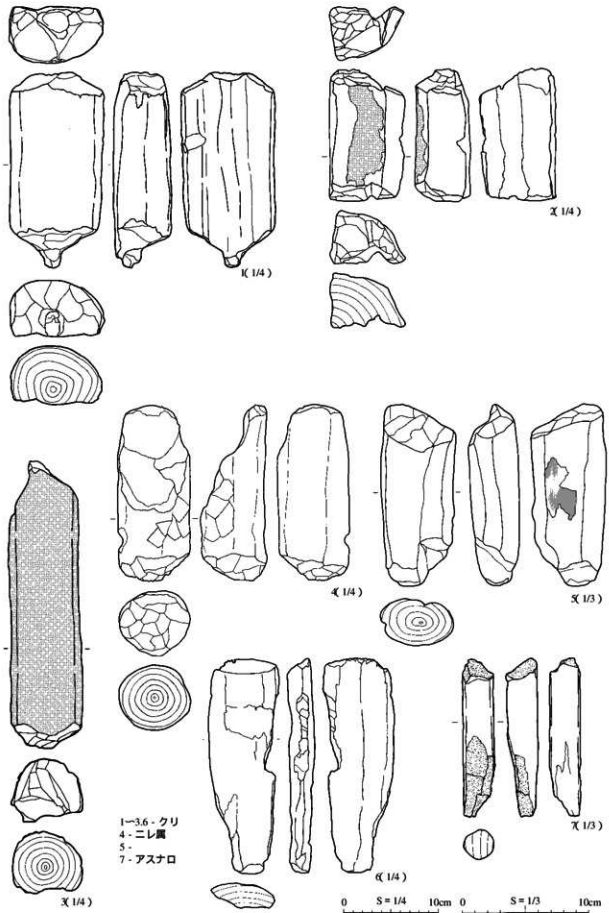


図94 沢出土半割材1



図95 沢出土半割材2



- 1-3.6 - クリ
- 4 - ニレ属
- 5 -
- 7 - アスナロ

図96 沢出土両端切断材

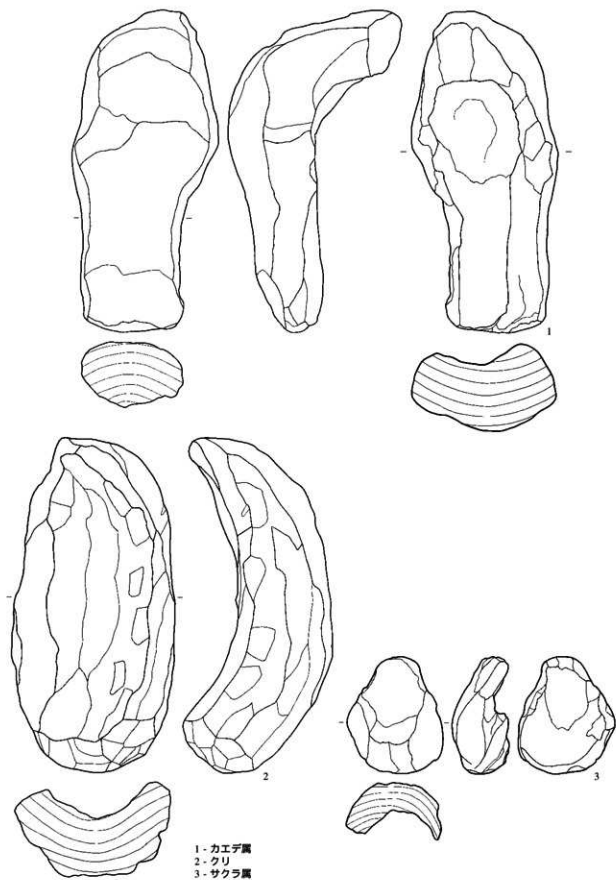


図97 沢出土用途不明加工材1(舟形)

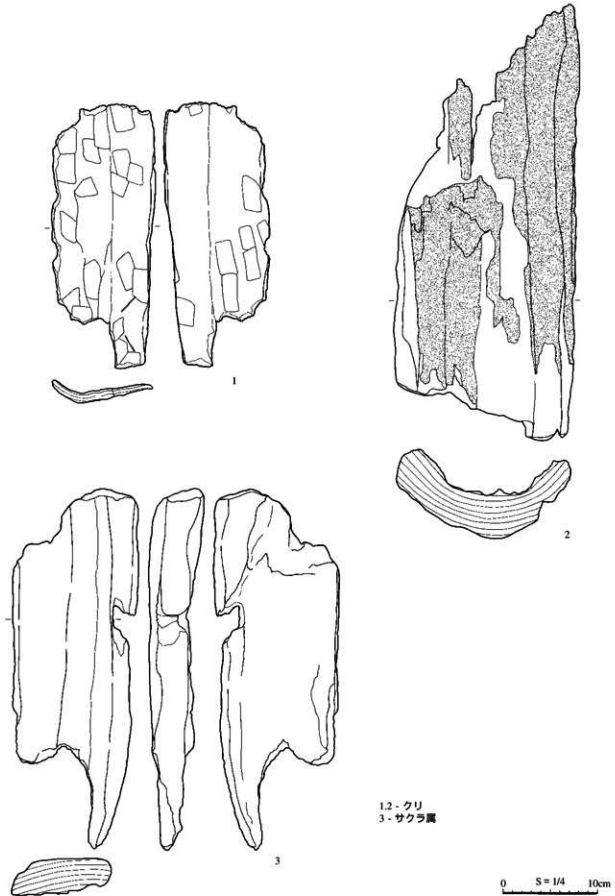


図98 沢出土用途不明加工材2(櫛状、容器片?)

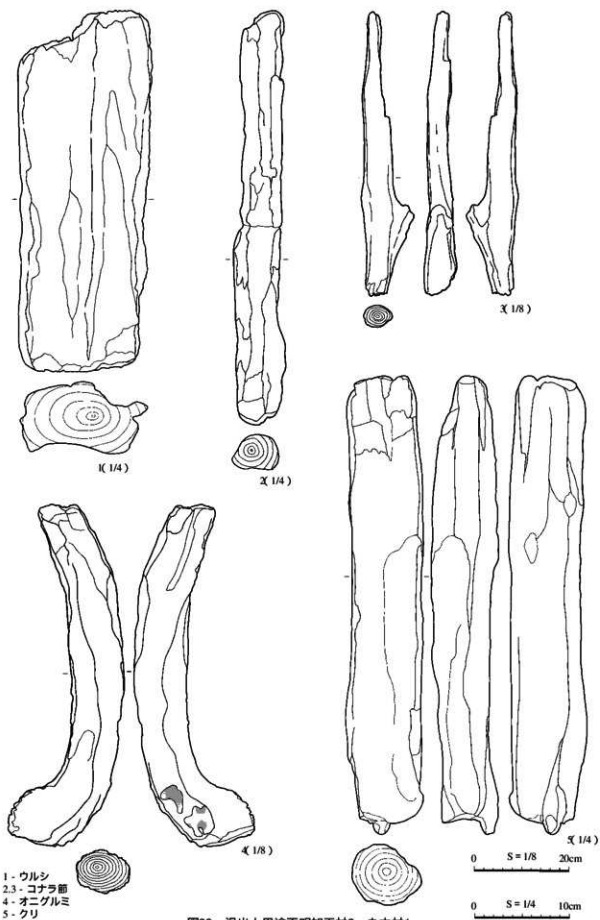


図99 沢出土用途不明加工材3・丸木材1

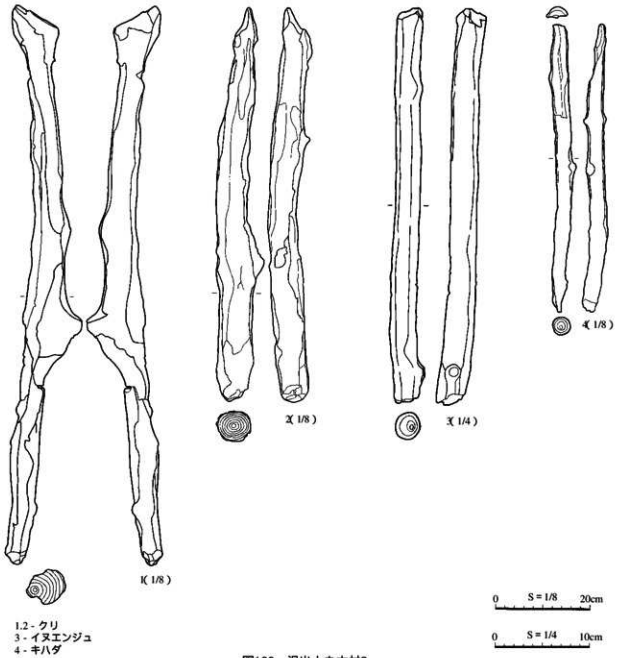


図100 沢出土丸木材2

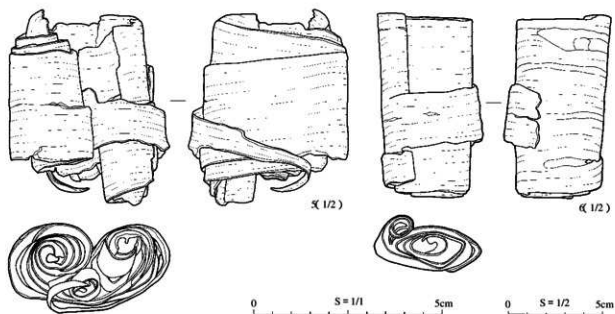
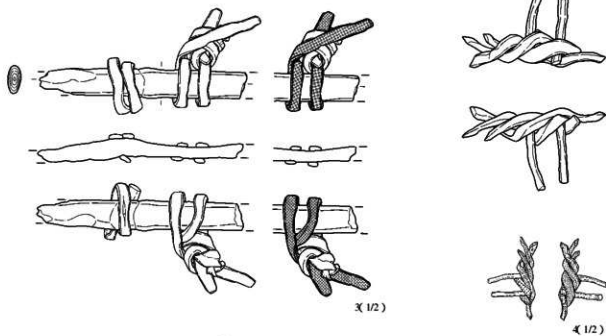
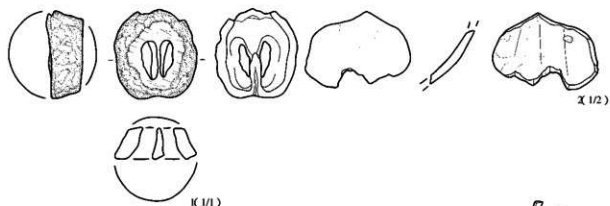


图101 沢出土遺物 樹皮1ほか

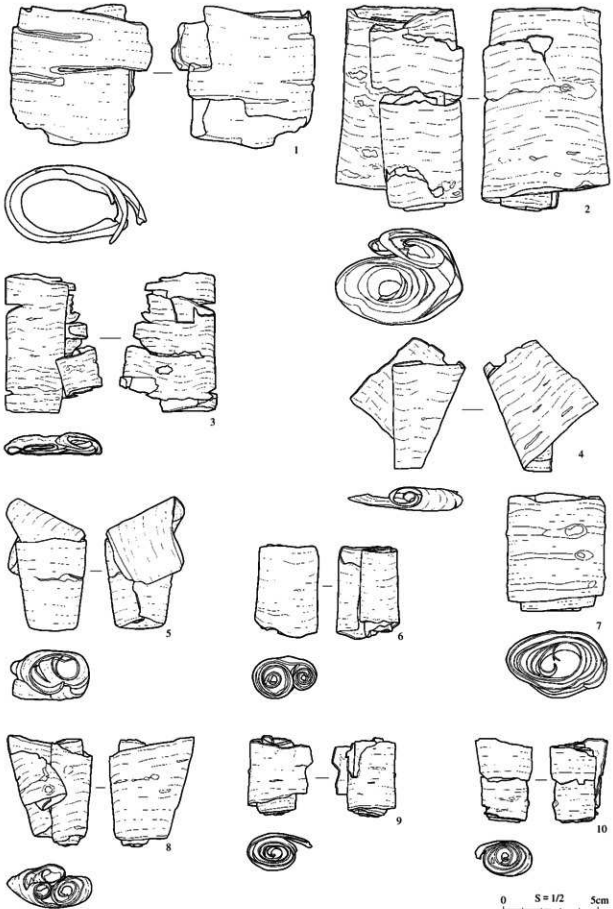


图102 沢出土遺物 樹皮2

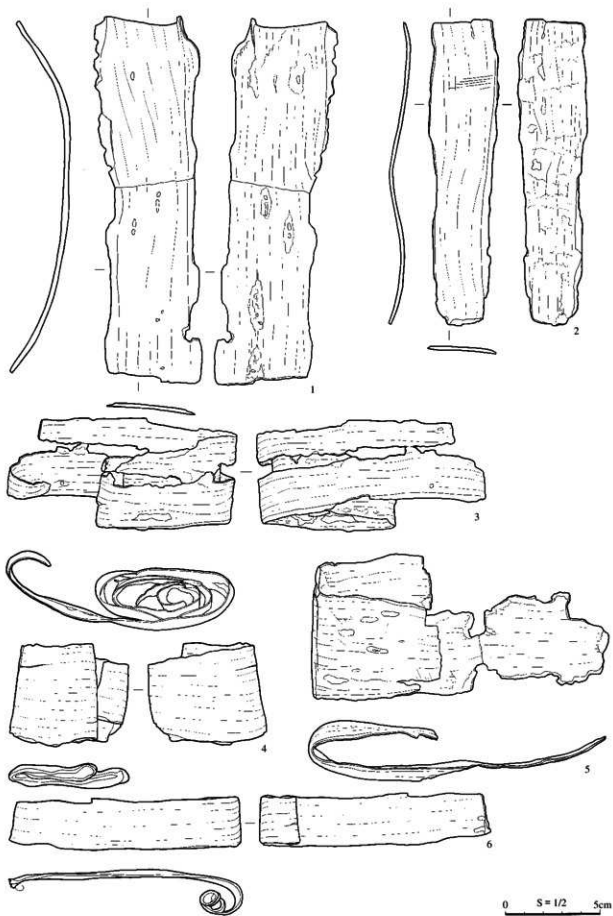


图103 沢出土遺物 樹皮3

2 土器

第1章第3節で分類したとおり、第1群から各群で第1類から記述している。ただし、第1群の図については、沢の包含層の主体をなすことから、各分類でなく、出土層位第A～C層ごとに掲載した。出土層位が複数にわたる場合は上位の堆積土出土層に含めている。記述については他の群と同様、各分類で行っている。第1群、第2群の図には出土層位を図の右脇に示している。

遺物出土状態 土器は主に沢の本流全体で出土しており、とくに下流側のAN59～61の第B層出土のものが多い。

前節の木質遺物とは異なり、土器や石器などの遺物は沢地区全体から出土しており、遺物の出土状況も集落の形成を考える上で重要となってくると思われる。このため、遺物の出土状況等にも簡単に触れたい。

土器は、標高33～35m、東西約32m、南北約10mの幅で埋没沢の堆積土全体から出土している。

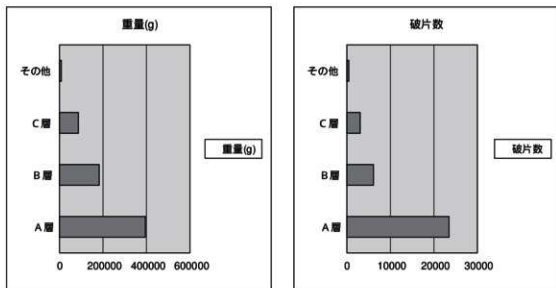
台地上での第1層が主に埋没沢の堆積土の主体であり、大きくA～Cの3層に分層される。A層とB層の間には粗粒砂を主体とした層が堆積し、C層からは砂粒の混入が多くなる。

A層の状況は上流・下流と大きな違いはなく、斜面～斜面際まで多量に出土している。

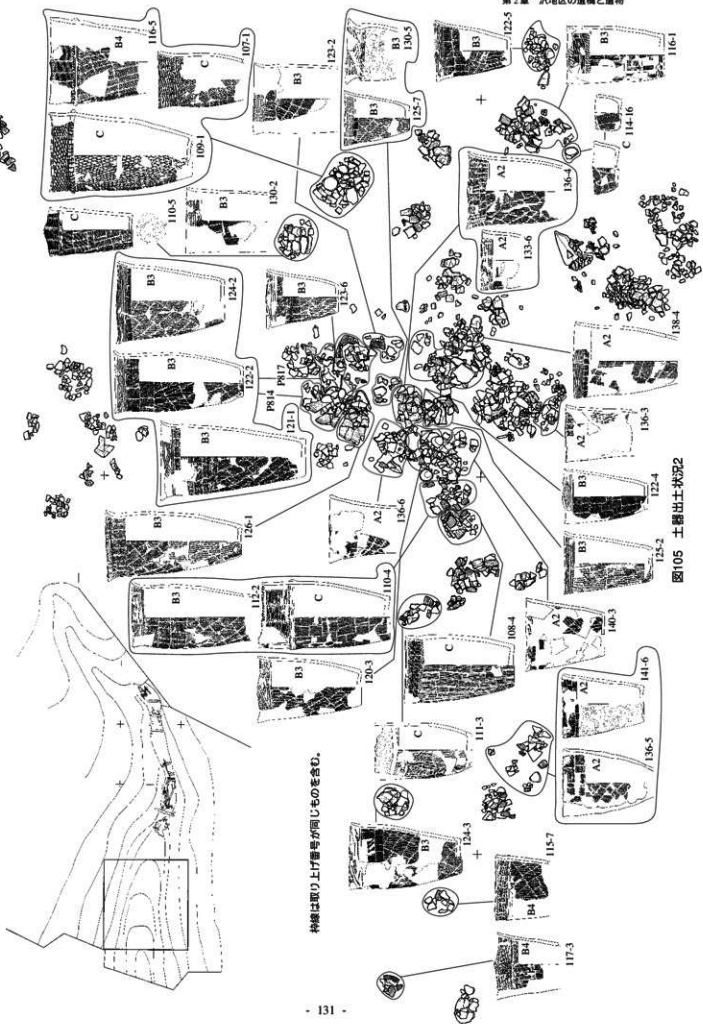
B層はA層について多いが、特定の地区での出土量が多く、上流側のAN54、下流側のAN59・60で特に集中している。とくに、AN59・60付近では他に比べて還元個体が多く出土している(図105)。

C層はA・B層に比べて出土量が少なく、木組遺構とその上流部はさらに少なく、下流側では多くなる傾向がある。第1号木組遺構出土底板から出土した27-1や湧水状遺構付近のほぼ同じ検出面から出土した107-2、114-3がこの層から出土している(図104)。

下のグラフが示すように、A層出土土器は破片数に対する重量が小さく、B・C層は高い。A層が破片化している傾向がある。



沢から出土した土器の重量・破片数



種別は取り上げ番号が同じものを示す。

図105 土器出土状況

第 群土器 縄文時代早期の土器

土器はすべて破片で、32点出土している。出土位置や層位は多様で、遺構掘り上げ土等で沢斜面上部から流れこんできたものや水の流れて移動し、原位置を留めていないものと思われる。部位別の内訳は、口縁部2点、底8部片2点、他28点は胴部片である。外面の色調はにぶい褐色が多く、褐灰色も若干含む。内面は褐灰色・黒褐色など炭化して変色したものが含まれる。器厚は12mm程で、口縁部の106-1が最も薄く、5mm程度である。胎土は石英粒を多く含むものがある。焼成は堅緻である。内面にミガキ調整があるもの106-4・6～8・11・13・16・18がある。これらは縦方向にミガキが入るものが多い。土器は外面文様から、大きく3つのタイプに分けられる。1. 条痕文を施した後、貝殻腫縁文を施すもの、2. 貝殻腫縁文のみ施すもの（磨耗が激しく、条痕文の痕跡が認められないものも含む。）、3. 条痕文のみの施文である。

第 群土器 縄文時代前期の土器

沢出土土器の主体をなす土器群である。第352集で第1類を設定したが出土せず、第2～5類が主体となる。以下のように細別し、各類の特徴を抽出している。

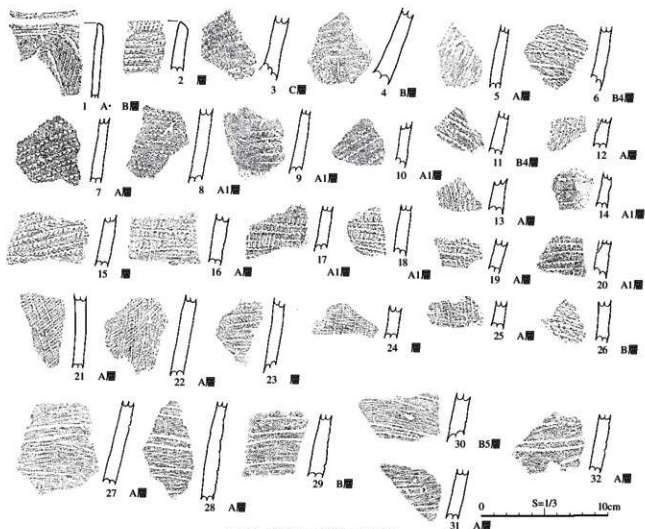


図106 沢出土土器第 群土器

器形

- A類 底部から直線的に立ち上がり、土器の最大径が口縁部にくるもの
- B類 底部から緩やかに立ち上がり、土器の最大径が口縁部及びその下位にくるもの(バケツ形)。
- C1類 底部から直線的に立ち上がり、口縁部文様帯付近で器形の変化点がある。土器の最大径が口縁部及び口縁部下位にくるもの。
- C2類 底部からやや緩やかに立ち上がり、口縁部文様帯付近で器形の変化点がある。土器の最大径が口縁部及び口縁部下位にくるもの。
- D類 底部から直線的に立ち上がり、器形の変化点があり、土器の最大径が胴部上半にくるもの。

口縁部形状

1. 平口縁のもの。 2. 波状のもの。 3. ごく緩い小波状のもの。

口唇部形状・施文

- a 口唇部の上面が平坦で、四角形状になるもの。
- b 口唇部の先端が尖り外反するもの。
- c 口唇部が肥厚し、上面が断面三角形になるもの。
- d 口唇部が肥厚し、上面が丸味を帯びるもの。

文様

口縁部文様

- 回転施文 胴部文様と同じもの 胴部と異なるもの
- 押圧施文

縄文原体 単節、複節、結束、結節

結条体 単1、単2、単4、単5、単6、自縄自巻

文様直下・胴部文様

縄文原体 単節、複節、燃戻し、結束、結節

結条体 単1、単5、単6、多軸、自縄自巻

その他の文様

隆帯 微隆帯

刺突 沈線

以上の細別から第2～5a類までの特徴は以下のとおりである。

第2類 器形Cで、口唇部形状aの土器群で、口縁部に結条体を回転施文するものが大半である。

第3 a類 器形Aで、口唇部aの土器群で、口縁部に絡糸体を回転施文するものが大半である。太隆帯が貼り付けられるものもある。

第3 b類 器形Bで、口唇部aの土器群で、口縁部文様帯に絡糸体を回転施文、縄文原体を押圧するものが大半である。隆帯が貼り付けられるものもある。

第4類-1 器形C・Aで、口唇部bの土器群で、口縁部文様帯に縄文原体を回転施文するか絡糸体・縄文原体を押圧するものが大半である。

第4類-2 器形C・Aで、口縁部文様帯に結束縄文を回転施文するもので、器形の変化点に縄文原体を押圧するものも見られる。

第5 a類 器形A・B、口唇部dの土器群で、口縁部文様帯幅が第4類よりも狭く、縄文原体を回転施文するか絡糸体・縄文原体を押圧するものが大半である。微隆帯が貼付けられるものや内面に丁寧なミガキが入るものもある。

第2類 円筒下層a式（C層107-1、破片114-12）器形はおよそCで、胴部中央付近で最大径がくる。口縁部文様帯境界付近から上部は緩やかに外反する器形である。口縁部に結節回転文を施文している。

第3 a類 円筒下層b₁類（C層107-2～5、108-4、109-2、破片113-9・10、B層115-1～7、117-4、破片131-6・7、A層132-1・2）器形はおよそAで、口縁部に最大径がくるものが多い。Cのようにやや外反するもの（115-1・5・7）もある。

口縁には四波状、二波状、平口縁がある。口唇部形状はa基調で、やや角のとれ丸味を帯びたものが多い。口縁部文様は結節、単軸絡糸体第1・5類の回転施文で、文様の区画には隆帯を用いるものもある。隆帯上には大きめの円形刺突を施文するもの（115-1・132-1）縄文原体を斜めに押圧施文するもの（107-2、115-4）隆帯の上下に施文するもの（115-5）がある。胴部は複節縄文を横位回転施文しているものが多い。

第3 b類 円筒下層b₂式（遺構27-1、C層108-1～3、109-1・3～5、110-1～6、111-1～6、破片113-5、B層115-8、116-1～5、117-1～3・5～8、118-4・5、119-1、破片131-1～5・8・10～12、A層132-3～7、133-1・2・4・5、層143-4）

器形はおよそB基調で、胴部上半に最大径がくることが多い。口唇部形状はaが多い。口縁端部をつまむようにして外側に屈曲している116-1もみられる。

口縁は波状口縁のものが多く、四波状のものが最も多い。

口縁部文様帯は第3 a類と比べると広く、単軸絡糸体第1類を横位回転施文するものが多い。ついで、単軸絡糸体第6類を横位回転施文するものが多い。施文後、縄文原体を押圧して文様を施文するものもみられ、最も多い施文方法は口縁部直下・口縁部文様帯境界付近（隆帯上部）に各一条ずつ縄文原体を側圧するものである。これに、波頂部もしくは口縁部から垂下する2条の縄文原体施文が加わる場合がある。この縄文原体は複節が圧倒的に多い。その他、口縁部に回転施文する縄文は単軸絡糸体第4・5類、複節縄文（117-8）などである。胴部の縄文施文が口縁部に残っている場合もあり

(115-6、117-3・5、132-5) 胴部文様施文後に口縁部文様の施文が行われていると思われる。

隆帯を貼付けるものが多く、太い隆帯の上面に複節を側面圧痕するものが多く、横に施文するもの、隆帯上面をまたがせて縦に施文するもの、斜めに施文するものが見られる。複節に次いで多いのが、単軸結糸体第1種を施文するもので、横位に回転施文するもの、側面圧痕による施文などがみられる。これ以外の施文として、32-4では隆帯上に縄文原体端部の刺突が円形に施文されている。隆帯上面と側面に沈線が施文されるもの(132-5) 円形刺突が施文されるもの(110-4)もみられる。

胴部は複節を横回転するもの、単軸結糸体第1種を縦回転するものの2種類が多く認められる。この他に複節縄文を斜回転するものもみられる。

111-1は口縁部文様帯に結束縄文を回転施文するが、器形の形状や隆帯がみられることからこの類に含めた。

第4類 円筒下層c式(C層112-1~4・113-1~3、 B層119-2~4、図120~126、破片131-13~19・23、 A層133-3・7、134-1~4、135-1~7、136-1・2・4、・層143-1)

第4類-1 器形Cで、胴部上半から中央に最大径をもち、口縁部文様帯境界付近でくびれ、外反する器形である。明瞭な変化点を持つ土器は復元個体の三分の一程度である。Aの器形も三分の一程度見られ、胴部中央がややふくらむものの基本的には口縁部に最大径がくる器形である。

口縁部はほとんどが四波状である。この中には緩い小波状も多数含まれる。

口縁のくびれが第3b類よりも大きく、口唇部形状は全体的にbが多い。口縁端部が先細りになり外反している。いずれも口縁部文様帯直下の胴部上半には結束縄文を施文し、下半には単節・複節縄文を斜回転して施文している。口縁部文様は幾何学文で施文される。

- 1 口縁部から垂下する文様をもつもの(119-2~4、134-1)
- 2 菱形文を施文するもの(112-2・4、120-4、121-2、134-2、143-1)
- 3 三角形文の内部を左右対称的に短い縄文原体で充填するもの(120-1~3・121-1・5、122-1・2、135-1~3)
- 4 三角形文の内部を三角形の下辺と平行に施文し充填させるもの(112-3、121-4・122-3~5、123-1~7、134-3・4、135-4)
- 5 直線的に施文されるもの・文様の変化点が見られないもの(124-1~4、125-2・5~7、135-5~7)

第4類-2 口縁部に結束縄文を横回転するもの(112-1、125-1・3・4、126-1~4)

結束縄文の施文の他に、横位に縄文原体を押圧するものも見られる。

用いる原体は単節縄文が最も多い。B層130-3は口縁部が欠損しているが、口縁部付近の個体と思われるため、この類に含めた。

胴部は結束縄文を上半部に施文し、下半部に縄文原体の斜回転を施文するもの、1種類の縄文原体のみを斜回転するもの、3種類の縄文原体を使用するものなどが見られる。1種類の縄文原体で多いのは複節縄文で、ついで単節縄文である。ほかに撚り戻しも見られる。底外面の文様は全く見られない。

第5a類 円筒下層d1式(C層113-4、破片113-8、 B層127~129、130-2・7、 A層133-6、137~142-2、破片142-8~10、・層143-2・3・6)

第 5 a 類 - 1 底径が大きく、器形 B・D が主体である。底部からややカーブするように立ち上がり、内湾するもの、やや外側に開くものが見られる。口唇部形状は e・d 主体である。器内面は丁寧に磨かれている。器壁は厚い。口縁部文様帯は狭く、微隆帯で区画するものも見られる。口縁部直下に結束縄文・結節回転文が回転施文される。第 4 類と比較して、その幅は口縁部直下に限定される。器形 B で、底部から曲線的に緩やかに立ち上がる。口唇部形状は d で、口縁端部が内側に向かって斜めになる形状である。

口縁部文様帯は狭く、幾何学文を施文する。幾何学文は菱形状文、三角形文がみられる。第 4 類と異なるのは、幾何学文の頂部に縦に施文されることが多くみられることである。また、絡条体の回転施文やさまざまな縄文原体を押押し、バリエーションに富む。胴部下半の縄文は単節縄文の斜回転がみられるが、これと結束縄文が交互にくるよう組み合わせたもの、複節縄文を使用しているものもみられる。

第 5 b 類 円筒下層 d 式 (C 層破片 113-7、 B 層 130-5・6、 A 層 142-4、破片 142-11、
・ 層 143-7) 130-6 は底部から真っ直ぐに立ち上がり胴部下半から緩やかに立ち上がる。波状口縁で、口縁上端は平坦に面取りされている。142-4 は底面上部から緩やかに立ち上がり、肩部で内曲し、その上部で破損している。おそらく、破損面から上部の口縁部付近は大きく外反している器形と思われる。胴部全体に単軸絡条体第 1 A 類を縦に施文している。口縁部が大きく外反する土器として 130-5 がみられる。口縁部と肩部の境が明瞭で、屈曲する部分に刺突がみられる。口縁は平口縁で、口縁部文様帯には菱形状の文様が施文される。

第 6 類 口縁一胴部の土器 (C 層 118-1~3、破片 113-6、 B 層 130-1・3・4、136-3・5・6)
上記の第 2~5 類に相当するもので、器面の摩耗や破損により類型を特定できないもの一群である。第 3 類に相当するもの (118-1~3) 第 4・5 類に相当するもの (130-1・3・4、136-3・5・6) などがある。

第 7 類 胴一底部の土器 (C 層 114-1~11、 B 層 131-9・20、 A 層 142-3・5・12、
・ 層 143-5) 底外面を施文するもの 縄文が回転施文される一群である。単軸絡条体のもの、縄文原体のものの施文があり、一方向に施文するものと施文方向を変えるものがある。施文後に底外面の縁に沿って粘土を薄く貼付けるものもある (114-1・2・9)。

台付きのもの 142-3・5 は胴部下半まで縄文が施文され、底外面はナデ調整のみ施される。

赤色顔料が塗布されるもの 1 点出土した。器面の摩耗が激しいが、胎土や調整から縄文前期の土器に相当する。器外面のみ塗布される。

第 9 類 その他 (鉢形土器 C 層 114-16、 A 層 142-13、小型土器 C 層 114-13~15、17~19、
B 層 131-21・22、24・25、A 層 142-6) ここでは、鉢形土器、器高の低い土器 (いわゆるミニチュア土器) を扱う。

浅鉢形土器 2 点出土した。どちらも完形で、114-16 は若干外側に広がるもののほぼ垂直に立ち上がる。器面は内外面ともやや凹凸がある。口唇部形状は丸味を帯びた a 形状である。142-13 は底面から外側に開くように立ち上がり、口唇部形状は a で上端面を面取りしている。口縁直下に一カ所補修孔

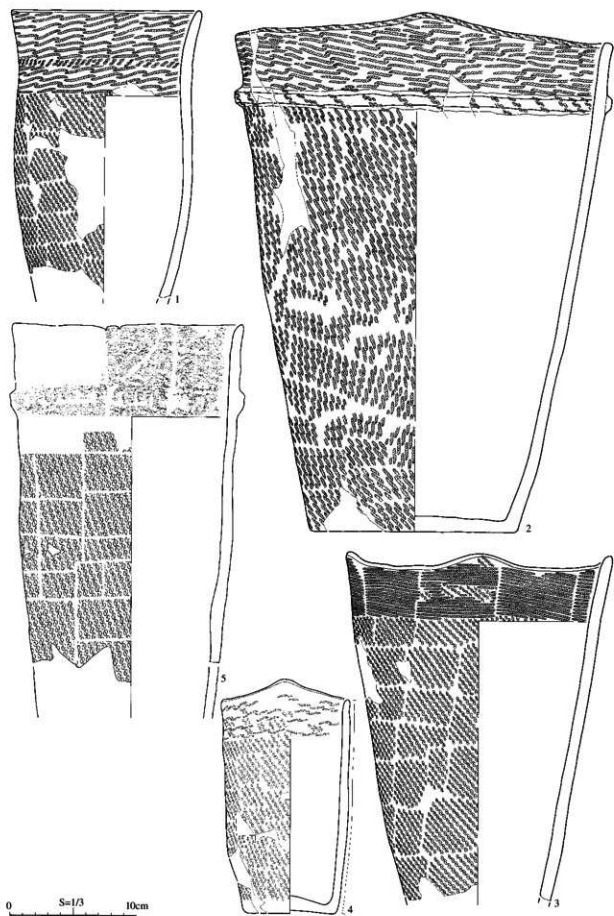


図107 沢出土土器C層1（第 群土器）

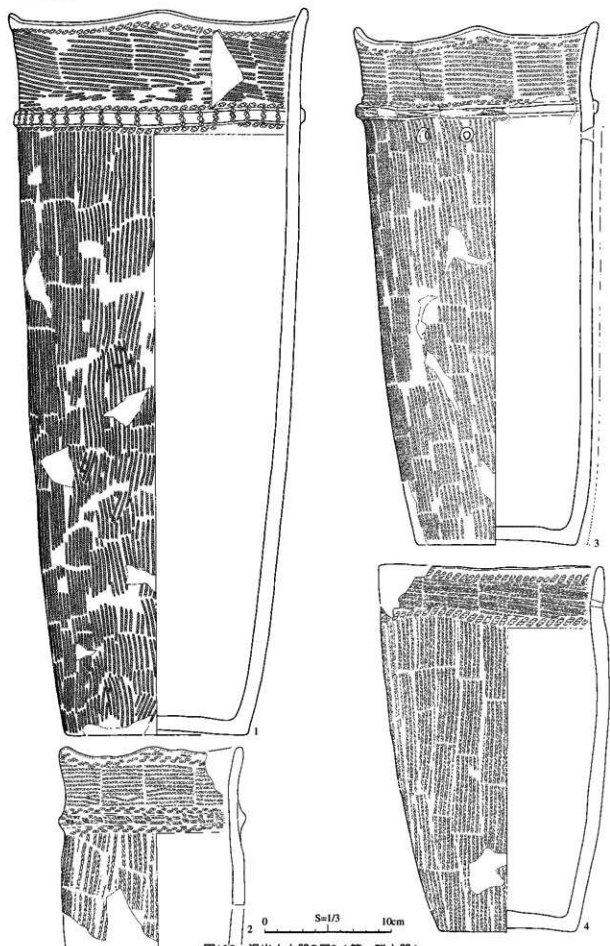


図108 沢出土土器C層2（第 群土器）

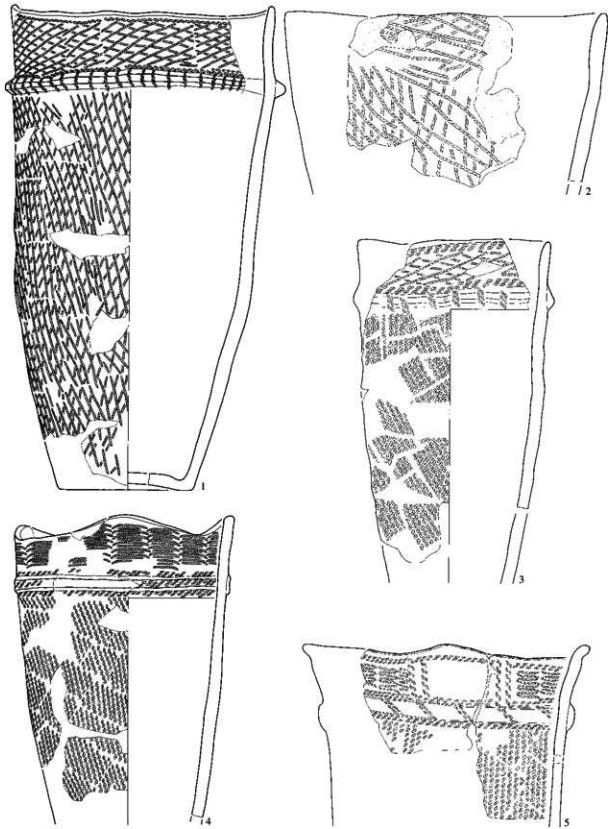


図109 沢出土土器C層3 (第 群土器)

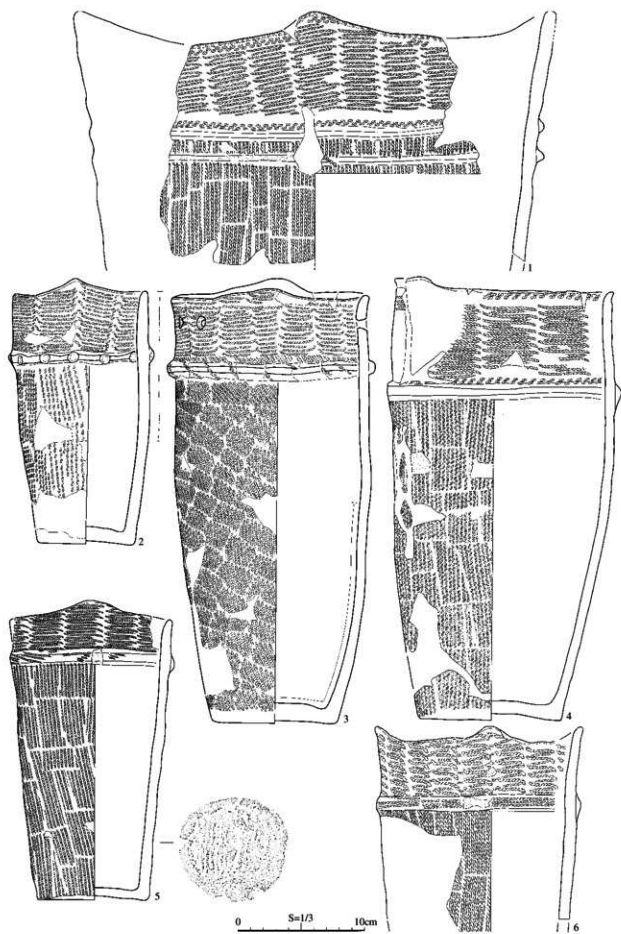


図110 沢出土土器C層4(第 群土器)

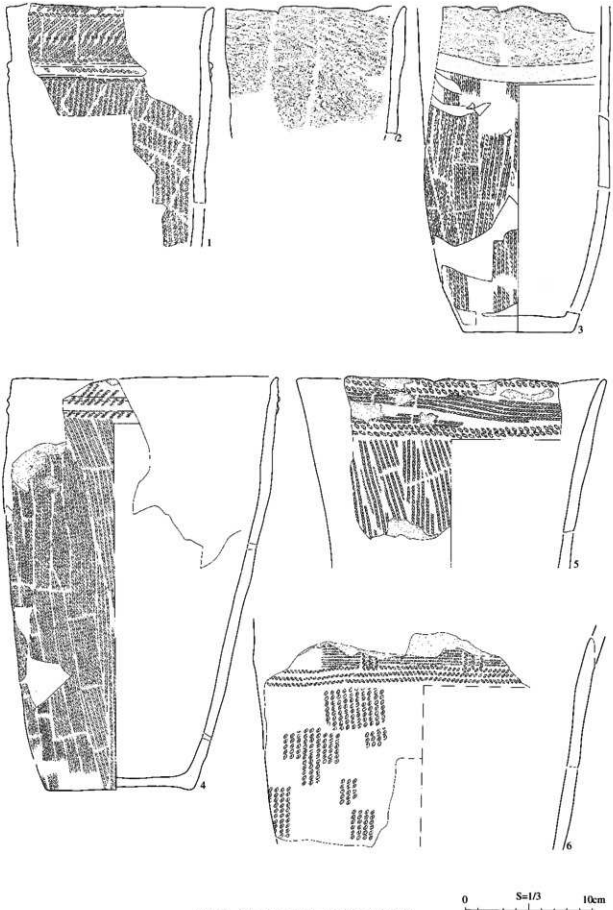


図111 沢出土土器C層5(第 群土器)

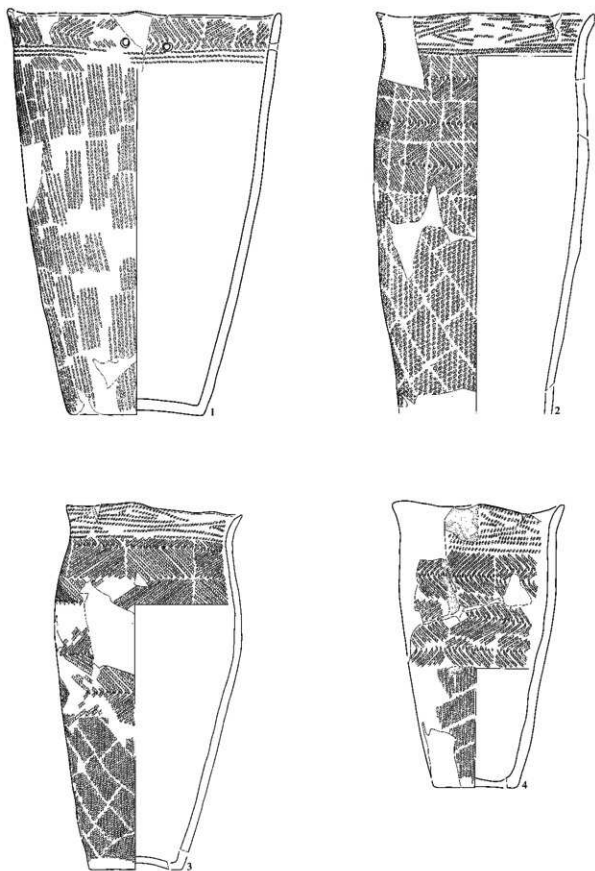


図112 沢出土土器C層6(第 群土器)

0 S=1/3 10cm



图113 沢出土土器C層7(第 群土器)

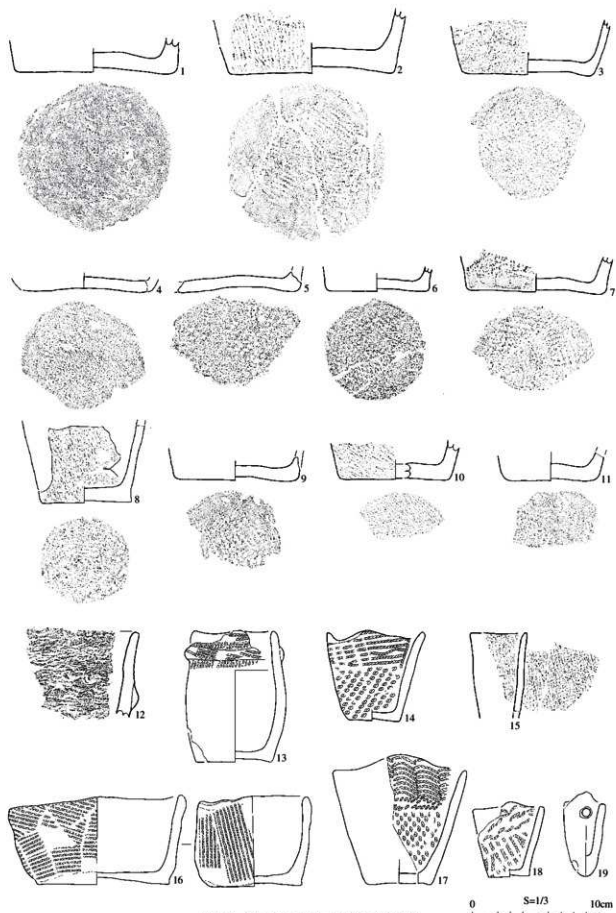


図114 沢出土土器C層8(第 群土器)

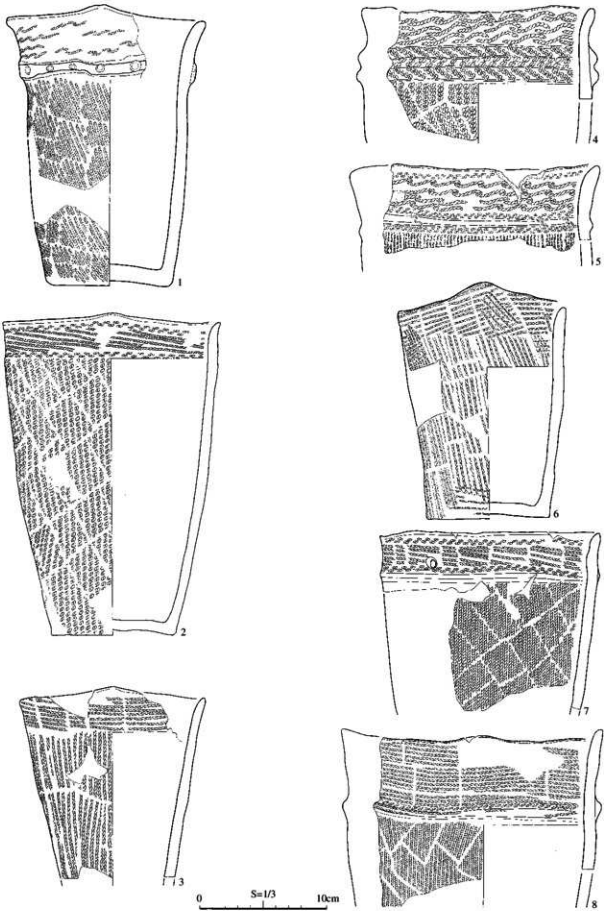


図115 沢出土土器B層1 (第 群土器)

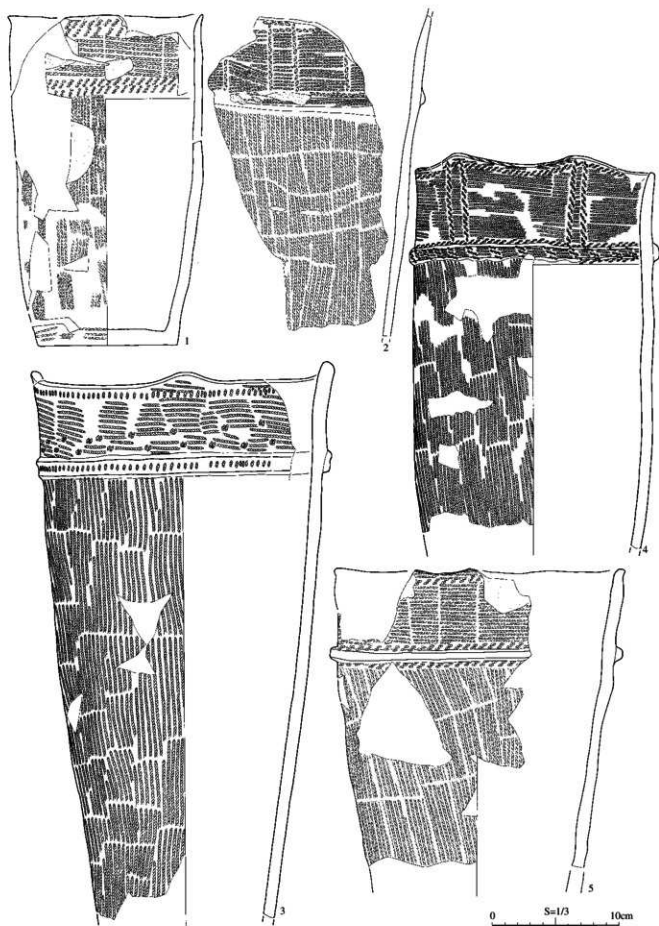


図116 沢出土土器B層2(第 群土器)

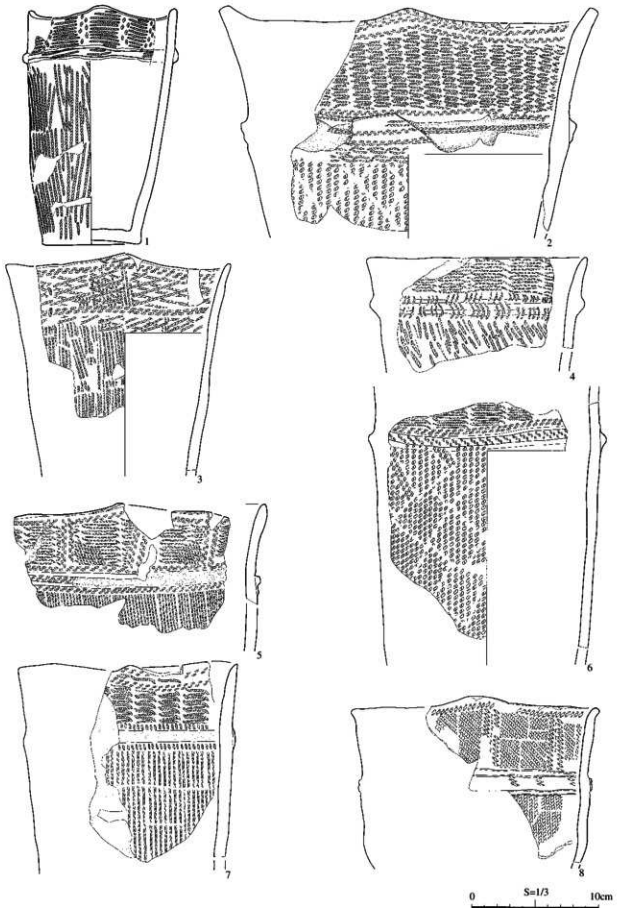


図117 沢出土土器B層3（第 群土器）

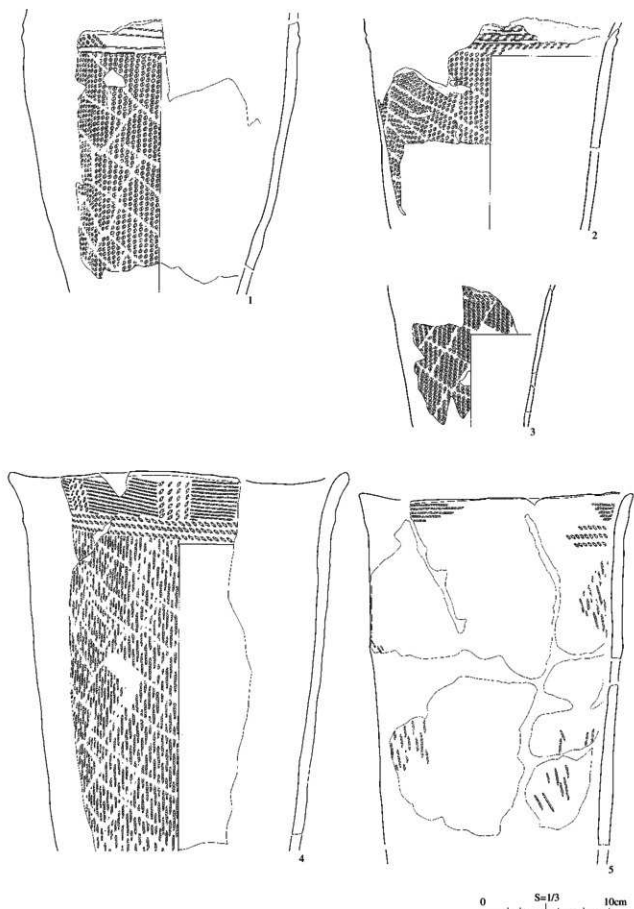


図118 沢出土土器B層4(第 群土器)

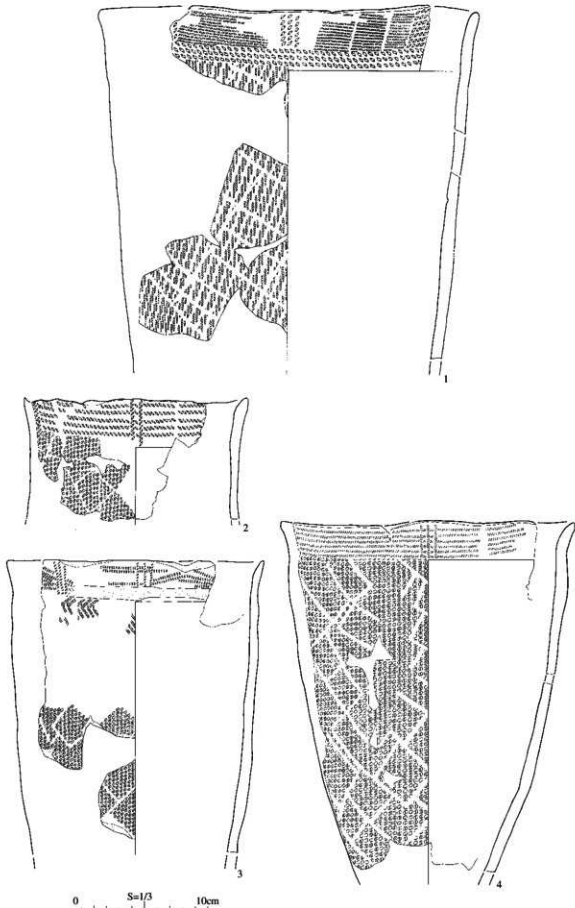


図119 沢出土土器B層5(第 群土器)

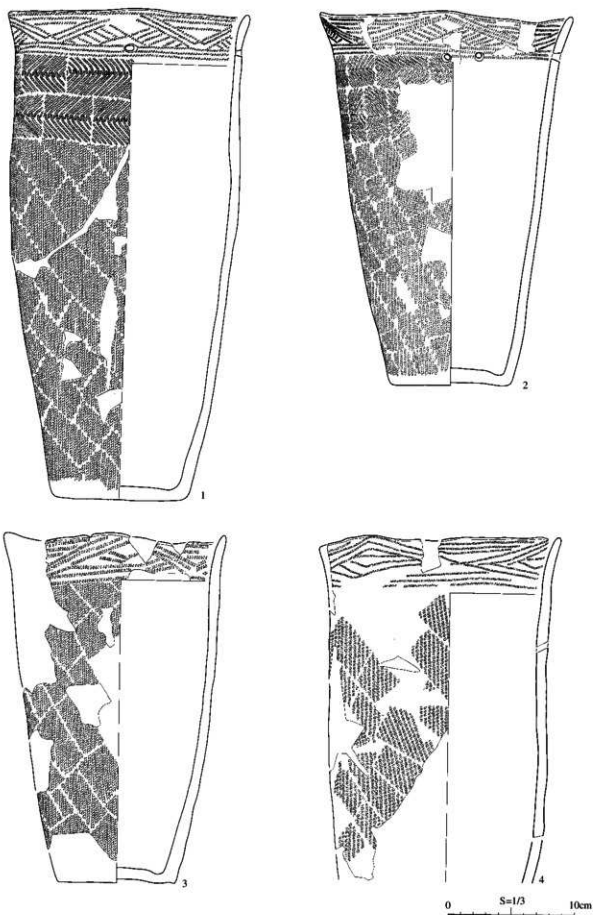


図120 沢出土土器B層6(第 群土器)

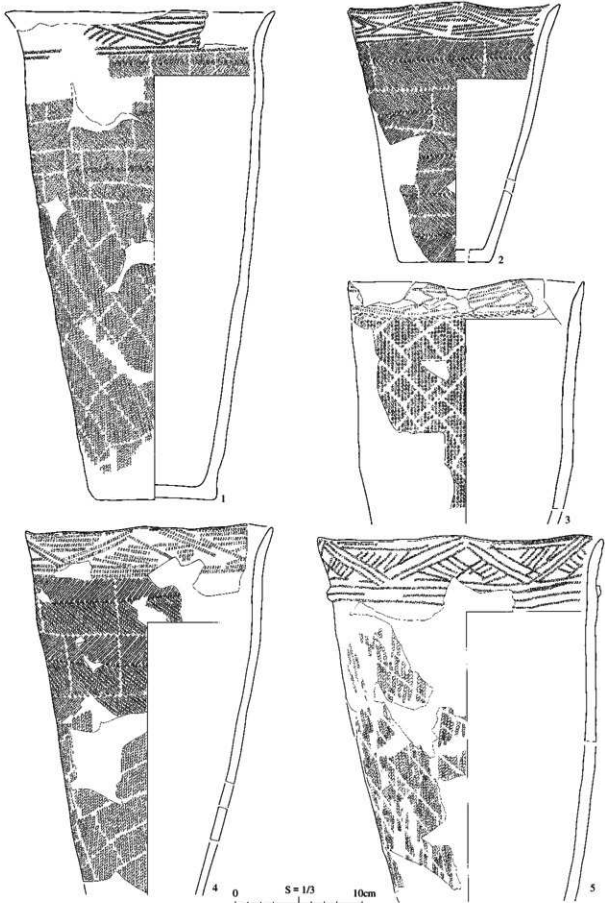
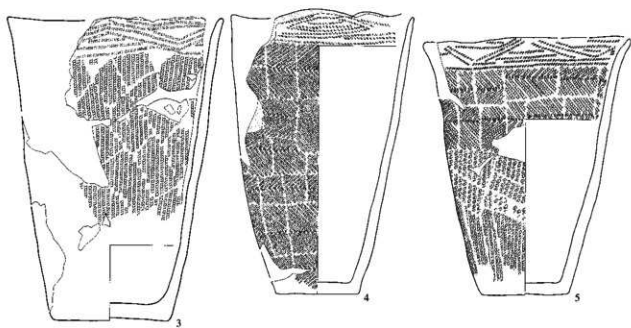
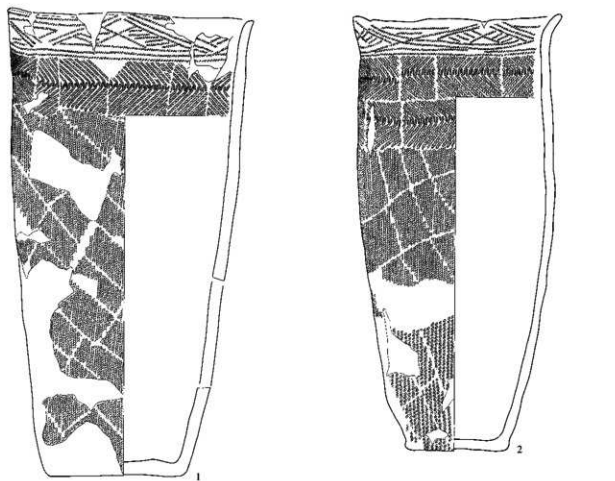


図121 沢出土土器B層7(第 群土器)



0 S = 1/3 10cm

図122 沢出土土器B層8(第 群土器)

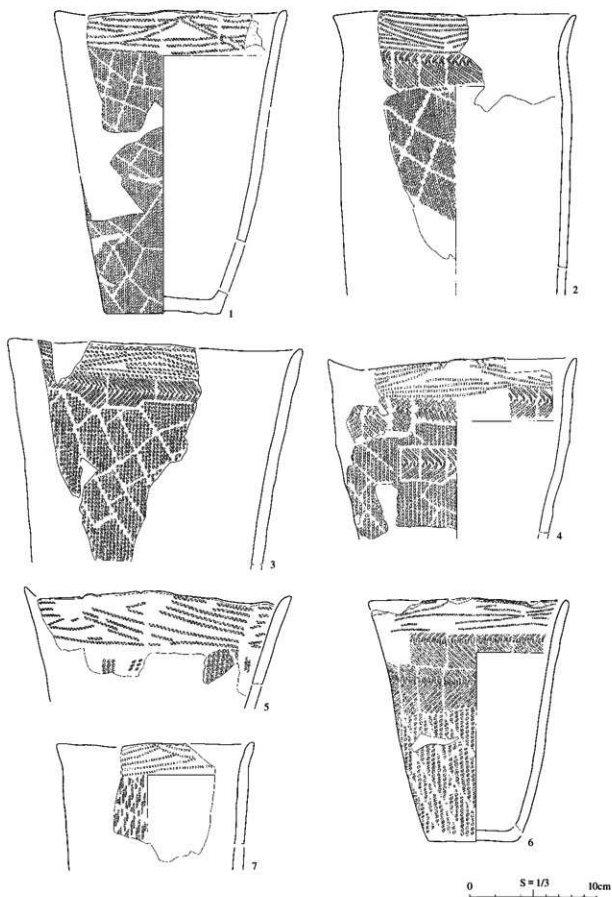


図123 沢出土土器B層9(第 群土器)

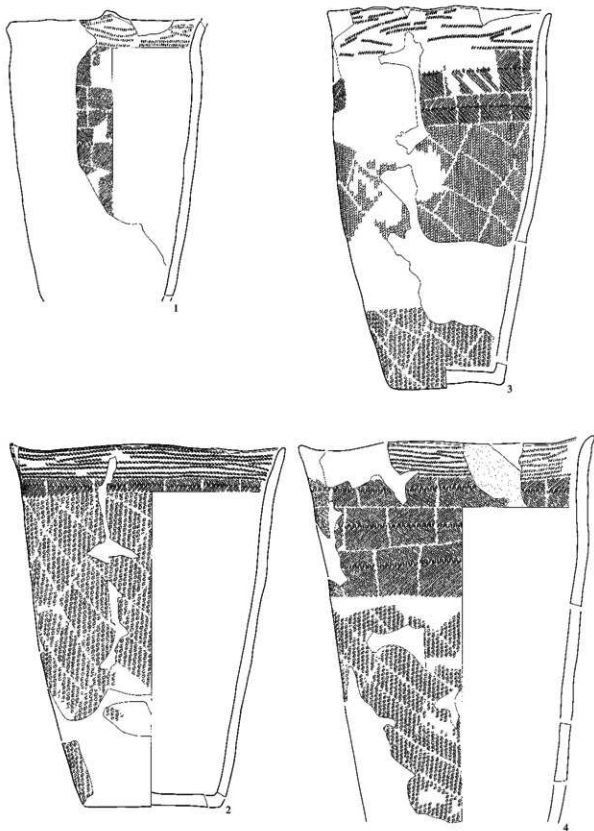


图124 沢出土土器B層10 (第 群土器)

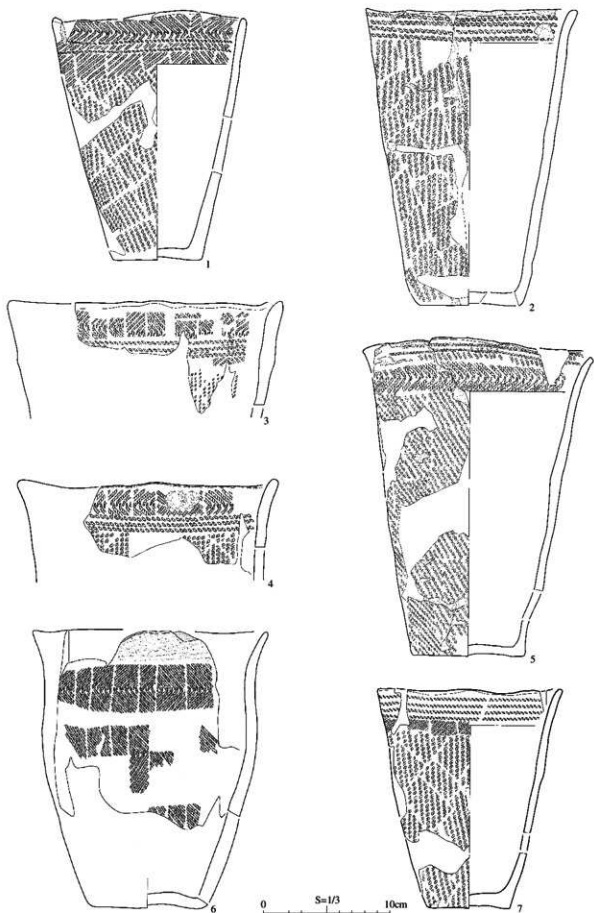


图125 沢出土土器B層11 (第 群土器)

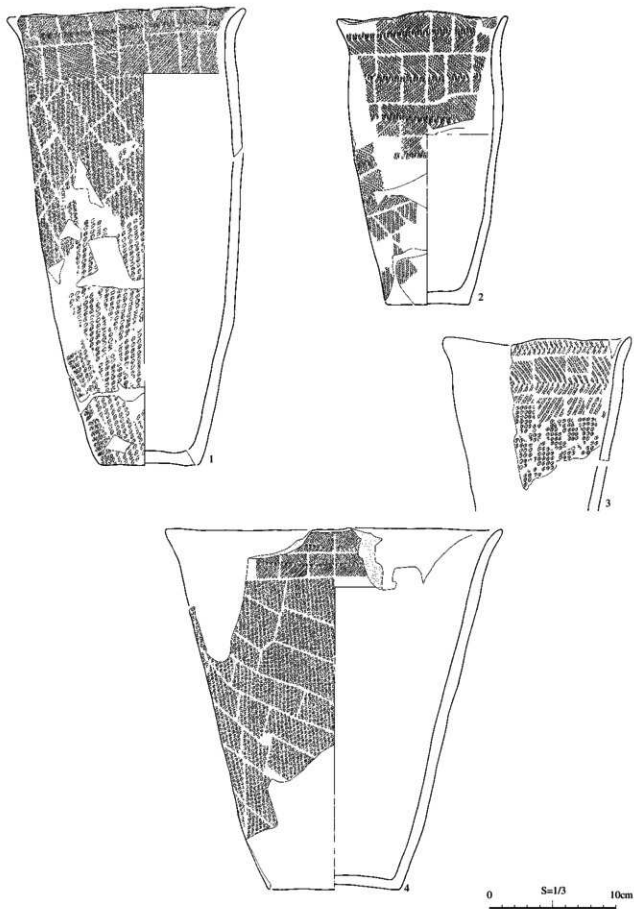


图126 沢出土土器B層12 (第 群土器)

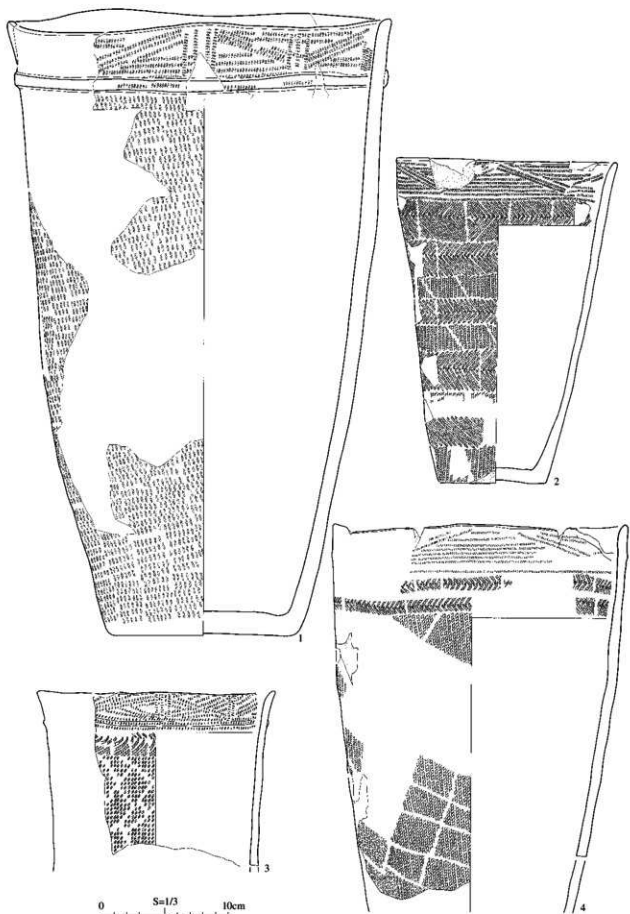


图127 沢出土土器B層13 (第 群土器)

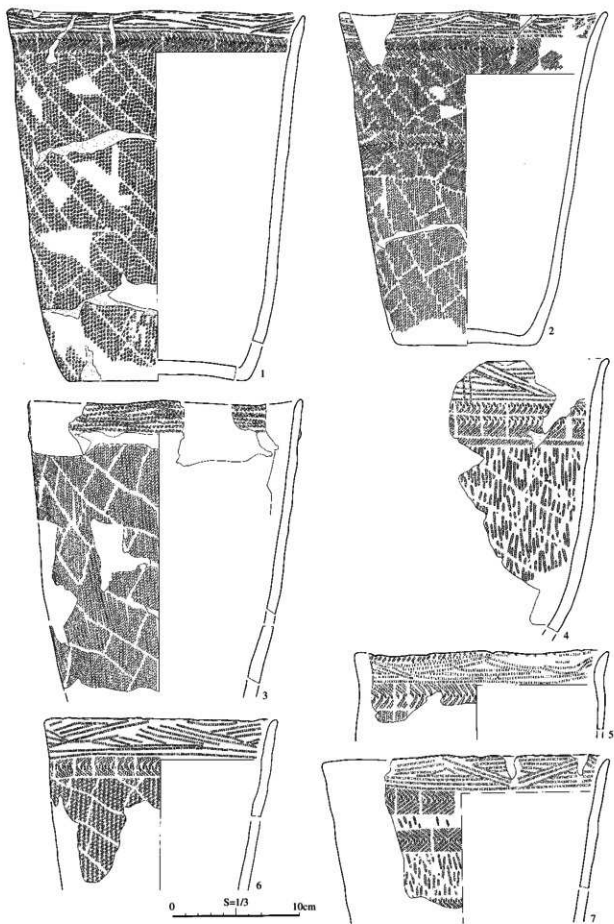


图128 沢出土土器B層14 (第 群土器)

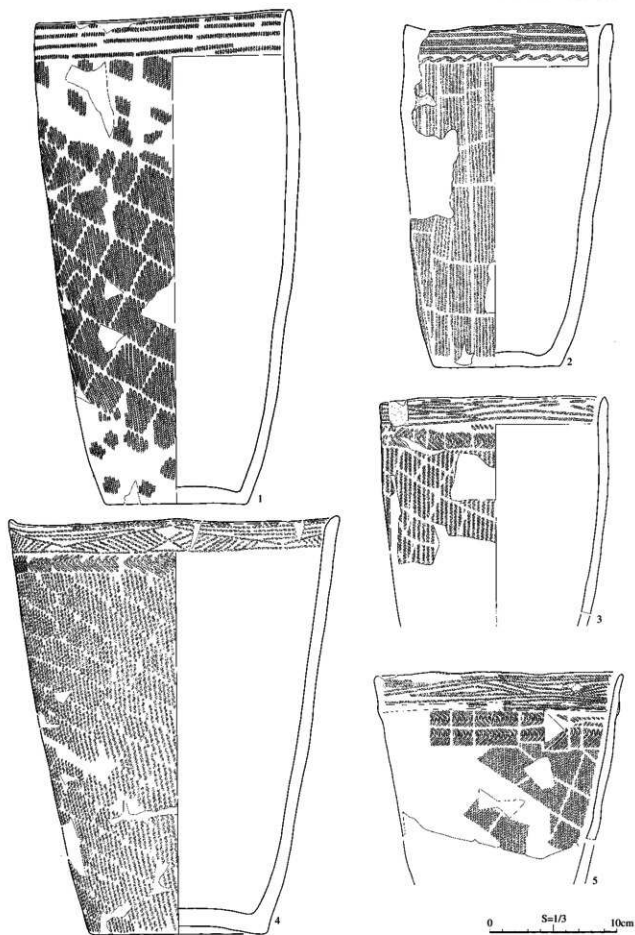


图129 沢出土土器B層15 (第 群土器)



图130 沢出土土器B層16 (第 群土器)

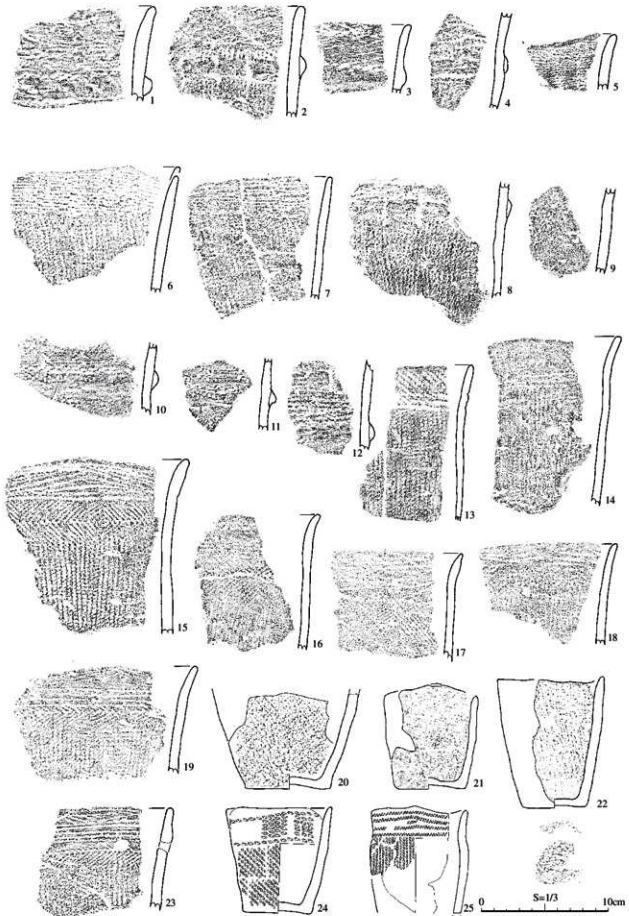


图131 沢出土土器B層17(第 群土器)

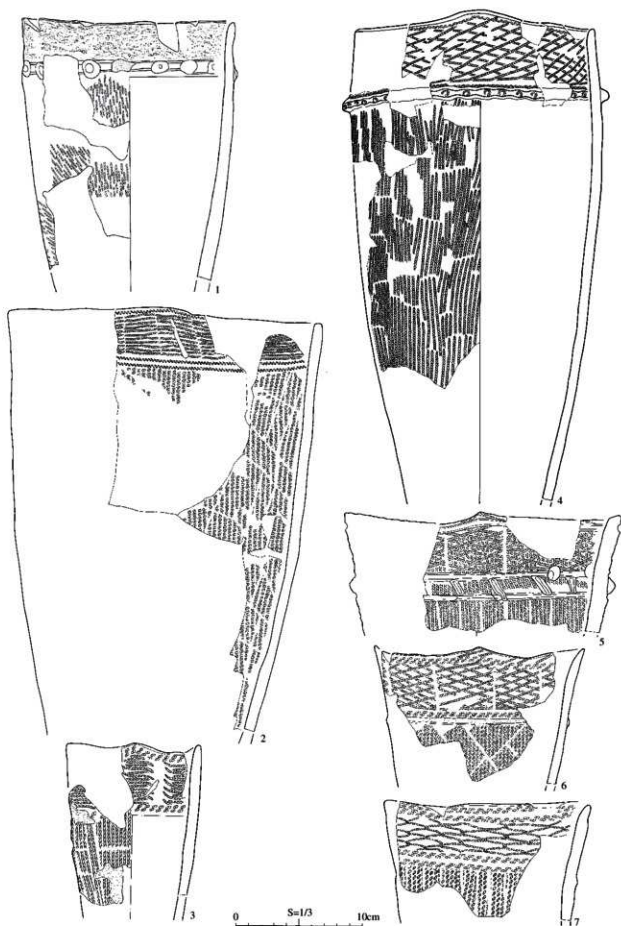


図132 沢出土土器A層1(第 群土器)

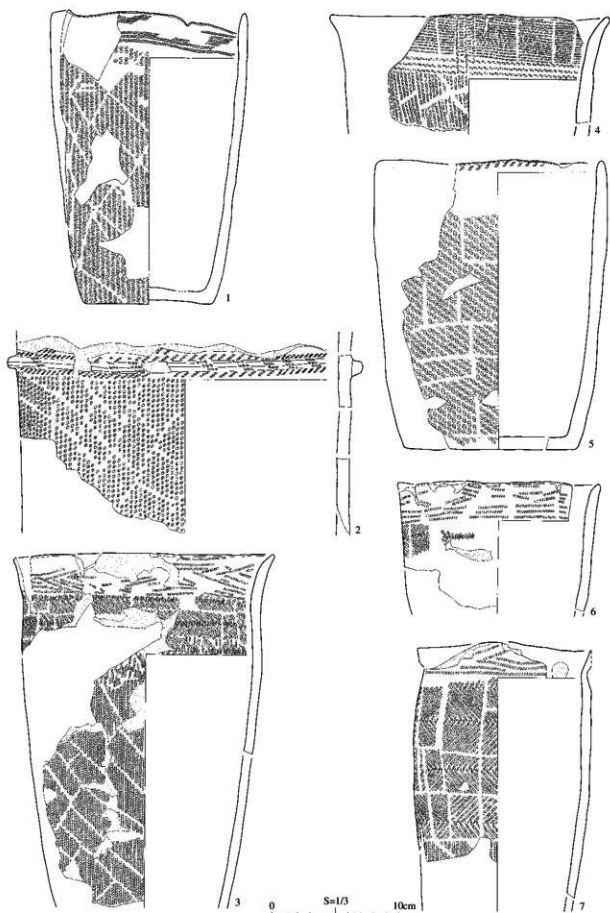


図133 沢出土土器A層2(第 群土器)

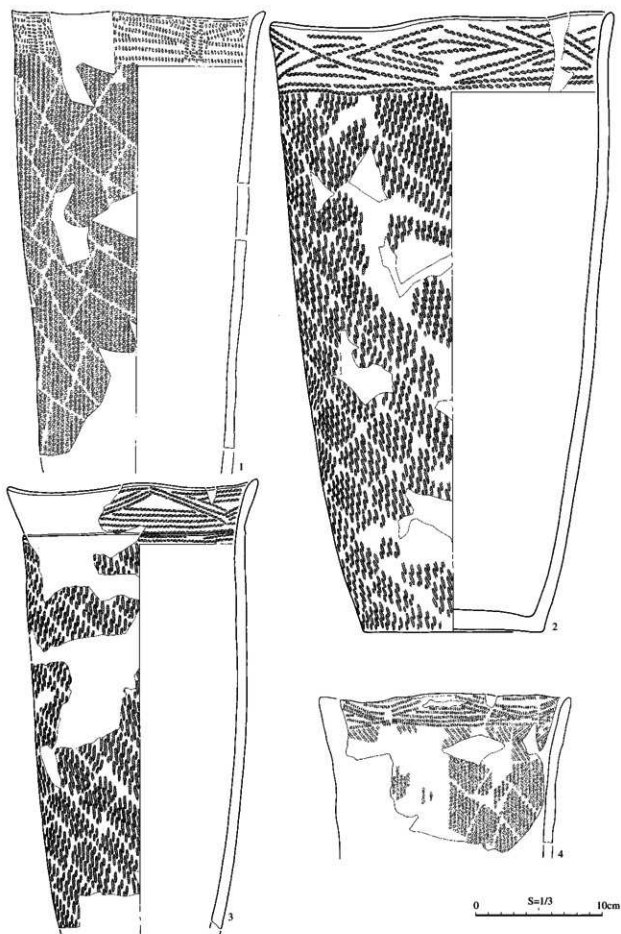


図134 沢出土土器A層3(第 群土器)



図135 沢出土土器A層4(第 群土器)

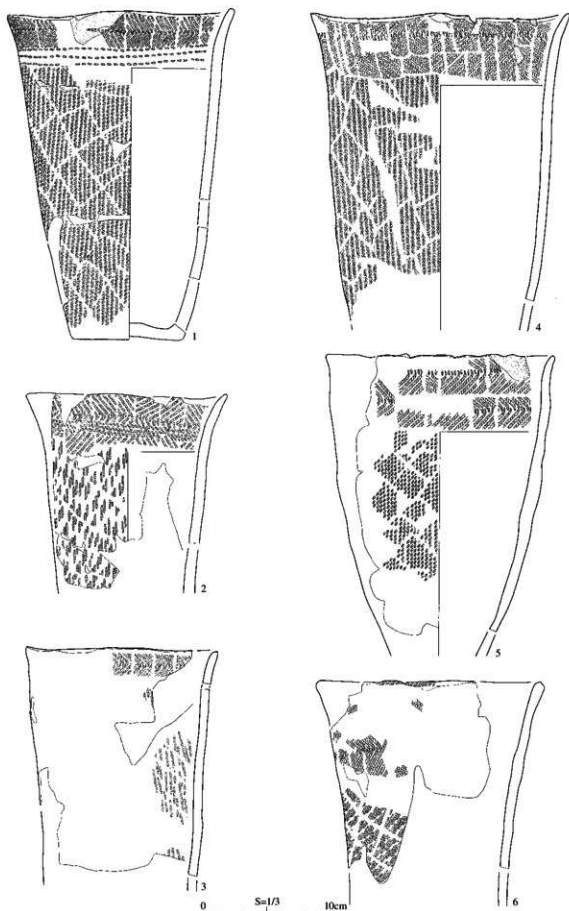


図136 沢出土土器A層5(第 群土器)

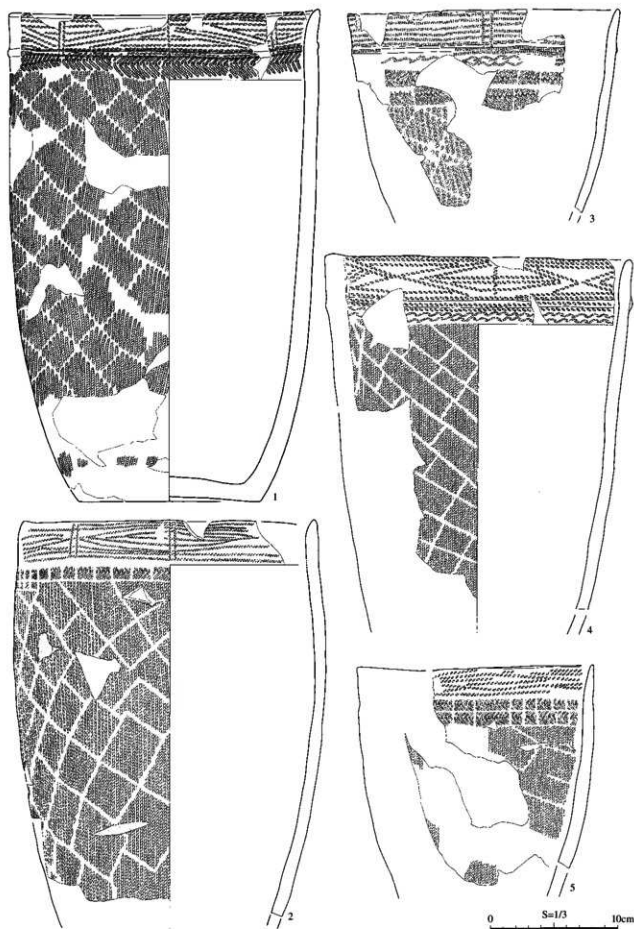


図137 沢出土土器A層6 (第 群土器)

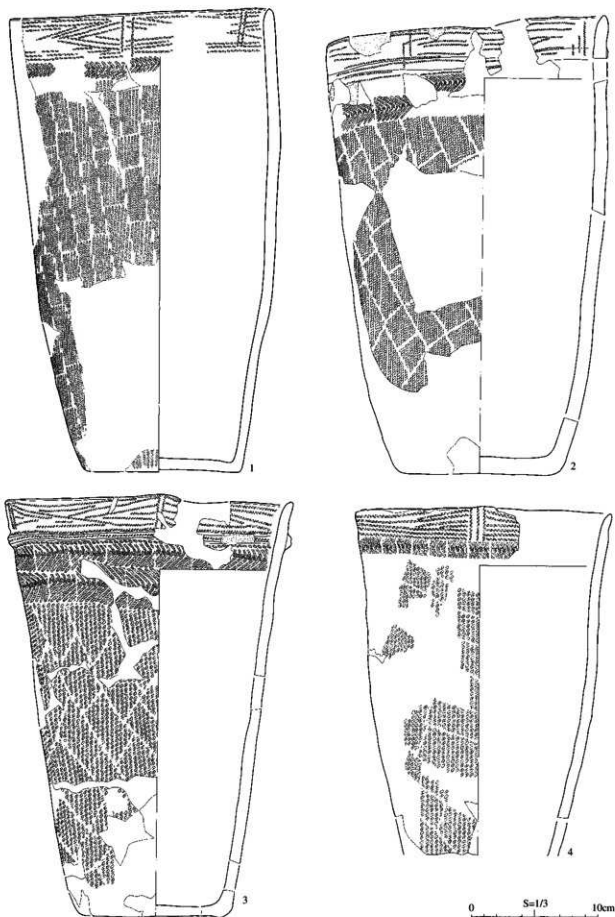


図138 沢出土土器A層7(第 群土器)

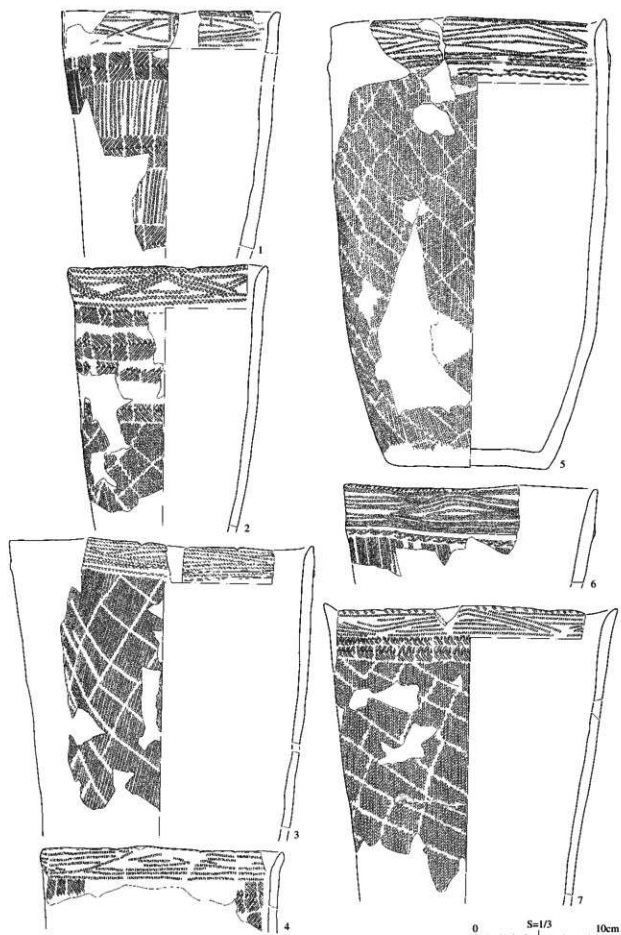


図139 沢出土土器A層8 (第 群土器)

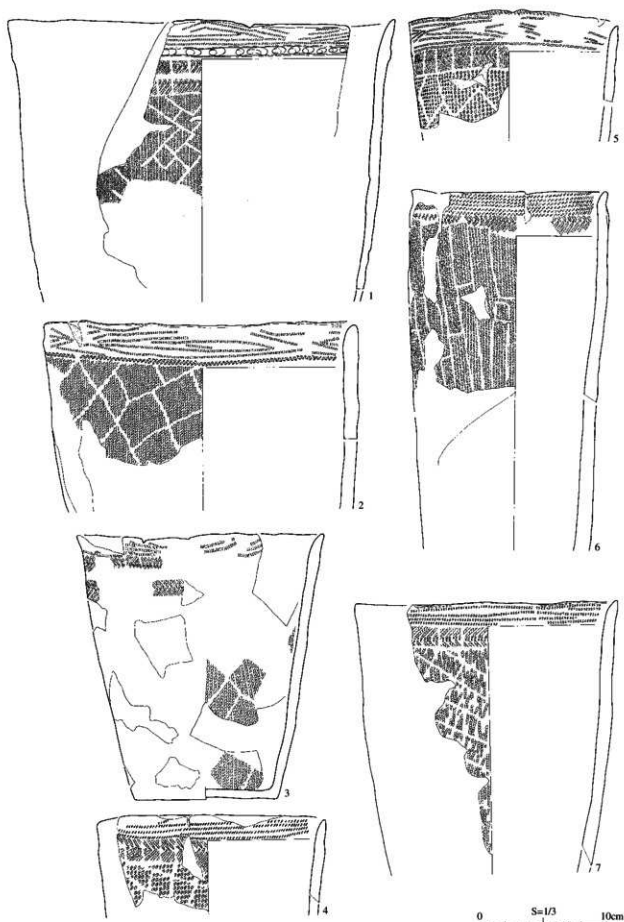


図140 沢出土土器A層9(第 群土器)

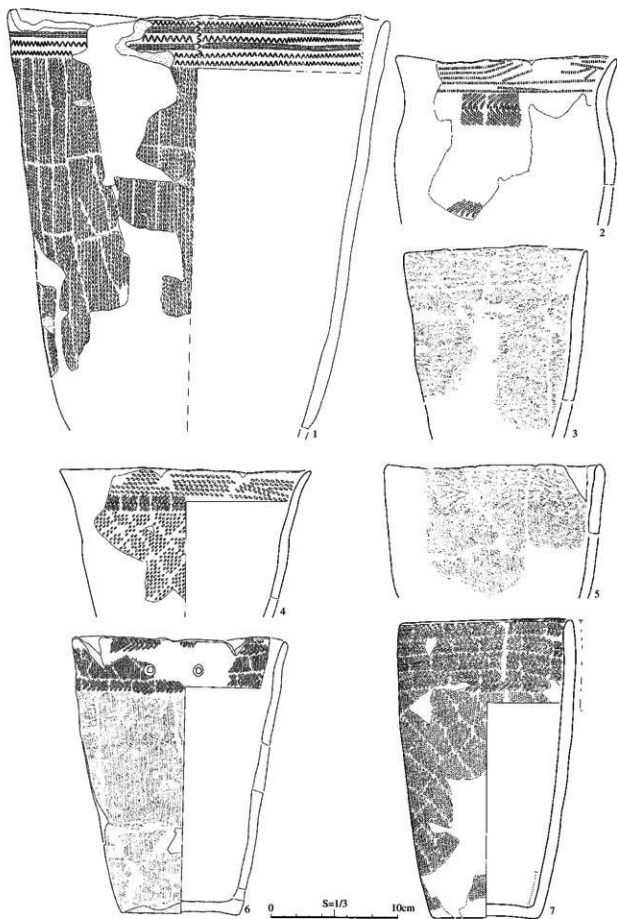
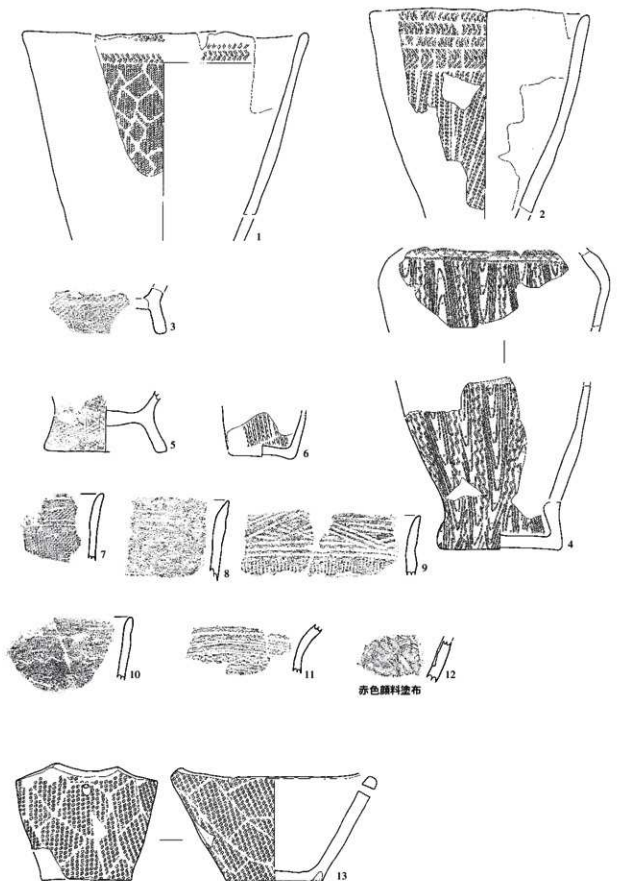


图141 沢出土土器A層10(第 群土器)



赤色顔料塗布

图142 沢出土土器A層11(第 群土器)

0 S=1/3 10cm

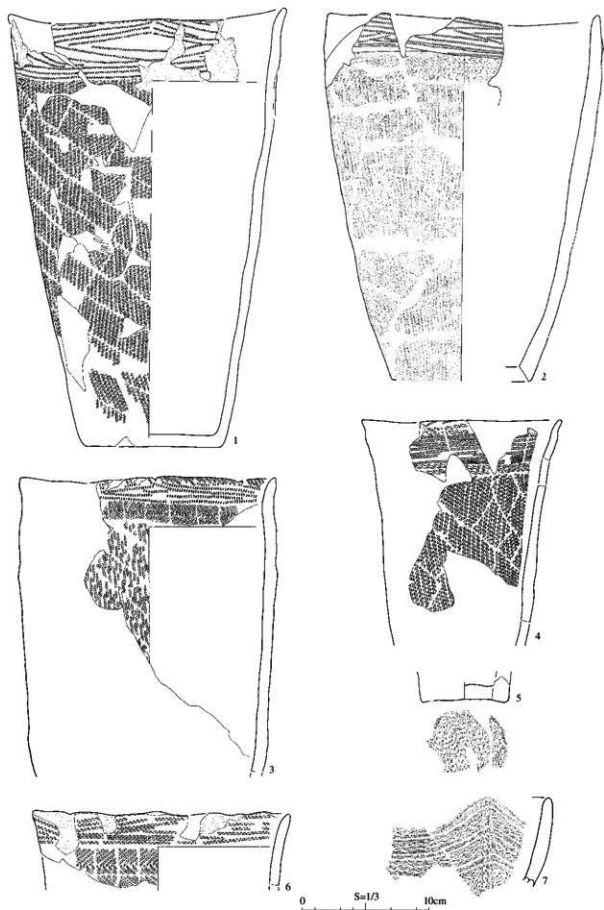


図143 沢出土土器（・層第群土器）

小型土器 全部で61点出土している。大部分が底部片もしくは胴部片であり、この内11点を図示した。深鉢形土器と形状や施文方法に変わりはなく、全体では第3類に相当するものが主体である。図示したものは、第3類に相当するもの(114-13・14・17・18、131-21・22・24)、第4類に相当するもの(131-25)、不明なもの(114-15・19、142-6)に分けられる。内外面とも炭化しているものもあり、深鉢形土器と同様に使用された可能性もある。

第 群土器 縄文時代中期の土器

第 1 類 円筒上層 a 式(145-1～4) 口縁部に縄文原体を側面圧痕するもので、円形の粘土貼付文に縄文を押圧しているものもある。口縁部には縄文原体を横位に側圧している。145-3 は円形貼付文の直上に把手がつき、器形が屈曲している。

第 3 類 円筒上層 c 式(144-2、145-5～8) 胎土に砂粒を多く含むが、145-6・8 は混入物も少なく、密である。粘土紐を貼付けその上部に縄文原体や刻みを施文している。一定方向から斜めに施文し、施文具には凹凸のあるものや先端が丸味を帯びるものなどがみられる。

第 4 類 円筒上層 d 式(144-1、145-9・10・14) 胎土に砂粒を多く含み、色調は褐色である。粘土紐がやや細くなり、粘土上部に施文の見られないものがみられる。144-1、145-14は粘土上部に縄文原体を押圧する。口縁部に沿って、波状に粘土紐を貼付ける。

第 5 類 円筒上層 e 式(145-11・12) 平口縁で、一部粘土紐を円形に貼付けており中がくぼんでいる。口縁部はやや膨らみ上部を面取りしており、断面三角形である。

第 9 類 その他 中期末から後期初頭に相当する土器である。145-13・15は波状口縁で口縁上部には縄文を施文せず、ナデ調整を行っているもので、145-15は口縁に沿って粘土を貼付けている。145-13は外面に厚さ 3 mm 程度の粘土を貼付け器形に厚みを持たせている。

第 群土器 縄文時代後期の土器

第 3 類 その他 後期中葉に相当するもの(145-21・23～26) 145-21・25・26は2・3条の横位沈線で区画されており、沈線の施文されている付近で縄文が施文されている。145-24は口縁の周囲に粘土紐を貼付け上部を平坦にしている。

無文土器(145-18～20・22) 胎土に砂粒を若干含み、褐色土主体である。この時期に相当するものとした。145-18・19は口縁部がやや外反し、途中段をもつ形状である。145-20は胴部で、内面にハケメ状の痕跡がある。土師器の可能性もあるが、胎土や焼成からこの類に含めた。

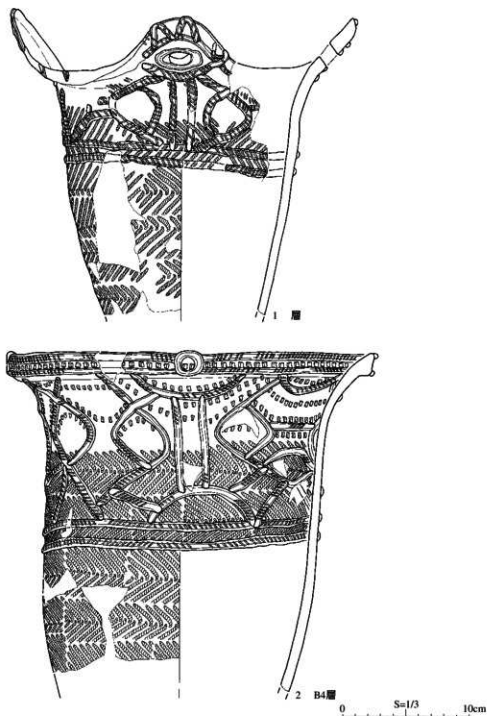


図144 沢出土土器 第 群土器

第 群土器 縄文時代晩期の土器

145-27・28は、鉢の破片と思われる。145-27は肩部を含む口縁部片で、口縁部は横方向にナデている。

第 群土器 平安時代相当の土器

1点出土している。平安時代の襷の破片の可能性が高い。色調は灰白色で、器壁は3mm程である。胎土内の混入物はケズリと見られる痕跡で一方向に移動している。 (坂本)

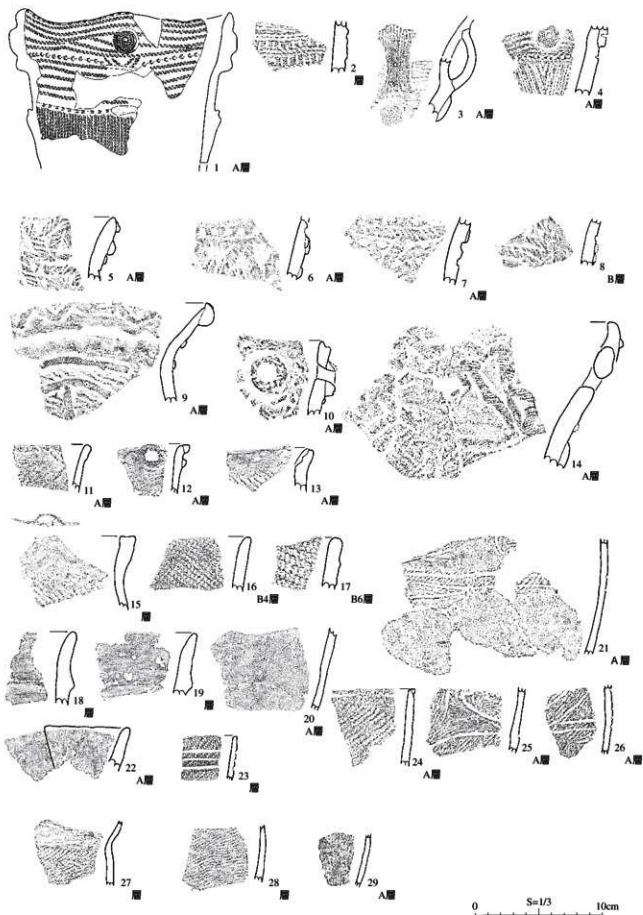


図145 沢出土土器第一群土器

3 石器

沢から出土した石器は剥片石器類260点、礫石器類280点である。剥片を除いた剥片石器類では石匙やスクレイパー類、礫石器類では敲磨器類や半円状扁平石器・挟入扁平磨製石器・石皿などが多く出土している。層位別の出土数は文末に示したとおりであり、共存した土器から縄文時代前期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。なお、石匙を主体とした剥片石器の使用痕分析について第3章第8節に掲載しているのので、参照されたい。

(1) 剥片石器類

A類 石鏃(147-1・2) 2点出土した。1は凹基無茎鏃、2は平基無茎鏃である。石材は2点とも珪質頁岩である。

D類 石匙(147-3~149-6) 39点出土した。Da類29点、Db類6点、Dc類1点のほか、破片のためDa類かDb類か不明なものが2点ある。なお、148-12は縦形石匙の体部破片と思われるのでDa類に含めている。完形品26点、破損品13点で、破損率は33.3%である。また、光沢痕が見られるものが多く、Da類では19点、Db類では2点の石器に観察されている。石材には鉄石英が1点あるが、他はすべて珪質頁岩である。

Da類 縦形石匙(147-3~148-13) 完形品21点、破損品8点がある。先端部の形状には尖頭状のもの、丸みを帯びているもの、直線気味のもの、幅広のものなどがある。147-3・8・148-3・7・8は強度の光沢痕が広範囲に観察されたものである。このうち、147-3の石匙では裏面の下半分に広く見られ、左側縁には微細な剝離痕も発達している。この部分が主に使用された部位であったことがわかる。また、147-8では裏面に広く光沢痕が見られたが、とくに右側縁下部に強い光沢が見られた。また、表面中央部の高まった稜の部分には光沢や摩耗も見られた。着柄に関する痕跡と思われる。148-7では光沢痕が表面右側縁とこれに対応する裏面に見られたが、表面の方より強い光沢(摩耗)痕が観察された。また、148-8では裏面左側に広く見られたほかに、これに対応する表面側にも見られ、剝離の稜線がトロトロに摩滅した状況が見られた。148-10では表面の先端部の突出した左端部に強い摩耗が見られたほかに、裏面左側縁の上部のつまみ部に近い部分にもやや強い光沢痕が観察された。これらの石匙は、使用痕分析ではAタイプ光沢と判定されており、植物質の切断に用いられたと想定されている。一方、Aタイプ以外の光沢が確認されたものには147-13のB?タイプ、148-1のE2タイプ、148-6のBタイプ、148-11のEタイプの光沢がある。肉眼観察では、147-13と148-1では微弱な光沢痕が見られたが、他の2点では確認できなかった。

Db類 横形石匙(148-14・149-1~5) 完形品5点、破片1点がある。148-14と149-3の石匙の末端部には微弱な光沢痕が見られた。使用痕分析では、148-14がAタイプ、149-3がA?タイプの光沢が見られた。また、149-2は刃部再生が行われている石器で、光沢痕は見られなかった。

Dc類(149-6) 両面加工の石器で先端部を欠損しているが、櫛状の先端部を持つものとして、本類に含めた。1点のみの出土である。

E類 石筥(149-7~9) 3点出土した。石材は3点とも珪質頁岩である。7・8の刃部は弧状を呈し

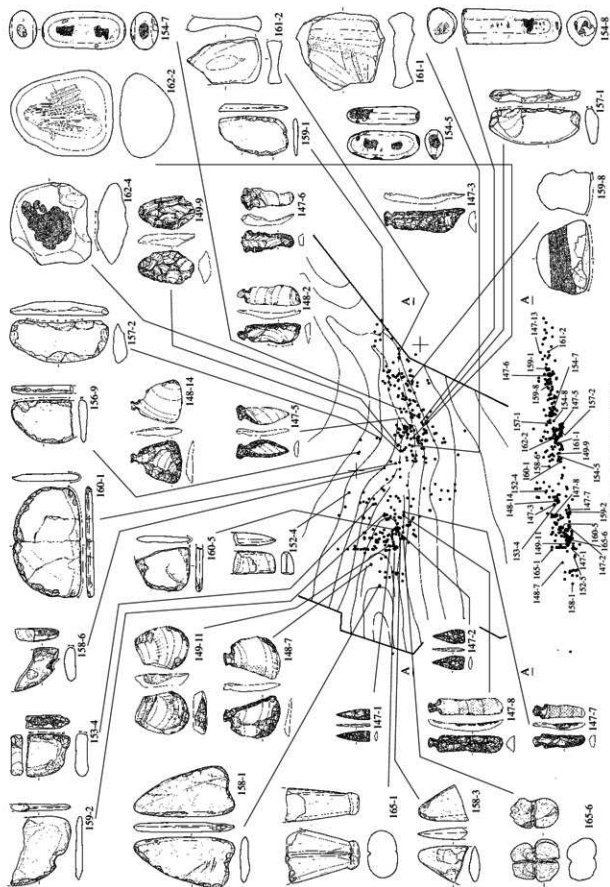


図146 石器の出土状況

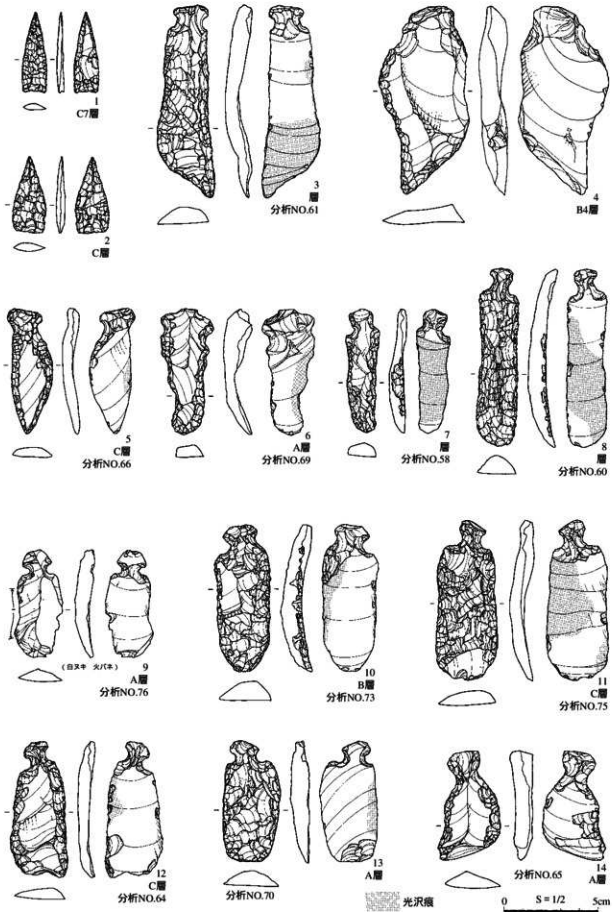


图147 沢出土石器1

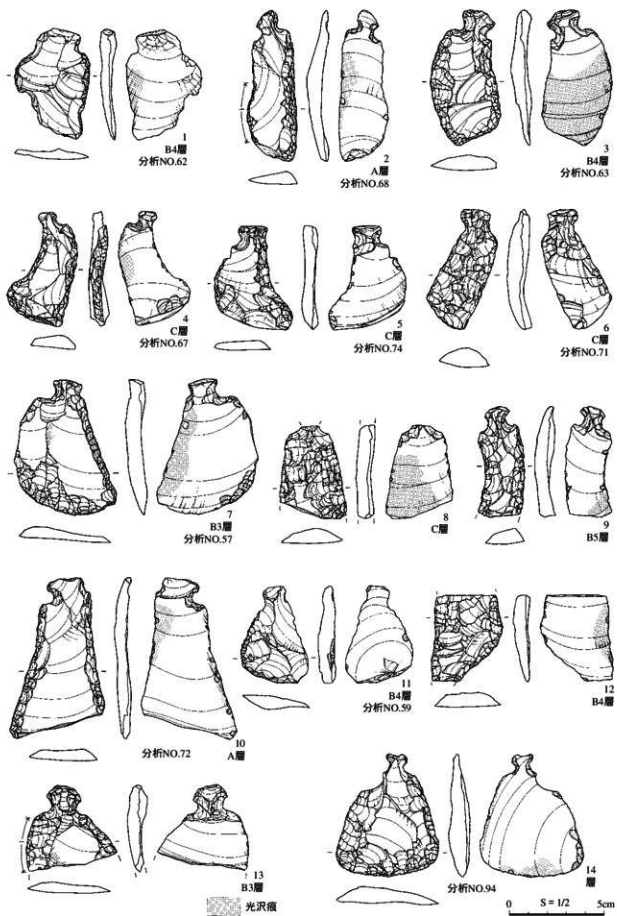


图148 沢出土石器2

ており、裏面刃部の一部には光沢痕が認められた。また、着柄に関するものと思われる光沢痕が7では両面の体部中央付近に、8では裏面基部付近に見られた。なお、使用痕分析では2点ともE2タイプ光沢とBタイプ光沢との中間的な特徴を持つ光沢が確認されており、刃部に直交する線状痕も観察されている。また、被加工物は不明であるとしながらも、器体を寝かせて掻き取るような作業が想定されている(分析79、80)。9は未製品の可能性が高いが、裏面刃部縁辺の狭い範囲に摩擦痕?が観察された。

G類 不定形石器

Ga類 スクレイバー類(149-10~151-2)45点出土した。搔器5点、削器32点のほか、石匙の破片と思われるものが8点ある。石材には珩質頁岩44点、玉髄1点がある。

149-10~12は搔器の類である。10と11は刃部に急斜度の調整が加えられているが、12は薄い剥片を利用しているためそれほどでもない。肉眼でははっきりとは確認できなかったが、10の裏面刃部には光沢痕らしきものが観察された。使用痕分析では光沢のタイプは不明であったが、刃部に直交する線状痕が確認されている。また、12の刃部には摩擦、その裏面側には光沢痕が狭い範囲で観察された。149-14・15及び150-4は尖頭状削器であるが、149-14は先端部の調整から石錐の可能性もある。また、149-13や150-3・5・6・10・13の削器には弱い光沢痕が見られた。このうち150-3は縦形石匙に似たつくりで、裏面左側縁には光沢痕が広範囲に見られる。なお、150-6は石錐の未製品、16は横形石匙の破片の可能性もある。

Gb類 Rフレイク(151-3~6)20点出土した。石材には珩質頁岩19点、玉髄1点がある。5の裏面右側縁には微細な剥離痕が連続して見られ、いくぶん摩擦している。

Gc類 Uフレイク(151-7・8)18点出土した。剥片の一部に微細剥離痕が見られる石器である。7では左側縁下部、8では右側縁に微細剥離痕が観察された。石材には珩質頁岩16点、玉髄珩質頁岩1点、頁岩1点がある。

I類 剥片、石核、母岩

Ia類 剥片 126点出土した。石材には珩質頁岩124点、玉髄2点がある。

Ib類 石核(151-9~152-1)6点出土した。石材はすべて珩質頁岩である。

Ic類 母岩(写真56)1点出土した。石材は珩質頁岩である。

(2) 礫石器類

J類 磨製石斧(152-2~5)6点出土したが、完形品はない。刃部破損2点、基部破損2点、刃部破片2点である。石材には石英安山岩が1点(152-3)があるが、他は緑色細粒凝灰岩である。このほかに敲石に転用されたものが1点ある(152-6)。刃部を欠損したもので、破損部分に敲打痕が見られたことから敲磨器Kb2類に分類した。側面には擦切痕が見られる。

K類 敲磨器(152-6~156-11)96点出土した。

Ka1類(152-7・11)4点出土した。磨石に凹孔を持つ類で、石材には凝灰岩2点、流紋岩1点、輝緑岩1点がある。7は両面に深い凹孔が見られるもので、器面はざらついている。11も両面に凹孔が見られるもので、左面の凹孔はアバタ状で深く、右面のものは浅い。側面が利用されておらず、いわゆる磨石の類とは異なるが、端部に強い磨痕が見られたことから本類に含めた。磨痕部分には長軸

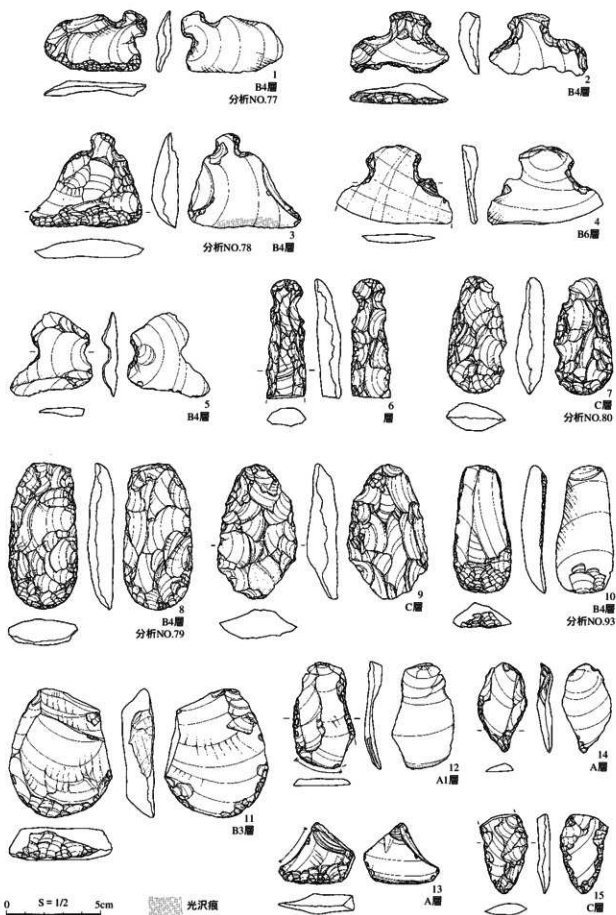


图149 沢出土石器3

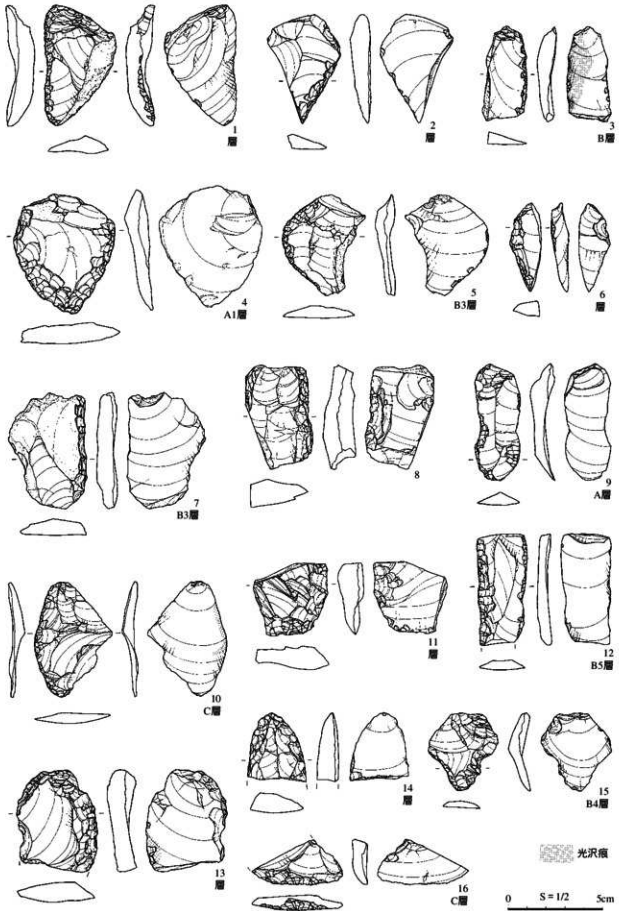


図150 沢出土石器4

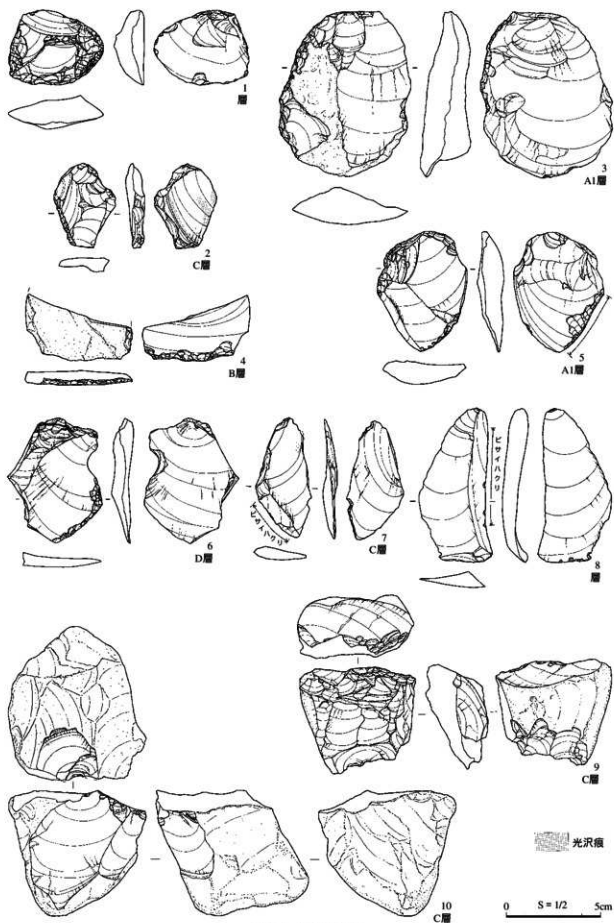


图151 沢出土石器5

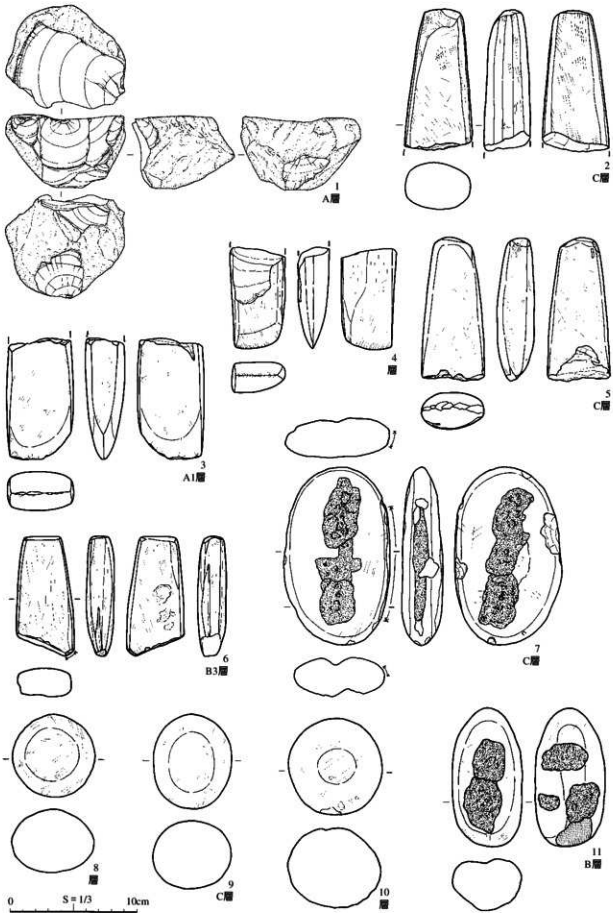


图152 沢出土石器6

方向の線状痕が観察されている。また、器体にはスリ整形が施されていて器面は滑らかである。石材は11が凝灰岩、12が流紋岩である。

K a 2 類 (152-8~10・153-1~7) 22点出土した。石材には凝灰岩 8 点、石英安山岩 6 点、安山岩 4 点、流紋岩 2 点、ヒン岩 2 点がある。球状磨石の類 7 点 (すべて完形) 扁平磨石の類 14 点 (完形品は 14 点) 三角柱状磨石の類 1 点 (欠損、153-5) がある。152-8~10は球状磨石の類である。8 と 10 は器面がザラついているが、9 は全体に滑らかである。石材は 8 が凝灰岩、9 が安山岩、10 が流紋岩である。153-1~4・6・7 は扁平磨石の類である。2 の平坦面には敲打痕が集中している部分があるが、凹孔ではない。流紋岩を石材とし、器面は滑らかである。3 は片方の端部と側縁に簡単な打ち欠きが施されていて、半円状扁平打製石器に似ている石器である。石材は凝灰岩である。4 は形状や製作技法の点で半円状扁平打製石器や挟入扁平磨製石器に似ているが、スリ幅が 14mm と広いことから本類に含めた。剥離整形や敲打整形の後にスリ整形を施しているが、器面の中央部分が低いので周辺が強く磨られて光沢を帯びている。また、破損面の一部には強い磨痕が見られる。石材は石英安山岩である。7 は側縁と端部に簡単な剥離痕が見られる石器で、挟入扁平磨製石器の未製品の可能性もある。石材はヒン岩である。

K b 1 類 (153-8~154-8) 15点出土し、うち完形品は 12 点である。石材には凝灰岩 6 点、流紋岩 5 点、石英安山岩 3 点、輝緑岩 1 点がある。棒状礫や扁平礫の端部に敲打痕が見られるものが主体であるが、円形の扁平礫を素材とするものや石斧に似た形状のものもある。

153-9 は円形の扁平礫を素材とする石器で、周縁には敲打痕が巡っている。平坦面は滑らかで、中央には凹孔が見られる。石材は輝緑岩である。153-8 と 154-3 は扁平礫を素材とするもので、153-8 では両端部、154-3 では片方の端部に敲打痕が見られる。なお、153-8 の器面は滑らかであるが、とくに右側面が顕著であることから磨石として利用された可能性もある。石材は 153-8 が石英安山岩、154-3 が凝灰岩である。154-2・4~8 は棒状礫を素材とする石器である。長軸端部や側面の一部に敲打痕が見られ、スリによる整形が施されていて器面は滑らかである。2 の凹孔は深いものが多く、側面のものには溝状のキズも見られる。4 の凹孔は浅いもので、長軸端部の敲打痕は弱い。5 は両側面と端部に強度の敲打痕が見られ、潰れた状況をみせている。6 は長軸の両端部と側面に敲打痕、両平坦面にはアバタ状の浅い凹孔が見られる。7 は長軸の上端部には弱い磨痕?、下端部には敲打痕が見られる。両面に凹孔が見られ、敲打による溝状のキズが見られる部分もある。8 は大型の棒状礫を素材としているもので、下端部に敲打痕が見られ、礫表皮が剥がれている。もう一方の端部 (上端) は切断面であるが、凹凸を減らすための磨痕が見られる。両面にアバタ状の凹孔が見られるが、左面の下方には溝状のキズも見られる。石材は 2・4・7 が流紋岩、5・6 が凝灰岩、8 が石英安山岩である。154-1 は石斧に似た形状の石器で、刃部に相当する部分には敲打痕、左面にはアバタ状の凹孔が見られる。器面はスリ整形が施されていて、滑らかである。流紋岩を石材としているが、磨製石斧の転用品の可能性もある。

K b 2 類 (152-6・154-9・155-1~7) 20点出土した。石材には安山岩 3 点、石英安山岩 2 点、凝灰岩 4 点、流紋岩 4 点、頁岩 2 点のほか、輝緑岩、珪岩、ヒン岩、緑色細粒凝灰岩がそれぞれ 1 点ずつある。なお、緑色細粒凝灰岩の 1 点は磨製石斧の破損品を転用したものである (152-6)。棒状礫や扁平礫の端部及び側面に敲打痕が見られるものが多い。154-9 は石英安山岩の太めの棒状礫を素材と

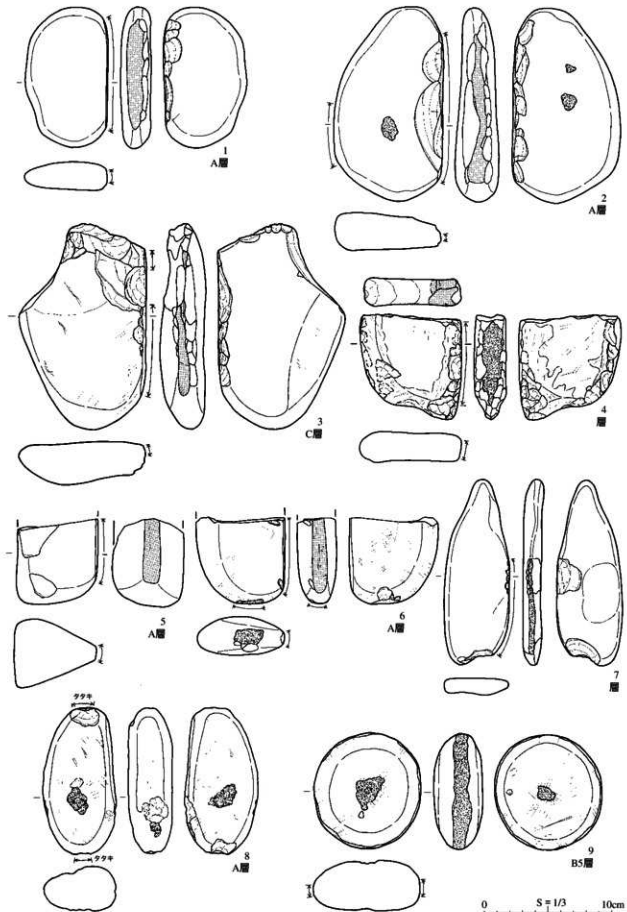


図153 沢出土石器7

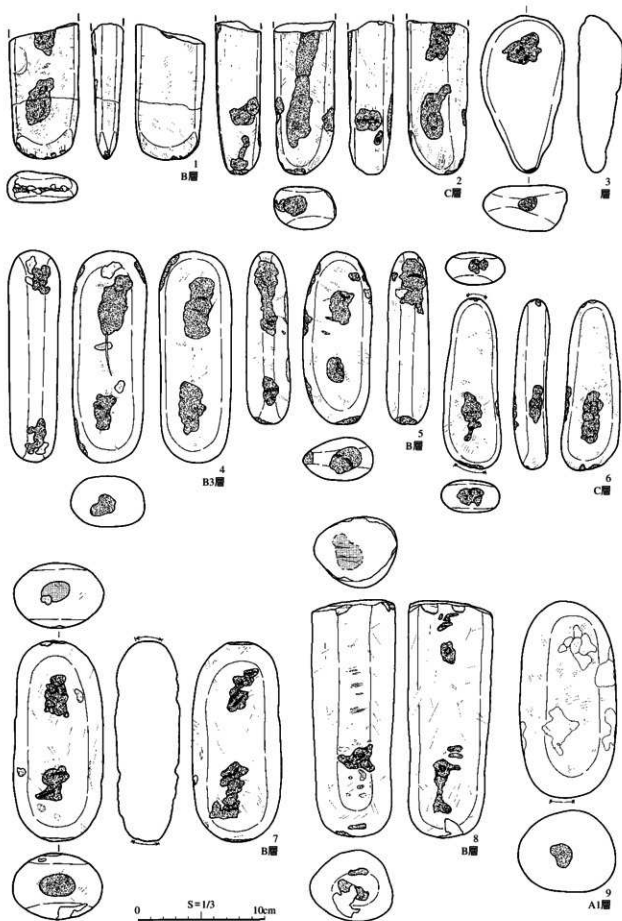


图154 沢出土石器8

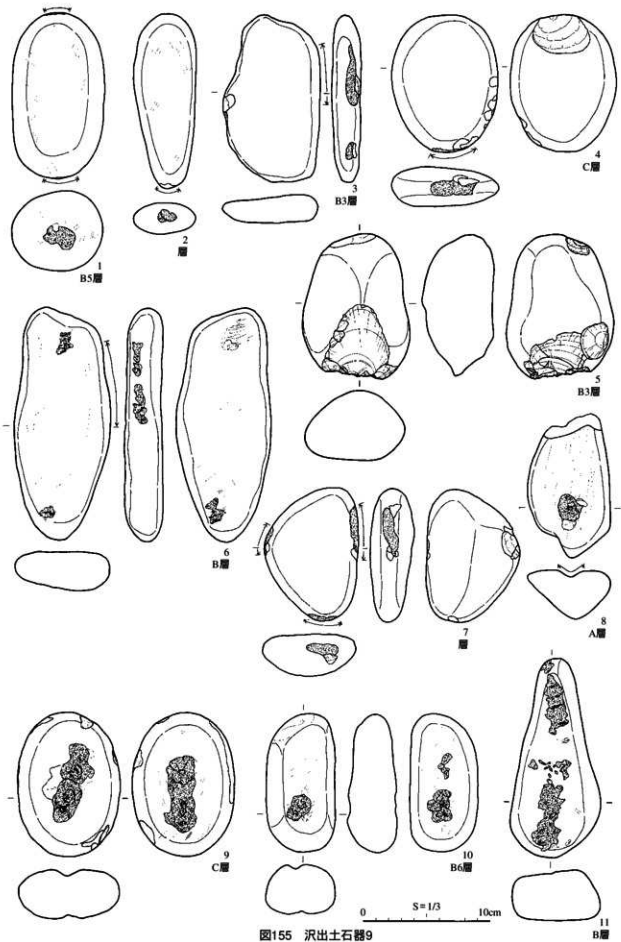


図155 沢出土石器9

した石器で、握るには少し大きい。下端部には弱い敲打痕が見られる。器面全体にスリ整形が施され滑らかであるが、とくに側面がツルツルになっている部分がある。155-1は流紋岩の棒状礫を素材とした重量感のある石器で、長軸の両端部に敲打痕が見られ、器面全体が滑らかである。155-6は凝灰岩の扁平礫を素材としているもので、側縁の一部に敲打痕が見られる石器である。器面は平滑で、平坦面には捺痕のほか線状のキズやアバタ状の敲打痕も見られ、砥石的な用途や台石的な用途も考えられる石器である。

Kc1類(155-8~11、156-1~3)器面に凹孔だけが見られる石器で、32点出土した。完形品は23点である。石材には凝灰岩13点、流紋岩12点、安山岩2点、石英安山岩3点、緑色凝灰岩1点、礫岩1点がある。扁平礫や柱状礫を素材とし、凹孔が見られる面が平滑となっている石器が多い。155-8~10や156-2は滑らかな平坦面にすり鉢状の深い凹孔が見られるものである。このうち、155-10と156-2では右側の平坦面が左側の面よりも滑らかとなっており、凹孔も深い。155-11は両面に浅い敲打痕が広範囲に見られるもので、部分的に線状のキズも観察される。台石的な利用がうかがわれる石器である。156-3は塊状の安山岩を素材とし、敲打による広く浅い凹孔が見られる。

Kc2類(156-4)石皿の破片を利用した凹石で、3点出土した。石材は石英安山岩2点、凝灰岩1点である。4は凝灰岩製の石皿片を素材としたもので、やや脆い。すべての面を利用しており、深い凹孔が見られる。凹孔の最深部分がすり鉢状になっているものもある。

L類 半円状扁平打製石器(156-5~9・図157)24点出土した。完形品が4点で、接合して完形に復元できたものが1点ある(156-7)。石材には凝灰岩6点、流紋岩5点、安山岩3点、石英安山岩4点、ヒン岩3点、輝緑岩2点、砂岩1点がある。大半は板状礫を素材としているが、やや肉厚の扁平礫を素材とするものが2点ある。半円状あるいは長方形に剥離整形が施され、弦部の機能面には鋭い縁辺や狭いスリ痕が見られることが特徴である。平坦面には加工が施されていないものもあるが、軽いスリ整形が施されているものもある。157-5・7の場合はスリ整形が顕著に見られる例であり、半円状を呈する側縁部にもスリ整形が施されている。とくに、5ではそれが丁寧に施されていて挟入扁平磨製石器の製作技法と通じる部分がある。石材は5が流紋岩、7が凝灰岩である。156-5・6は片端を欠損しているが、失敗品とも思われるものである。5は片側側縁部のみ加工を施し、鋭い縁辺を作出している。6は片側縁を半円状に剥離整形しているが、弦部にはあまり加工が加えられていない。右の平坦面上部には凹孔のような敲打痕、中央付近には線状のキズが集中して見られる。石材は5がヒン岩、6が輝緑岩である。また、破損後に再利用されたと思われるものが2点ある。156-8では破損面の端部と平坦面及び弦部の一部に、157-8では破損面の端部にごく狭い範囲の磨痕が観察されている。石材は2点とも凝灰岩である。

M類 挟入扁平磨製石器(図158・159-1~7)32点出土した。完形品は1点のみで他は破損品か破片である。器体の一部が破損したものが3点、1/2~1/3を欠損したものが10点、1/3以下の破片が19点である。破損率は96.1%である。石材には凝灰岩21点、安山岩5点、流紋岩2点、ヒン岩2点、頁岩1点、細粒凝灰岩1点がある。扁平な礫を素材として、器面全体にスリ整形が施されることが特徴である。機能面と思われる弦部はV字状かこれに近いものが多いが、丸みを帯びるものや狭い平坦部を持つものもある。また、弧に相当する側縁は丸みを帯びるもの11例、平坦のもの8例、V字状のもの7例となっている。158-1は完形品で、凝灰岩の板状礫を素材としている。周縁を打ち欠いた後

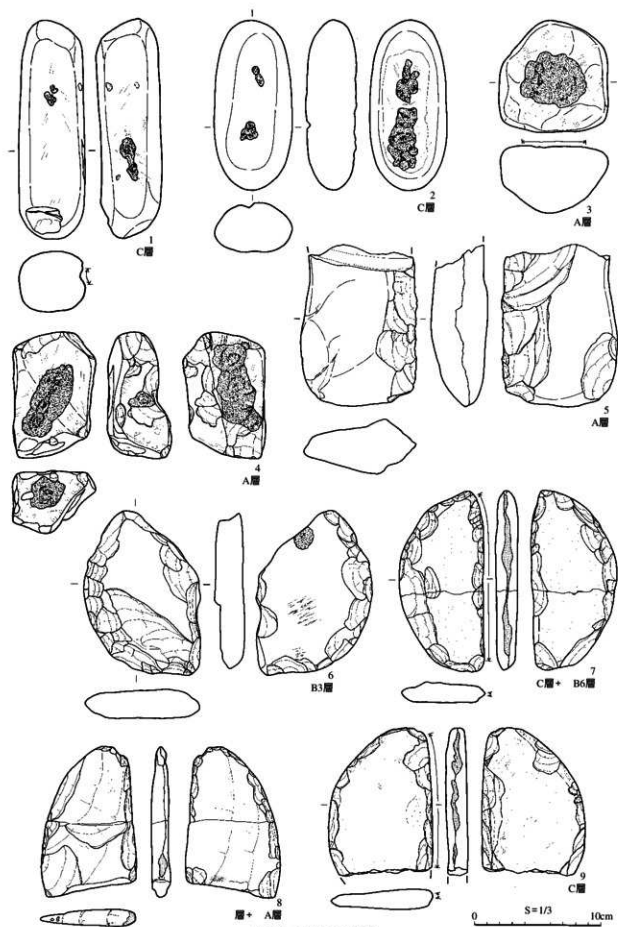


图156 沢出土石器10

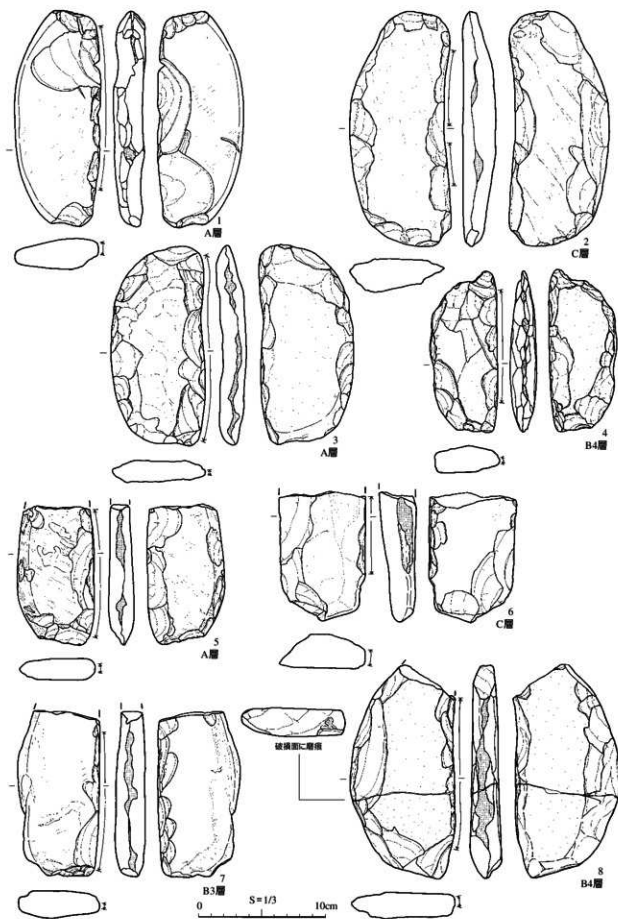


图157 沢出土石器11

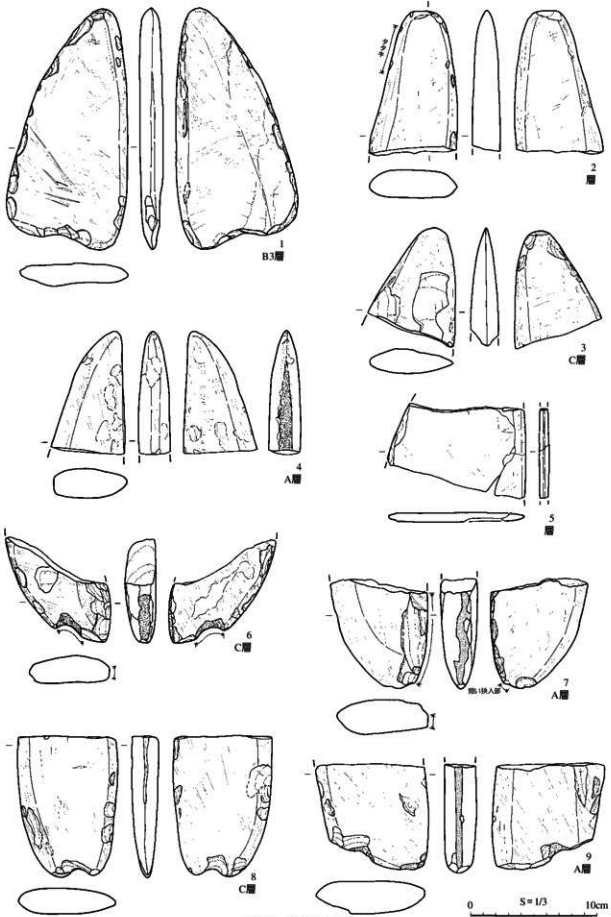


图158 沢出土石器12

に、ほぼ全面にスリ整形を施しているが、部分的に原石面や剥離面を残している。側縁部は両側縁ともややV字状である。石材は凝灰岩である。159-3～5は弦の部分に摩耗痕が見られるもので、いくぶん微弱な光沢も見られるものである。断面はV字状である。石材は159-3と5が凝灰岩、4が安山岩である。

N類 北海道式石冠(159-8)1点出土した。完形で、全体を敲打整形し、体部に敲打による溝を巡らしている。底面はやや滑らかで、石材は凝灰岩である。

O類 石皿・台石類

Oa類 石皿(図161)37点出土した。完形品は4点で、破損品33点、破損率は89.2%である。石材には安山岩10点、石英安山岩9点、凝灰岩15点、流紋岩1点、軽石凝灰岩1点、ヒン岩1点がある。両面を利用しているものが8点、片面利用が16点、不明24点である。1・2・5は木組み遺構の周辺から出土したもので、いずれも両面が利用されている。1は溝状の窪みが形成されている。3は第85号土器埋設遺構の土器内部から出土したものと接合したものである。表面はいくぶん窪み、裏面には砥石様の溝が見られる。石材は1が石英安山岩、2が凝灰岩、3・5が流紋岩である。

Ob類 台石(162-1～5)7点出土した。完形品6点、破損品1点である。石材には安山岩1点、石英安山岩2点、流紋岩2点、凝灰岩2点がある。1は石英安山岩の四角柱状礫を素材としているもので、両面とも平滑で光沢を持つ。砥石の可能性も考えられる。2は木組み遺構の周辺から出土したもので、平坦面には5～10mm幅の細い溝が集中して見られる。石材は凝灰岩である。5は敲打による凹孔と浅い溝状のキズが見られるもので、両面とも平滑である。流紋岩の柱状礫を素材としている。

P類 石棒類(163-1～4)4点出土した。すべて無頭のもので、器面全体にスリによる整形が施されており、器面は滑らかである。石材はすべて石英安山岩である。

Q類 石錘(162-8)2点出土した。長軸端部を打ち欠くもの(8)と短軸を打ち欠いているものがある。石材は頁岩1点、凝灰岩1点である。

R類 砥石(162-6・7)4点出土した。石材には凝灰岩2点、安山岩1点、流紋岩1点がある。6の器面はやや滑らかで、線状痕が顕著に見られる。角柱状の流紋岩を石材としている。7は石皿片を再利用した可能性のあるもので、浅い溝状の研磨痕も一部に見られる。石材は凝灰岩である。

S類 擦切具(図160)7点出土した。完形品1点と接合して完形に復元できたものが1点ある。石材には流紋岩1点、石英安山岩1点、安山岩2点、凝灰岩3点がある。1・2・4は半円形に整形されており、5もこれに近い形状のものと思われる。刃部には刃縁に平行する擦痕が見られ、使用のために丸みを帯びている例が多い。1は4片が接合して完形に復元できたもので、刃部は摩耗してやや丸みを帯びている。また刃部を除いた広い範囲に煤状炭化物が付着していて、装着痕を現しているかのようである。石材は流紋岩である。2は完形品で、刃部には整形時の剥離痕がわずかに残っている。刃部の断面はV字状であり、やや鋭さがある。器面のスリ整形は凹凸を除去する程度の簡易なものである。石材は石英安山岩である。4は片方の端部を破損したもので、端部には浅い挟りに加えられ、側縁部にはスリ整形が施されている。刃部は摩耗して丸みを帯びており、弱い光沢も見られる。石材は凝灰岩である。5は端部破片で、刃部断面はV字状である。刃縁に平行に走る擦痕が見られることから本類に含めたが、挟入扁平磨製石器の可能性もある。石材は凝灰岩である。3は3片が接合したものであるが、方形が長方形の形状と思われる大型のものである。器面の剥離整形はあまり加えられ

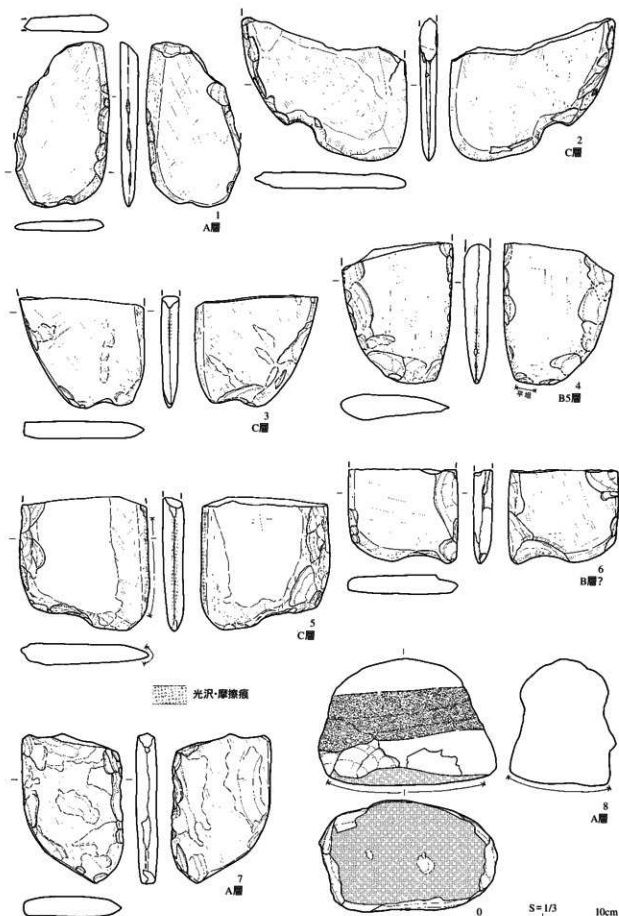


図159 沢出土石器13

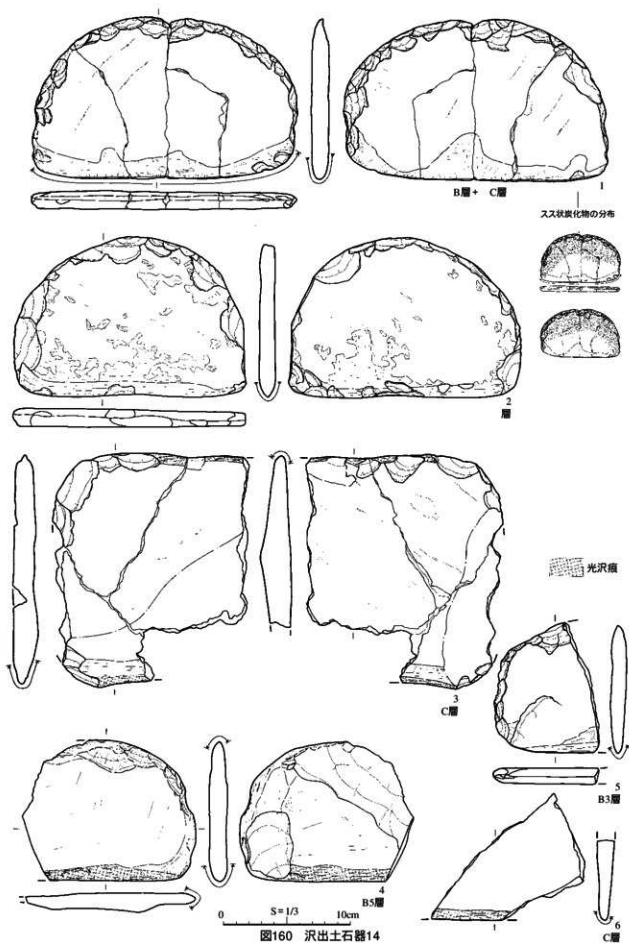


图160 沢出土石器14

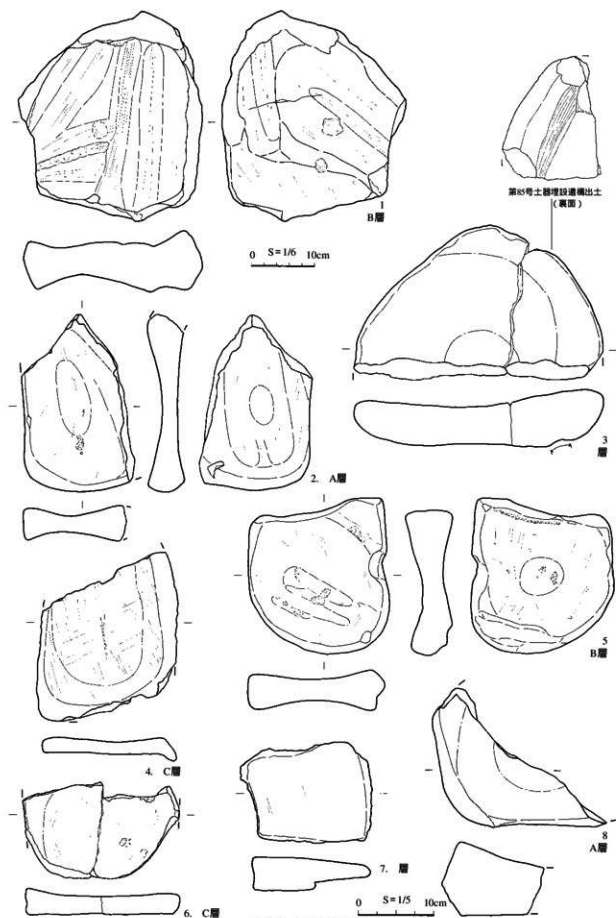


图161 沢出土石器15

ていない。刃部は上下の側縁に作出されており、刃部は摩耗して丸みを帯びている。石材は安山岩である。6は破片で、刃部は摩耗して丸みを帯びている。石材は安山岩である。

T類 その他

T a類 (163-5 ~10) 器面に何らかの痕跡が見られるものであり、13点出土した。5は磨製石斧の原石で、擦切痕が見られるものである。石材は緑色細粒凝灰岩である。6は流紋岩の板状礫を素材としたもので、片側面に擦切痕が見られるものである。磨製石斧のように擦切技法で折りとられ、縁辺部には整形剥離が加えられている。何かの石器の未製品が失敗品の可能性がある。おそらく、半円状扁平打製石器や挟入扁平磨製石器などの石器の一部はこの技法によって折りとられたものを素材としてつくられた可能性がある。7~10は器面全体が滑らかになっている石器である。7は小さな棒状礫を素材とし、片面がとくに平坦気味になっていて、光沢を帯びている。石材は凝灰岩である。8は円形の扁平礫を素材としている。これも石材は凝灰岩である。9は小形の石棒ともとれるもので、破損部分の一部に打ち欠きが見られる。石材は安山岩である。10は角柱状の流紋岩を素材としている。図示しなかったものにも器面が平滑なものが7点あり、それらの石材は凝灰岩2点、石英安山岩3点、流紋岩2点である。

T b類 角柱状の挟入礫 流紋岩の柱状節理のもので、22点出土した。

以上の他に、何かの礫石器の破片と考えられる細片が10点出土した。

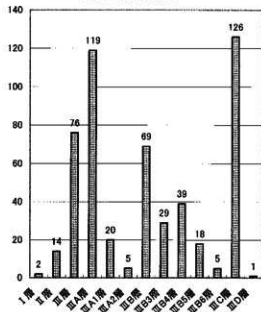
(畠山)

層別別石器出土数

	I類	II類	III類	III A類	III A類	III B類	III B類	III B類	III C類	III C類	小計
	層	層	層	1層	2層	3層	4層	5層	6層	層	層
A類										2	2
D類	1	1	5	8		1	2	2	9	1	8
E類										1	2
G類		3	20	14	6	1	9	4	8	3	14
I類	1	4	18	47	3	1	14	6	8	4	27
J類			2		1						3
K類		3	12	18	5	1	17	9	1	3	1
L類			2	7	2	1		2	5	1	1
M類		2	4	7	2		4	2	1	1	10
N類					1						1
O類		1	5	8			11		3	2	1
P類						1					3
Q類				1							2
R類		2				1		1	1		1
S類			2			2			1	1	3
T類			4	9			8	3	2	1	8
小計	2	14	76	119	20	5	69	29	39	18	5
											126

※1 接合例が数例あるため、石器の出土点数とは一致しない。
 ※2 異層位間の接合例にはL類のIII B層+III C層(203)、M類のIII A層+III B層(205)、O類のIII B層+III C層(262)、R類のIII B層+III B層(271)、III B層+III C層(283)、S類のIII B層+III C層(396)、III B層+III C層(327)がある。()は整理番号。

層別別出土石器数



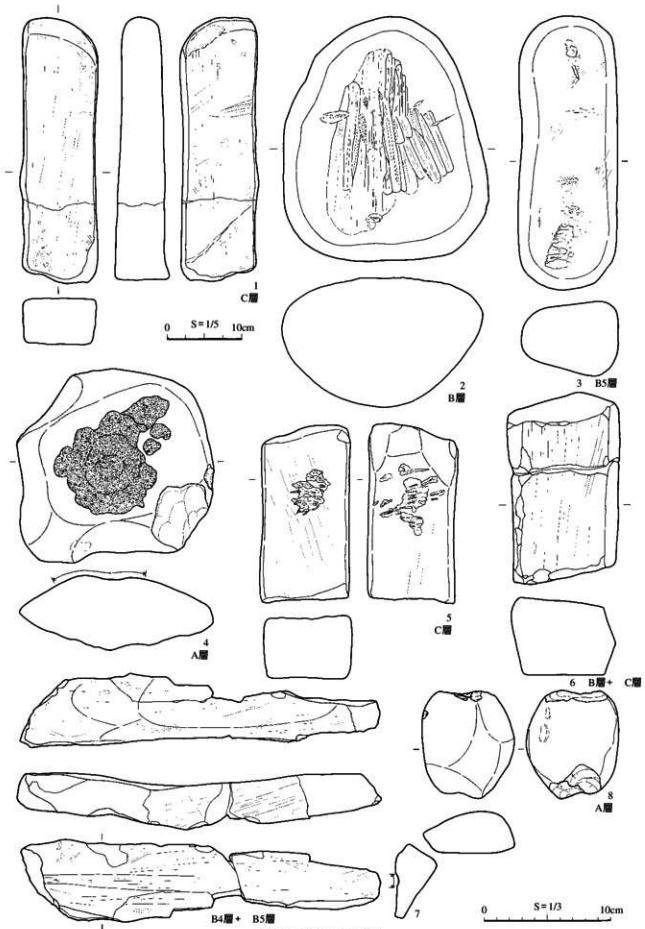


图162 沢出土石器16

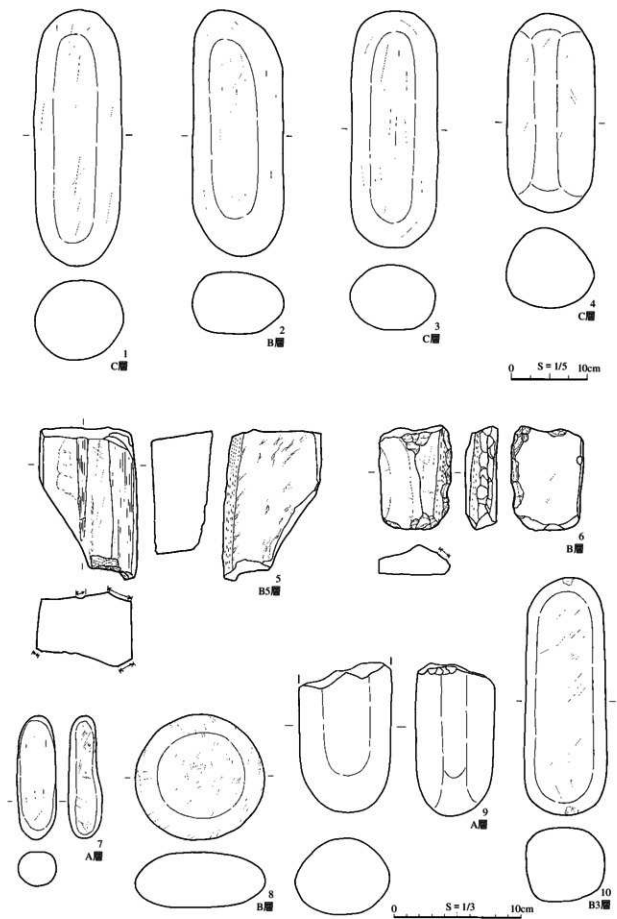


图163 沢出土石器17

4 土製品・石製品

(1) 土製品

円盤状土製品(164-1~8) 8点出土した。1~7は土器片を再利用したもので、完形品は5点である。5は周縁の全部、6は周縁の一部にスリによる整形を施している。8は円形の粘土板の両面に縄文が施されているもので、1/4の破片である。直径約9.5cm大のものと推測される。

(2) 石製品

岩偶(165-1) 第C層から1点出土した。胴部下半の破片である。両面に幅3~5mm、深さ2mmほどの溝が縦に刻まれており、端部は楕円球状となっている。上半部分がないが、稲野裕介氏のいう肩バッド型岩偶の類であろう。器面には被熱を受けた痕跡が見られ、とくに裏面が黒褐色色気味となっている。石材は細粒凝灰岩である。

浮き(165-5・6) 軽石製のもので、2点出土した。5は三角形に面取りされているもので、径8mmの貫通孔があげられている。6は器体の中央に紐掛け用の溝が十字に巡らされている。

不明石製品(165-2~4・7~10) 細粒凝灰岩と軽石製のものがある。

細粒凝灰岩を石材とするものは2点出土した。2は椀状に整形されているもので、器面には長軸方向の線状痕が見られる。3は楕円礫の中央部に長さ2.6cm、幅2.0cm、深さ7mmの窪みが見られるもので、表面は丁寧に整形されている。

軽石を石材とするものが5点出土した。4は不整形の軽石の片面に深さ1cmの円形の穴が穿たれているものである。7は方形、8は長方形、9・10は長楕円形に整形されているものである。製品になる前段階のものと思われる。

(畠山)

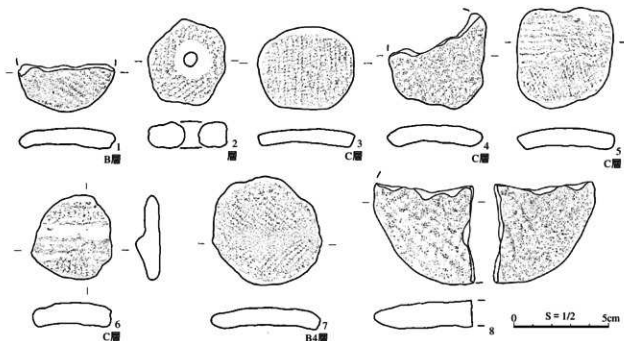


図164 沢出土土製品

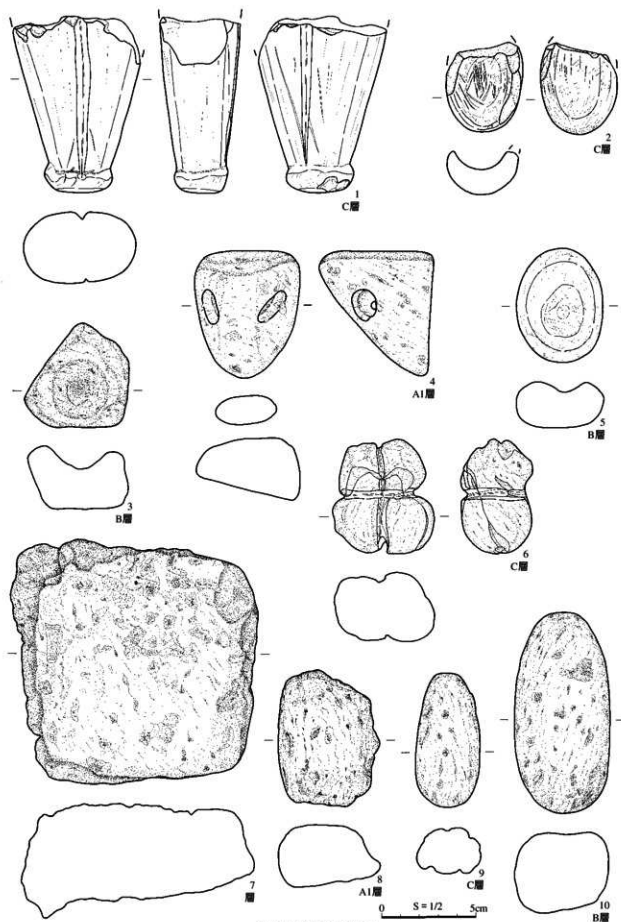


图165 沢出土石製品